

62区2住居跡 (第176～181図 PL.15・91～93)

位置：調査区中央の遺構密集地点にある。62区A・B・6・7グリッドに位置する。周辺の地形は、北側から北西側に急斜面地形が展開し、本住居跡周辺で緩やかな南斜面へ変化する。重複、近接する住居跡としては、61区43号住・46号住が東に接する。南東には62区4号住居跡や18号住居跡が重なる。さらに西側には62区5号住が壁同士を接して検出されている。また62区1号掘立柱建物跡の柱穴や62区14坑、18坑、20坑、25坑、38坑が床面や壁に重なるように、多くの遺構が密集する地点である。

経過：北側は斜面地形のため、暗褐色土から黄褐色ロームでの平面形確認となったが、南半はローム漸移層の暗褐色土及び黒褐色土を基盤とした調査となった。周辺は遺物の出土が顕著で、遺構一住居跡の存在を前提に調査を進めた。その結果、床面と大型地床跡の検出に至り、住居跡として確定した。

規模：南東側壁が4号住や18号住との重複により、判然としなが、概ね径500.0cm前後の不整形を平面形とする。南辺が北辺に比してやや狭い洋梨型も推定される形態である。北側壁は約65.0cmを測る良好な深さを呈するが、南半は斜面地形も影響し壁の残存も良くない。

重複：前述のように、多くの住居跡、土坑と重複・近接するが、明瞭な新旧土層で確認できた例が無い。南側で重複する18号住の上に乗る状況を示すが、明瞭な分層ではなく作業工程からの新旧である。おそらく、本住居跡が周辺遺構を切る重複関係と思われるが、検討を要しよう。

床面：黄褐色硬質ロームを地床とする。小型の基盤礫が露出し、凹凸を見るがほぼ平坦面を維持する。硬化面は跡北側から西側にかけて広く認められた。

施設：床面中央やや東寄りに大型の地床跡を見る。壁周溝は西側壁から南壁にかけて2条が平行して検出されている。柱穴として、20基のピットを調査したが、良好な例は数基に止まる。

炉跡：不整楕円状を呈する大型地床跡である。長軸を北東に向け、平面規模は130.0×108.0cmを測る。深さは36.0cmで壁も緩やかな立ち上がりを示す。検出当初は、大型円礫を伴出したため、炉石として位置付けていたが、炉石ではなく、廃棄時の流入と捉えた。底面は焼土の影響も強く、焼礫も含まれていた。

埋裏：明瞭な例は見られなかったが、床面南端に空くP8に深鉢体部破片(1)が立位で出土している。出入口埋裏の痕跡として位置付けておきたい。P8内で別ピットの重複層位が見られることから、埋裏を廃棄し新たにピットを設けた状態と判断したい。おそらく、住居内の拡張行為に伴う例と判断した。P8は径40.0cm、深さ65.0cmを測る。

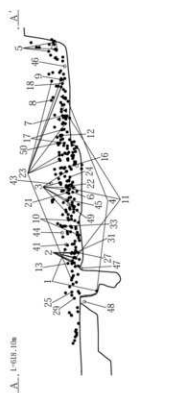
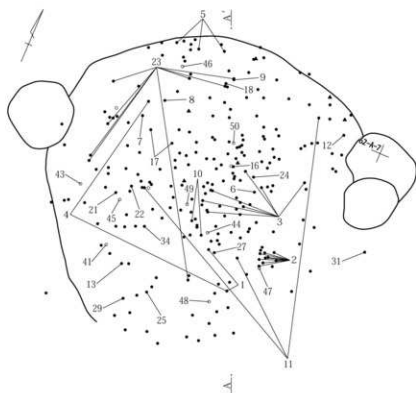
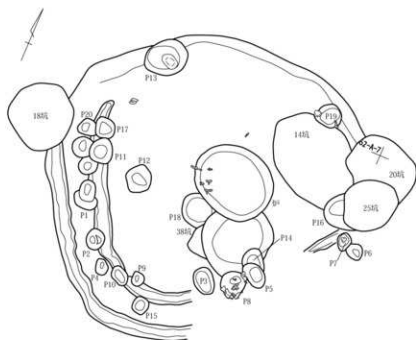
壁周溝：西壁際から南壁際にかけて、2条が平行して確認された。また東壁付近でも、周溝状の一部が検出されており、これも延長の一部と思われる。2条平行する壁周溝はおそらく住居内の拡張痕跡と思われる。内側の壁周溝から外側への拡張と考えられよう。

柱穴：20基のピットのうち、規模、配置から良好な例はとして、P1～P3、P5、P7、P11～P13、P19が挙げられる。このうちP13は大型で主軸からややずれるが、奥壁柱穴として位置付けたい。また、P3、P5は先に述べた埋裏痕跡を見せるP8を挟む位置にあり、出入口部の対ピットと同様の性格が想起されよう。周辺のピットでは、4号住P1、P2も位置的には本住居跡の平面形に沿っており検討を要す。さらに、4号住P3、P4も、出入口部のピットに近い形態を示す。

その他では、西壁際の2条の壁周溝にかかり多くのピットが存在する。壁柱穴として位置付けられるが、深さが良好な例は数基に止まる。

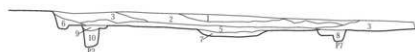
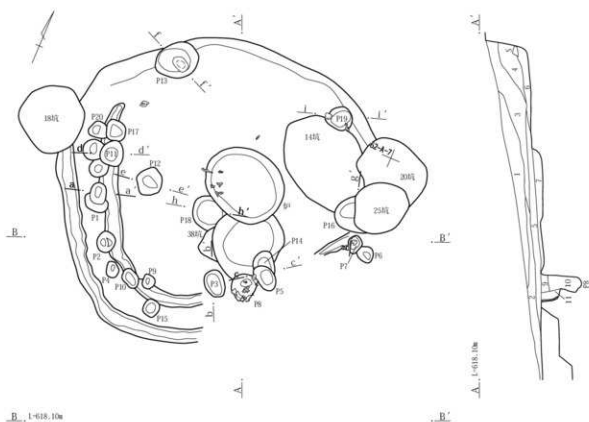
遺物：平面的な偏りもなく、住居跡全体から出土を見る。埋土中から床直まで満遍なく出土しており、多くの遺物が廃棄に伴う例と位置付けられよう。おそらく短期間の所産と考えられよう。その中で、1は埋裏として位置付けたため、居住に伴う例である。4も一部が1と同様に出土していることから、1と極めて近縁性にある破片である。2は床直上、3は埋土下位よりまとまった出土を示している。5は北壁際からやや浮いた状態で出土した。埋裏(1)は加曾利EⅢ式新段階の所産と捉えられ、その他も加曾利EⅢ式～EⅣ式に比定されよう。

所見：敷石住居跡ではないが、出入口施設の在り方など極めて近い構造を示す。壁周溝が2重で埋裏の移動痕跡から、拡張住居の可能性が高い。時期は中期後葉から末葉と時間幅を持たせたい。



0 1 : 60 2m

第176図 62区2号住居跡(1)



2号住上層

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム塊を少量、黄色粒を微量含む | 6 褐色土 ローム小塊を少量含む。軟質 |
| 2 暗褐色土 ローム粒、黄色粒を微量含む | 7 にふい、黄褐色土 焼土粒を少量含む。砂礫埋土 |
| 3 にふい、褐色土 ローム粒、砂礫を多く含む | 8 灰褐色土 黄色粒を少量含む。P 7埋土 |
| 4 褐色土 ローム粒を多く含む | 9 灰褐色土 黄色粒を微量含む。P 2・8埋土 |
| 5 灰褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む | 10 黒褐色土 ローム粒を少量含む。P 2・8埋土 |
| | 11 黒褐色土 ローム粒を多く含む。P 8埋土 |



ピット土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 ローム塊を微量5%程含む
- 3 にふい、褐色土 ローム塊を多く含む
- 4 褐色土 ローム小塊を多く含む

P 16・18土層

- 1 にふい、褐色土 小礫、黄色粒を少量含む
- 2 にふい、褐色土 ローム粒を多く、黄色粒を微量含む
- 3 黄褐色土 ローム塊主体、黄色粒を微量含む

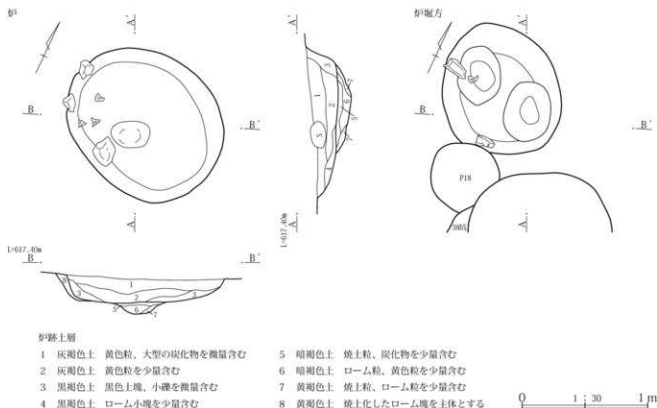
P 19

- 1 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 にふい、褐色土 ローム粒を多く含む



第177図 62区2号住居跡(2)

第3章 発見された遺構と遺物



第178図 62区2号住居跡(3)

62区3号住居跡(第182図 PL.94)

概要：本住居跡も61区45号住と同様に土層観察で抽出した住居跡である。平面図、写真記録はないが、土層図にその存在が記され、遺物も少量ながら取り上げられている。

土層図記録を見ると、3号住は2号住と8号住居跡の間に挟まれ、両住居跡に切られる新旧を示している。また、この2号住と8号住の間は、4号住と18号住が存在しており、平面図上は3号住が記録されていない。本報告書では、4号住への帰属も考えたが、4号住そのものも跡と僅かな立ち上がりを持って住居跡としているため判断しにくい要素が多く、確定性に乏しい。故に、遺物のみの掲載となったが、62区3号住居跡出土遺物として掲載する。時期は中期後葉である。

62区4号住居跡(第183図 PL.15-94)

位置：調査区中央の住居跡密集地点内にある。61区と62区に跨がり、61区Y-5・6、62区A-5・6グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあるが、重複住居跡の影響もありほぼ平坦地形での調査となった。重複・近接する住居跡としては、前述の2号住の他、

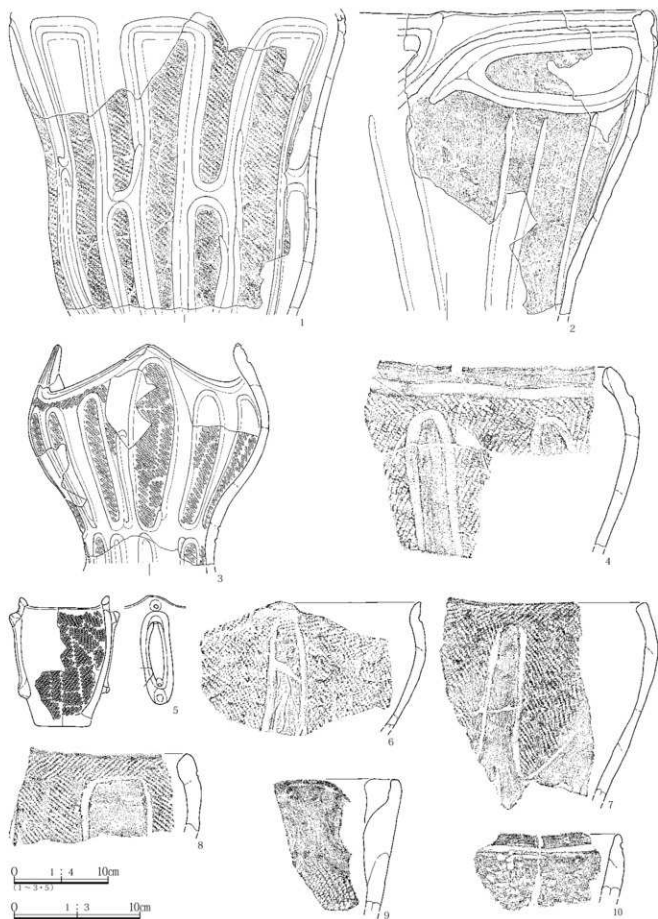
18号住がある。さらに東には61区43号住や46号住が重なり、南には8号住居跡が見られる。

経過：ローム漸移層の暗褐色土で平面形確認をした。前述のように、2号住から8号住までの土層観察において、3号住が確認されていないが、本住居跡が同時に位置付けられている。おそらく同一住居跡と思われるが、検討を要しよう。

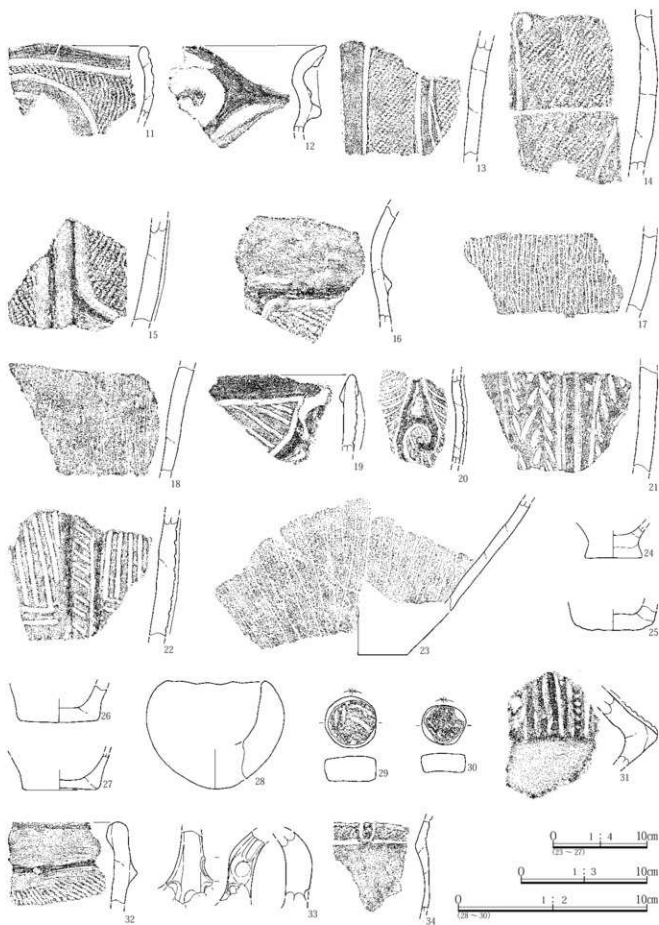
規模：北西の壁と南東の壁が確認されたため、その間の距離を径として、規模とした。径約475.0cmの円形を基調とした平面形を呈す。深さは29.0cm程で遺存度は悪い。壁の立ち上がりも数cmで極めて弱い。

重複：前述の各住居跡と重複・近接するが、61区43号住や45号住は土層では本住居跡を切る新旧を示す。また2号住や8号住との新旧に関しては、おそらく、ほぼ同時期の所産か、本住居跡(3号住・18号住)が古く位置付けられる傾向がある。このように、本住居跡が最も古い住居跡と位置付けられるが、出土土器の様相は、大きな差は無い。

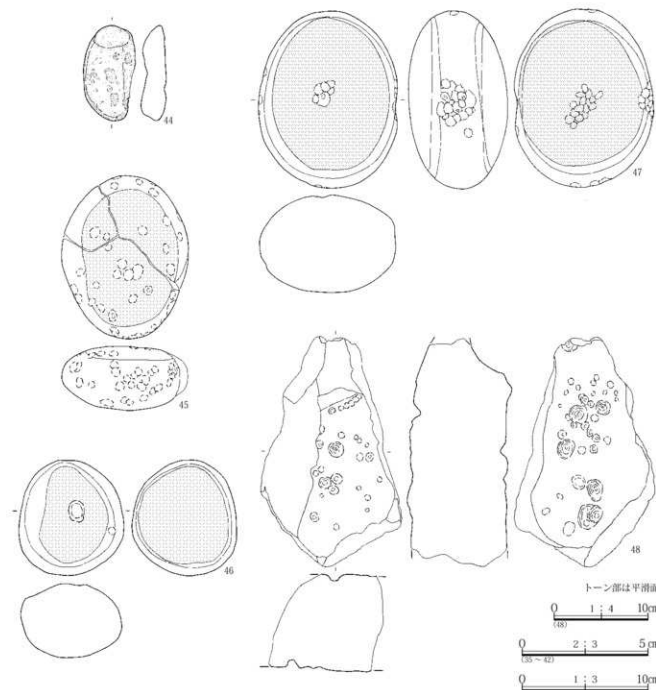
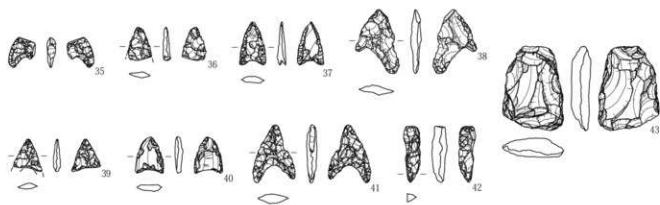
床面：暗褐色土や黒褐色土による地床である。凹凸を持つがほぼ平坦面を築く。硬化面は見られず、軟弱な床面だった。



第179図 62区2号住居跡出土遺物(1)

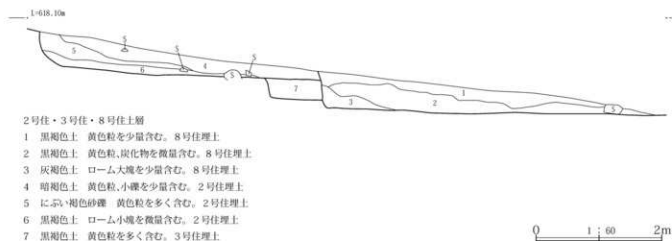


第180図 62区2号住居跡出土遺物(2)



第181図 62区2号住居跡出土遺物(3)

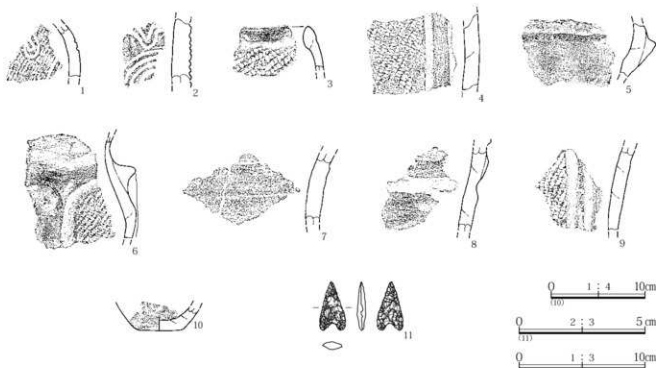
第3章 発見された遺構と遺物



2号住・3号住・8号住土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む。8号住埋土
- 2 黒褐色土 黄色粒、炭化物を微量含む。8号住埋土
- 3 灰褐色土 ローム大塊を少量含む。8号住埋土
- 4 暗褐色土 黄色粒、小礫を少量含む。2号住埋土
- 5 ぬい褐色砂礫 黄色粒を多く含む。2号住埋土
- 6 黒褐色土 ローム小塊を微量含む。2号住埋土
- 7 黒褐色土 黄色粒を多く含む。3号住埋土

0 1 60 2m



第182図 62区3号住居跡及び出土遺物

施設：床面中央やや北寄りに地床炉を見る。北西壁周辺にピットが集まり、南東壁周辺に焼土とP5を見る。

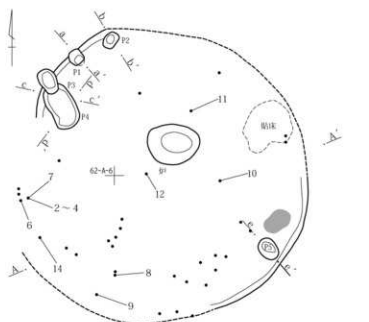
炉跡：地床炉である。長軸をほぼ東西に向けた不整楕円状の平面形を呈し、規模は約84.0×63.0×21.0cmを測る。皿状の断面形を示すが壁は明瞭に立ち上がる。埋土は黒褐色土を主体にし、焼土の堆積は少量だった。

柱穴：北西壁にP1～P4、南東壁にP5を見る。壁柱穴の配置に近いが、深さなどが不均質で統一性に欠ける。さらに、2号住の項でも述べたが、P1～P4は2号住南の出入口部周辺の柱穴に該当する可能性を持つため、本住居跡の柱穴としては確定できない。

遺物：住居跡南側に集まる傾向が見られるが、ほぼ埋

土中の出土で、居住に伴う例では無い。出土土器の多くは中期後葉（加曾利EⅢ式・「郷土式」・曾利式）に比定される。11と12は加曾利EⅡ式か、14は諸磯b式である。

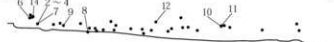
所見：南北に62区2号住と8号住に挟まれ、東に45号住に切られる住居跡として調査されたが、平面形も壁の立ち上がりは弱く壁周溝も見ない、さらに柱穴も確定できない状況である。住居跡としての疑問もあるが、炉跡の存在により居住痕跡としての位置付けは可能である。時期は中期後葉としたい。



A, 1-617.0m

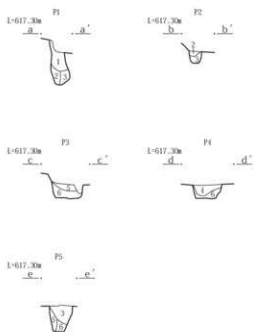


A, 1-617.0m



4号住居跡

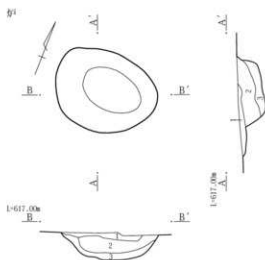
- 1 灰褐色土 褐色土大塊を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、As-Y%10%程含む



ピット上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊を微量含む
- 3 黒褐色土 ローム大塊を多く含む
- 4 灰褐色土 ローム大塊を少量含む
- 5 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 6 黄褐色土 ローム大塊を主体とする

トーン部は焼土

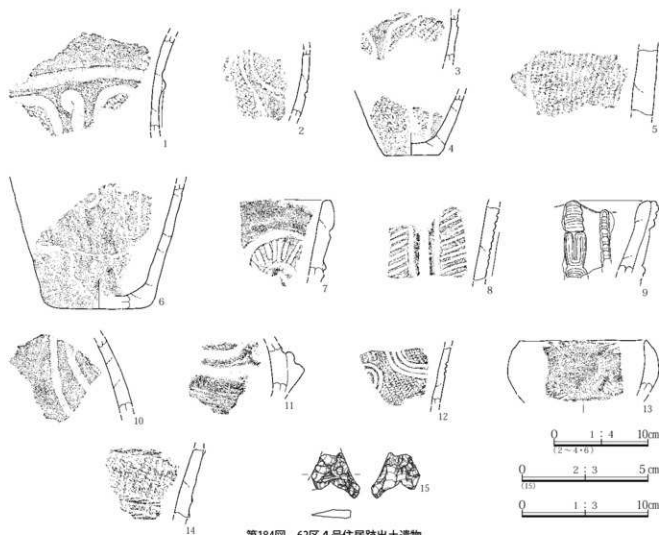


炉跡上層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊、炭化物を微量含む
- 3 黒褐色土 焼土小塊を少量、炭化物を微量含む



第183図 62区4号住居跡



第184図 62区4号住居跡出土遺物

62区5号住居跡 (第185～189図 PL.15・94・95)

位置：調査区中央の住居跡密集地点の西端にある。62区B・C-5・6グリッドに位置する。2号住と同様に北側から北西側に急斜面地形が展開し、本住居跡周辺で緩やかな南斜面へ変化する。周辺の重複・近接する遺構としては、2号住が東に、南には7号住居跡、20号住居跡が重複する。さらに5号坑、12号坑、18号坑、22号坑、23号坑、31号坑が床面上に重なり、1号掘立柱建物跡柱穴も本住居跡を切る。

経過：北側の強い斜面地形が強い箇所は、黒褐色土及び暗褐色土で平面形の確認が果たせたが、南半は重複遺構の存在もあり、明瞭な平面形が把握できなかった。しかしながら、平坦な床面及び石囲いが床面上に確認できたため、住居跡として調査を進めた。

規模：東側と南側は重複する住居跡と斜面地形のため平面形の把握は果たせなかったが、北北西に主軸を持つ、概ね6m前後の円形を基調とした平面形と思われる。北

側から西側の壁の遺存度は良好で約40.0cmを測る。

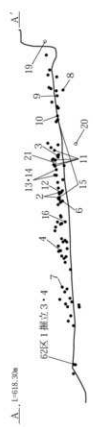
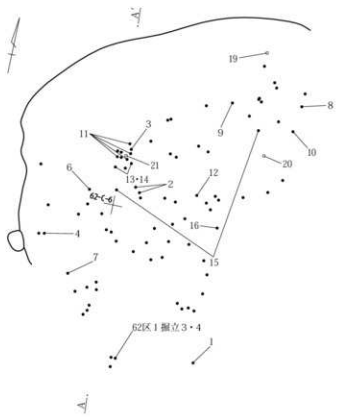
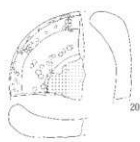
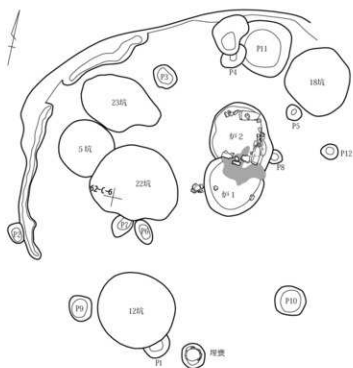
重複：2号住、7号住、20号住とも土層による新旧関係は確認できなかった。おそらく2号住は本住居跡を切ると思われるが、7号住、20号住は判然としない。その他の土坑は本住居跡が新しい様相を示すが、確定的ではない。

床面：ローム漸移層下位の褐色土を地床とし、僅かに南側への傾斜が見られるが、ほぼ平坦面を築く。土坑等の重複遺構が多いため判然としないが、硬化面は広がりを見なかった。

施設：床面中央北寄りに竈跡2基を見る。埋葬は南端に1基ある。壁周溝は西側壁に走行が確認された。柱穴として、12基のピットを調査している。

竈跡：2基の竈跡が南北に重複した状態で検出された。南側の地床が竈1、北側の石囲い竈が竈2とし、土層観察では竈2が竈1を切る新旧関係を示す。

竈1は長軸を南北に持つ不整楕円状を呈し、平面規模

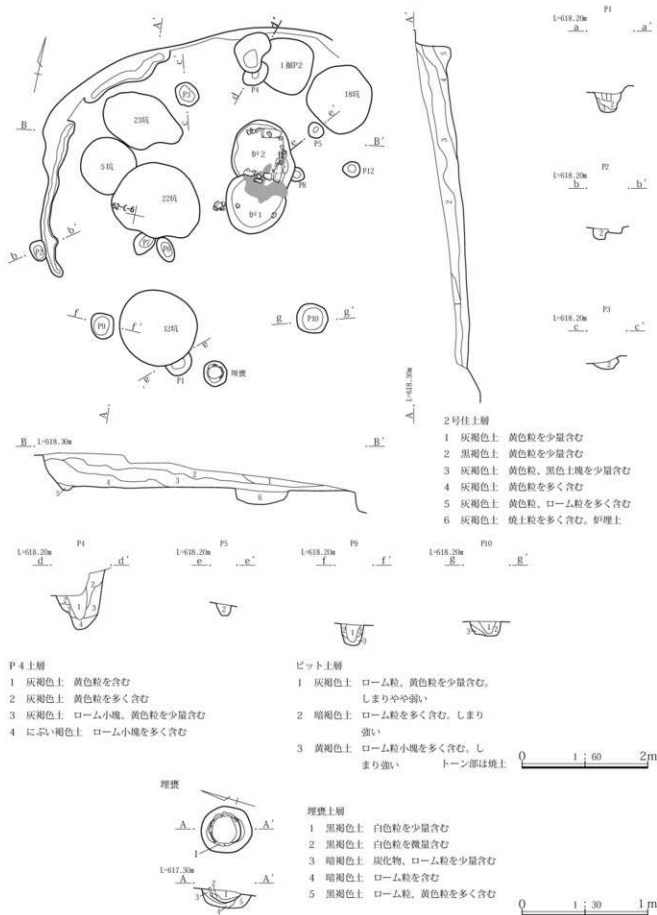


A. 1=0.30m

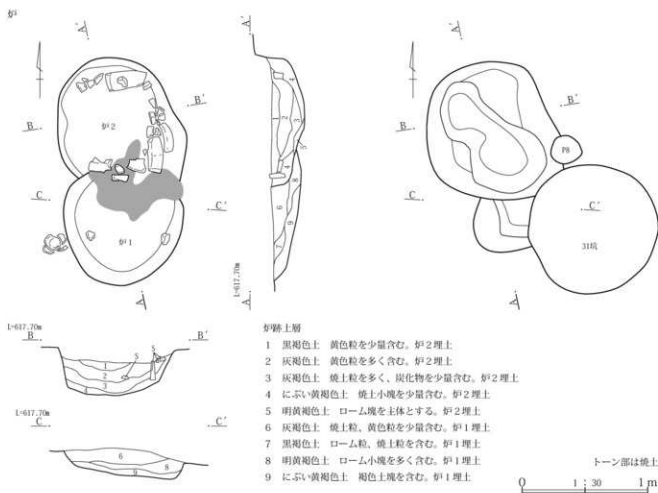
トーン部は焼土



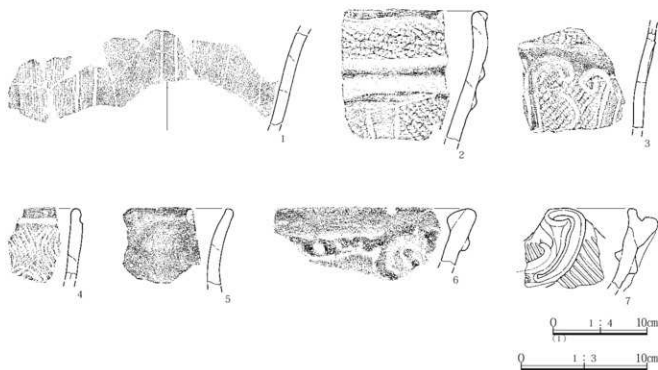
第185図 62区5号住居跡(1)



第186図 62区5号住居跡(2)

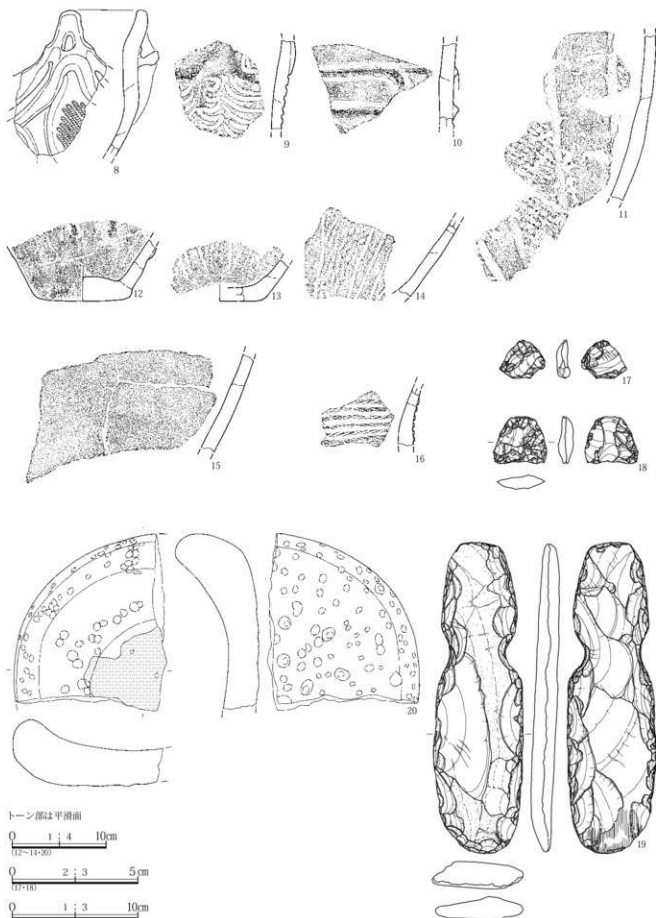


第187図 62区5号住居跡(3)



第188図 62区5号住居跡出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第189図 62区5号住居跡出土遺物(2)

は $\approx 93.0\text{cm}$ を測る。深さは約 20.0cm で、底面は比較的四凹凸があり、壁はやや弱い立ち上がりである。焼土粒を含む灰褐色土や黒褐色土を埋土とする。

炉2は主軸を北北西に持つ石囲い炉である。長軸長約 95cm 、短軸は約 80cm を測る不整楕円状の掘り込みに西辺を除く三辺に、角礫を中心とした炉石を設ける。東辺の炉石の中には石皿片(20)を並べていた。深さは約 26.0cm を測り、壁の立ち上がりもしっかりしていた。埋土は焼土粒を多く含む灰褐色土を主体にしており、南側への焼土塊の分布が著しかった。

2基の炉跡の確認は本住居跡内における、移動の痕跡と見ることができよう。

埋 裏：床面南端にあたるP1東に接して調査された。径 35cm 程の円形の掘り込みに小型の深鉢体部が正位の状態で見出されていた。深さは約 15cm を測る。炉主軸を延長した住居主軸に近い箇所に設けられており、南壁に設けられた出入口埋裏と考えている。

壁周溝：西側壁際に走行が認められる。やや浅いがほぼ壁と一体化しており、掘り込みもしっかりしていた。2基の炉跡を住居内の移動痕跡と捉えたが、壁周溝には具体化しておらず、1条の検出に止まっている。

柱 穴：12基のピットを確認し、柱穴としての整合性を語った。住居跡主軸線上にのP4他、出入口部の柱穴としてP1、さらにP9、P10が良好な配置と規模を示すが、床面北側に関しては土坑との重複のため、良好な例は確認できなかった。

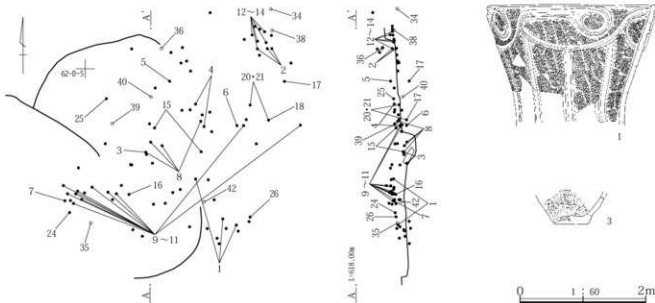
遺 物：出入口埋裏(1)と、炉石に供された石皿(20)が居住に伴う例であろう。その他の破片類は全体的に広がりが見られ、層位としても床直上、床直出土に近い。一括廃棄に伴う所産と考えられる。出入口埋裏1が加曾利EⅢ式古段階、7、9が「郷土式」、6が「坪井類型」、8が「屋代類型」と位置付けられ、その他は加曾利EⅢ式のため、中期後葉でまとまる。16は諸磯b式で混在であろう。

所 見：炉跡2基を検出したことから、住居内の移動痕跡と捉えた。しかしながら、壁周溝や柱穴ではその痕跡が顕著ではなく、炉の移動のみが行われたようだ。時期は中期後葉と考えた。

62区6号住居跡(第190～193図 PL.16・96・97)

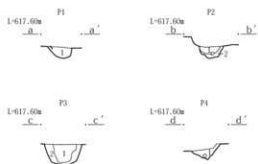
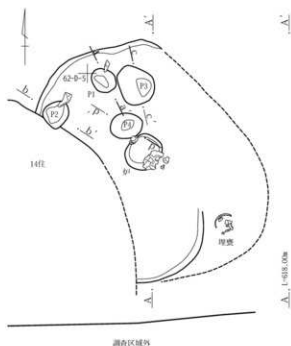
位 置：62区C-D-4・5グリッドに位置する。調査区西寄りの南端にあたり、周辺は南東への斜面地形が広がる。西に14号住居跡と重複して調査された。

経 過：ルーム漸層下位の暗褐色土で平面形を確認したが、床面までは深さが無く、調査着手と同時に炉跡が露出する状態となったため住居跡として調査をした。しかしながら、西側は14号住との重複、東側から南側は、斜面地形のため判然とせず、僅かな色差で南側壁を検出したが、不安定な要素が多く確定的な平面形ではない。規模：平面形も規模も不明部分が多く確定できない。概ね径 3.6m 程の不整円形を呈する小型住居跡と思われる。深さも 25.0cm 程で浅く、立ち上がりも弱い。遺存度



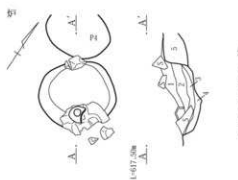
第190図 62区6号住居跡(1)

第3章 発見された遺構と遺物

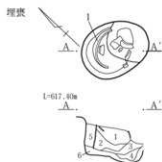
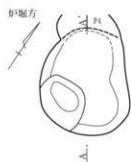


- P 1 上層**
1 黒褐色土 ローム塊を多く含む
- P 2 上層**
1 黒褐色土 ローム塊、礫を含む
2 にぶい黄褐色土 ローム塊を主体とする
- P 3 上層**
1 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
2 にぶい褐色土 ローム小塊を多く含む
- P 4 上層**
1 黒褐色土 ローム粒を多く含む

0 1 : 60 2m



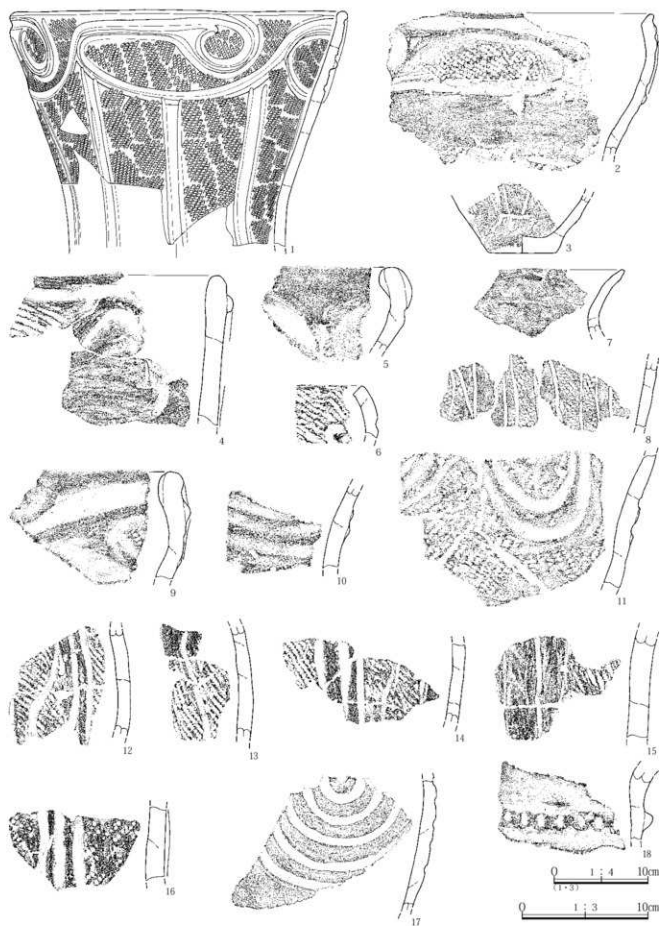
- 5号跡上層**
1 暗褐色土 黄色粒を少量含む
2 暗褐色土 ローム小塊を含む
3 褐色土 礫土小塊を含む
4 灰黄褐色土 ローム粒を含む
5 暗褐色土 ローム粒を含む



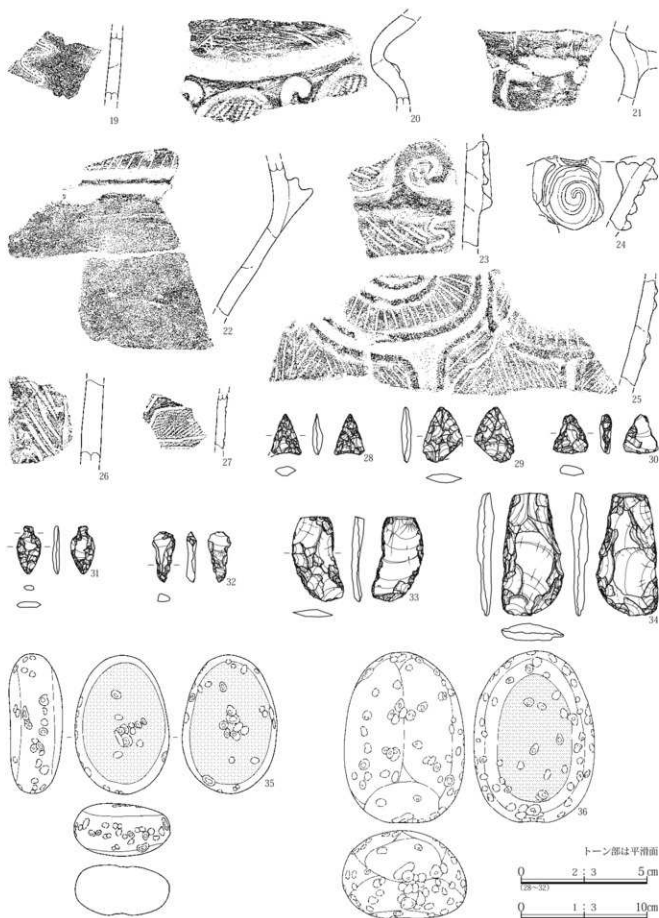
- 埋裏上層**
1 黒褐色土 ローム粒を多く、中礫を少量含む
2 黒褐色土 白色粒を微量含む
3 黒褐色土 暗褐色土塊、黄色粒を少量含む
4 黒褐色土 黄色粒を少量、ローム小塊を含む
5 暗褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む
6 褐色土 ローム塊を含む

0 1 : 30 1m

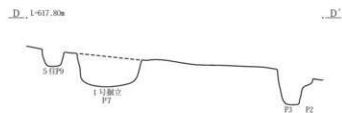
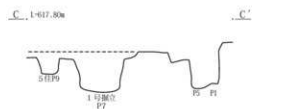
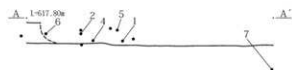
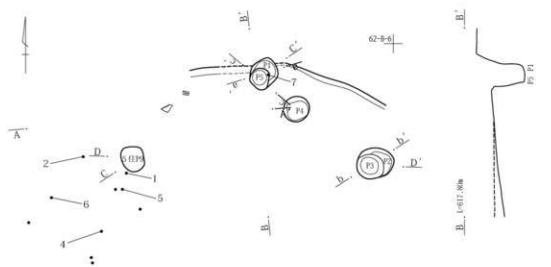
第191図 62区6号住居跡(2)



第192図 62区6号住居跡出土遺物 (1)



第193図 62区6号住居跡出土遺物(2)



7号住居層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 黒褐色土塊を多く含む
- 3 灰褐色土 黄色粒、黒褐色土塊を少量含む



P 1 上層

- 1 灰黄褐色土 ローム粒を含む
- 2 灰黄褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 にぶい褐色土 ローム粒を多く含む

P 2・3 上層

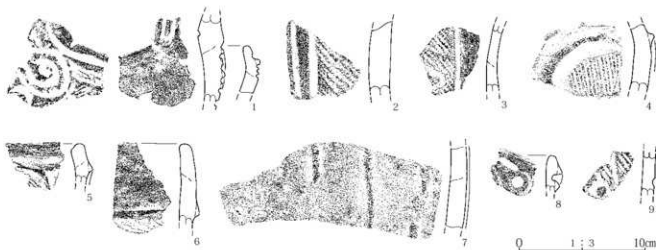
- 1 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む
- 3 黒褐色土 ローム大塊を含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 5 黒褐色土 小礫を含む
- 6 黄褐色土 ローム粒を多く含む
- 7 黄褐色土 ローム塊を含む
- 8 にぶい褐色土 ローム小塊を主体とする

P 5 上層

- 1 にぶい褐色土 明黄褐色土塊を含む
- 2 明黄褐色土 ローム塊、褐色土塊を含む
- 3 灰黄褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 灰黄褐色土 しまり弱い



第194図 62区7号住居跡



第195図 62区7号住居跡出土遺物

は不良といえよう。

重複：14号住との重複は層位に反映されず、不明である。出土土器は本住居跡が新しく位置付けられるが、検討を要しよう。

床面：暗褐色土を地床とする。ほぼ平坦面を築くが硬化面もなく、軟弱な床面である。

施設：炉跡を1基、埋裏を1基、ピット4基を調査した。炉跡：床面中央に地床炉を1基確認した。径約60.0cmを測る小型の円形を平面形とし、深さは30.0cmながら皿状の断面形を示す。拳大の角礫を埋土層や南側壁際に集める傾向が見られるが意図的ではなく、廃棄に伴う例と考えた。この角礫に混じり深鉢底部(3)が出土する。埋土は焼土塊を下層に含む褐色土を堆積する。

埋裏：調査では南側壁外で1基を検出している。前にも述べたように、本住居跡東側から南側は斜面地形が強く、そのため壁の遺存度が悪い。南側で辛うじて検出した壁も浅く確定性に乏しい。そのため平面形の把握は困難であり、ここで報告する埋裏もあるいは壁内に存在する出入口埋裏の可能性もある。径約50cm、深さ約30cmの不整楕円状の掘り込みで、大型深鉢口縁部から体部上半が逆位に埋設されていた。

柱穴：如北側に4基のピットの近距離に検出した。柱穴として妥当な規模を呈する例はP3しかなく、他は浅く柱穴としては相応しくない。

遺物：広い範囲で出土が見られるが、本住居跡出土とは限らない。居住に伴う例としては、炉跡出土の深鉢底部(3)と埋裏(1)で他は混在、流入と考えられる。所見：炉跡が検出されたため住居跡として調査したが、

炉跡以外は確定性に乏しい。埋裏とした逆位深鉢は、出入口埋裏として位置付けたい。

時期は、炉跡で出土した深鉢底部が加曾利EⅢ式に比定されるため、中期後葉としたい。

62区7号住居跡(第194・195図 PL.16・97)

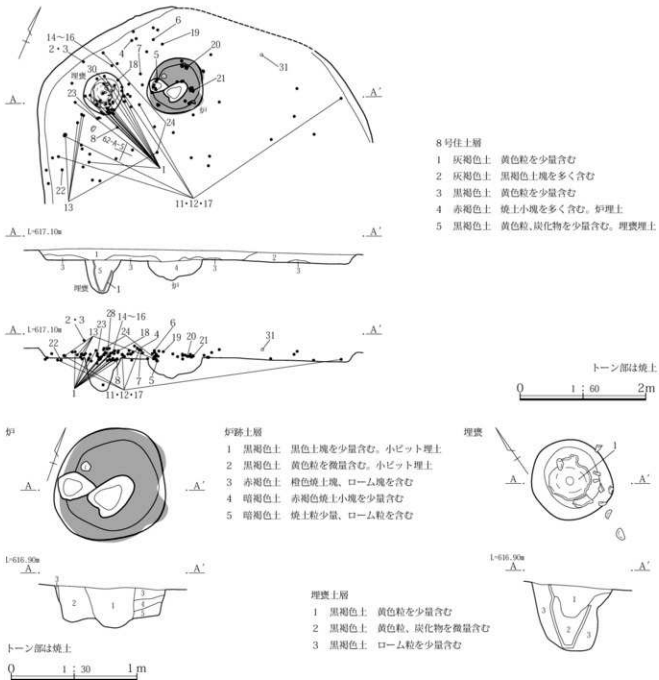
位置：調査区中央の住居跡密集地点の西端で調査された5号住南に重複する。62区B-5グリッドに位置する。近接する2号住や5号住と同様に北側から北西側に急斜面地形が展開する箇所であり、そのため本住居跡南側は大きく逸失している。

経過と概要：ローム漸移層下位の暗褐色土～褐色土で平面形を確認したが、北側壁一部のみの検出に止まった。さらに検出に努めたが、炉跡、壁周溝などの諸施設の確認が果たせず、ピット5基の調査に止まっている。平面規模など詳細は不明であり、近接遺構との土層観察も果たせなかったため、新旧関係も判然としない。

床面：褐色土を地床とするが、南側への傾斜が強く確定的な床面ではない。

柱穴：5基のピットを調査した。そのうちP4は浅く柱穴として妥当性を持たないが、P1・P5とP2・P3は重複しながらも良好な規模であり、柱穴としての可能性は高い。また柱穴の重複状況を鑑みると、住居跡内の移動や拡張といった要素が想定されよう。

遺物：西側に偏る傾向が見られ、これは本住居跡の帰属としては保証できない。本住居跡に帰属し得る遺物としては、P1より出土した深鉢体部破片(7)が挙げられよう。加曾利EⅣ式と捉えた。



第196図 62区8号住居跡

所見 北側壁の一部と2基の柱穴に限られている。住居跡としての可能性もやや疑問が残る。時期は中期末葉としたい。

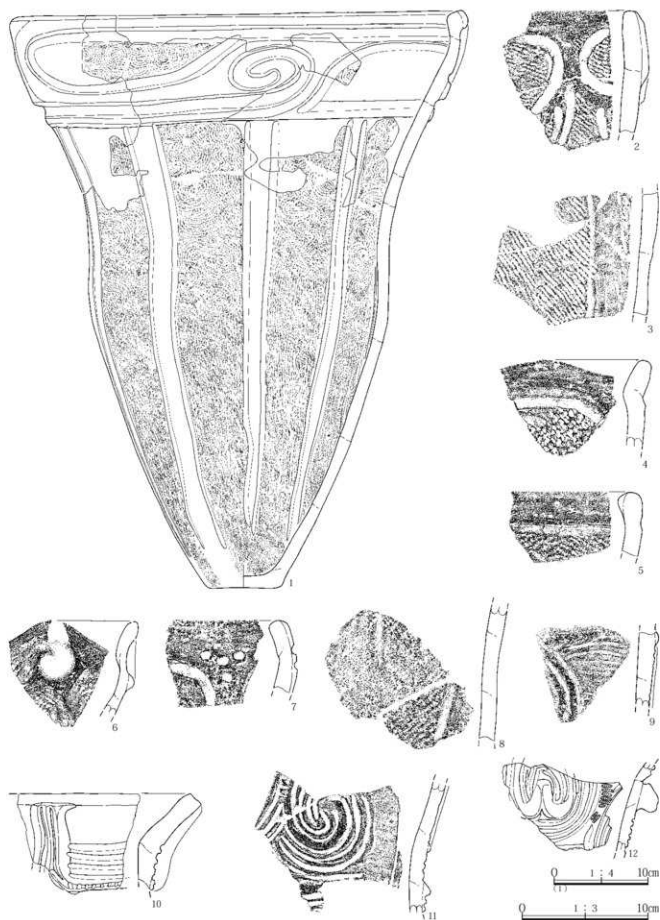
62区8号住居跡 (第196～198図 PL.16・97・98)

位置 調査区中央の住居跡密集地点内にある。61区と62区に跨がり、61区Y-4・5、62区A-4・5グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあるが、重複住居跡の影響もあり、ほぼ平坦地形での調査となった。重複・近接する遺構としては、4号住が北に重複し、西

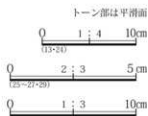
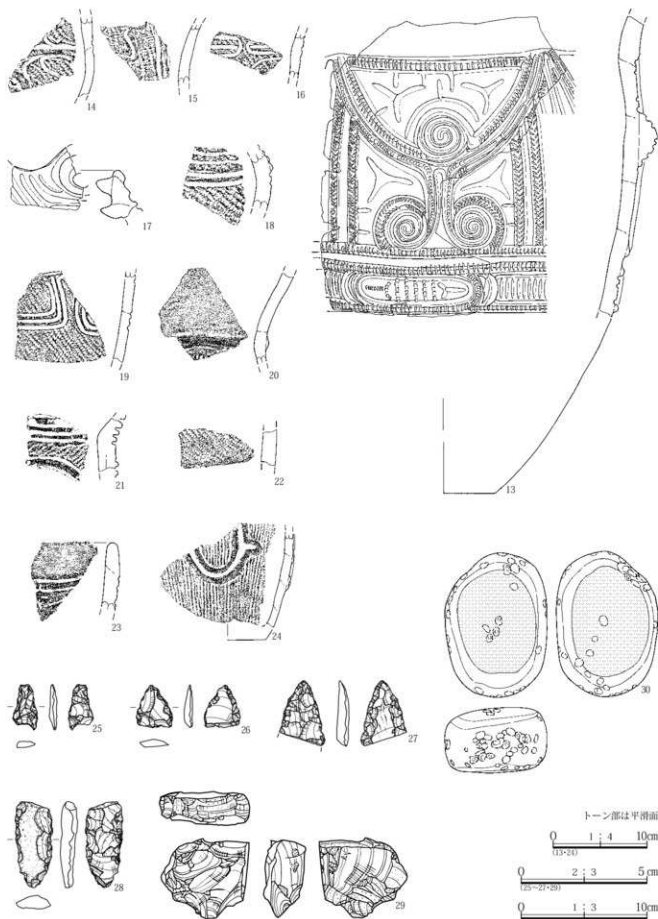
に22号住が重なる。さらに62区2号掘立柱建物跡柱穴が床面上に重なる

経過 確認面は黒褐色土中である。出土遺物の広がりが見られたため、確認面を広げたが、土色の変化を見る前に黒褐色土中に焼土が確認され、埴跡として位置付けられた。埴跡を確認できた面を床面として、さらに精査を重ね、埋設土器を西に見ることができ、北壁～西壁を確認し、東壁も一部を見る事ができた。ただし南半は壁及び床面の遺存が悪く、平面形も把握できなかった。

規模 南半を逸しているため全容は把握できないが、



第197図 62区8号住居跡出土遺物(1)



第196図 62区8号住居跡出土遺物(2)

おそらく、径5m程の六角形状の不整形円形を平面形とする。西壁と東壁の一部が残存するが、浅く約20.0cmを測り、壁の立ち上がりも弱い。

重複：4号住との重複は、南北に設定した土層観察の結果、本住居跡が新しく位置付けられた。また22号住とは調査手順からは本住居跡が22号住に乗る新旧関係である。これは出土土器との検討を要するだろう。

床面：黒褐色土を地床とする。平坦面が広がるが、硬化面は見られず、少量の焼土塊やローム塊が点在する様相をしめす。やや軟弱な床面だった。

施設：床面北東寄りに地床^カを1基、西に近接して埋設土器を1基調査している。床面が黒褐色土中の検出ということもあり、壁周溝や柱穴は得ていない。

跡：地床^カである。径約94.0×88.0cmの不整形円形を平面形とし、深さは32.0cmを測る。壁の立ち上がりもしっかりしていた。中央部及び西側に小ピットが重複しており土層の観察の妨げとなったが、焼土塊の著しい堆積は確認できた。

埋設土器：跡西側約40cmに近接して、埋裏として調査されている。径約60cm、深さ約70cmの不整形円形を呈する掘り込みに大型深鉢（1）が正位の状態に埋設されていた。口縁部2/3は欠損するが他は残存し、底部も土坑底面に接していた。

南壁ではなく、西壁際での出土ということ、跡からの距離がやや近いこと、口縁部も底部も意図的な欠損が見られず、底部まで残存していたことなどが、他の住居跡に見られる埋裏と様相を異にしており、そのためここでは出入口埋裏とはせず、埋設土器として位置付けた。

遺物：平面的に西側に偏った出土が見られる。出土層位は床直上や床直が多く、一括出土遺物の感が強い。しかしながら、出土土器は時期的に2大別され、1～9は中期後葉、10～24は中期中葉末と時期差が観察される。本住居跡の居住に伴う出土遺物としては中期後葉に比定される埋設土器1があり、2～9はその段階に伴う例と位置付けられよう。さらに10～24は下位に重複する22号住に帰属する可能性が高く、本来ならば分別して報告すべきである。反省点として記す。

所見：埋設土器1は加曾利EⅢ式中段階に比定されよう。跡が確認されたため住居跡として位置付けているが、重複する22号住との分別が果たせないまま、報告に

至っている。おそらく本住居跡が加曾利EⅢ式中段階に併行する中期後葉の所産、22号住が「勝坂系」や「焼町類型」を伴う中期中葉末の段階と考えておきたい。

62区9号住居跡（第199～213図 PL.17・99～107）

位置：調査区西側の住居跡群の中にある。62区G-H-5・6グリッドに位置し、北西に21号住居跡、南に11号住居跡、西壁には48坑が重複する。周辺は南への緩斜面地形だが、ほぼ平坦地形での調査となった。

経過：ローム漸移層である暗褐色土～褐色土を確認面とした。重複が著しくなくそのため比較的容易に平面形の把握が果たされた。出土遺物は多く、跡や床面に至るまで時間を要したが、明瞭な跡、床面、壁を呈していたため、全体像の検出も良好に果たされた。

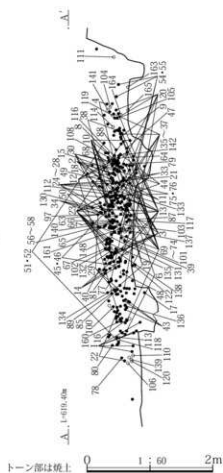
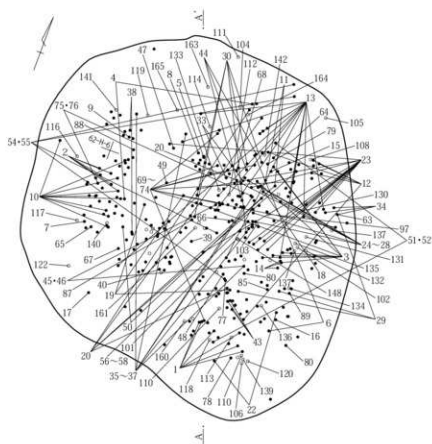
規模：平面形は六角形を呈する。平面規模は530.0×500.0cmで主軸方位を北北西に向ける。深さは北壁付近で65.0cmを測り良好な遺存度を誇る一方、南壁は斜面地形に影響され数cmに止まる。さらに南壁周辺は平面形把握が難しく、若干過掘した様相をしめす。これには復元線を加えている。

重複：北に重複する21号住は本住居跡が切る様相を示すが、21号住の石囲い^イが本住居跡埋土中に確認されている。21号住を新しく見るべきであろう。11号住との重複部分は狭小で、明瞭な土層把握が見られなかった。出土土器からおそらく本住居跡の方が新しい様相を示すが、検討の余地を残す。

床面：黄褐色軟質ロームを地床とする。僅かに南に傾き凹凸があるものの、ほぼ平坦面を築く。硬化面は跡周辺から中央部分にかけて広く見ることができた。また南西側にかけて、基盤礫が露出する箇所も見られた。

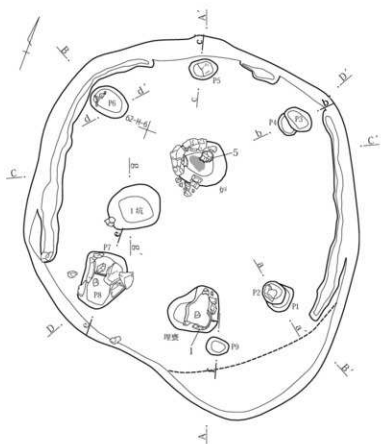
施設：床面中央北北西寄りに石囲い^イを1基設ける。埋裏は南壁際に1基、壁周溝は西壁際と東壁際、さらに北壁際の一部に見ることができた。柱穴として9基のピットを調査した。また、土坑1基を住居内の施設として位置付けて調査している。

跡：住居跡主軸線上北北西寄りに石囲い^イを設ける。北辺と西辺、南辺の一部に跡石が囲う。西辺は大型の垂角礫だが他はやや小型の角礫を主としていた。いずれも被熱しており破砕した状態を示す。如内北東側に如内土器（5）が正斜位（南西）に向けて埋置されていた。跡

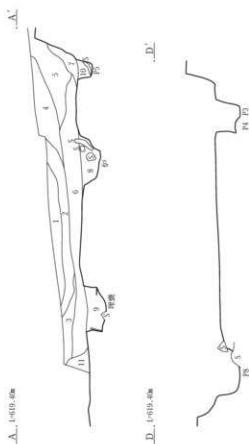


第199図 62区9号住居跡 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



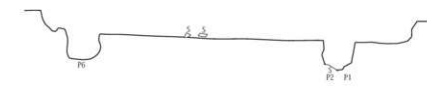
B, L=619.40m



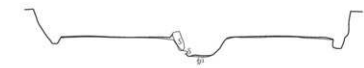
B'



D, L=610.40m



C, L=619.40m



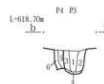
C'

9号住上層

- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を多く含む
- 2 褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 3 黒褐色土 礫を含む、ローム粒少量
- 4 黄褐色土 ローム粒、炭化物、遺物を含む
- 5 褐色土 ローム粒、黄色粒、遺物を含む
- 6 黒褐色土 黄色粒、炭化物を多く含む
- 7 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 8 暗褐色土 黄色粒を含む。埋室土
- 9 暗褐色土 黄色粒を少量含む。埋室埋土
- 10 にぶい黄褐色土 ローム粒を含む。P5埋土
- 11 にぶい黄褐色土 ローム粒を多く含む



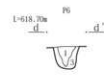
I-618.70m P2 P1



I-618.70m P4 P3



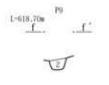
I-618.70m P5



I-618.70m P6



I-618.70m P8 P7



I-618.70m P9

ビット上層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 にぶい黄褐色土 ローム大塊を多く含む
- 4 黄褐色土 にぶい黄褐色土塊を含む
- 5 にぶい褐色土 ローム塊を含む

1号土坑



I-618.50m P1

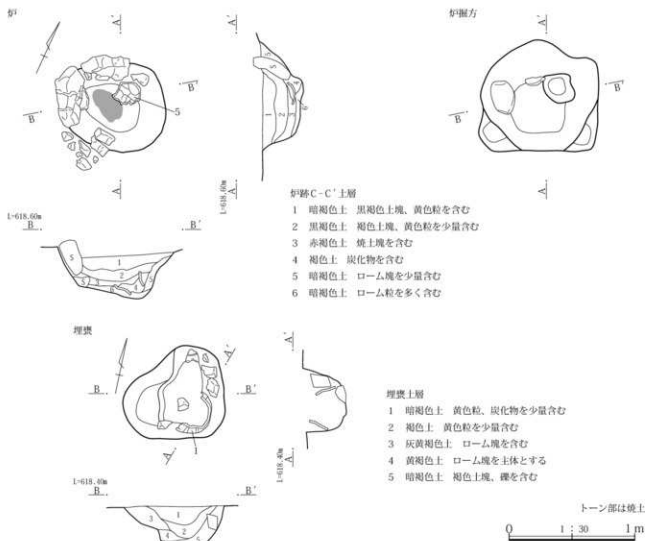
1号土坑上層

- 1 にぶい褐色土 ローム塊を含む
- 2 灰黄褐色土 礫を含む

トーン部は境土



第200図 62区9号住居跡(2)



第201図 62区9号住居跡(3)

石同様被熱が著しい状況だった。

埋 裏：住居跡主軸線上の床面南側で検出した。約80.0×75.0×32.0cmを測る不整形土坑を掘り込みとしており、南東隅に深鉢口縁～体部上半の1/2(1)が逆位で出土した。同じ土坑内及び南側の床直上出土2点が接合し、ほぼ全周するが、土坑内は半分の出土だった。逆位土器以外には拳大の角礫が伴出していたが、性格は不明である。

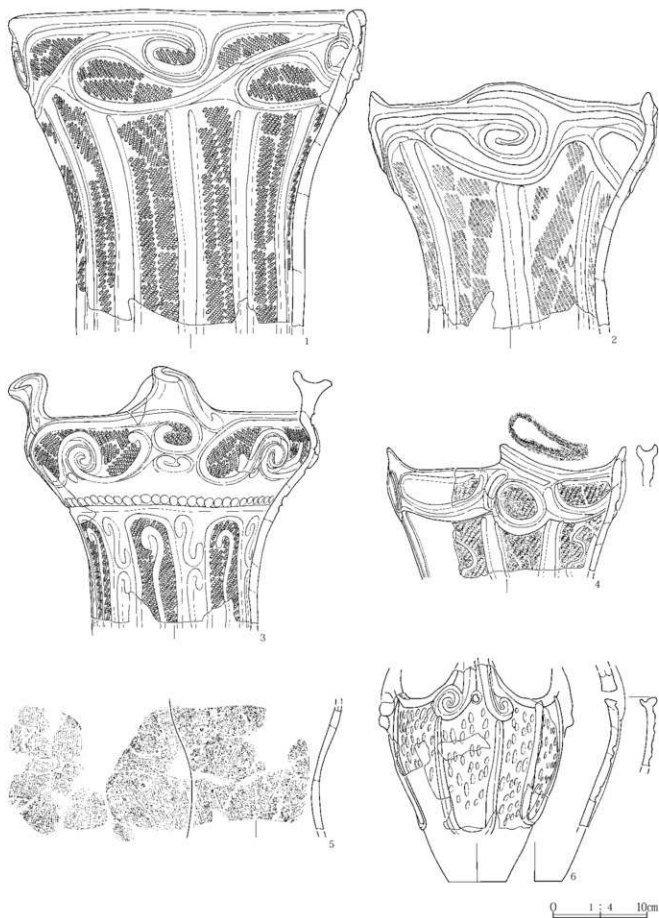
壁周溝：西側壁と東側壁に良好に走行する。ほぼ壁と一体化しており、平面形を際立たせている。また、北壁際の極一部にも小溝が設けられる。周辺の壁周溝の延長かあるいは別の施設なのか性格は不明であるが、奥壁柱穴であるP5にまで及んでおらず、奥壁柱穴周辺の施設の存在が想定されよう。

柱 穴：床面上にピット9基を調査したが、柱穴として良好な例は(P1・P2)、(P3・P4)、P5、P6、(P7・P8)であ

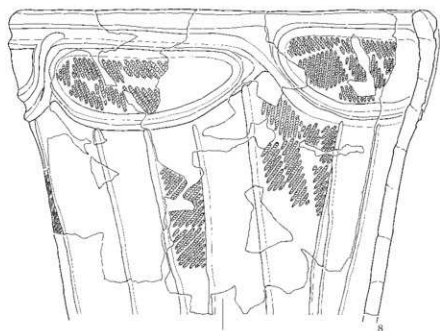
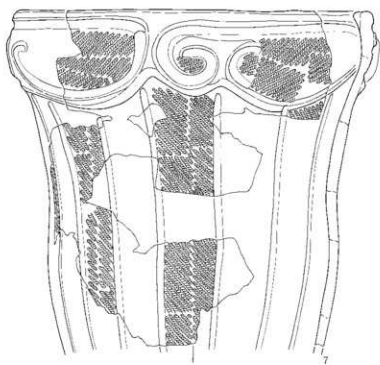
る。住居平面形の各隅に沿った配置で5箇所に配されており、南側の出入口部にP9が設けられていた。極めて整然とした配置である。また、P1とP2のように重複状態で検出された柱穴が3箇所あり、建て替えなどの痕跡と位置付けられよう。また奥壁柱穴のP5内には扁平な自然石が置かれ、重複痕跡を見ないことから、他の柱穴との差が想起される。

土 坑：住跡の南西側に不整形を呈した浅い土坑を検出した。規模は約85×60×15cmを測り、底面は基盤礫が露出している。重複ではないものの、柱穴としては位置、規模とも不適当で土上に特徴はないが、何等かの施設の可能性を踏まえて、土坑として位置付けておく。

遺 物：出土遺物量は多い。そのうち、居住痕跡としての炉内土器(5)、埋裏(1)以外は多くが埋土中～床直上で出土している。平面的にも住居跡全体から出土しており大きな偏りは見られないことから、ほぼ同

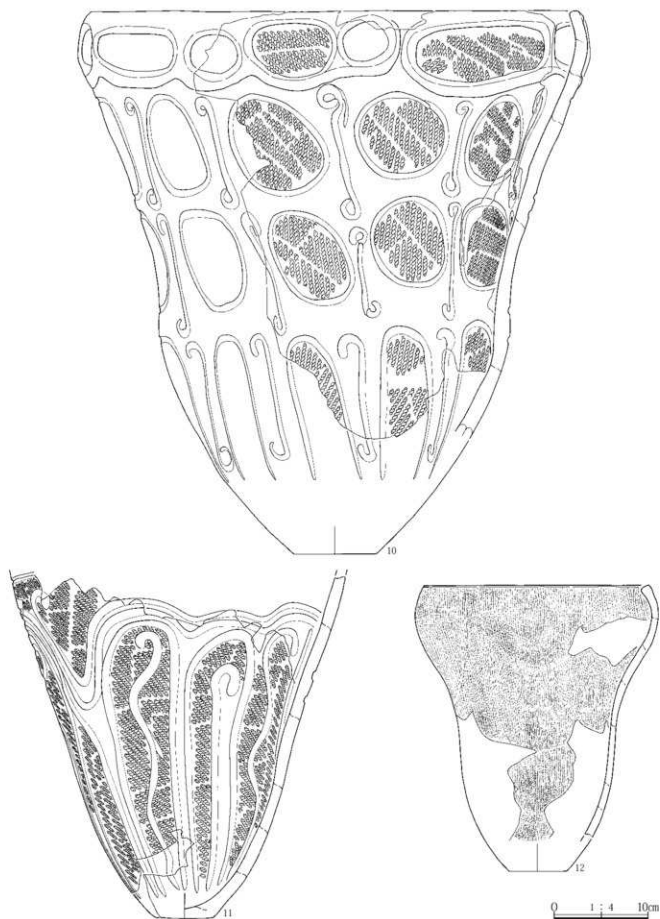


第202図 62区9号住居跡出土遺物(1)

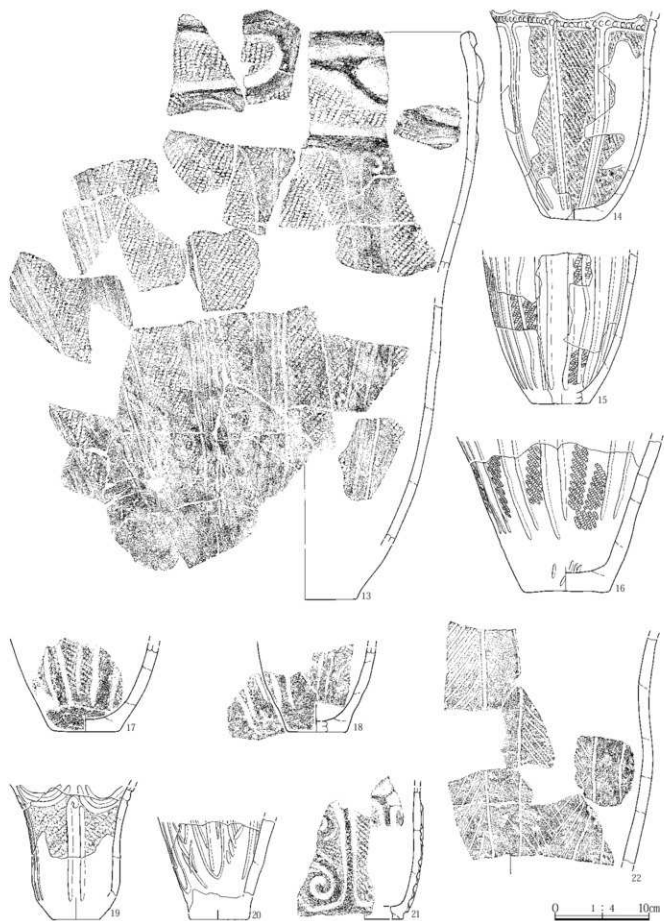


0 1 : 4 10cm

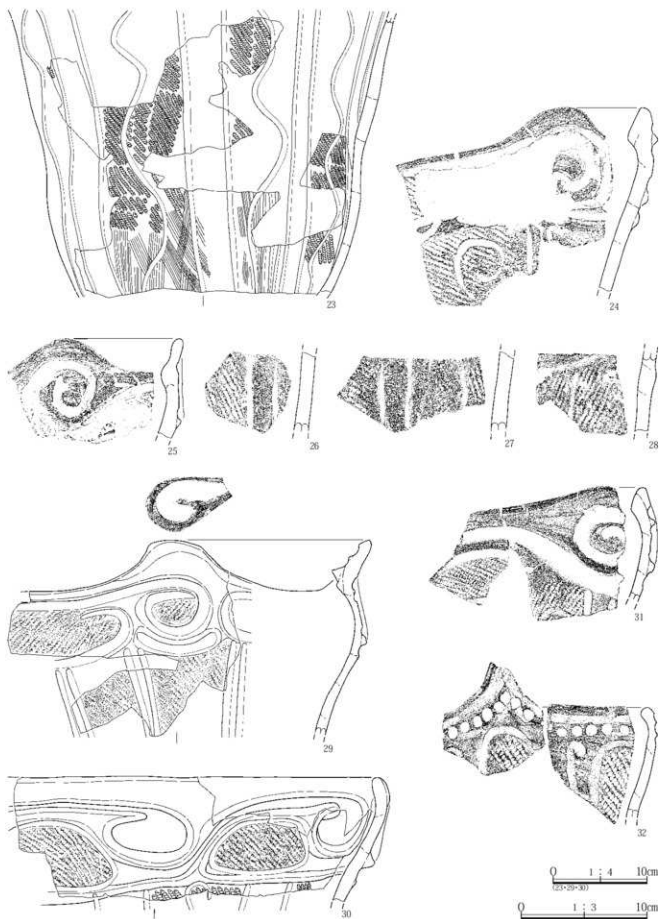
第203図 62区9号住居跡出土遺物(2)



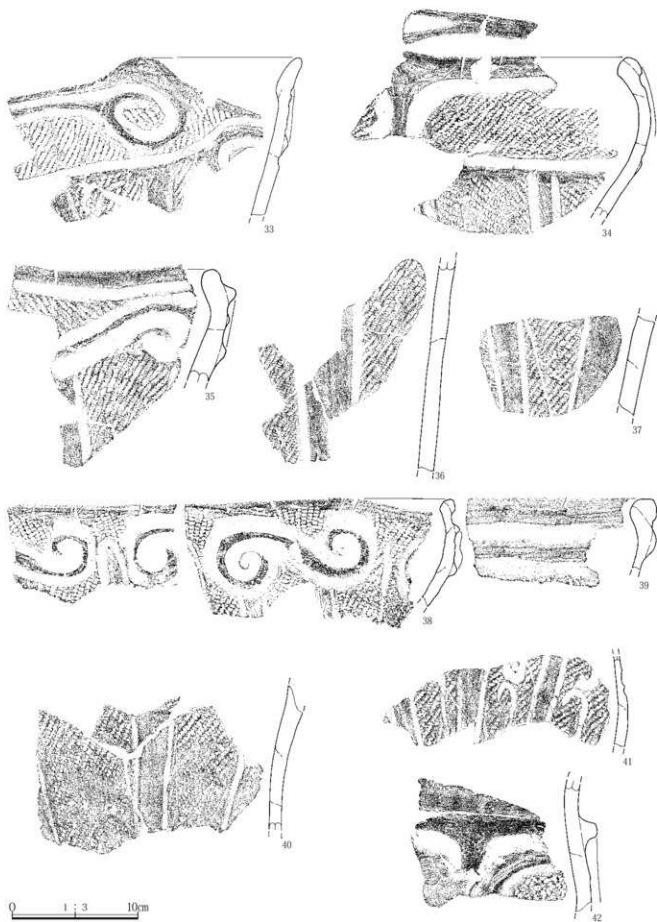
第204図 62区9号住居跡出土遺物(3)



第205図 62区9号住居跡出土遺物 (4)



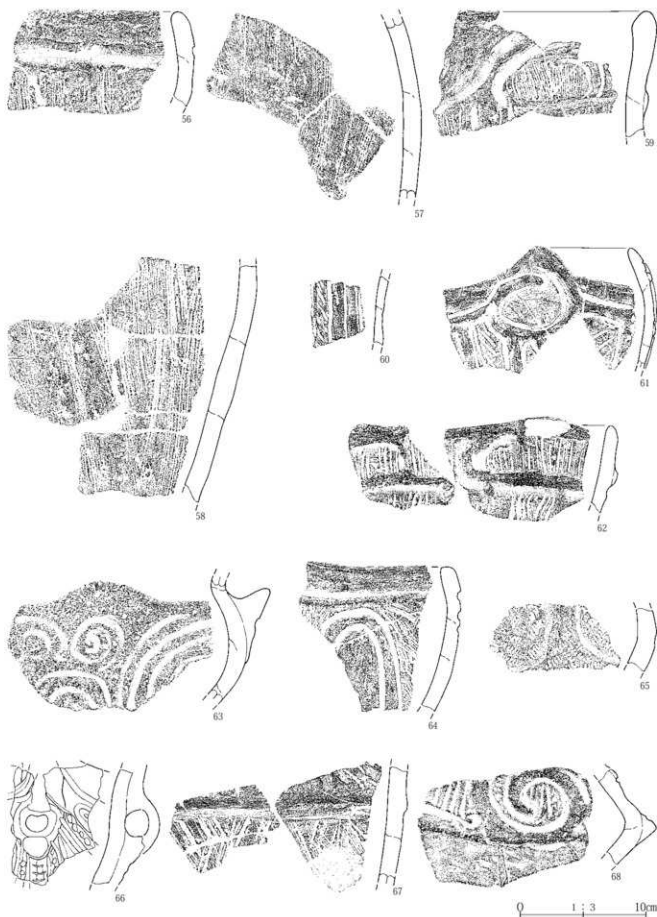
第206図 62区9号住居跡出土遺物(5)



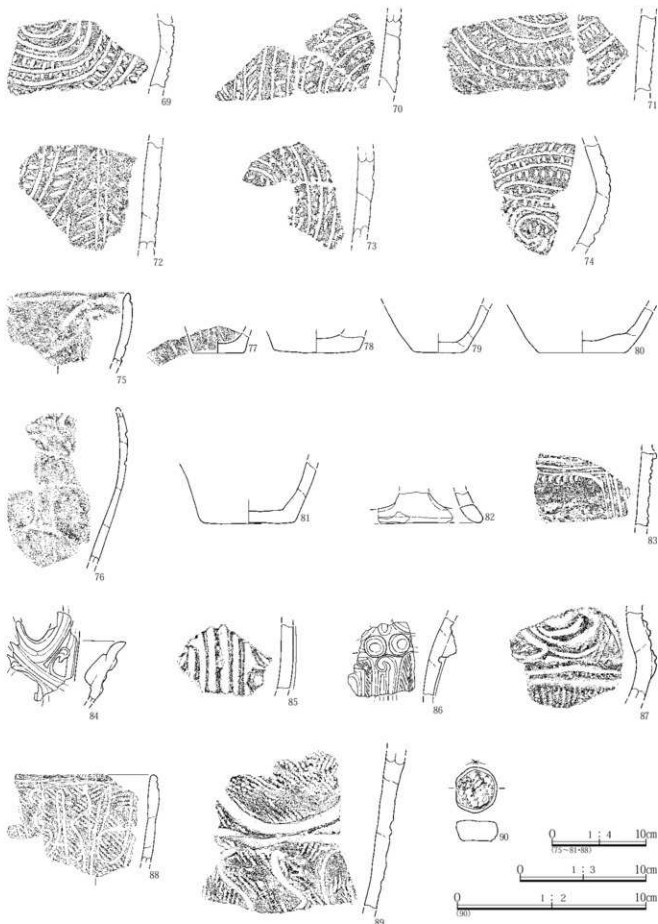
第207图 62区9号住居跡出土遺物(6)



第208図 62区9号住居跡出土遺物(7)



第209図 62区9号住居跡出土遺物(8)

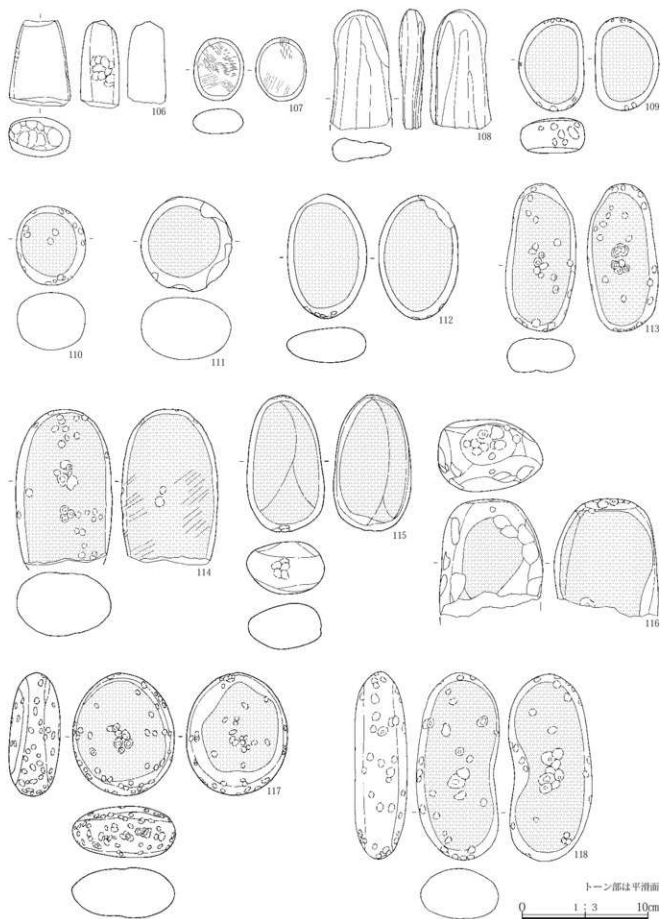


第210図 62区9号住居跡出土遺物(9)

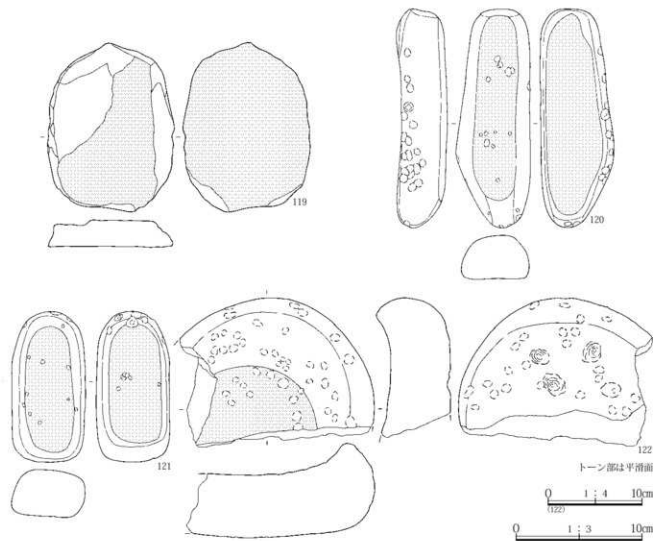


第211圖 62区9号住居跡出土遺物 (10)

第3章 発見された遺構と遺物



第212図 62区9号住居跡出土遺物 (11)



第213図 62区9号住居跡出土遺物 (12)

時期の一括廃棄による出土状態と見なせよう。出土土器の多くは加曾利EⅢ式土器中段階に比定されよう。出土土器組成としては、圧倒的な比率で加曾利EⅢ式が占めており、「郷土式」(6・10・20・22・51・52・60・61・68～74等)の客体化が始まった様相が把握できよう。その他では21はジョッキ型深鉢の可能性ある。石器では石皿片(122)が南壁際床直で、さらに礫石器類(106・110・113・118・120)が南壁際に相当する箇所に集まる傾向が見られる。他には、凝灰質砂岩製の研磨具(108)が東側埋土中より出土している。

所見：整然とした六角形を呈する住居跡である。主軸を北北西に向け、炉跡、出入口埋裏、壁周溝、柱穴5基を配し、さらに主軸線上に柱穴、炉跡、埋裏が乗った典型的な住居内施設を備える。柱穴は立て替えの痕跡を有するが、その他の施設は移動痕跡は無かった。

出土遺物は、炉内土器、埋裏以外には大量の加曾利E

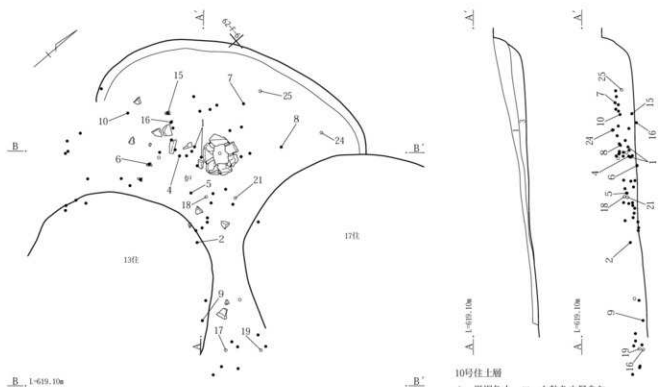
Ⅲ式土器とやや客体的な「郷土式」が出土しており、良好な一括組成を示していた。

時期は、出土遺物から中期後葉とする。

62区10号住居跡 (第214～216図 PL.18・107)

位置：調査区西側の住居跡群の中にある。62区E-F-5・6グリッドに位置し、北側に急斜面地形が迫り、本住居跡周辺から傾斜が緩やかになり南への緩斜面地形が広がる。東の17号住居跡、南の13号住居跡、25号住居跡が重なるように、住居跡立地密度は高い。

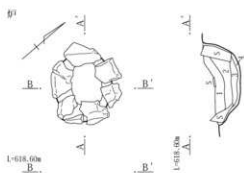
経過：平面形は、Ⅲ層下位である黒褐色土で確認している。南側への斜面地形に沿って、遺物が集中して出土したため遺構の存在を予測して平面形の検出に努めた結果、数軒の住居跡平面形が確認された。最上位の平面形を本住居跡とし、下位の住居跡は13号住、17号住とし、ほぼ同時に調査を進めた。



10号住居層

- | | |
|--------|--------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 2 黒褐色土 | ローム粒を微量含む |
| 3 黒褐色土 | 白色粒を微量含む |
| 4 黒褐色土 | 焼土粒、白色粒を微量含む |

0 1 : 60 2m

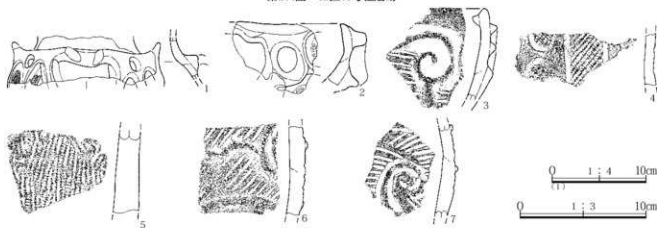


10号住居層

- | | |
|--------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒、白色粒を少量含む |
| 2 黒褐色土 | 白色粒を微量含む |
| 3 黒褐色土 | 黄色粒を少量含む。しまりやや強い |
| 4 暗褐色土 | ローム粒を少量含む。しまりやや強い |

0 1 : 30 1m

第214図 62区10号住居跡



第215図 62区10号住居跡出土遺物(1)



第216図 62区10号住居跡出土遺物(2)

規 模：南側は13号住と17号住の重複のため逸失しており、全体像は把握できない。概ね径5m前後の不整形円形を平面形と考えられる。深さは北側から西側だけの残存であるが、約40.0cmを測り良好な壁立ち上りを示していた。

重 複：3軒の住居跡ともか跡を残し、土層観察による明瞭な新旧関係も果たせなかった。出土土器の傾向から

は、13号住が最も新しく後期初頭、次に17号住が加曾利EⅢ式中段階、本住居跡が加曾利EⅢ式古段階と捉えられた。これは発掘調査手順と合致した新旧関係で、大きな手違いはなかったと自負できよう。また後に調査された25号住との新旧は極めて曖昧である。出土土器も希薄なため、検討を要しよう。

床 面：石囲いが中心とした床面の検出に努めた。黒

褐色土を地床とし、僅かながら南側への傾斜を見る。硬化面はなく、全体に軟弱な床面だった。

施設：石囲い炉を床面中央に見る。その他の埋蔵や柱穴などは見なかった。

炉跡：小型の石囲い炉である。主軸を北西に向けた方形を基調とした平面形で、規模は約60.0×54.0cmを測る。四辺を大型の垂角礫や板石で圍繞しており、炉石が外側に強く傾く断面特徴を見せる。深さは約26.0cmで良好な掘り込みである。埋土は少量の焼土を含む黒褐色土を主体とする。炉石内縁に黒斑など被熱痕跡を見る。

遺物：全体に疎らな出土分布を見せた。断面分布も埋土中の出土を主体とし、偏りを見なかった。故に、居住に伴う出土遺物は無く、また住居跡時期を具体化する土器も見られない。炉跡周辺の土器片は加曾利EⅢ式古段階Ⅲ式を主としているようだ。

所見：黒褐色土中の住居跡確認のため、柱穴や壁周溝などの検出が果たせず、石囲い炉と北側の壁のみで住居跡とした。出土遺物も破片資料を主としており、時期の確定には苦慮するが、おおよそ中期後葉にまとまることから、加曾利EⅢ式古段階に比定されよう。

62区11号住居跡 (第217～219図 PL.18・108)

位置：調査区西側の住居跡群の中にある。62区G・H-4・5グリッドに位置し、北に9号住、南東に19号住、南西に12号住が重複するように、周辺は南への緩斜面地形の中、ほぼ平坦地形での調査となった。

経過：ローム漸移層上位である黒褐色土を確認面とした。北西側は重複遺構も無く平面形の確認は明瞭にできたが、その他は住居跡との重複のため明瞭な平面形は把握できなかった。黒褐色土中で石囲い炉を検出したため、北側の壁と炉跡を中心とした住居跡として調査を進めた。

規模：北壁と西壁のみの検出に止まったため、全体的な平面形状や規模は不明である。おそらく、径380.0cm程度の不整形円形を基調とした平面形であろう。深さは遺存度の良好な北壁付近で20.0cmを測る。北壁の立ち上がりは直立気味で良好である。

重複：12号住居跡と19号住居跡が重複する。両住居跡とも土層観察により、12号住が本住居跡を切り、本住居跡が19号住に乗る新旧関係を示す。出土土器の様相もこ

の新旧関係に合致している。また北側に接する9号住は厳密には重複しておらず層位の観察は果たせなかった。出土土器からは9号住が新しい

床面：検出された石囲い炉を中心として、床面の検出に努めた結果、黒褐色土を地床とした床面を広げた。ほぼ平坦面を築くが、硬化面はなく、全体に軟弱な床面だった。

施設：床面中央に石囲い炉1基を設ける。柱穴、壁周溝などは確認できなかった。

炉跡：小型の石囲い炉で、主軸を北西に向けた方形を基調とした平面形を呈す。平面規模は約70.0×57.0cmを測り、周辺を大型の円礫や垂角礫、板石で囲んでいる。炉石は立位に埋められておらず、横位に置かれた例が主体となっており、そのため中央の燃焼部が狭い印象を得る。深さは約28.0cmで、壁の立ち上がりも良好でしっかりした掘り込みである。埋土は黒褐色土、暗褐色土で少量の焼土を含む。炉石内側は黒斑などの被熱痕跡を見る。

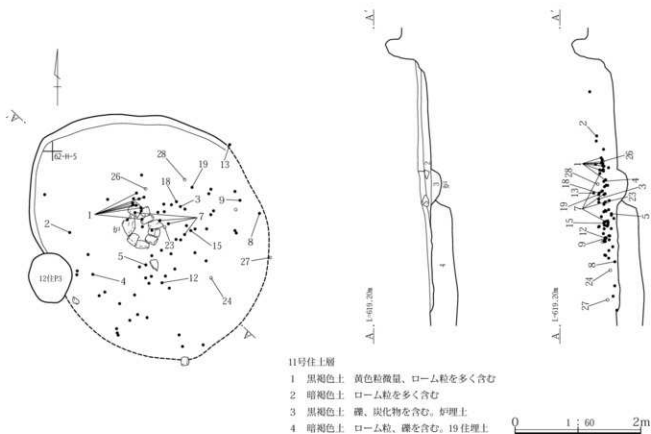
遺物：住居跡中央部の埋土中に集まる傾向がある。北から南にかけての流入を所産とするのであろうか。その中で、1～9は「郷土式」古段階の所産と思われ、出土土器組成で主体をなす。10～15は加曾利EⅡ式だが、やや客体的な出土量である。

所見：中期後葉古段階の小型住居跡である。中央に石囲い炉を設けるが、残念ながら柱穴や壁周溝を見る事ができなかった。出土遺物も流入による所産で、土器は「郷土式」古段階を組成の中心にする。

62区12号住居跡 (第220～228図 PL.18・109～113)

位置：調査区西側の住居跡群の南西端にある。62区G・H-3・4グリッドに位置し、東に11号住が重複する。周辺は南への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。

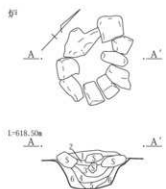
経過：ローム漸移層の暗褐色土を確認面とする。遺構平面を確認中に遺物の集中が特に顕著で、11号住とは別の住居跡の存在が想定された。また、遺物とは別に自然石の出土も多く見られた。これは基礎礫の露出と流入が混ざった様相である。調査を進め下面の暗褐色土において、少量ながら焼土粒がまとまったため、炉跡と考え、周辺の壁を検出し住居跡として確定した。



11号住居層

- 1 黒褐色土 黄色粒微量、ローム粒を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 礫、炭化物を含む。如理土
- 4 暗褐色土 ローム粒、礫を含む。19住居上

0 1 60 2m

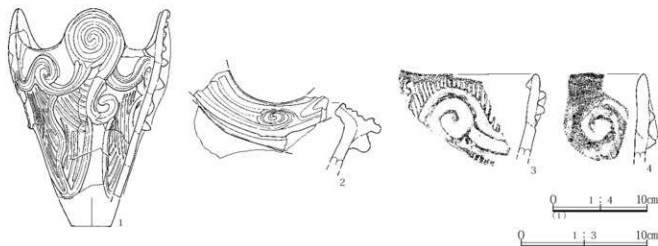


如跡上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む。しまり強い
- 2 黒褐色土 炭化物を含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。しまり強い
- 4 褐色土 焼土粒、白色粒を少量含む
- 5 褐色土 ローム小塊を多く含む
- 6 黒褐色土 ローム粒を多く含む。しまり強い

0 1 30 1m

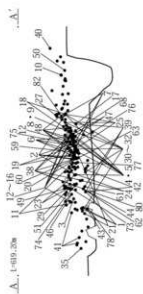
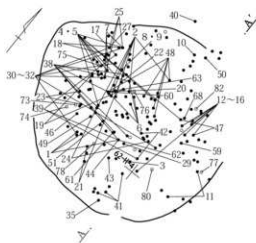
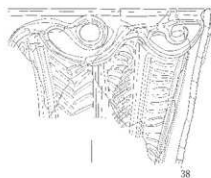
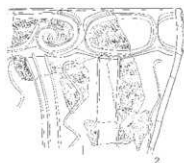
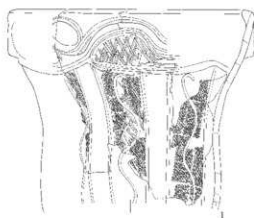
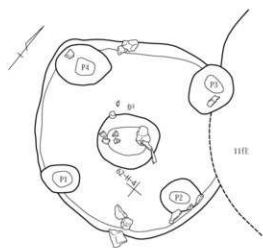
第217図 62区11号住居跡



第218図 62区11号住居跡出土遺物(1)

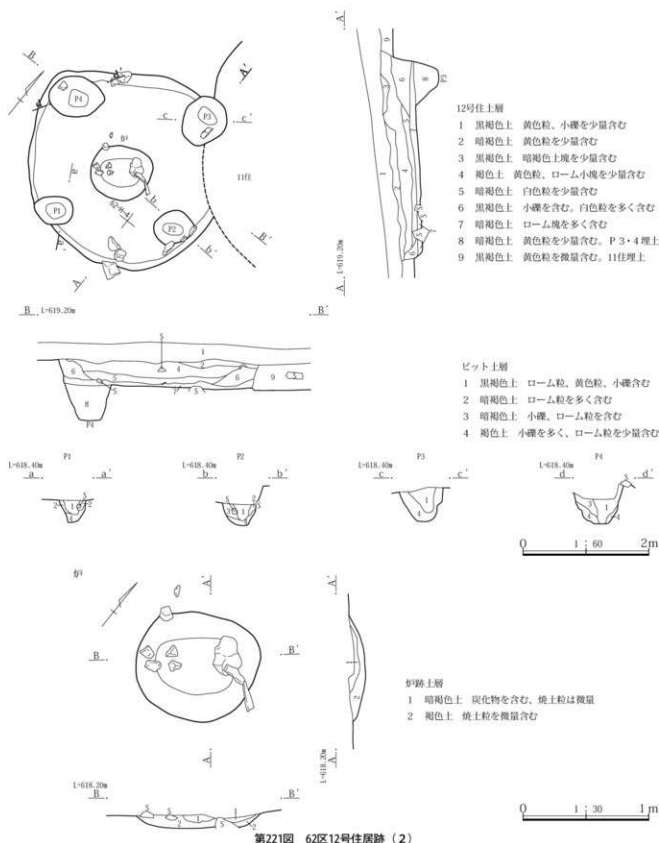


第219図 62区11号住居跡出土遺物(2)



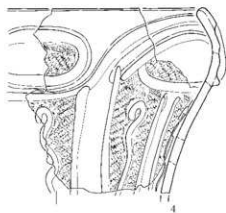
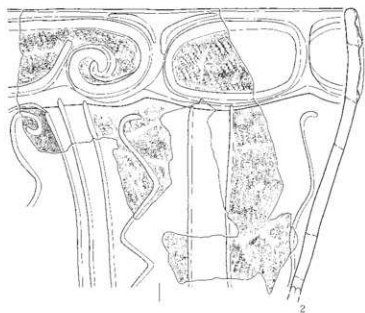
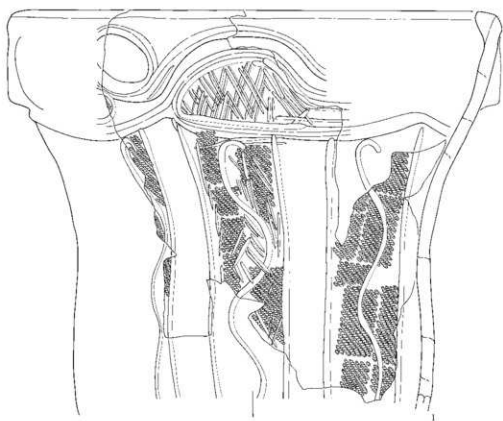
0 1 : 60 2m

第220図 62区12号住居跡 (1)



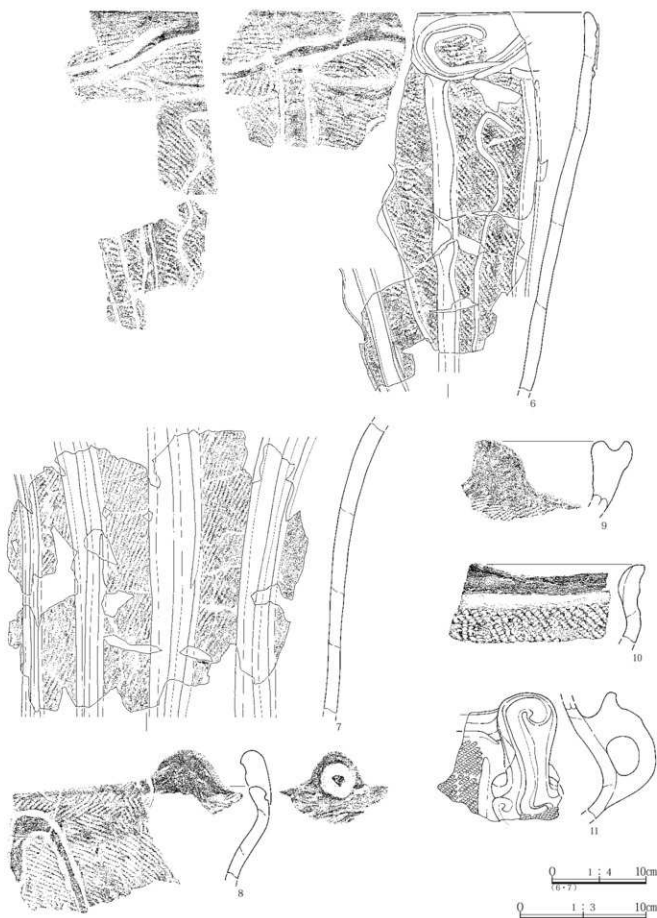
規模：主軸方位は北西を向き、平面規模が径約336.0×310.0cmを測る小型円形住居跡である。深さは、遺存度の良好な西壁周辺で約40.0cmを測り、壁の掘り込みも直立気味でしっかりしていた。

重複：11号住が東側で重複するが、土層観察において本住居跡が11号住を切る新旧関係を把握できた。床面のレベル差が大きく無く、若干11号住が深いため、全体図などは11号住が本住居跡を切る様相を示すが、土層、出

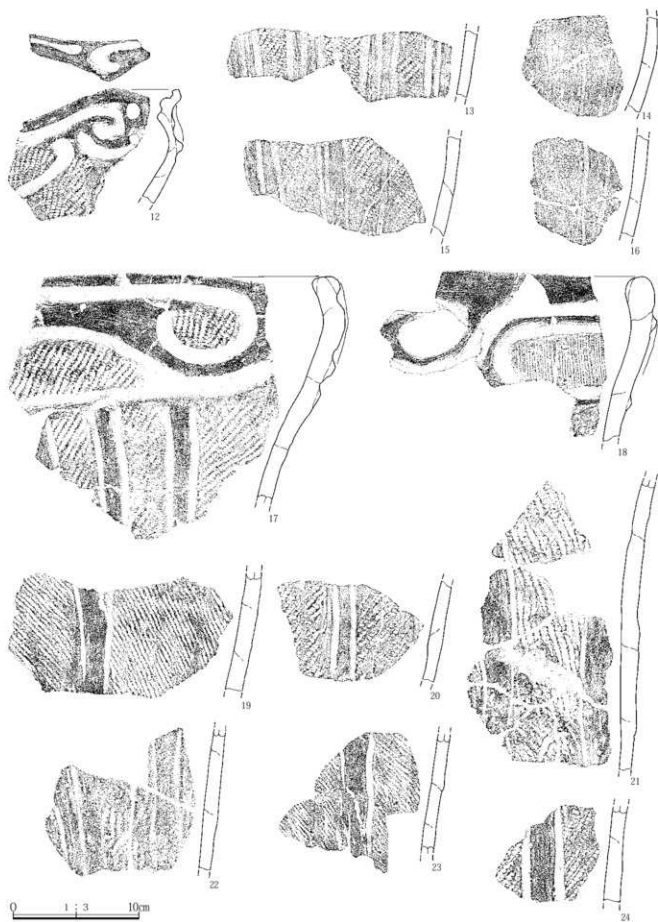


0 1 : 4 10cm

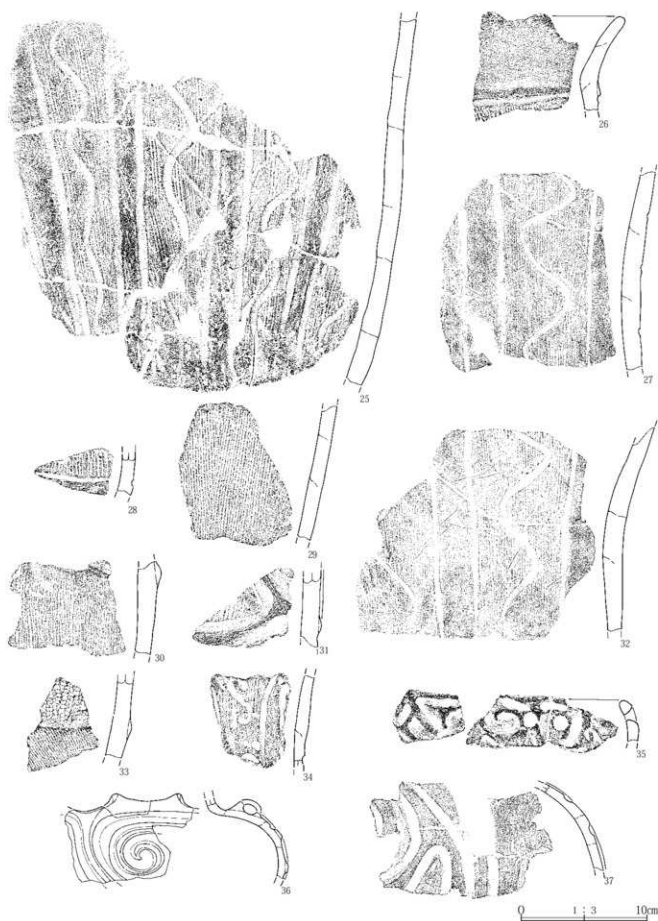
第222図 62区12号住居跡出土遺物 (1)



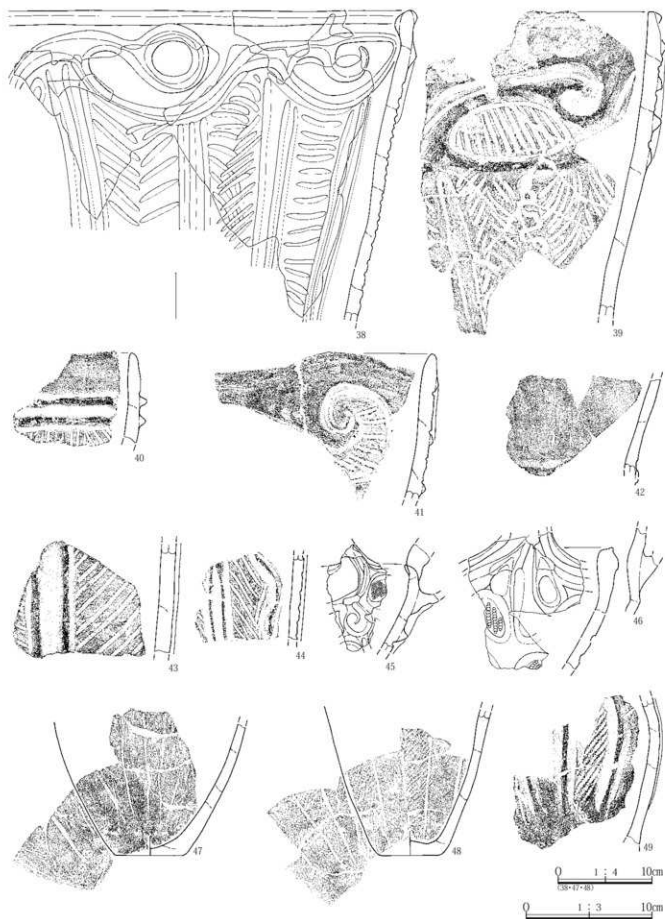
第223図 62区12号住居跡出土遺物(2)



第224図 62区12号住居跡出土遺物(3)



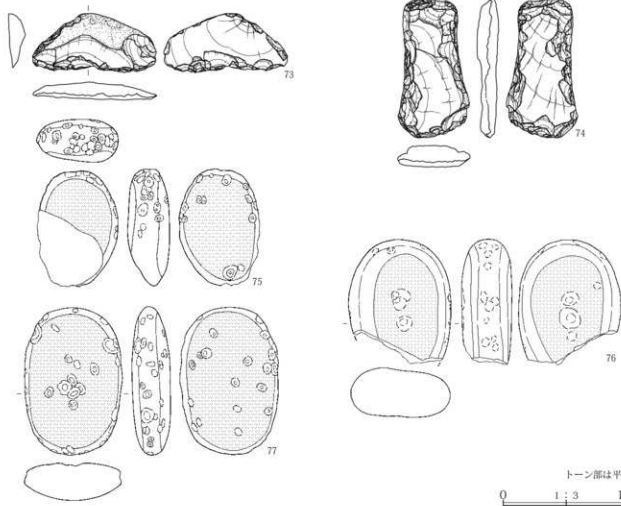
第225図 62区12号住居跡出土遺物(4)



第226図 62区12号住居跡出土遺物 (5)



第227図 62区12号住居跡出土遺物(6)



第228図 62区12号住居跡出土遺物(7)

土器とも木住居跡が新しい。

床 面：黄褐色軟質ロームを地床とする。大型の基盤礫が各所で露出していたが、床面は基盤礫の上層に止まり、ほぼ平坦面を築く。硬化面は認められず、やや軟弱な床面といえよう。

施 設：床面中央に地床が1基設ける。また柱穴として大型ピットが4基調査されている。

炉 跡：径約98.0×86.0cmの不整形円形を平面形とする地床がである。深さは13.0cmと浅く、断面形状も皿状を呈す。炉跡底面及び周辺に角礫が見られるが、これは基盤礫の露出で、炉石ではない。埋土は暗褐色土～褐色土を主体とし焼土粒の堆積は微量だった。

柱 穴：4基のピットを検出している。4基とも、径70.0cm、深さ約40.0cm程度で、住居跡四隅に配される配置を示す。柱穴として良好な規模、配置である。土層も柱痕として黒褐色土を確認している。

遺 物：住居跡全体から満遍なく出土している。出土層

位も多くが埋土上層～中層にまとまる。おそらく、北側から南側への一括廃棄によるものと判断できよう。多くの土器個体が、大型破片の状態で埋土中からまとまって出土しており、出土遺物の同時性はかなり高いと思われる。加曾利EⅢ式新段階の所産とした。この住居跡の出土土器組成も加曾利EⅢ式主体の土器組成で、「郷土式」(38～44など)や「屋代類型」(45・46)は客体的な組成である。

所 見：出土遺物の豊富な小型円形住居跡である。地床が中央を持ち、四隅に柱穴を配する。該期住居跡としては特異な形態である。しかし、生活痕跡を表す出土状態ではなく住居跡の性格は不明である。時期は、出土土器から中期後葉とする。

62区13号住居跡(第229～233図 PL.19・20・114・115)

位 置：調査区西側の住居跡群の中にある。62区E-F-4・5グリッドに位置する。周辺の地形は、北側に急斜

面地形が広がるが、10号住や17号住などが占地するため、傾斜自体が緩やかになって、本住居跡は南への緩傾斜地形に立地する形態となる。西側には16号住が重複し、南側には14号住居跡が近接するように、住居跡は群在する地点である。

経 過：平面形北半分は、Ⅲ層下位である黒褐色土で確認している。10号住や17号住、16号住と共に平面形確認がなされ、各住居はほぼ同時に調査が進んだ。その結果、10号住南に本住居跡が検出され、平面形に沿った敷石、立石が確認されたため敷石住居跡として位置付けられた。

規 模：住居部は五角形状の方形を呈して、主軸を北西に向ける。平面規模は約350×320cmを測り、南側に180×150cm程の出入口部を張り出す。深さは、北側壁で約25.0cmを測るが、有段住居ともなっているため、最深部で45.0cmになる。南側が斜面地形のため壁などが判然としないが、良好な残存度といえよう。

重 複：10号住、16号住、17号住と重複する。土層としての確認はないが、敷石住居跡である本住居跡を新しく捉えている。

床 面：暗褐色土を地床とする。僅かな凹凸は見られるがほぼ水平に平坦面が築かれる。貼り床は見られないが、西壁際と南壁際西半及び東壁際の一部に扁平な板石状角礫を敷石として並べていた。

床面内縁の段差：本住居跡は北側床面に段差が認められた。幅20cm前後、高さ15cm程の段差が北壁際のみには設けられていた。61区24号住にも同様の段差が全周していたが、本住居跡は北側に認められた。また、平坦面を保たず、南側へ傾斜する傾向が見られ、積極的な生活空間とは思われなかった。あるいは拡張痕跡の可能性も考えたが、東壁から北壁際の壁周溝が一体化することから、拡張ではなく一回の構築によるものと考えた。

施 設：石囲い⁴を床面中央に1基、全周する壁周溝と壁立石、出入口石囲い施設を確認した。また、柱穴として11基のピットを調査した。

炉 跡：床面ほぼ中央に石囲い⁴を設ける。主軸を北西に向けた方形を基調としており、平面規模は約60×54cmで、西辺と北辺に炉石を囲う。主に大型の板石状角礫が供され、被熱のため破碎していた。炉内中央やや北寄りの底面には、深鉢体部下半(2)が正位に埋設されてい

た。深鉢は炉内で確認したときは全周していたが、著しい被熱のため、接合も果たせず1/2の残存に止まる。埋土は焼土粒を微量含む黒褐色土を主体としていた。

壁周溝：幅20～30cm、深さ10cm程の規模でほぼ全周する走行で確認された。明瞭な途切れは奥壁柱穴周辺であり、奥壁部の施設が存在が窺われる。1条の走行であり、住居内の移動・拡張の痕跡は見られなかった。

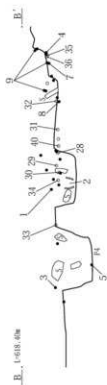
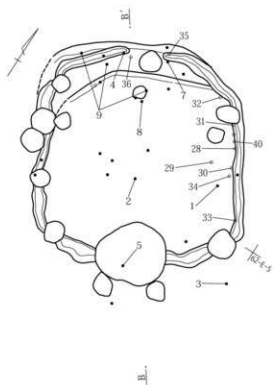
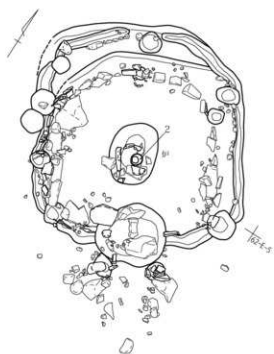
壁立石：本住居跡の最も特徴的な施設の一つに、壁際に設けられた、立位の板石である。北側の壁内縁部及び東西壁際から25cm程の距離を保ち、15～20cm四方の板石が並ぶ。床面側に傾く特徴を見せるが、おそらく原位置は直立しており、土圧により傾いたものと考えられる。壁際の上留めのような性格を想起したい。同時に壁際の幅狭のテラス状施設が想定できよう。

出入口石囲い施設：炉跡南約40cmにP4が配されるが、これは出入口部石囲い施設として位置付けたい。住居主軸線上にのり、ピット内に立位の石を埋置する状況から、中期末葉から後期初頭に見られる石囲い施設として考えて良いだろう。また、規模、配置から対ピットとしての可能性もあり、石囲い施設と対ピットが一体化した例も可能性がある。今後検討していきたい。平面規模は約112.0×100.0cmで不整形を呈す。深さは約54.0cmを測り、壁も良好でしっかりとした立ち上がりを示す。

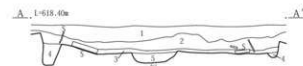
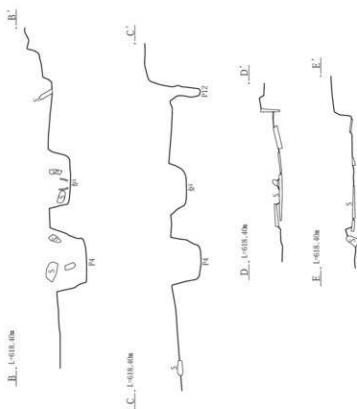
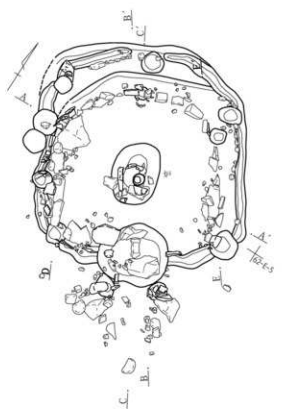
出入口部立石：出入口部である張出部西側のP9上に立位の大型円礫を見た。P9に僅かに埋められていたが、積極的に立石とする根拠は少ない。しかしながら、基盤礫もなく、出入口部に見る規則的な敷石や壁材でもなかったため、立石の可能性が強い。出入口部を装飾する施設として位置付けたい。

壁際の円礫列：東壁際床直に、長さ12cm前後の円礫が列状に出土していた。磨石・敲石でもある礫石器(28・30～34・40)が混じっており、何等かの意図を持った出土状態と捉えられた。壁周溝に伴う壁体の押さえの可能性もあり、先に述べた壁立石との関連も踏まえて、検討を要しよう。

柱 穴：11基のピットのうち、10基を壁際の柱穴として位置付けた。規模・配置とも良好な例である。さらに、重複する16号住P2もあるいは本住居跡柱穴としての位置付けに妥当性が残る。また前述のP4は出入口部の対ピットとして、さらにP9、P10も対ピットとしての可能性を

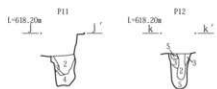
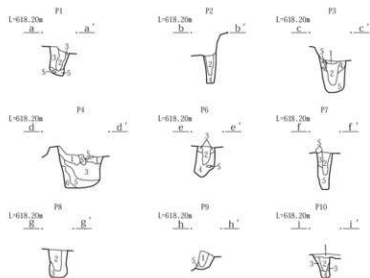
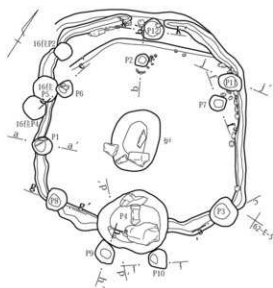


第229図 62区13号住居跡 (1)



13号住上層

- 1 黒褐色土 黄色粒、礫を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 灰黄褐色土 黄色粒、ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む。ビット、壁周溝埋土
- 5 黒褐色土 黄色粒を少量含む。砂り土

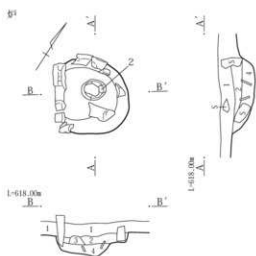


ビット上層

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、ローム小塊を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む。しまり強い
- 5 暗褐色土 ローム塊を多く含む。しまり強い
- 6 にぶい黄褐色土 ローム小塊を多く含む

0 1:60 2m

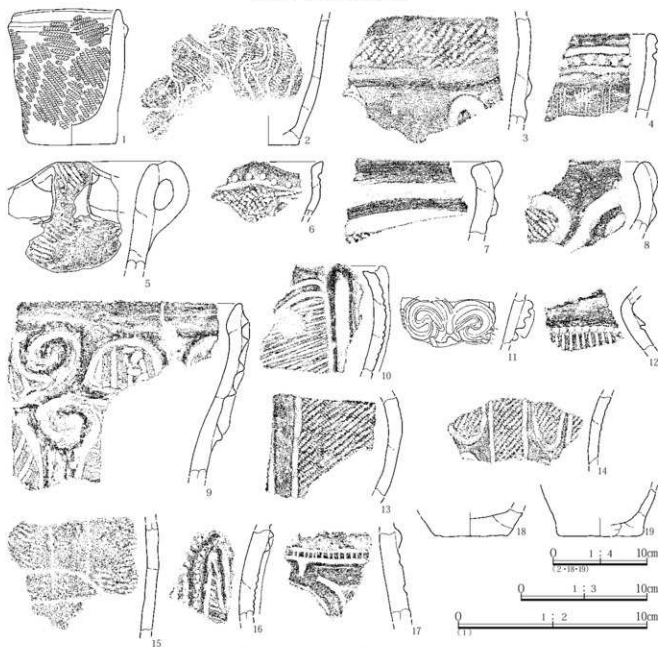
第230図 62区13号住居跡(2)



- 62区上層
- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
 - 2 黒褐色土 焼土粒を少量、白色粒を微量含む
 - 3 黄褐色土 ローム小塊からなる
 - 4 暗褐色土 炭化物、黄色粒を微量含む

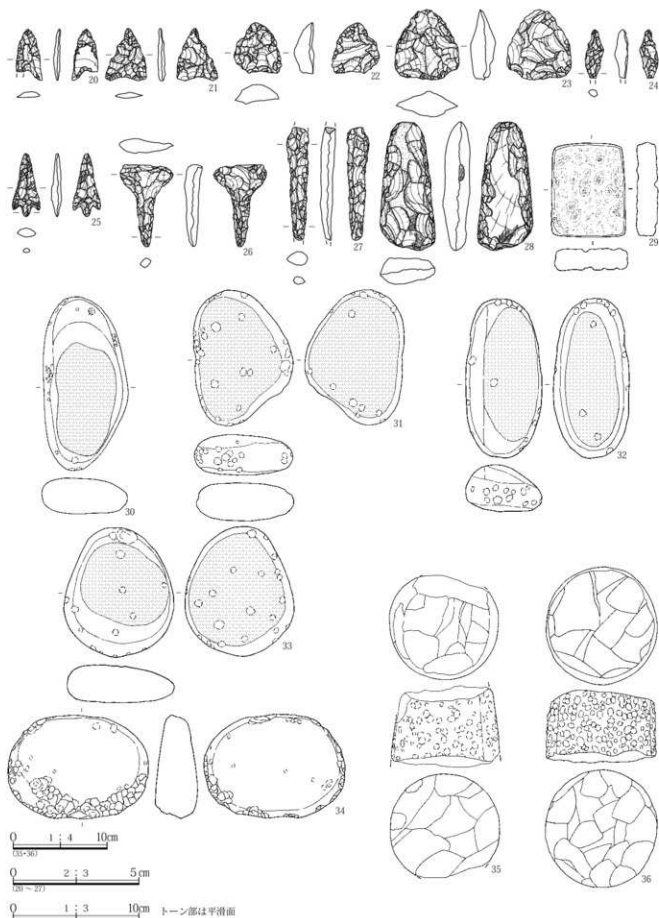
0 1 : 30 1m

第231図 62区13号住居跡 (3)

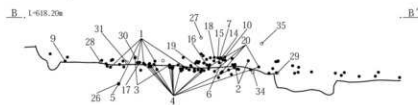
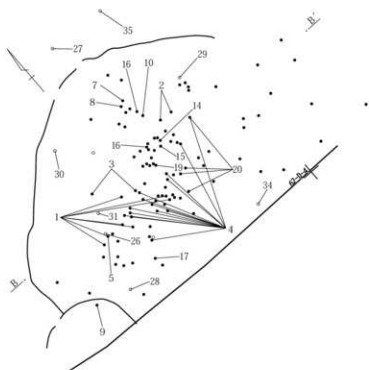
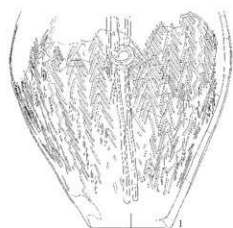
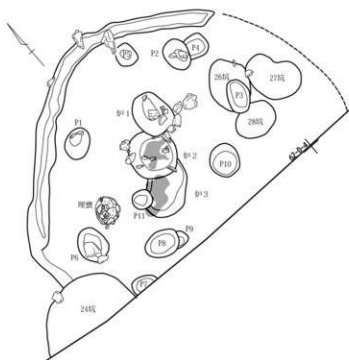


第232図 62区13号住居跡出土物 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



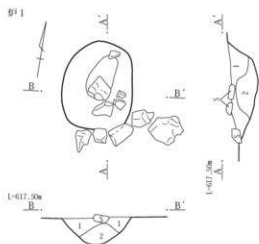
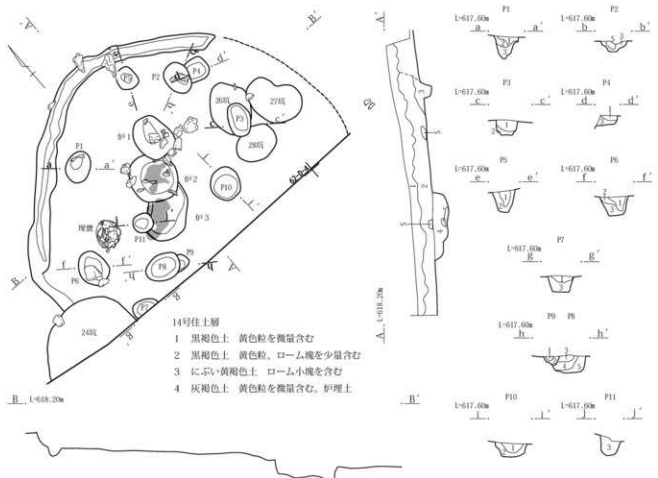
第233図 62区13号住居跡出土遺物(2)



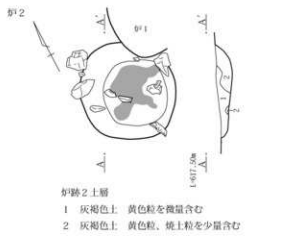
トーン部は焼土

0 1 : 60 2m

第234図 62区14号住居跡 (1)



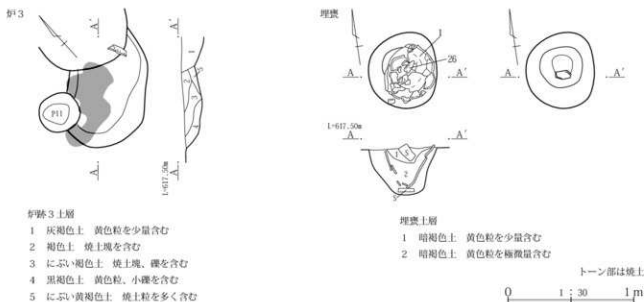
- が跡1土層
- 1 黒褐色土 焼土粒、黄色粒を微量含む
 - 2 にぶい黄褐色土 ローム粒を含む



- が跡2土層
- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む
 - 2 灰褐色土 黄色粒、焼土粒を少量含む



第235図 62区14号住居跡(2)



第236図 62区14号住居跡(3)

残す。

遺物：良好な遺存度の割には、出土遺物量は少ない。居住に伴う例としては、炉内土器(2)がある。さらに先に述べた東壁際の円礫に混じる礫石器(28・30～34・40)が挙げられよう。さらに、円盤状欠損を施した石棒片(35・36)は北壁際の奥壁柱穴(P12)脇から出土している。あるいは儀礼痕跡の可能性もある。また東壁際にあるP7南で出土したミニチュア土器(1)は壁に接した埋土中の出土であるが、これも原位置の可能性もある。その他の遺物は、疎らに埋土層から床直にかけて出土しており、おそらく流入を示唆するものと思われる。

炉内土器やミニチュア土器は加曾利IV式と捉えた。

所見：遺存度の良好な敷石住居跡である。北壁周辺が有段で床面内縁の段差を設ける。さらに内縁に沿って壁立石を埋め敷石も沿わせていた。床面中央に石囲い炉と南に近接して出入口部石囲い施設を付設する。また張出部西には立石を立たせた可能性がある。時期は炉内土器から中期末葉と考えた。

62区14号住居跡(第234～239図 PL.20・115・116)

位置：調査区中央西寄りの南端にあたり、周辺は南東への斜面地形が広がるが、本住居跡周辺の傾斜は緩やかで、ほぼ平坦地形である。位置するグリッドは62区C～E-4グリッドで、東側に6号住と重複して調査された。その他には、24坑や26～28坑が床面や南壁に重なる。

経過：ローム漸移層である暗褐色土で平面形の確認を

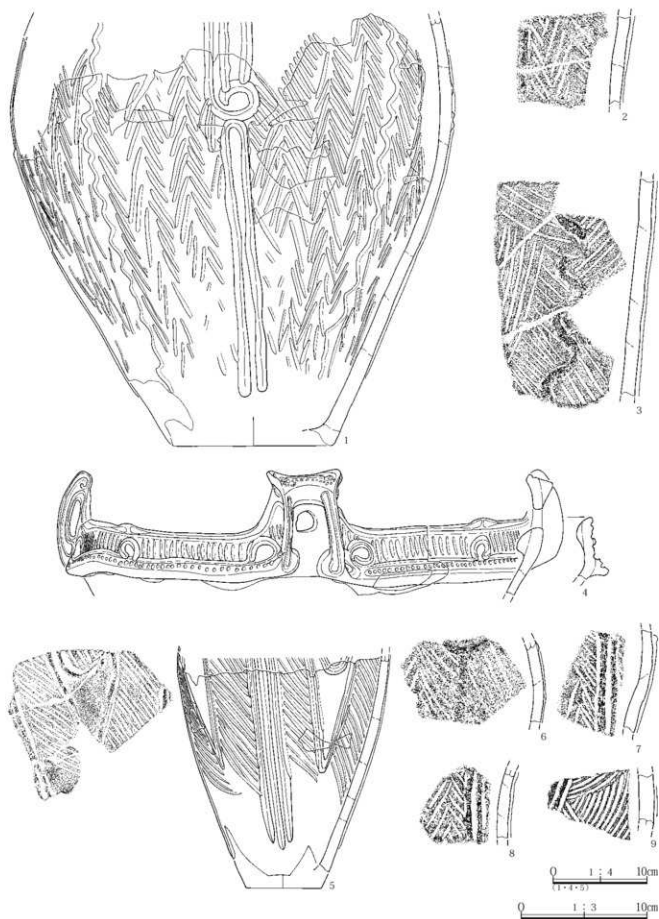
試みたが、壁は確認できず壁周溝の走行で平面形の概略を把握することになった。しかし、床面中央付近で炉跡が検出できたため、住居跡として調査を進めることができた。東側は6号住との重複のため平面形の全容は把握できず、また南側は調査区域外に床面が延びるため、南半は未調査となっている。

規模：全容が把握できないため、平面形の詳細は不明であるが、径4.5m以上の不整形を呈すると思われる。壁周溝の走行からあるいは、六角形に近い平面形も想定されよう。壁の殆どを検出できなかったため、良好な深さは計測できなかったが、土層観察によって得た深さは約30cmを測る。炉跡の様相から、主軸方位を北東に求めた。

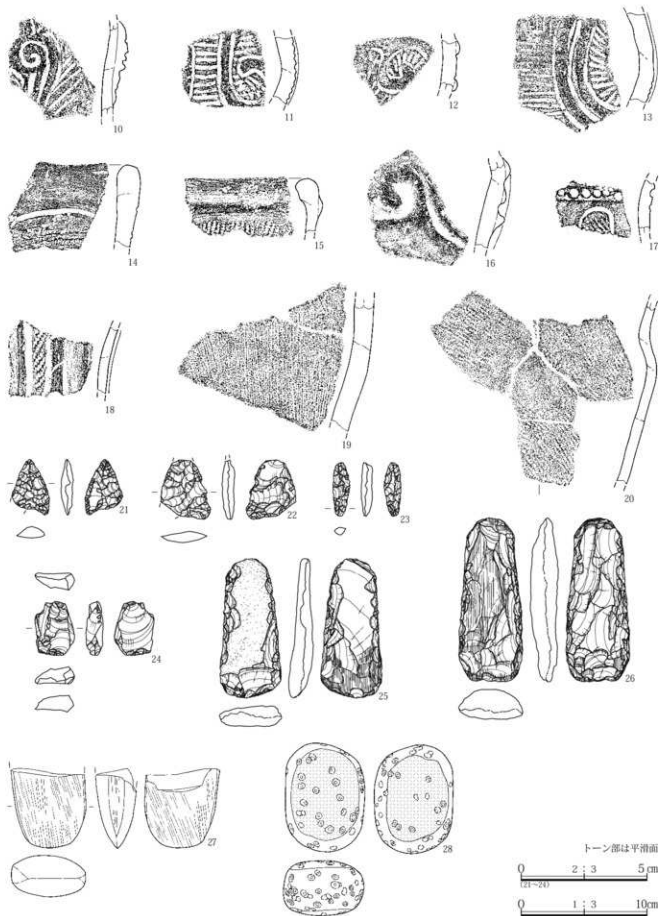
重複：6号住との新旧関係は土層では観察できなかった。出土土器の様相は6号住が新しく、本住居跡が古い時期を示すが、6号住が不確定な住居跡のため、詳細は控えた。

床面：北側は黄褐色ローム、南側は暗褐色土を地床とする。僅かな凹凸を持ち、南側への傾斜が見られるが全体的には平坦面を維持する。硬化面は炉跡周辺を中心にして北側に顕著に見られた。また、床面下は基礎礫が多数集まる層位で、その直前で床面を止めていた傾向が捉えられた。

施設：床面中央に炉跡3基を見る。また、炉3西側に近接して埋設土器1基が設けられる。壁周溝は北壁～西壁にかけた走行を検出した。柱穴として11基のビットを

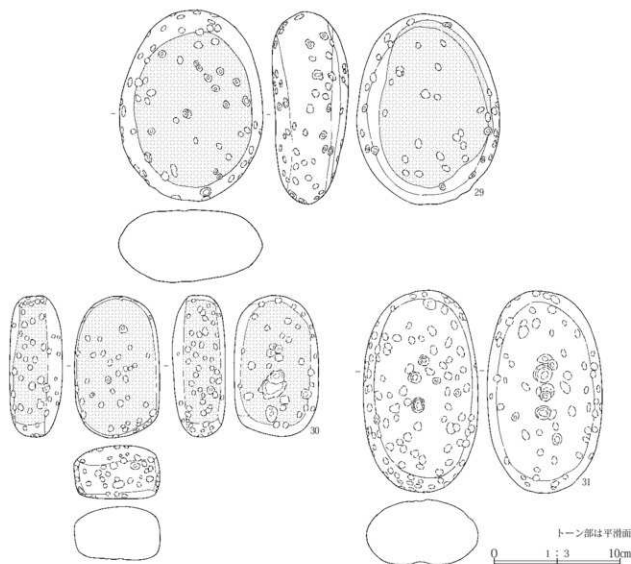


第237図 62区14号住居跡出土遺物(1)



第238図 62区14号住居跡出土遺物(2)





第239図 62区14号住居跡出土遺物(3)

調査した。

炉 跡：3基を検出した。住居跡主軸に沿って、縦位に重複する様相で連なる。土層の観察及び炉石の在り方から、炉1が最も新しく、炉3が一番古く観察された。

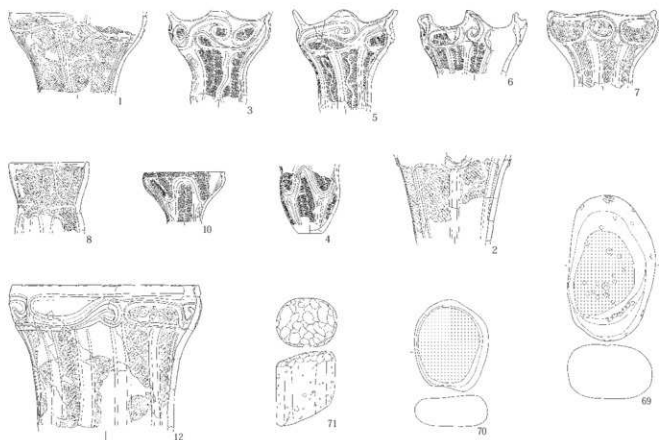
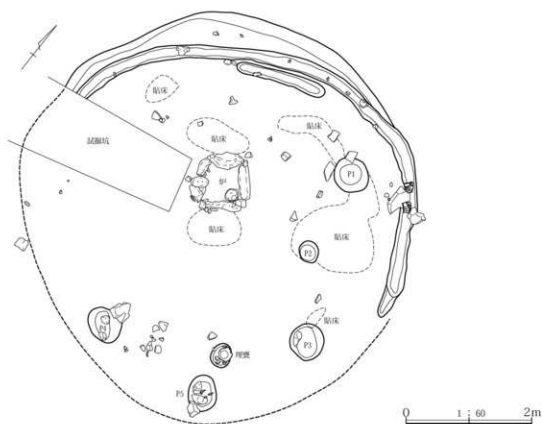
炉1は北東端に位置する。北に長軸を向け、平面規模が約70×55cmの不整楕円状を呈する。南側壁から東壁南端にかけて拳大の角礫が並ぶため炉石として考えた。しかしながら、顕著な掘り込みを持たず、炉上端に置くのみの設置である。炉内部は深さ21cm程で、皿状の断面形を示し微量の焼土粒を含む黒褐色土を埋土としていた。

炉2は北側を炉1に切られる重複関係で調査した地床炉である。径75cm程の不整形円形を平面形とし、深さは約15cmを測る。浅く、皿状の断面形だが、焼土が上面に広がりを見せていた。埋土中より深鉢体部破片が出土したが、炉の用途に伴うものではない。埋土は焼土粒を少量

含む灰褐色土である。

炉3は炉2に切られ最南端で調査された。長軸長は不明だが90cm以上を測る長楕円形の平面形を呈す。短軸長は60cmで、深さは約20cmで浅い皿状の断面形を示す。埋土は焼土塊を含む褐色土を主体としている。

以上のように3基の炉跡が検出されたが、おそらく住居内における移動の痕跡と思われる。しかしながら、柱穴や壁周溝に移動痕跡が見られないことから炉のみの移動で、上層の変更は行われなかったと考えられよう。埋設土器：炉3西30cmに近接して設けられる。平面規模60×50cm程の不整形円の掘り込みに、大型の深鉢体部下半～底部(1)を正位で埋置していた。掘り込みの深さも深く40cmを超える。底面に板石状の自然石を置き土器を乗せ、さらに土器内部に打製石斧(26)、上層に大型自然石が出土する様相を見た。



第240图 62区15号住居跡 (1)

調査では埋裏として扱ったが、検出位置が南壁出入口部ではなく西壁に近いため、ここでは念のため埋設土器として扱った。

壁周溝：北壁から西壁にかけての走行が確認された。壁の検出が果たせなかったため、住居跡平面形の把握は壁周溝に頼ることになった。北壁と西壁の間で弱く屈折しており、全体感から六角形を描く様相が想定された。なお1条の検出で、移動や拡張の痕跡は見られなかった。

柱 穴：11基のピットを確認したが、柱穴として妥当な例は、P1、P3、P5～P7である。P5はあるいは奥壁柱穴の位置付けか。基盤に小礫が多く含まれることもあり、やや浅い規模を示していた。

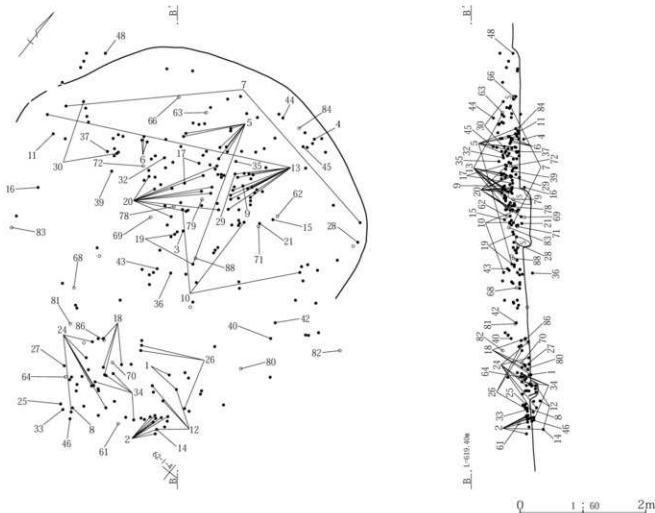
遺 物：埋設土器(1)と打製石斧(26)は居住に伴う例と位置付けられる。その他の遺物も住居跡中央部に集中する傾向が見られ、床面出土が多い。住居跡廃絶直後の廃棄と捉えられ、住居跡の時期を具体化する良好な一括資料と評価したい。

多くの出土土器(1～13)が「郷土式」古段階の所産あるいは加曾利Ⅱ式(14～20)と考えた。

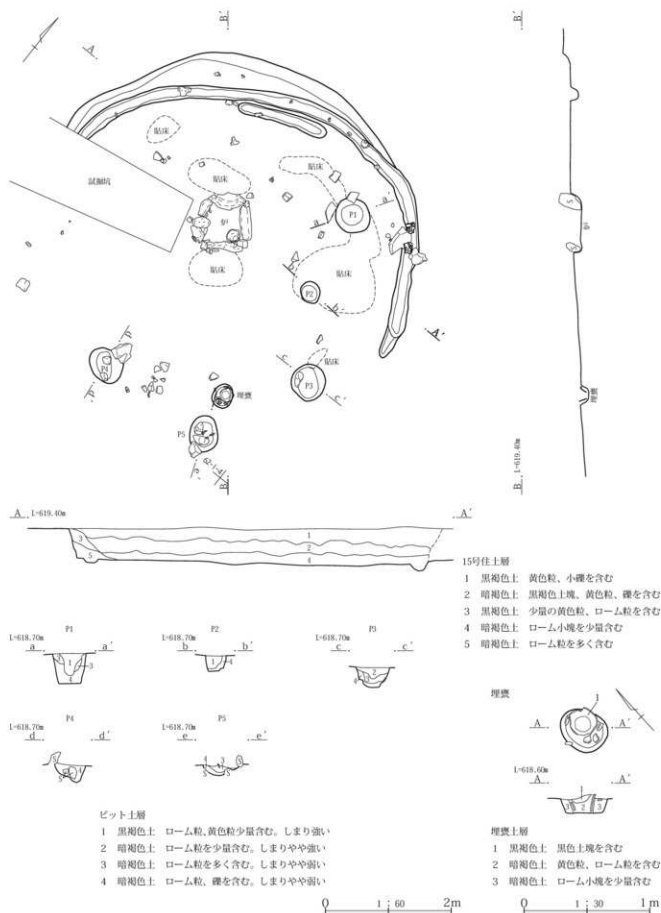
所 見：炉跡を3基検出した住居跡である。その他の柱穴や壁周溝に拡張や移動の痕跡がないため、単独の住居内移動と捉えられよう。住居跡平面形はおそらく六角形～円形で、地床かと伴に中期後葉前半段階の良好な事例と考えられる。

62区15号住居跡(第240～249図 PL.20・21・117～120)
位 置：調査区西側の62区B～J・4・5グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形が連続し、そのため本住居跡南半は壁が逸失していた。周辺遺構は多くなく、北側に24号住居跡が重複するのみである。

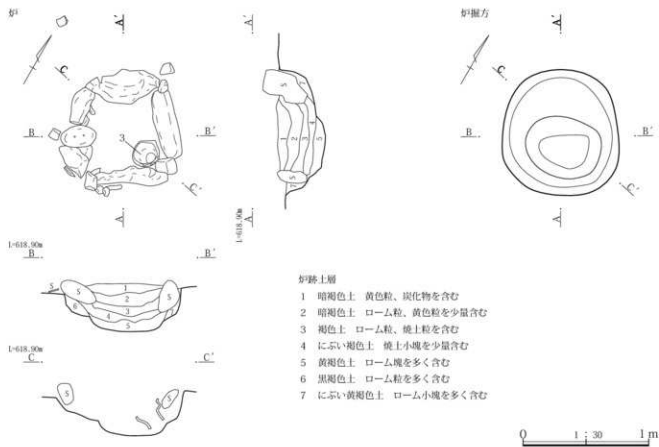
経 過：ローマ漸移層の暗褐色土で平面形の確認を行った。平面形確認時より多くの遺物が出土し住居跡の存在は確定されており、良好な石囲いや埋裏の検出に至り、住居跡としての調査を進めた。なお、西壁の一部に平成



第241図 62区15号住居跡(2)



第242図 62区15号住居跡 (3)



第243図 62区15号住居跡(4)

18年に行われた県教委試掘坑を確認した。

規模：斜面地形のため、南半の平面形が明瞭ではなく判然としないが、概ね径6m程の不整形を平面形とする。深さは遺存度の良好な西壁付近で50cm近くあるが、その他は0～数cmの壁高に止まる。主軸方位は北西を向く。

重複：北側に24号住居跡が重複するが、24号住居跡が本住居跡北壁に乗る。本来ならば、24号住居が本住居跡を切る新旧関係を示す例であるが、本住居跡北壁は壁周溝と壁上端に間隔があり、その差が24号住居跡に及んだ可能性がある。故に24号住居を本住居跡より新しくは捉えられず、出土土器との比較を果たすべきである。

床面：暗褐色土を基調とした平坦な床面で、ローム塊による貼り床が、炉跡周辺及び床面東側などに点在して確認された。硬化面は炉跡周辺でやや狭い範囲で確認された。床面南半は黒褐色土を地床としやや軟弱だった。

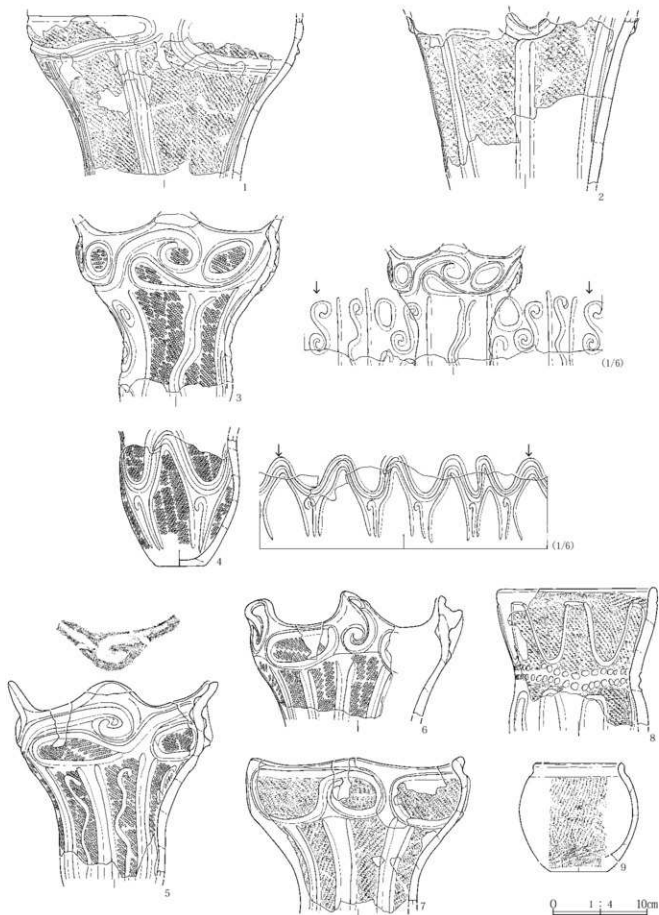
施設：床面中央やや北西寄りに石囲い炉を設ける。床面南端に埋裏を1基、壁周溝は西壁際から北壁を経由して東壁まで達していた。柱穴としてピットを5基調査した。

炉跡：平面形は方形で、規模は約100.0×92.0×33.0cmを測る石囲い炉である。四辺を大型の円礫で圍繞し、北・東・南辺は1石で甬われ、西辺は3石が供されていた。いずれも内側は被熱痕跡が著しく北辺が石の破砕は著しかった。なお、西辺が石の一部には台石(69)が再利用されていた。炉内南東隅に、深鉢(3)が正斜位一北西に口をむけて埋置されていた。四単位波状線深鉢で波頂部及び体部下半を意図的に欠損する。また、口唇部は被熱痕跡が著しかった。埋土は暗褐色土を主体に下層に焼土粒を少量含む。

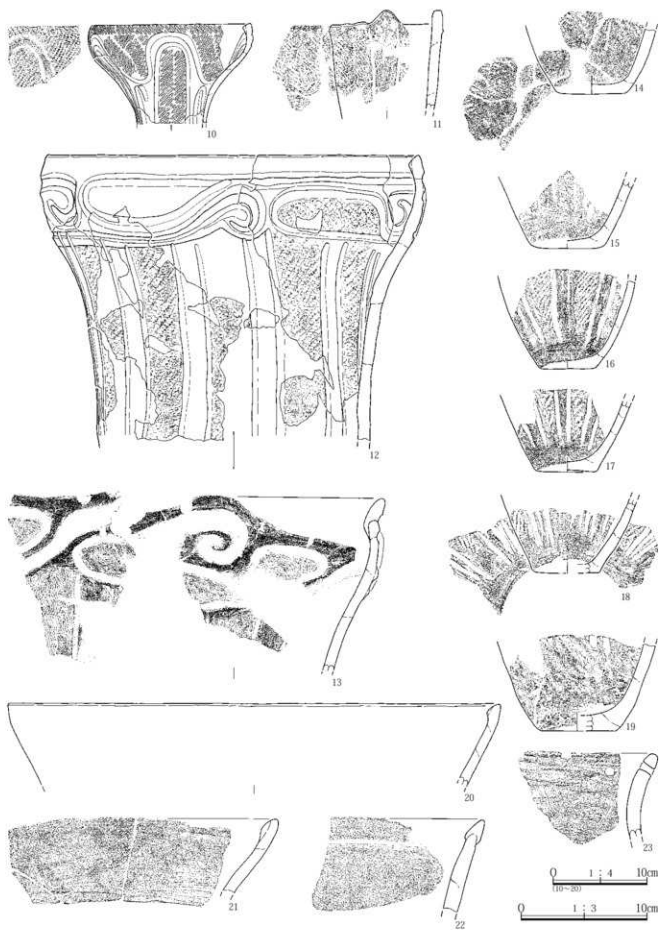
埋裏：炉跡南約2.1mに位置する。主軸線上に乗るため、出入口埋裏と位置付ける。径約30cmの小型円形の掘り込みに深鉢口頸部～体部中位が正位に埋設されていた。埋土に特筆される特徴は見られなかった。

壁周溝：幅約10～20cm、深さ約15cmの規模で、床面北半の壁際に確認された。北側には一部2条が平行しており、拡張、移動痕跡として考えられるが、その他の施設に具体化していない。

柱穴：調査された5基のピットのうちP2・P5を除く3基が、柱穴として相応しい規模・配置を示す。北西側の



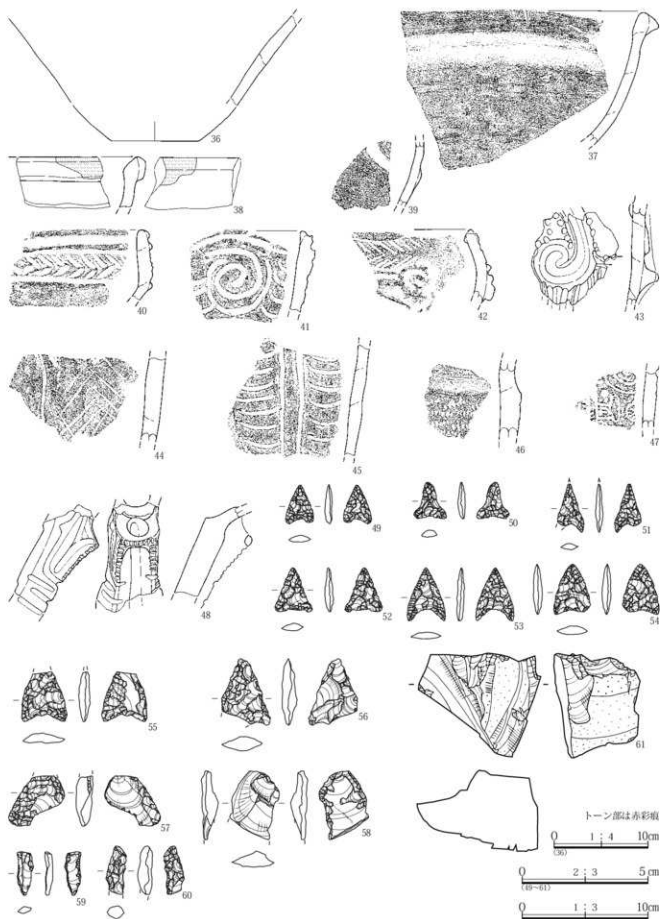
第244図 62区15号住居跡出土遺物 (1)



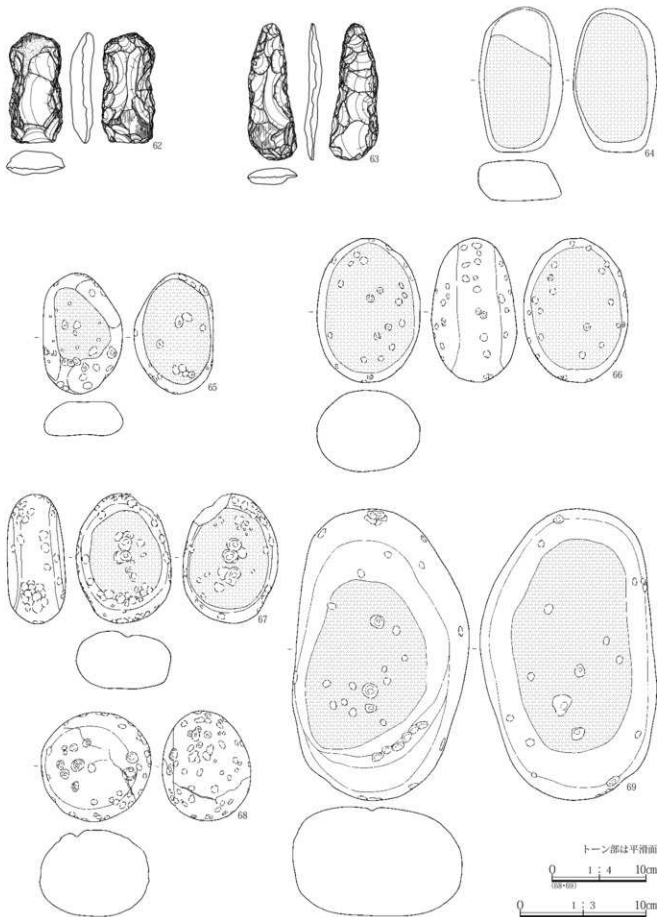
第245図 62区15号住居跡出土遺物(2)



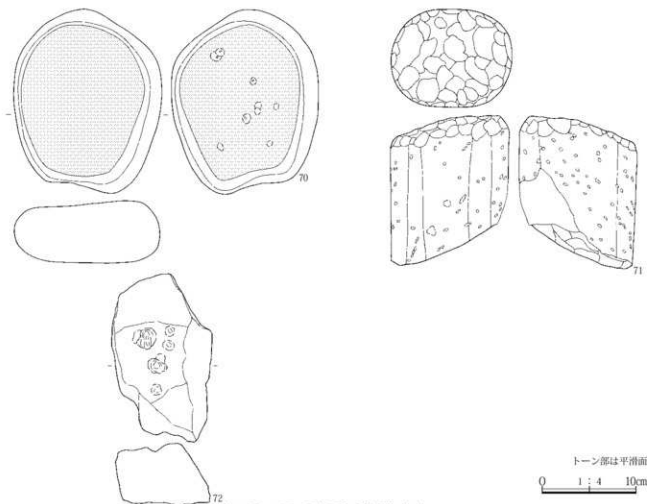
第246図 62区15号住居跡出土遺物 (3)



第247図 62区15号住居跡出土遺物(4)



第248図 62区15号住居跡出土遺物 (5)



第249図 62区15号住居跡出土遺物(6)

柱穴は試掘坑で失われた可能性がある。また奥壁柱穴は設けられていないようだ。

遺物：平面的に2つの分布を示す。南側の埋裏やP4周辺を中心とする一群と、北側のP1やP1を中心とする一群に分けられる。見かけ上の偏りかも知れないが、断面分布では、北側の一団が若干高く、南側はやや低い位置から出土している。遺物流入時の何等かの差が生じていたのかもしれない。さらに南側の一団の中で、土器は若干古い様相を示している。

出土遺物の内居住に伴う例が考えられるが内土器(3)や台石(69)、さらに埋裏(1)が挙げられる。埋裏はやや古手の様相を示すが、その他の出土土器は加曾利ⅢⅢ式中段階と考えられる。また、「郷土式」の出土量が極端に少なくなる現象が具体化している。

所見：良好な石囲い炉を設け、主軸線上南側に埋裏を配す住居跡である。柱穴の配置も良好で、該期住居跡の典型例と評価できよう。出土土器も豊富で、加曾利ⅢⅢ式中段階の良好な一括資料と捉えられよう。

62区16号住居跡(第250～253図 PL.21・120～122)

位置：調査区西側の住居跡群の中にある。62区E・F-4・5グリッドに位置する。周辺の地形は、北側に急斜面地形が広がるが、13号住や19号住などが占地するため、傾斜自体が緩やかになって、本住居跡は南への緩傾斜地形に立地する形態となる。東側には13号住が西側には19号住が重複するように住居跡が群在する地点である。

経過：平面形北半はⅢⅢ層下位である黒褐色土で確認した。南半は19号住と13号住に挟まれた褐色土中の確認となったが、斜面地形が著しく平面形の確定までは至らなかった。床面中央に相当する19号住との重複部で跡を見たため、19号住や13号住とは別の住居跡として調査をした。

規模：平面形として確認が果たせたのは北壁のみのため、平面形や規模は判然としない。おそらく径4.0～4.5m程の小型円形を呈する平面形と想定されよう。深さは遺存度の良好な北壁付近で35.0cmを測るよう深くしっ

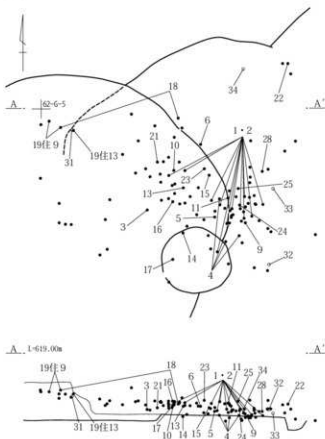
かりした立ち上がりを示すが、他の壁は残存しておらず、遺存度は不良である。

重複：東に重複する13号住は敷石住居跡であり、土層で確認されていないが、本住居跡を切ると判断している。19号住は、土層観察により本住居跡が19号住上に乗る様相が把握されている。さらに19号住東壁上に本住居跡が跡が重なるため、層位的には本住居跡を新しく見ることができよう。これらは、出土土器の傾向からも合致するものである。

床面：黄褐色ロームを地床とする。南側へはほぼ平坦面を築き、西側は、19号住との段差が見出される。硬化面はなく、やや軟弱な床面が広がる。

施設：が跡を1基確認した。5基のピットを確認したが、柱穴としての可能性は低い。壁周溝、埋裏などは確認されていない。

炉跡：19号住東壁との重複部に地床炉を見る。平面規模は61.0×53.0cmで、主軸を北西にむけた小型の楕円状を平面形とする。深さも16.0cmと浅く、壁の立ち上がりも弱い。埋土は焼土粒を含む褐色土や黄褐色土が堆積する。



第250図 62区16号住居跡 (1)

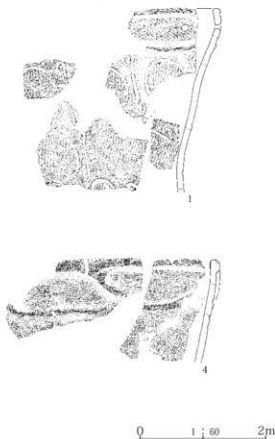
柱穴：調査した5基のピットのうち4基 (P1、P2、P4、P5) は、先に述べた13号住西壁にかかる柱穴に相当する可能性も高い。故に、本住居跡に帰属し得るピットはP3のみで、位置的にも柱穴としては相応しくない。

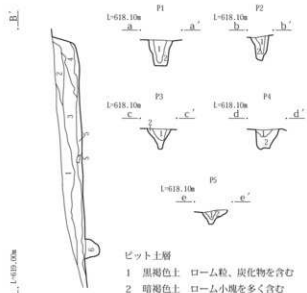
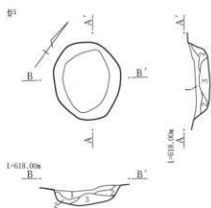
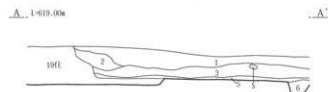
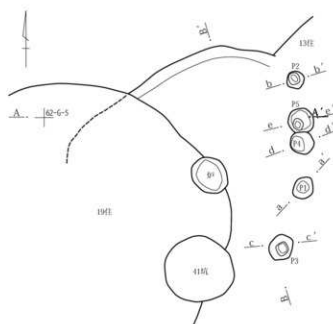
遺物：遺存度が悪い割に出土量が多い。床面南半と19号住重複部にかけて出土が見られる。多くが床面から浮いた状態での出土で埋土上層～中位といえよう。断面分布をみても北西から南東への傾斜に沿った流入が看取される。その中で、床直上でまとまった出土を示す「郷土式」1・2や加曾利EⅢ式4は、本住居跡廃絶時の所産である可能性がある。

所見：13号住と19号住に挟まれ、幸うじて北壁と地床が1基を抽出した住居跡である。柱穴などの施設が確認できず残念だが、出土土器の大半は中期後葉に比定され、ある程度の一括性は認められよう。

62区17号住居跡 (第254～259図 PL.21・22・122・123)

位置：調査区西側の住居跡群の中にある。62区D・E-5・6グリッドに位置する。周辺の地形は、北側に急斜面地形が広がるが、10号住や13号住などが占地するため、





- ピット上層
- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を含む
 - 2 暗褐色土 ローム小塊を多く含む

16号住上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土 ローム小塊を含む
- 5 灰黄褐色土 ローム塊を多く含む
- 6 黒褐色土 黄色粒を少量含む。ピット埋土

0 1:60 2m

16号住下層

- 1 褐色土 焼土粒、黒褐色土塊を含む
- 2 灰黄褐色土 ローム塊、少量の焼土粒を含む
- 3 黄褐色土 焼土塊を多く含む

0 1:30 1m

第251図 62区16号住居跡(2)

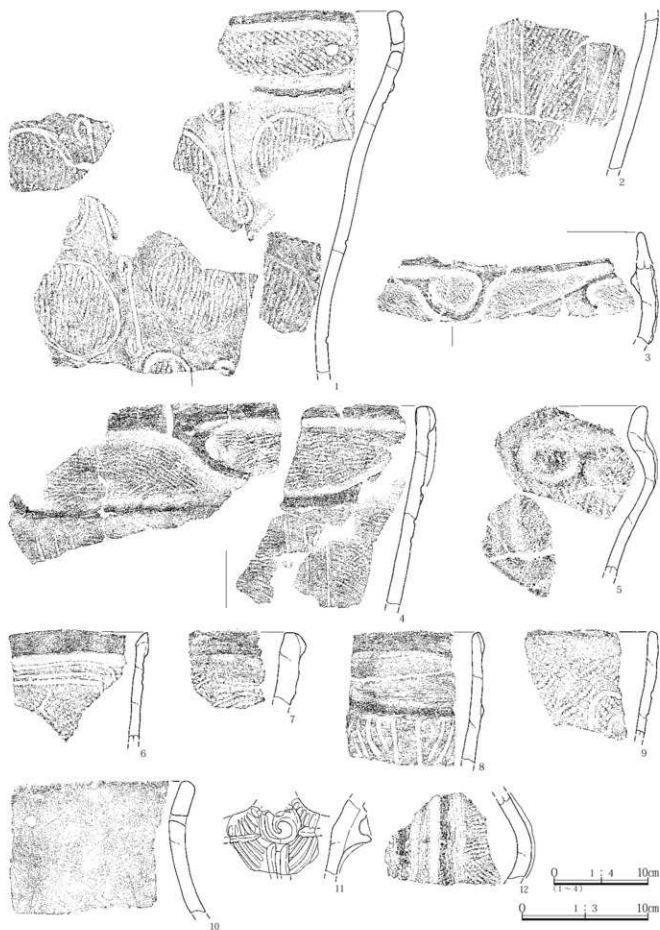
傾斜自体が緩やかになって、本住居跡は南への緩傾斜地形に立地する形態となる。本住居跡西側には13号住や16号住、19号住が重複するように、南西にかけて帯状に住居跡が群在する地点である。

経過：Ⅲ層下位である黒褐色土で平面確認を施した。平面形に沿って遺物が多く出土したため、土層と床面の検出に努めた。その結果、良好な遺存度のもと床面上に良好な石囲い帯が検出され、壁も南壁を含めて良好な立ち上がりを得ることができた。周辺の住居跡である10号住や13号住は同時に調査が進んだが、本住居跡は深く、周辺住居跡の影響を殆ど受けていない。

規模：やや横長の楕円状を平面形とする。規模は約500.0×400.0×40.0cmを測り、主軸を北北西に設ける。壁の遺存度も極めて良好で直立気味の壁を検出できた。深く良好な遺存度といえよう。

床面：深く、ローム漸移層上層から黄褐色ローム上面まで達しており、ロームを地床とする。僅かな凹凸があるが、ほぼ平坦面を築く。硬化面は跡を中心に床面全域にわたり広く確認できた。

施設：床面中央やや北西寄りに石囲い帯を設ける。壁周溝は全周し、柱穴として調査したピットは4基ある。埋裏は見られなかったが、南が壁際に敷石1枚を見た。



第252図 62区16号住居跡出土遺物(1)



第253図 62区16号住居跡出土遺物(2)

炉 跡：主軸を北西にむけた方形の平面形で、平面規模は65.0×58.0cm、深さは30.0cmを測る。四辺を大型の角礫、亜角礫4石で圍繞し、隙間に小礫を配していた。内側の被熱痕跡は強く、一部炉石の破砕が認められた。埋土は焼土を含む黒褐色土を主体にしていた。また炉堀方で炉石設置穴が明瞭に観察された。

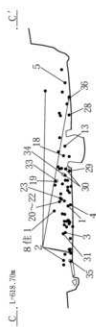
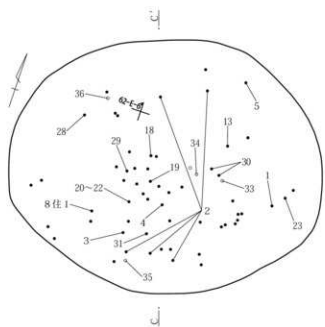
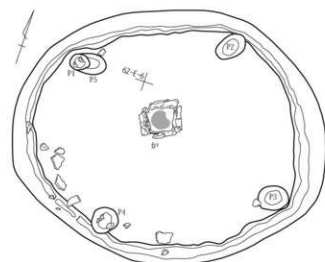
敷 石：南壁際床面に20×30cm程の板石が置かれていた。住居跡主軸線上にあたり、本来ならば埋裏が設けられる箇所である。板石が置かれた様相は、あたかも埋裏蓋石に近い様相だが、下位には掘り込みも埋裏もなく、単独で敷かれた板石だった。また、敷石は南西壁際にも設けられていた。本住居跡の帰属時期は、敷石住居を構築す

る時期に係っており、地床ながら、敷石行為が意識されたと考えられる。

壁周溝：途切れもなく全周する。壁と一体化し、住居平面形を際立たせている。また単独で1条のみ設けられており、移動や拡張の痕跡は見られなかった。

柱 穴：4基を確認した。四隅壁際に設けられており、配置、規模とも良好な柱穴である。土層からも柱痕を観察できた。奥壁の柱穴が検出できなかったが、設けられていないと判断した。

遺 物：埋裏、炉内土器を見ないため、直接居住に伴う例は見られない。しかしながら1はP3北側のほぼ床直で横位に潰れた状態で出土している。また、土器が脆弱な

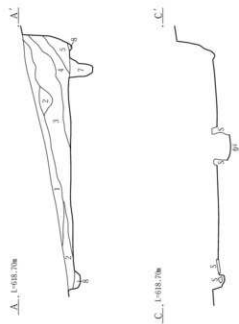
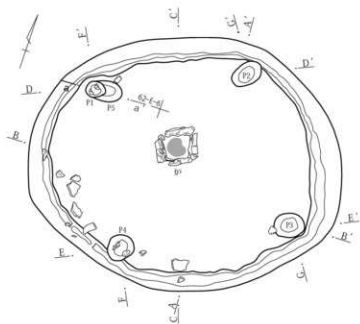


トーン部は焼土

0 1 : 60 2m

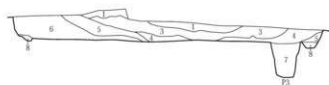
第254図 62区17号住居跡 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



B. l=618.70m

B'



D. l=618.70m

D'



E. l=618.70m

E'



F. l=618.70m

F'



G. l=618.70m

G'



l=618.20m A'



17号住土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、炭化物を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を多く含む
- 4 黒褐色土 白色粒、黄色粒を微量含む
- 5 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む
- 6 黒褐色土 ローム塊を多く含む
- 7 黒褐色土 ローム粒を含む。ビット埋土
- 8 暗褐色土 黄色粒を少量含む。周溝埋土

ビット土層

- 1 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を含む
- 4 黄褐色土 ローム粒を多く含む
- 5 黒褐色土 ローム大塊を少量含む
- 6 黒褐色土 ローム塊を多く含む

トーン部は境上

0 1 : 60 2m

第255図 62区17号住居跡(2)



第256図 62区17号住居跡 (3)

ため図化が果たせなかったが、北壁P2の西に深跡がやはり横位に潰れた状態で出土している (PL.22)。2個体とも柱や壁などに立てかけた状態で横位に転倒したのかもしれない。その他では2が床面の各所から床直出土で見られた。出土土器の多く(1~23)は加曾利EⅢ式中段階に比定されよう。「郷土式」(24~29)は客体的な存在である。30・31は加曾利EⅠ式で混在であろう。

所見：中期後葉の典型的な住居跡である。平面形も安定しており、床面まで深く、良好な遺存度を誇る。床面中央に石囲い枠、四隅壁際に柱穴を設け、出入口に板石を置く様相は極めて良好な例として位置付けておきたい。時期は中期後葉である。

62区18号住居跡 (第260図 PL.124)

位置：調査区中央の住居跡密集地点内にある。61区と62区に跨がり、61区Y-6、62区A-6グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形があるが、重複住居跡の影響もありほぼ平坦地形を呈す。重複・近接する住居跡としては、2号住及び4号住が複雑に重複する。

経過と概要：ローム漸移層の暗褐色土で平面形確認をした。2号住から8号住までの土層観察において、3号住や4号住が確認されているが、本住居跡もほぼ同一地点で検出されている。あるいは同一住居跡の可能性もあり、検討を要しよう。また、住居跡としての断面記録がなく、さらに個別の写真記録も無かったため、新旧や床面の様相は把握できなかった。

調査では4号住床面上に、小型住居跡北壁として本住居跡を確認した。4号住床面からの僅かな掘り込みで、

北壁を検出したため平面形、規模等は不明である。

4号住との新旧関係も層位の記録が反映されておらず不明である。出土土器も少量のため確定性に乏しい。

床面上に伊跡、壁周溝などは検出できず、柱穴としてビット5基を調査した。深さは柱穴として良好な例であるが、配置などに疑問が残る。

本住居跡出土遺物として、6点を図示した。土器片は「郷土式」(1・4)が見られるが、細片のため住居跡帰属時期を確定する遺物ではない。

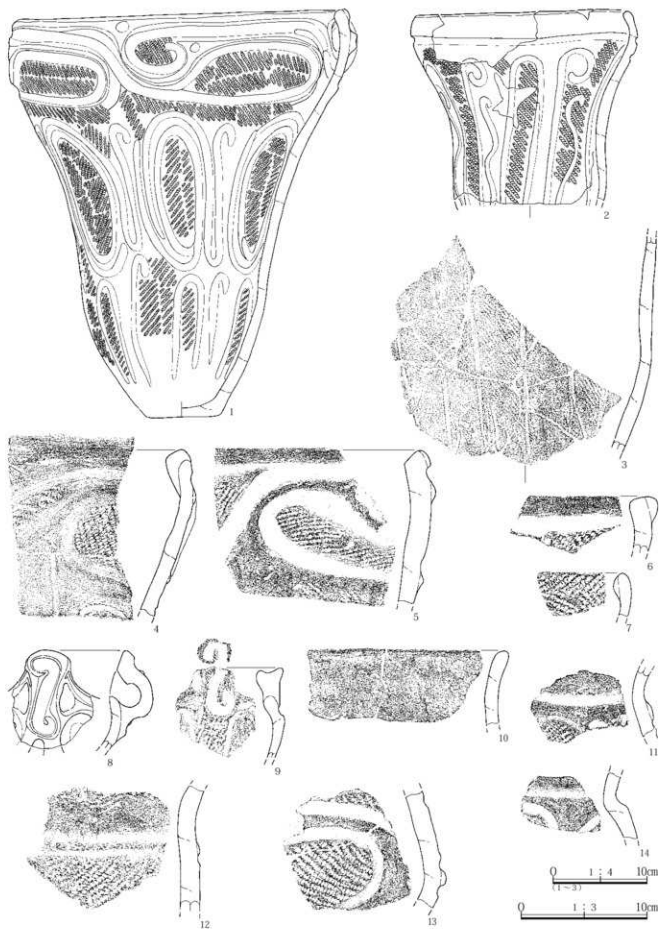
所見：4号住床面下で新たに確認された、浅い壁とビットをもって住居跡としている。出土遺物は中期後葉に限られるが、居住に伴う例では無く、時期は確定できない。

62区19号住居跡 (第261~267図 PL.23・124~126)

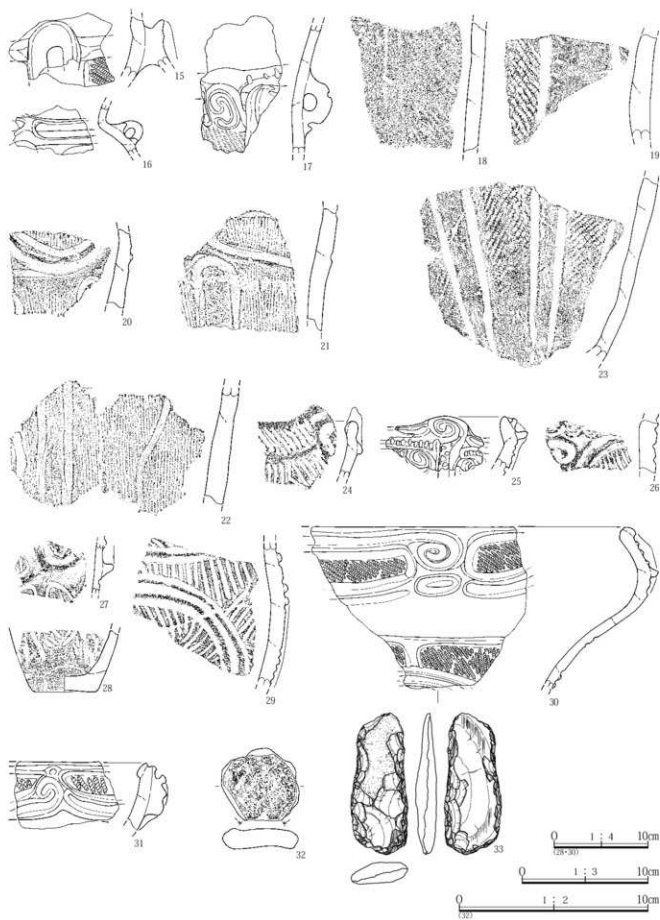
位置：62区F-G-3~5グリッドに位置し、北に9号住、東に16号住、西に11号住が重複するように、調査区西側の住居跡群の中にある。周辺は南への緩斜面地形が広がっており、ほぼ平坦地形での調査となった。

経過：ローム漸移層上位である黒褐色土を確認面とした。平面形確認時に遺物が多量に出土し、集中する傾向が見られ、周辺の住居跡との新旧関係を踏まえて調査を進めた。その結果、伊跡及び良好な壁の立ち上がりを確認し、住居跡として確定した。なお、南側壁の一部は調査区域外に延びるため未調査となっている。

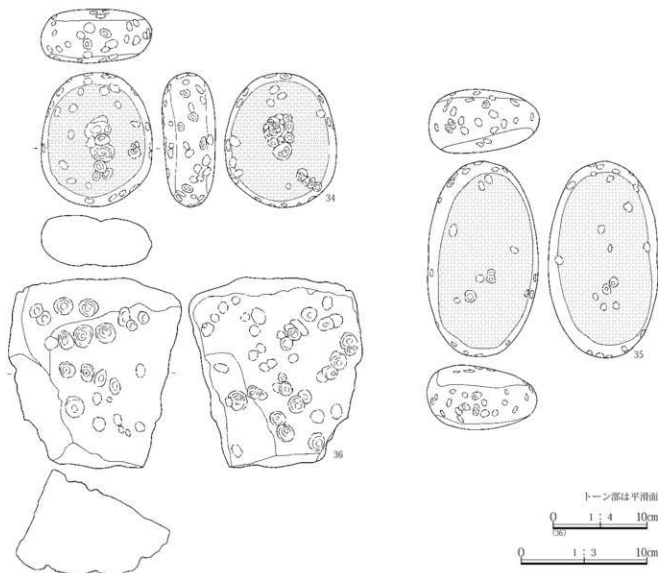
規模：主軸を北北西に向けた、径(483.0)×550.0cm程のやや大型の不整形円形を平面形とする。壁の遺存度は極めて良好である。特に傾斜上位の北壁から西壁の残りは非常に良好で、深さ約25.0cmを測り、直立気味の壁が



第257図 62区17号住居跡出土遺物(1)



第258図 62区17号住居跡出土遺物(2)



第259図 62区17号住居跡出土遺物(3)

しっかりと掘り込まれていた。なお、東側壁は16号住が乗るため、やや低く検出されている

重複：西側の11号住と東側の16号住に切られる新旧関係である。両住居跡とも土層による観察で新旧が把握され、出土土器の様相とも合致する。

床面：ローム漸移層上層から黄褐色ローム層上層にまで達している。黄褐色ロームを地床とし、僅かな凹凸を見るがほぼ平坦面が広がる。硬化面は炉跡を中心に広く、顕著に認められた。床面下数cmで小型の基盤礫が大量に含まれる層になり、その直前で床面を構築したと思われる。

施設：床面中央やや北寄りに地床炉を1基見る。壁周溝は西半に走行を見る。柱穴として8基のピットを調査した。

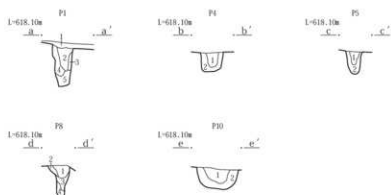
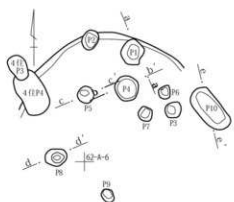
炉跡：主軸を北西に向ける不整形を平面形とし、平

面規模は約108.0×106.0cmを測る。断面形は皿状を呈すが、深さは30.0cmを超え掘り込みはしっかりしていた。埋土は焼土粒を多く含む暗褐色土を主体とする。炉石等の構築材の痕跡は見られなかった。

壁周溝：北壁際から西壁を経由して南壁に至る走行を示す。壁とほぼ一体化した立ち上がりを示し、平面形を際立たせる。北壁中位にあるP5の両脇で途切れており、北壁を中心と施設の存在も想定されよう。

柱穴：5箇所6基のピットを柱穴と捉えた。(P1・P2)、P3～P6が該当しよう。五角形の配置で規模も良好である。P5は奥壁柱穴で主軸線上に乗る。P7とP8の規模は良好であるが、配置上主柱穴にはなり得ない。北東壁際の施設を構成する柱などが想定されよう。

北西壁の集石施設：北東壁にあるP7・P8と対称的な位置に、大型の自然石が集まる。西壁際に大型の板石3個



P 1 土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む。4号住居土
- 2 黒褐色土 少量のローム小塊、極微量の炭化物を含む
- 3 黒褐色土 ローム大塊を微量含む
- 4 黒褐色土 ローム小塊を微量含む
- 5 黒褐色土 黄色粒を多く含む

P 4 土層

- 1 黒褐色土 ローム塊を含む
- 2 暗褐色土 ローム塊を含む

P 8 土層

- 1 暗褐色土 ローム大塊、黄色粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を含む
- 4 褐色土 ローム粒を含む

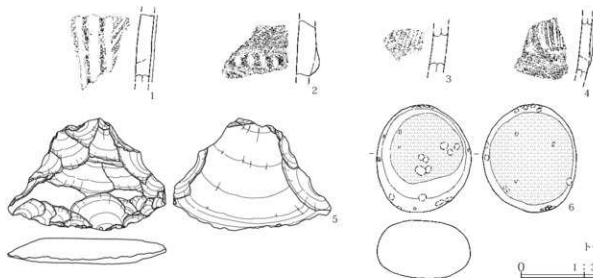
P 5 土層

- 1 黒褐色土 ローム塊、黄色粒を含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む

P 10 土層

- 1 黄褐色土 ローム大塊を多く含む
- 2 黄褐色土 ローム塊を少量含む

0 1 : 60 2m



トーン部は平断面

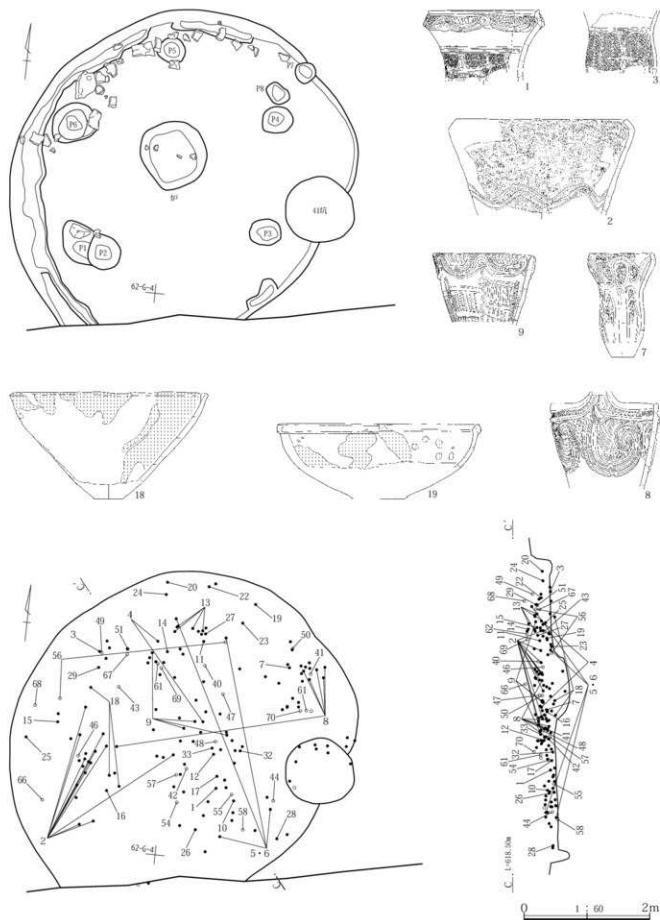
0 1 : 3 10cm

第260図 62区18号住居跡及び出土遺物

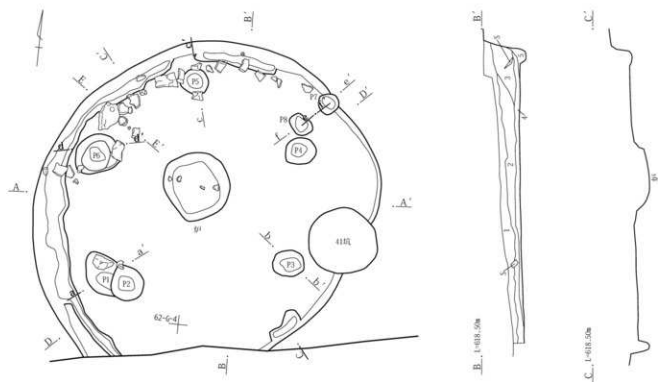
を並べ、間隔を置いて2枚の小型板石を置く。大型板石と小型板石中間に深鉢頸部～体部(3)を正位に置く(E-E')。土器を置いた集石施設は横壁中村遺跡に類例があり、壁際の儀礼施設として位置付けておきたい。

遺物：平面的に住居跡全体から偏りもなく出土し、断面分布からも埋土中から床直まで満遍なく出土が見られる。遺物以外では、大型角礫が住居跡中央部の埋土中に集まる傾向が見られた。出土土器の傾向を見ても、7は新しい様相を示し問題が残るが、16号住との重複部にあたる箇所であり混在の可能性が高い。その他の土器は加曾利E1式新段階に比定され、ほぼ一括廃棄による所産と考えられよう。

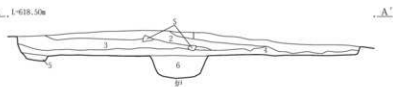
所見：南側の一部が未調査とはいえ、ほぼ全容が把握された住居跡である。径550.0cm程の不整円形を呈し、5本柱穴を整った箇所配す。北西壁際に集石と土器を伴った施設を見た。何等かの儀礼施設と位置付けられよう。また北東壁の2基の小ピットもあるいは儀礼空間を画す施設の痕跡かもしれない。時期は出土土器から中期中葉末から後葉初頭と位置付けたい。



第261図 62区19号住居跡(1)



A, 1/618.50m



D, 1/618.50m



B, 1/618.50m



C, 1/618.50m

19号住土層

- 1 暗褐色土 黄色粒、焼土粒を少量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒、炭化物、礫を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を含む
- 4 にぶい黄褐色土 ローム小塊を多く含む
- 5 にぶい黄褐色土 ローム粒を多く含む
- 6 暗褐色土 焼土粒を含む。処理土

E, 1/618.50m



1/618.10m



1/618.10m



1/618.10m



1/618.10m



1/618.10m



1/618.10m



P 1・5～8土層

- 1 黒褐色土 少量のローム小塊、礫を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 にぶい褐色土 ローム塊を含む
- 5 黄褐色土 ローム大塊を含む

P 3土層

- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒を多量に含む
- 2 褐色土 ローム小塊を含む
- 3 黄褐色土 褐色土塊を多く含む
- 4 黄褐色土 ローム大塊を含む

P 2・4土層

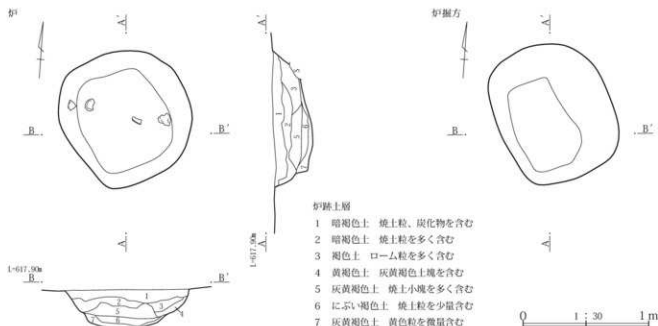
- 1 暗褐色土 ローム小塊、礫を含む
- 2 にぶい褐色土 ローム塊を多く含む
- 3 暗褐色土 礫を多く含む

P 5土層

- 1 黒褐色土 黄色粒、小礫を少量含む。しまり強い
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりやや強い



第262図 62区19号住居跡 (2)



第263図 62区19号住居跡(3)

62区20号住居跡(第268図 PL.23・126)

概要：調査区中央の住居跡密集地点の西端にあたる62区B・C-5・6グリッドに位置する。5号住や7号住と重複して調査され、5号住調査後にが跡が確認されたため住居跡として調査した。周辺は北側から北西側に急斜面地形が展開し、本住居跡周辺で緩やかな南斜面へ変化する。前述の住居跡以外には、22号坑や1号掘立柱建物跡柱穴も本住居跡に重なる。

確認面は5号住床面である褐色土である。床面としては把握できず、長楕円状のが跡を検出したため、住居跡として調査した。

が跡は約92.0×56.0×24.0cmを規模としており、掘り込みのしっかりした石囲いである。西辺に大型板石をが石として設け、他辺は小型礫が置かれる程度で、が石は埋めていない。埋土は灰褐色土を主体とし、底面に焼土塊を堆積していた。

ピットは2基をが跡周辺で確認したが、規模、配置とも良好ではなく、柱穴としての妥当性は弱い。

遺物は、1の深鉢底部がが南西約150cmに出土しているが、本住居跡に帰属するのかわからない。時期は中期後葉であろう。

住居跡としての確信性が弱く、詳細は述べられない。おそらく、5号住などの重複により古い住居上面が削平された結果、が跡と埋設土器下部が残ったのであろうか。

62区21号住居跡(第269図 PL.24・126)

位置：調査区西側の住居跡群の中にあり、やや北に位置する。62区G-6、H-5・6グリッドに位置し、南東に9号住が重複する。周辺は南側への緩傾斜地形にありほぼ平坦地形に占地していた。

経過：ローム漸移層である暗褐色土を確認面とした。北側から西側は重複遺構がなく、比較的容易に平面形の把握は果たされた。既に9号住の調査が進んでおり、床面までが深い9号住の北西側から、本住居跡に帰属する小型の石囲いのが跡が検出されたため、急速、本住居跡を優先して調査を進めた。

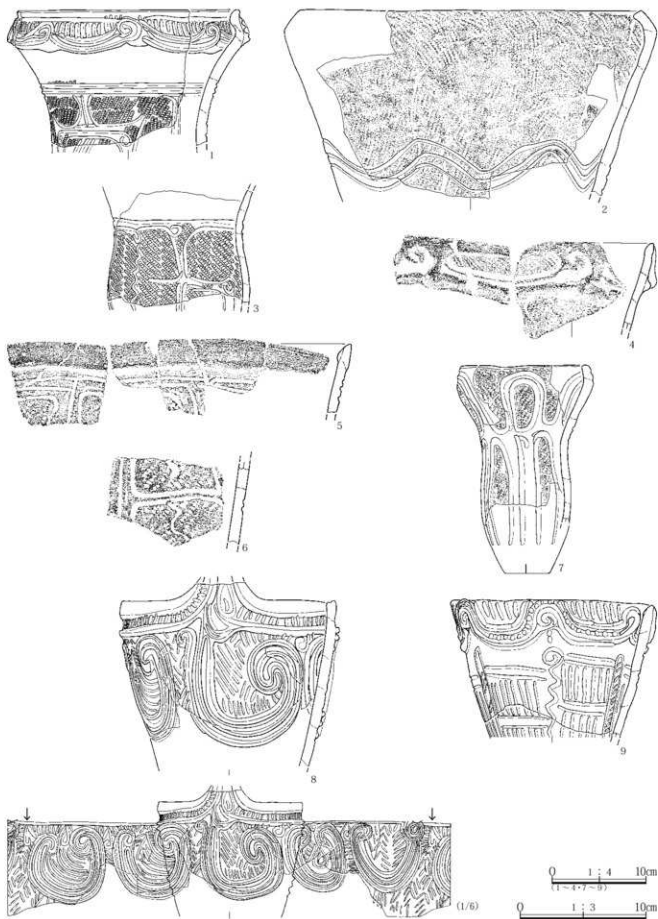
規模：9号住との重複部分は既に調査されてしまい不明となった。北側から西側の遺存度の良好な壁から推定すると、平面形は径280.0cm程の小型の円形を呈すると思われ、深さは約40.0cmを測る。本来は良好な遺存度だが、9号住重複調査のため状態は悪くなった。

重複：前述のように、9号住北西壁に本住居跡のが跡が乗ることから、本住居跡が新しい。しかしながら、出土土器の差は大きくなく、明確な新旧は確定できない。

床面：暗褐色土を地床とし、ほぼ平坦面を築く。硬化面は見られず、全体に軟弱な印象を受ける。

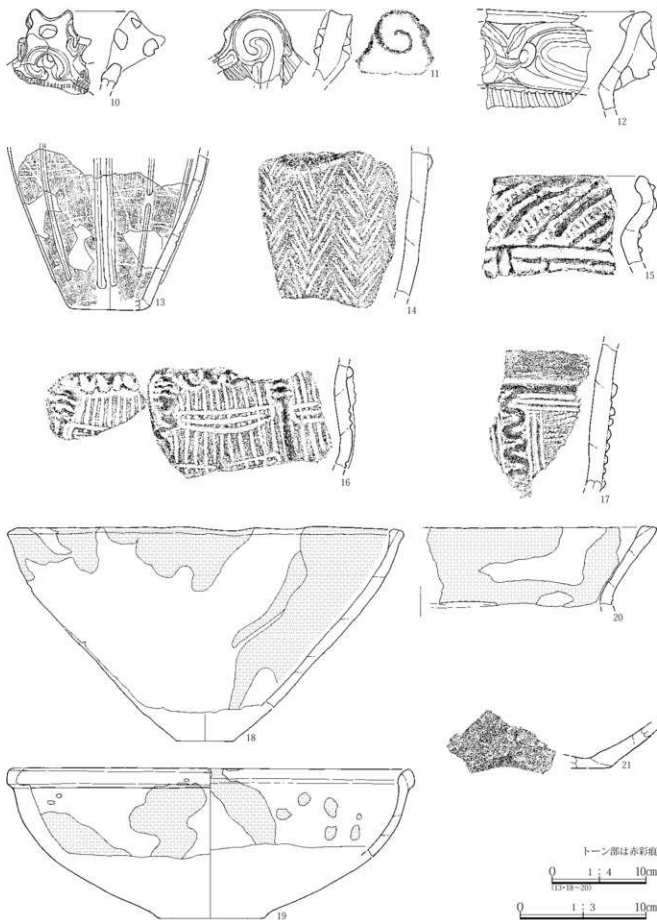
施設：床面中央付近に石囲いのが跡、柱穴としてピット3基を調査した。埋裏、壁周溝は見られなかった。

が跡：小型の石囲いのが跡である。規模は52.0×50.0×22.0cmで、周辺を6石の角礫や亜角礫で囲う。小型で住

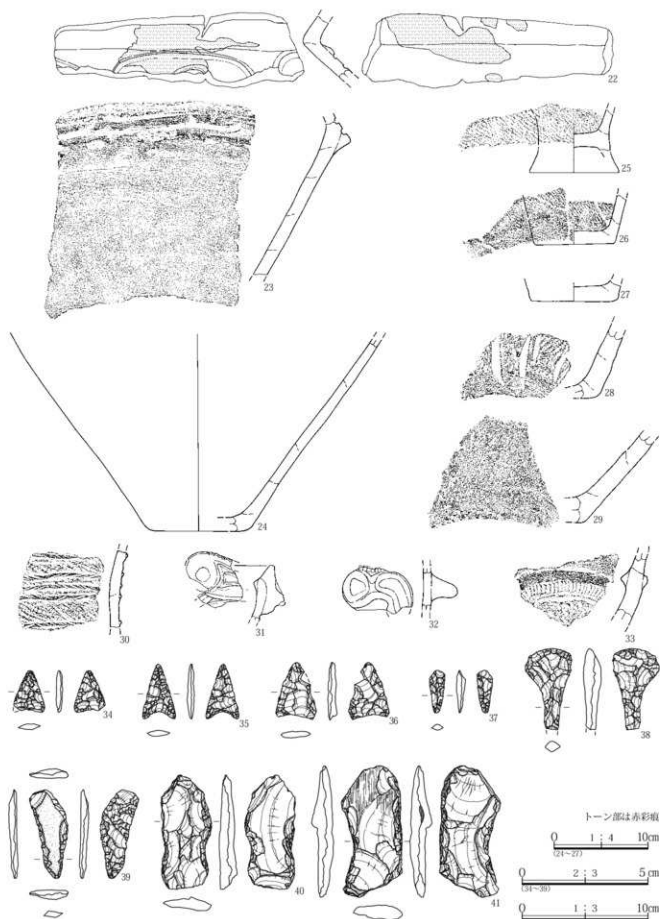


第264図 62区19号住居跡出土遺物 (1)

第3章 発見された遺構と遺物

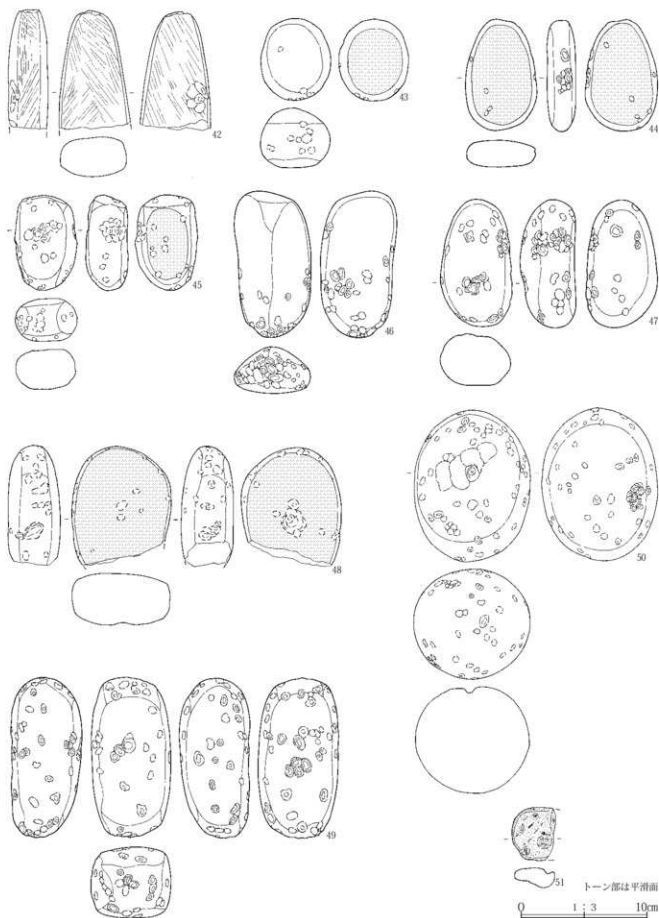


第265図 62区19号住居跡出土遺物(2)

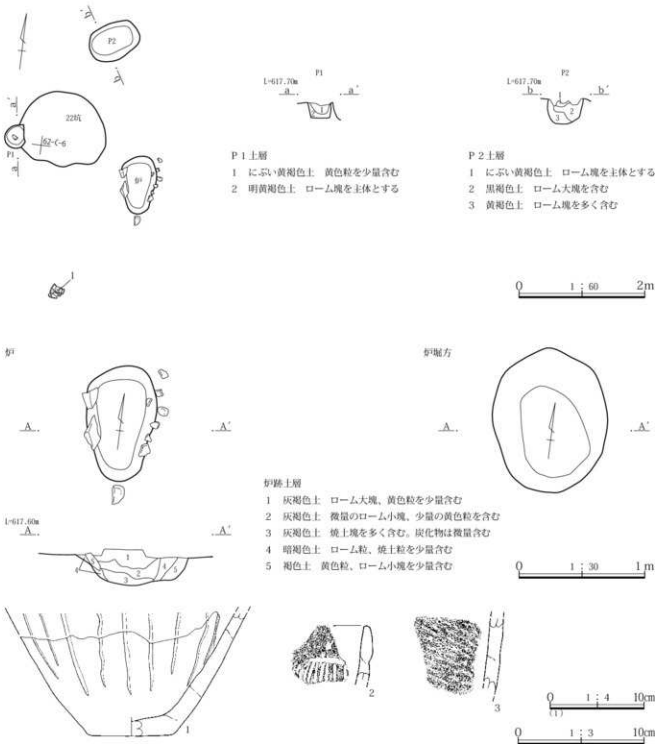


第266図 62区19号住居跡出土遺物 (3)

第3章 発見された遺構と遺物



第267図 62区19号住居跡出土遺物(4)



第268図 62区20号住居跡及び出土遺物

居跡規模に比例する例であろう。埋土は焼土粒を少量含む黒褐色土を主体としていた。

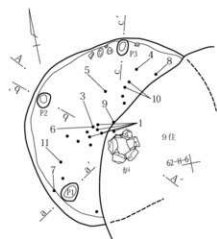
柱 穴：3基のピットを壁際で検出した。3基とも規模としてやや浅いが、配置的には良好で、壁際の柱穴として考えておきたい。

遺 物：中央部分に集まる傾向にある。埋土中からの出土が多く、おそらく流入による所産と捉えられよう。

多くが加曾利EⅡ式～EⅢ式古段階（1～6・11）で、「郷土式」（7～10）も伴出している。

所 見：9号住との重複調査の手違いにより、詳細が不明になってしまったが、小型円形の住居跡で、中期後葉に比定されよう。

第3章 発見された遺構と遺物

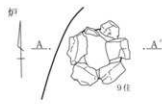
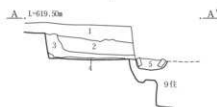


21号住上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 暗褐色土 灰白色土、ローム粒を含む
- 5 暗褐色土 炭化物を含む。砂土

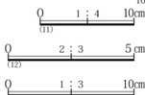
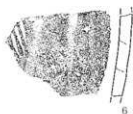
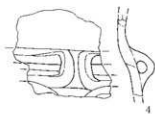
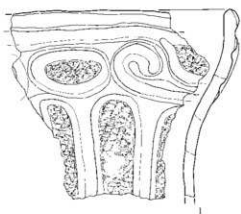
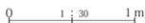
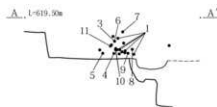
ピット上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 暗褐色土塊を含む



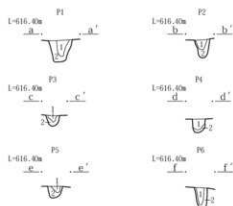
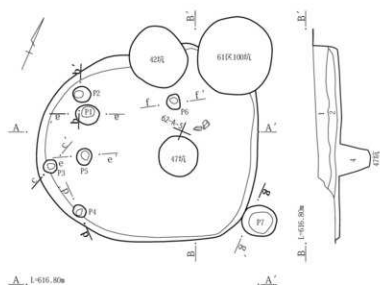
砂跡上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒、炭化物を含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を含む
- 4 黒褐色土 焼土粒を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム粒を少量含む



第269図 62区21号住居跡及び出土遺物

第3節 住居跡(62区)



P1~6 土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を極微量含む

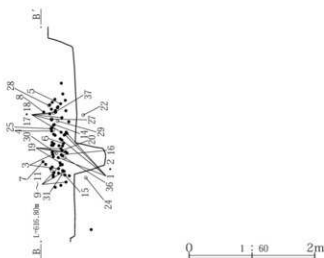
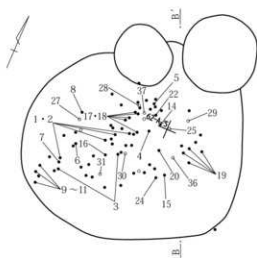


P7 土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 3 にふい黄褐色土 ローム粒、礫を含む

22号住土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 暗褐色土塊、黄色粒を含む
- 3 暗褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む
- 4 暗褐色土 褐色土塊、黄色粒を含む
- 5 褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む



第270図 62区22号住居跡

62区22号住居跡(第270~272図 PL.24・127・128)

位置 調査区中央の住居跡密集地点内にある。61区と62区に跨がり、61区Y-4・5、62区A-4・5グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあるが、重複住居跡の影響もあり、ほぼ平坦地形での調査となった。重複・近接する遺構としては、東に8号住が重複する。さらに62区2号掘立柱建物跡の柱穴が床面上に見られる。

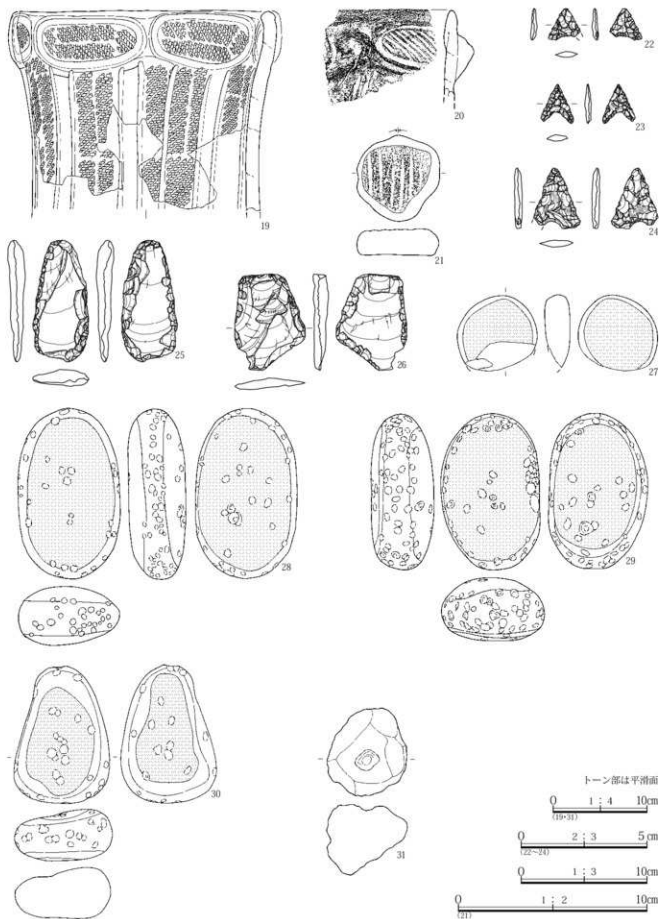
経過 確認面は黒褐色土中である。8号住の調査後に黒褐色土の床面下からも出土遺物が見られ、僅かながらの土色の変化も認められたことから、住居跡の存在を予想し調査を進めた。その結果、柱跡は確認できなかったが、床面と小ピットを得たことから、住居跡として確定した。

規模 南辺と東辺が方形に屈曲するが北辺から西辺は弧状の平面形を描く。約350.0×310.0×30.0cmを測る



第271図 62区22号住居跡出土遺物(1)

第3節 住居跡 (62区)



第272図 62区22号住居跡出土遺物(2)

小型不整形の住居跡である。壁の立ち上がりも良好で、しっかりと掘り込まれていた。

重複：8号住との重複は、作業手順からは本住居跡が古い。しかしながら、出土遺物は8号住と共に2時期が混在しており、明確な新旧は判断できない。

床面：黄褐色ローム上層を地床とする。凹凸を見るがほぼ平坦面を築く。硬化面は見られず、やや軟弱な床面が広がる。

施設：炉跡を見ない。柱穴として7基のピットを調査している。

柱穴：小ピットを7基調査したが、柱穴として規模、配置が良好な例は無い。その中で、P1、P2、P6は深さが妥当であるが、規則的な配置を示さない。検討が必要であろう。

遺物：住居跡中央部にまとまり、多くが埋土中の出土である。居住に伴う出土例は見られなかった。出土土器は2大別できる。中期中葉末に比定される一群（1～16）、中期後葉に属する一群（17～20）である。この傾向は、重複する8号住も同様であり、8号住は中期後葉の住居跡として位置付けられている。

所見：炉跡も見られず、柱穴も適当ではないため、住居跡というより竪穴状遺構としての性格が妥当だと思われる。時期は中期後葉の土器が出土しているが、重複する8号住からの混在と捉え、本住居跡の時期は中期中葉と捉えたい。

62区23号住居跡（第273図 PL.24・128）

位置：調査区北西の62区J・K-5・6グリッドに位置する。周辺は南への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦面に占地するが、重複する遺構は無く単独の検出となった。近接する住居跡としては、南東約1mに24号住がある。

経過：Ⅲ層の黒褐色土中で平面確認中に、小型の石囲い炉が検出され、住居跡としての調査を進めた。しかしながら、黒褐色土中での平面形確認であり、壁、壁周溝の検出には及ばず、柱穴も確認できなかった。特に黒褐色土下位には基盤礫層が迫っており、平面形の確認には困難な層序をしめしていた。なお、住居跡北半は調査区外に延びており、未調査となっている。

規模：石囲い炉を中心にして、径1m弱の円形平面形を想定し、調査区北壁で住居跡上層を確認したが、表土

層が確認面直上にまで堆積しており、深さ15.0cm程の僅かな壁立ち上がりを見出したのみで、確定的ではない。

床面：石囲い炉を検出した面を床面として、平坦に広げたが、顕著な硬化面などは確認できなかった。また、壁周溝や柱穴は検出できなかった。

炉跡：石囲い炉の平面規模は約53.0×53.0cmで不整形円形を平面形とする。深さは約18.0cmを測り、比較的しっかりとした皿状の掘り込みを示す。炉石は西辺南半と南辺西半のみに設けられる。円礫3と板石角礫1からなり、内縁の弱い被熱痕跡が認められた。

遺物：炉跡西側から、深鉢体下半～底部2個体が出土している。いずれも床直上と判断した。いずれも加曽利EⅢ式である。

所見：調査区北西端に位置する単独住居跡である。石囲い炉のみの検出で、調査区壁の土層により住居跡規模を推定したが、浅く不確定なものとなったが、おそらく径4m前後の小型住居と把握した。帰属時期は出土遺物から中期後葉であろう。

62区24号住居跡（第274～276図 PL.24・128・129）

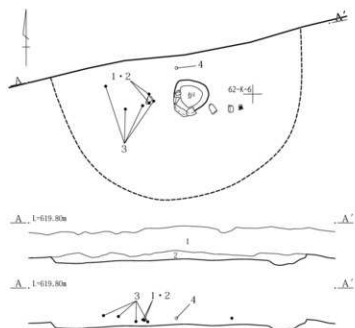
位置：調査区西側の62区I-5・6、J-4・5グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地形に占地する。周辺遺構は少ないが、南側に15号住が重複するため、本住居跡南半は壁が逸失していた。

経過：15号住調査中に住居北壁に本住居跡の炉跡が検出され、15号住北側にさらに住居跡の存在が予想された。周辺は基盤礫が夥しく露出し、基盤礫の分布が薄い箇所を住居跡範囲と捉え、ローム漸移層の暗褐色土及び15号住床下で平面形や柱穴の確認を行った。

規模：径560cm程の不整形円形を平面形とする。また、15号住床面下で得られた柱穴から推定すると南北径は6m近くになる。深さは残存度の良好な北壁付近で32.0cmを測り、壁周溝と併せて良好な立ち上がりを示していた。

重複：15号住の項でも述べたが、両住居跡の新旧関係を表す本住居跡の在り方は、15号住北壁と壁周溝の間隔から、再検討を要される。出土遺物からは本住居跡が古く加曽利EⅡ式や「郷土式」古段階に比定されると考えられている。

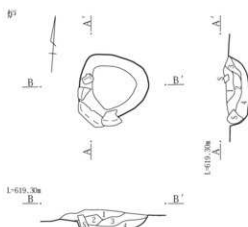
床面：ローム層上層にあたるにぶい黄褐色土を地床とする。僅かな凹凸は見られるものの、ほぼ平坦面を築く。



23号住居跡

- 1 表土 礫を含む
2 暗褐色土 黄色粒、ローム粒を含む

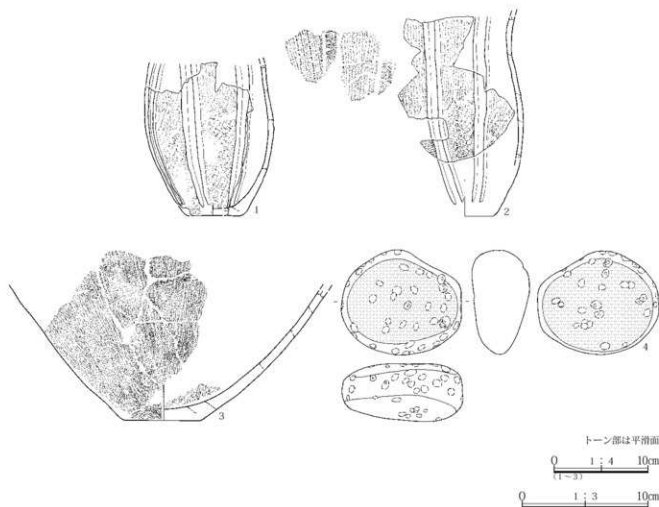
0 1:60 2m



炉跡上層

- 1 褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む
2 褐色土 焼土粒を少量含む
3 暗褐色土 黄色粒を少量含む
4 黒褐色土 ローム粒を少量含む

0 1:30 1m



トーン部は平滑面

0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第273図 62区23号住居跡及び出土遺物

硬化面は炉跡周辺に集まり、特に北東側が顕著だった。
 施設：石囲い1基、壁周溝、柱穴としてのピットを9基確認している。

炉跡：床面中央北西寄りに相当する箇所に設ける。平面規模は約96.0×86.0cmを測る方形で、主軸は北北西を向く。深さは約22.0cmで凹凸のある底面で皿状の断面形を示す。南辺には拳大の角礫が並べられるが、掘り込みも持たず、炉石としての性格は弱い。暗褐色土を基調にした埋土で焼土粒を含む。

壁周溝：北壁から西壁際にかけて連続的な走行を見せ、東壁際は断続的に設けられている。北東壁際と東壁際の一部に途切れが見られるが、何等かの壁際施設があったのかは不明である。1条の検出であり、拡張や移動の痕跡は見られなかった。

柱穴：9基のピットを調査したが、おそらく、9基とも柱穴として妥当であろう。P5～P9は15号住調査後に検出したピットである。いずれも、配置、規模良好な例と捉えられる。P2が奥壁柱穴として位置付けられ、P1～P3、P4～P7、P5～P6が対応する柱穴として位置付けられ

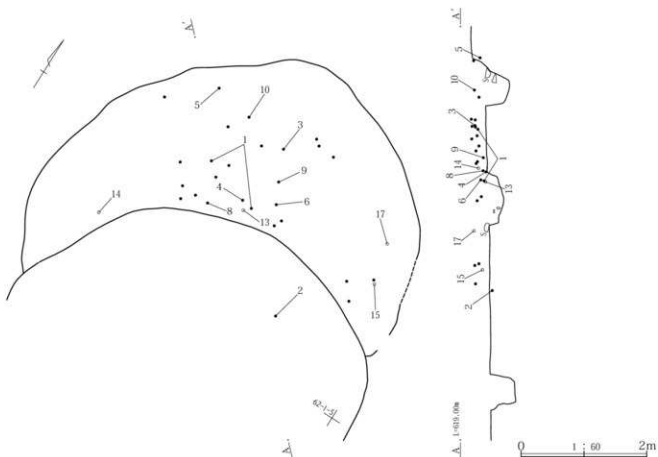
る。またP8とP9は、配置上ややずれる位置にあるが、P7のような重複するピットとして、対応関係が想定されるため、柱穴として位置付けられよう。

遺物：出土量は多くはなく、居住に伴う出土例も見られない。多くが埋土中の出土であり、廃棄時の流入と捉えられる。土器片の多くが「郷土式」古段階と捉えられる。5は加曾利EⅡ式か。

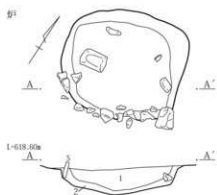
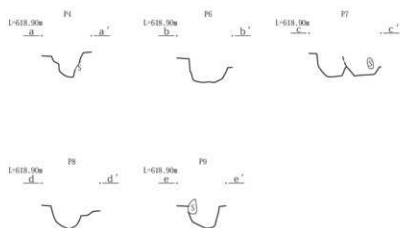
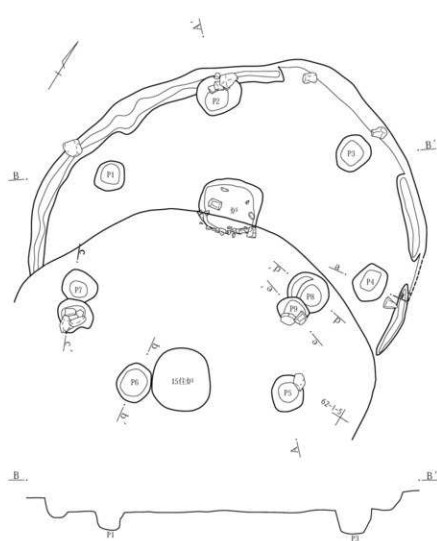
所見：調査区西側にあるやや大型の住居跡である。炉跡を持ち、7、8箇所の良好な柱穴配置を示す。加曾利EⅢ式を出土する15号住と重複するが、本住居跡はおそらく加曾利EⅡ式期と捉えられ、境界で検出した炉跡は重複していないと把握した。

62区25号住居跡 (第277図 PL.24・129)

概要：調査区西側の住居跡群の中にあり、62区E-F-5グリッドに位置する。南側への緩傾斜地形に占地し、北側を10号住、西側に16号住、南に13号住、東には17号住が重複する。四方を住居跡に重複された様相だが、13号住調査終了後に北側に新たな段差が検出され、平坦面



第274図 62区24号住居跡 (1)



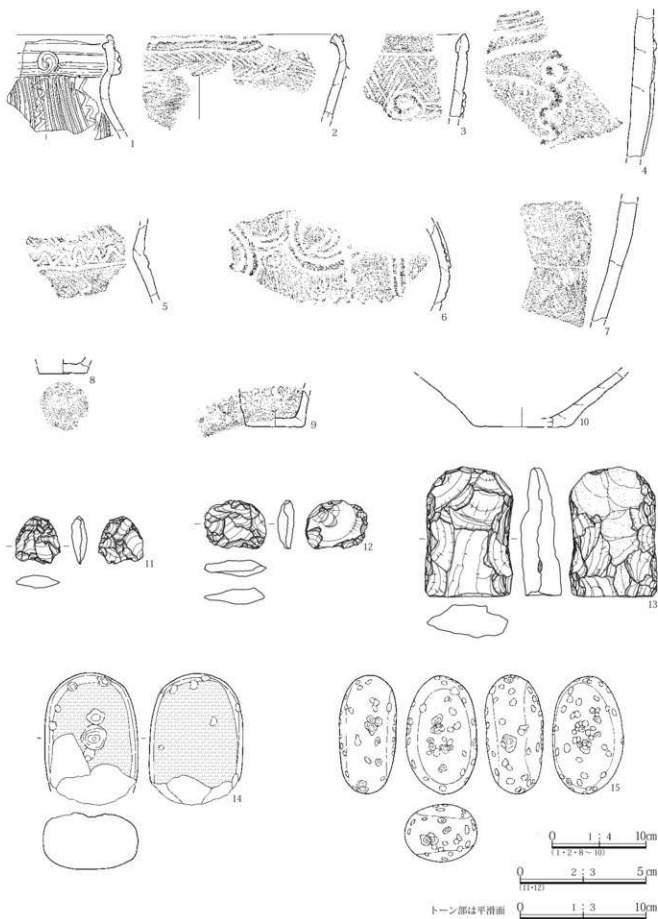
切跡上層

- 1 暗褐色土: 粘土粒、ローム粉を含む
- 2 暗褐色土: ローム小塊を少量含む

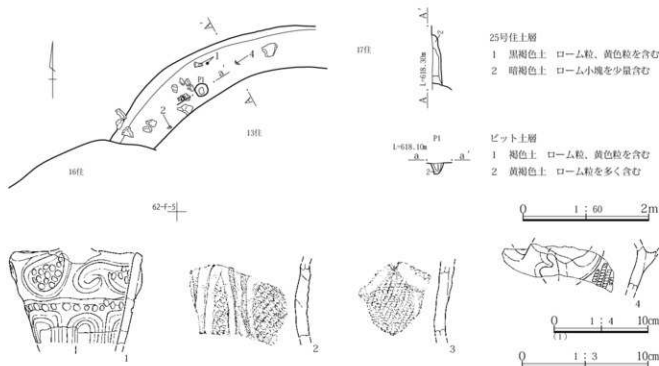
0 1:60 2m

0 1:30 1m

第275図 62区24号住居跡 (2)



第276図 62区24号住居跡出土遺物



第277図 62区25号住居跡及び出土遺物

も広がることから住居跡とした。しかしながら、段差のみの検出のため、住居跡としての確信性は乏しい。

北側壁だけの検出となったため、平面規模は不明である。深さは15.0cmを測り、浅い掘り込みの弱い壁である。

各住居跡との新旧関係は不明である。10号住居跡の下からの検出状況から、加曾利EⅢ式古段階より古く捉えるべきだろう。

床面は平坦面を築くとはいえ、検出面は幅狭で詳細は不明である。硬化面も見なかった。炉跡、壁周溝の検出も適わなかった。

柱穴として、ビット1基を調査したが、規模、配置とも不適当な例で、柱穴としては位置付けられない。

遺物は少量が出土し、「郷土式」の深鉢1が北壁際から出土している。その他の土器片は加曾利EⅢ式で、周辺住居跡の帰属時期と同じで出土土器からの新旧は確定できない。

所見：北側壁の段差のみの検出である。故に住居跡としての確信性に乏しく、竪穴状遺構としての位置付けが妥当であろう。時期は中期後葉であろう。

第4節 掘立柱建物跡

本節では発掘調査において、数基の柱穴の組成による建物跡4棟を掘立柱建物跡として報告する。検出された地点は遺構密度の高い箇所で、建物跡柱穴相互の組み合わせは、住居跡や土坑発掘後に把握することになった。そのため、建物跡柱穴の幾つかは、土坑名やピット名が別に付されており、土坑通番やピット通番に欠番が生じる事になった。また、発掘後の建物跡検出のため、重複土層による住居跡など他遺構との新旧関係把握は一部にとどまっている。本文では、詳細な時期を特定できなかったが、大別時期の可能性を探った。

61区1号掘立柱建物跡（第278～280図 PL.31・129）

位置：調査区東側の住居跡群内にある。61区S・T-6・7グリッドに位置し、全体的には南への緩斜面地形の中にあるが、周辺は住居跡が密集するため平坦地形が広がる。21号住、22号住、24号住、33～35号住など多くの住居跡と重複・近接する。

経過：前述の住居跡床面上で確認した。暗褐色土を確認面としたが、周辺は住居跡柱穴、土坑、ピットが群在しており、掘立柱建物の柱穴としての判断は難しかったが柱穴配置を優先し、1×2間の建物跡を確定した。

規模：主軸をほぼ北に向ける。北辺と南辺の距離差があり、若干歪な印象を受けるが、長軸約560cm、短軸約300cmの長方形を平面形とし6基の柱穴からなる。

重複：前に述べた各住居跡の床面で検出されているが、床面との新旧関係は不明である。柱穴相互の重複関係では、P2が22号住P2に切られる新旧関係を示す。P4が2号掘立柱建物跡P3を切る重複関係を示す。図示していないが、土層観察によるものである。また、P1は24号住敷石下あたり、24号住より古く位置付けられよう。

柱穴：柱穴規模はP1：約88×74×86cm、P2：約(90)×86×68cm、P3：約79×73×90cm、P4：約93×80×54cm、P5：約102×82×61cm、P6：約89×76×77cmを測り、いずれも掘り込みのしっかりした良好な柱穴である。柱穴の配置は、概ね長方形の平面形に沿うが、P4がやや南東にずれる位置に配され、P3との距離は330cm、P2はやや南にずれるため対応するP5との距離が約280cmとなる。また、P6は西に偏る傾向があり、P6とP1の距離は約260cmで、柱穴間距離は規則性がやや崩れていた。

遺物：主にP6から出土した土器片を図示した。すべて中期後葉の所産であるが破片資料であり、本建物跡帰属時期を具体化する資料ではない。

所見：主軸―長軸を南北に設けた建物跡である。本遺跡は南側への斜面地形に占地しており、南北に長い建物跡は、立地しづらい条件である。本遺跡以外の当地域で調査された多くの建物跡は、等高線に平行して立地する傾向が見られ、本建物跡のように長軸を南北に設ける例は珍しく、建物跡の性格も加えて検討を要する。

時期は、加曾利EⅢ式新段階の22号住や称名寺式段階の24号住より古い新旧関係から、加曾利EⅢ式中段階から新段階と判断したい。また、後述する61区2号掘立柱建物跡より新しい重複関係を示している。

61区2号掘立柱建物跡（第281～283図 PL.32・129）

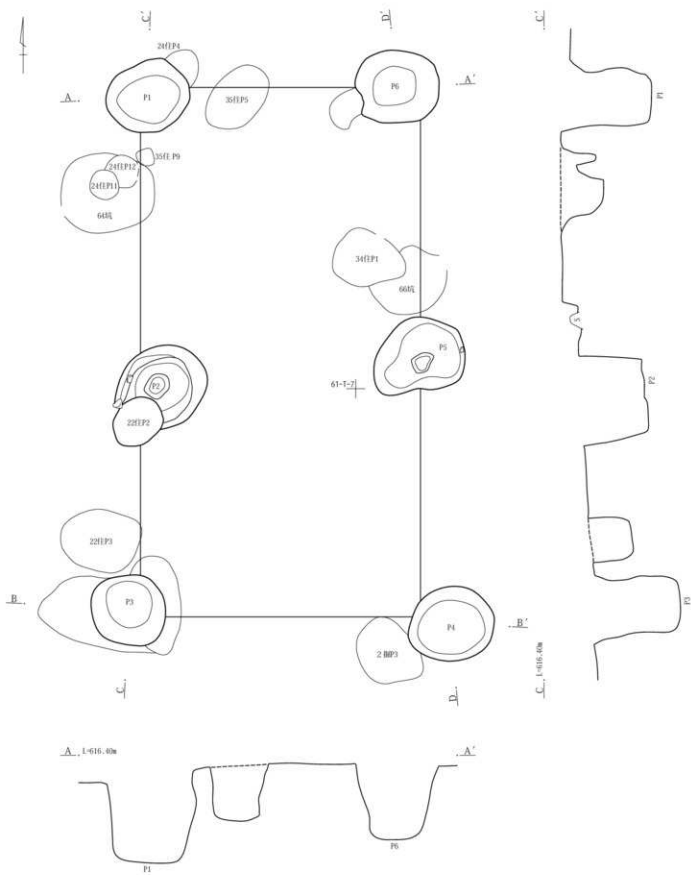
位置：調査区東側の住居跡群内南で検出された。61区S-U-6・7グリッドに位置する。住居跡が密集するため周辺は平坦地形が広がるが、本来は緩やかな南側への斜面上の立地といえよう。周辺の重複、近接する住居跡群では21号住、22号住、33号～36号住が重複する。また前に述べた1号掘立柱建物跡とも東側で重なる。

経過：重複する各住居跡床面が確認面となった。殆どがローマ漸移層上層の黒褐色土である。北側は漸移層下位の暗褐色土で、平面形の確認は容易だったが、南側の黒褐色土中での確認は手間取った。加えて、周辺住居跡に帰属する柱穴や群在する土坑群もあり、建物跡柱穴としての特定は難しかった。柱穴として規模、配置を優先して1間×2間の建物跡を把握した。

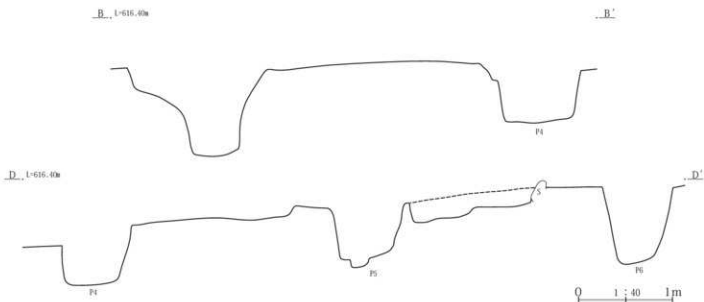
規模：長軸を西北西に向ける長方形の建物跡である。長軸約700cm、短軸約270cmを測り、6基の柱穴からなる。北辺と南辺の距離差から歪な印象を受ける。

重複：1号掘立柱建物跡でも述べたように、本建物跡P3が1号建物跡P4に切られる新旧である。また、P2は22号住跡北端下での検出であり、おそらく22号住より古い様相を示す。P3が21号P7と重複するが、良好な土層観察ではなく、新旧は不明である。

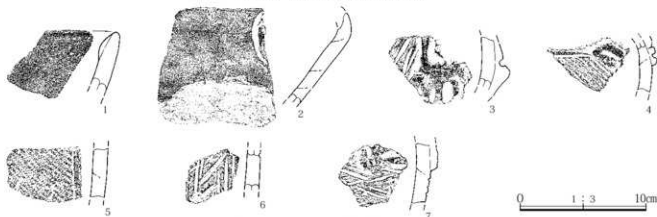
柱穴：6基の柱穴を抽出し、方形の平面形を基調にしているが、P3が南に、P4が東に、P6が西に僅かにずれる様相を示す。そのため、北辺と南辺の距離差が生じて不整形な平面形となる。柱穴規模はP1：約77×70×75cm、



第278図 61区1号掘立柱建物(1)



第279図 61区1号掘立柱建物(2)



第280図 61区1号掘立柱建物出土遺物

P2: 約83×62×68cm, P3: 約78×60×44cm, P4: 約84×64×65cm, P5: 約90×78×67cm, P6: 約75×54×65cmを測り、径80cm前後で、深さも40cm以上のしっかりした掘り込みで良好な柱穴といえよう。

遺物: 柱穴4と5より出土した土器片を中心に図示する。多くが中期後葉に比定されるが、周辺住居跡からの流入などの影響もあり、本建物跡の時期を確定するものではない。

所見: 平面形がやや歪な掘立柱建物跡であるが、抽出された柱穴は良好な規模であり、堅牢な印象を得る。また、1号掘立柱建物跡と違い東西に長軸を設けており、これは地形に沿った古地状況である。時期は、柱穴相互の重複により、1号掘立柱建物跡柱穴に切られる新旧関係を示すことから、加曾利EⅢ式古段階から中段階を想定するが、確定的ではない。中期後葉である。

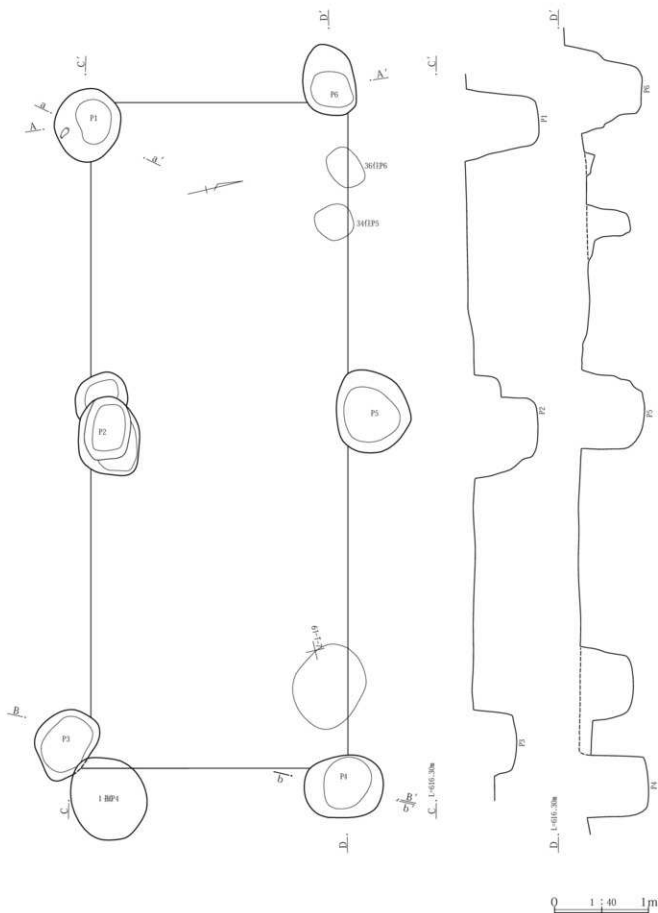
62区1号掘立柱建物跡

(第284～286図 PL.31・32・129・130)

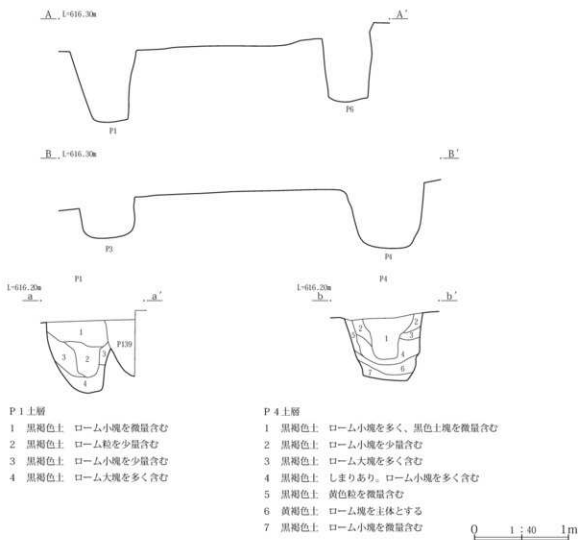
位置: 調査区中央の遺構密集地点北西側にある。61区Y-6、62区A～C-5～7グリッドに位置する。周辺地形としては、北側に急斜面地形が展開し、遺構密集地点周辺で緩やかな南斜面へと変化している。周辺の重複・近接する遺構としては、62区2号住と5号住が本建物跡全体と重複する。また周辺には土坑が群在しており、5号坑、18号坑、22号坑が本建物跡内に重なる。

経過: 建物跡全体を2号住と5号住床面上で検出した。両住居跡調査終了後、床面下の検出となり、北東側の大半が黄褐色ローム上層で、南西部はローム漸移層下層の暗褐色土で検出した。周辺は土坑やピットが群在し、建物跡の特定に苦慮したが、配置を重視して1間×2間の建物跡を把握した。

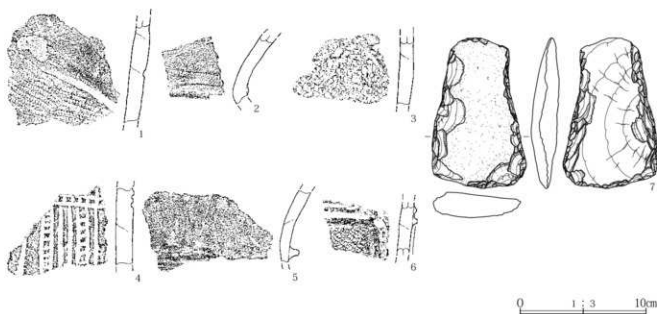
規模: 長軸を北東に向け、長軸約540cm、短軸約330cm



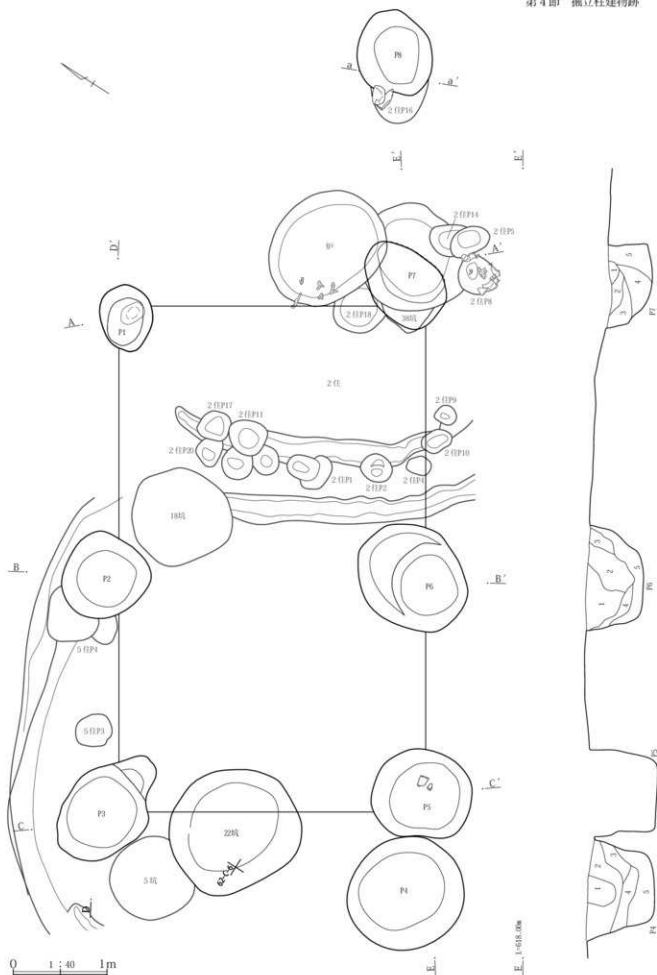
第281図 61区2号掘立柱建物(1)



第282図 61区2号掘立柱建物(2)



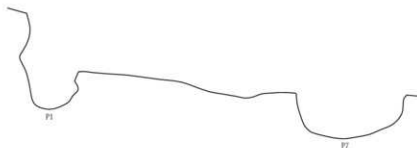
第283図 61区2号掘立柱建物出土遺物



第284図 62区1号掘立柱建物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

A, 1-618.20m



A'

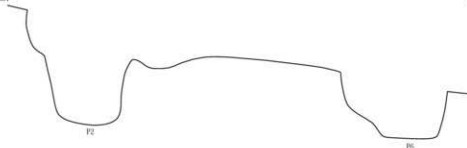
1-617.50m

P8

h'

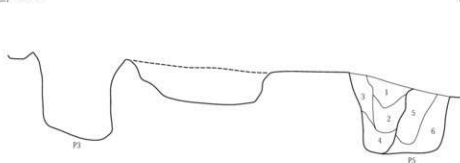


B, 1-618.20m



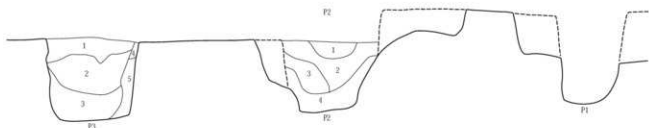
B'

C, 1-618.20m



C'

D, 1-618.20m



D'

P 3 上層

- 1 灰褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 灰褐色土 ローム大塊を微量含む
- 3 灰褐色土 ローム大塊を少量含む
- 4 褐色土 黄色粒を少量含む
- 5 褐色土 ローム大塊、黄色粒を多く含む

P 2 上層

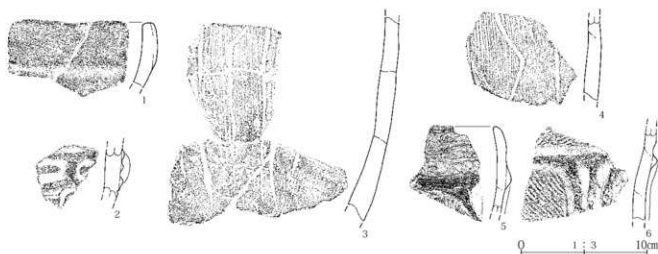
- 1 にぶい黄褐色土 黄色粒、炭化物を少量含む
- 2 にぶい黄褐色土 黄白粒を微量含む
- 3 にぶい黄褐色土 ローム塊を多く含む
- 4 黄褐色土 明るい。ローム塊を含む

P 4～8 上層

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む。P 6 はにぶい褐色土 2 黒褐色土 黄色粒、炭化物を少量含む 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。P 5 は暗褐色土、礫含む | <ol style="list-style-type: none"> 4 にぶい褐色土 ローム大塊を少量含む。P 4 は黒褐色土 5 黒褐色土 ローム小塊を少量含む。P 3 は灰褐色土。P 7 は黄褐色土 6 黄褐色土 ローム大塊を含む |
|--|---|

0 1 : 40 1m

第285図 62区1号掘立柱建物(2)



第286図 62区1号掘立柱建物出土遺物

を測り、主要部分は6基の柱穴からなるが、南辺西端にP4、東端にP8を加えて捉えられている。これは、南辺軸線上にP4、P8が並ぶためであり、何等かの附帯施設を想定したためである。建物主要部分は、P1～P3、P5～P7からなる長方形の平面形を呈する柱穴列で構成される。

重複：本建物跡P7が2号住居跡下での検出である。また、P2が5号住居P4と重複するが、新旧関係は不明である。
柱穴：8基のピットを建物跡柱穴として位置付けたが、前述のように主要部は6基の柱穴からなる。6基の配置は極めて良好で、歪みも大きくなく整然とした長方形を形成していた。規模も良好で、P1：約69×54×42cm、P2：約90×86×70cm、P3：約131×87×86cm、P5：約104×94×65cm、P6：約124×106×60cm、P7：98×72×48を測る。さらに調査では、P4：約125×117×65cm、P8：約94×80×68cmを追加するが、2基とも軸線上に位置するピットで、積極的に建物を構成する柱穴とは思われない。
遺物：柱穴から出土した土器片6点を図示した。殆どが中期後葉の所産ながら、時間幅もあり、本建物跡の時期を具体化する資料ではない。

所見：8基の柱穴で構成されるが、主要な建物部分は6基に止まり、1間×2間の東西に主軸を向ける建物跡である。出土土器に明瞭な例がなく、詳細な時期の特定は果たせないが、62区2号住居跡下でのP7の検出から、加曾利Ⅲ式古段階から中段階（中期後葉）とした。

62区2号掘立柱建物跡（第287～289図 PL.33・130）

位置：調査区中央の遺構密集地点南側にある。61区と62区に跨っており、61区X-5・6、Y-4～6・62区A-

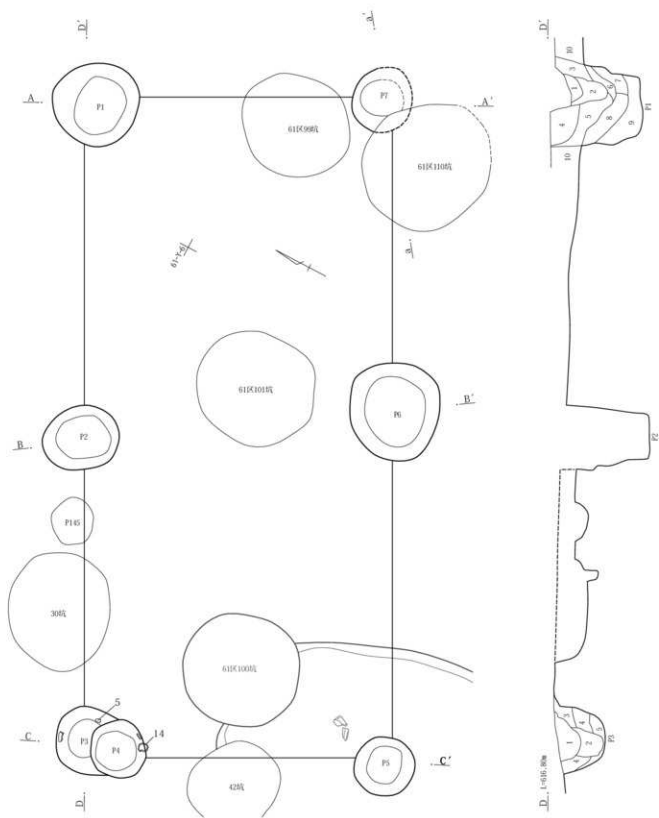
4・5グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあるが、重複住居跡の床面が広がるため、ほぼ平坦地形での調査となった。重複・近接する住居跡としては、4号住、8号住、22号住、61区46号住、47号住などがある。また土坑も群在しており、61区99坑～101坑、110坑、62区30坑、42坑などが重なる。

経過：北半は、重複する住居跡調査後の床面下での検出である。黄褐色ローム層上層が相当する。南半はローム漸移層下層にあたる暗褐色土で確認された。他の掘立柱建物跡と同様に群在する土坑やピットから建物跡柱穴の選択となり、判断が難しいピットも多かった。

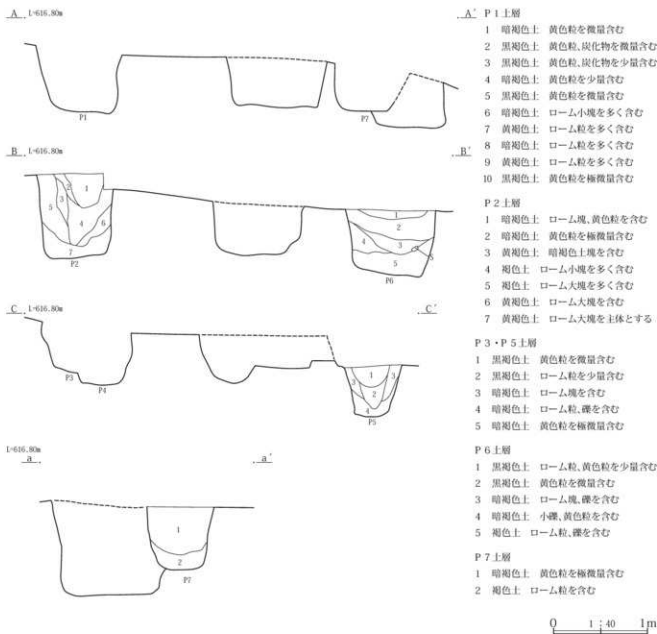
規模：長軸を北東に向け、長軸約700cm、短軸約330cmを測る長方形を平面形とする。柱穴7基、6箇所からなる配置である。全体的な大きな歪みも見られず、柱穴間距離も規則的で、整った配置といえよう。

重複：重複する住居跡や土坑が多いが、明瞭な新旧関係を示す例は皆無である。僅かに、61区110号坑との新旧が把握されるのみで、本建物跡P7が110坑を切る重複関係である。しかし、110坑出土土器は細片であり混在しているため、時期判別には参考にならず、有効な重複遺構を見出せなかった。

柱穴：7基の柱穴を見出したが、P3とP4は重複しており、6箇所の柱穴配置である。規模は、P1：約90×90×92cm、P2：約83×68×88cm、P3：約(38)×70×54cm、P4：約61×58×54cm、P5：約64×62×55cm、P6：約104×93×70cm、P7：約一×67×67cmを測り、径70cm前後で、深さも50cm以上のしっかりした掘り込みで良好な規模を示していた。



第287図 62区2号掘立柱建物(1)



第288図 62区2号掘立柱建物(2)

遺物：柱穴から出土した遺物19点を図示した。出土土器の大半が破片状態で、时期的なまとまりを見ないため、本建物跡の帰属時期を確定する資料にはなり得ない。ただし、P4から出土した加曾利EⅢ式の深鉢底部は安定した様相で、時期を具体化する資料といえよう。また、P3からは黒曜石原石がまとめて出土している。いわゆるデボとしての性格が想起されるが、建物跡柱穴にそのような機能が附帯した例は聞かない。伴出する土器片は加曾利EⅡ式やEⅢ式、「郷土式」である。おそらく中期後葉の所産と考えられよう。

所見：柱穴の配置や規模も良好で、比較的整った掘立柱建物跡である。主軸方位も北東を向いており、61区2

号掘立柱建物跡や62区1号掘立柱建物跡と同様に、地形に沿った占地を示していた。

重複する遺構から、帰属時期を判断できなかったが、柱穴から出土した土器を参考にすると、加曾利EⅡ式からEⅢ式の間に時期を求めておきたい。



第289図 62区2号掘立柱建物出土遺物

第5節 土坑

61区と61区の町道部分で調査された土坑を主に述べる。第1分冊では、51区と52区の国道部分で検出された土坑を掲載したが、その際は遺物を主体的に出土する土坑が多く、そのため第1分冊では土坑1を遺物を主体的に出土する土坑、土坑2をそれ以外の土坑として報告した経緯がある。

本書も同様な視点で土坑を掲載すべきであるが、町道部分になると、土坑出土遺物が少なく、主体的な出土を見せる例も極めて少ない。土坑の遺物量で分ける必要もないため、一括した掲載となった。

61区1号土坑(第290図 PL.26)

調査区北東部の61区P-11グリッドに位置する。1号住の北側で2号土坑と重複するが、2号土坑に切られる新旧関係である。周辺は標高が高く、黒褐色土の堆積も浅く、確認面は黄褐色ローム層で行われた。

40×50cm程の不整楕円状を平面形とする小型土坑だが、深さも25cmと良好である。

遺物の出土は無く、詳細な時期は不明であるが、確認面及び埋土の様相から縄文時代の所産と判断した。

61区6号土坑(第290・298図 PL.26・130)

調査区北東部の61区P-10グリッドに位置する。1号住南東で、住居壁周溝に重なり調査されている。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、標高が高い箇所である。そのため、黄褐色ローム面が調査着手時より露出していた箇所でもある。確認面は1号住床面と同様に硬質ローム上面である。尚、1号住との新旧は不明である。

平面形は北北東を向く不整楕円状を呈し、規模は約100×60×70cmを測る。深くしっかりした立ち上がりで箱形の断面形を示す。

出土遺物は埋土中位より、加曽利EⅢ式の深鉢底部が出土している。時期は出土土器から中期後葉としたいが、ほぼ同時期の1号住との新旧関係は不明である。

61区7号土坑(第290図 PL.26)

6号土坑と同様に61区P-10グリッドに位置する。1号住と3号住の重複部接点、10号住と重複して調査された。周辺は南への緩傾斜地形を呈し、黄褐色ロームを確認面

とした箇所である。1号住P4に切られる重複関係を示す。

平面形規模は約70×50cmで不整形を呈す。深さは50cmを測り、深くしっかりした掘り込みを示し箱形の断面形を示す。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、1号住ピットに切られる埋土の様相等から縄文時代の所産とした。

61区10号土坑(第290図 PL.26)

調査区最東端で調査された。61区P-8・9グリッドに位置する。南側への緩斜面地形に占地し、周辺は西に3A号住が近接するが、単独で調査されている。重複遺構は無い。黄褐色ローム下のAs-YPk層が露出している箇所を確認面もAs-YPk層上面で行われた。

縦長で北を向く長方形を平面形とする。規模は約110×70×20cmで、浅くやや不安定な掘り込みを呈す。

出土遺物は無く、埋土の記録も判然としない。あるいは中世、近世の所産の可能性もある。

61区17号土坑(第290図 PL.26)

調査区中央やや南東側寄りの61区U-6グリッドに位置する。南側への緩斜面地形に占地し、調査区中央の住居跡密集地点の中にある。周辺は黒色土～黒褐色土の堆積が厚く、本土坑も黒褐色粘質土を確認面とした。

径約35cmの小型円形土坑である。深さは約20cmを測りやや浅く、立ち上がりも黒褐色土中で弱い印象を得る。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明であるが、埋土の特徴から縄文時代と捉えた。

61区18号土坑(第290図 PL.26)

調査区中央やや南東側寄りの61区U-5グリッドに位置する。調査区中央から南側への住居跡密集地点の中にある。周辺は黒色土～黒褐色土の堆積が厚く、本土坑の確認は黒褐色粘質土で行った。

不整楕円状を呈する平面形で、規模は約130×70×50cmを測る。底面はローム漸移層の暗褐色土まで達し、深くしっかりした立ち上がりを示す。

出土遺物は見られず詳細な時期は不明だが、埋土の特徴から、縄文時代の所産と考えた。

61区19号土坑(第290図 PL.26)

第3章 発見された遺構と遺物

調査区中央やや南東側寄りの61区V-6グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形で、住居跡等遺構が密集している地点である。黒色土～黒褐色土の堆積は厚く、遺構確認も黒褐色土で行っている。

底面に小ピットが見られるが、おそらく重複と思われる。平面規模は約70×40cmを測り、長軸が西を向く小型楕円状を呈す。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。埋土の特徴から、縄文時代の所産とした。

61区20号土坑 (第290図 PL.26)

調査区北東部の61区R-10グリッドに位置する。1号住と2号住の重複部南西にあり、南側はやや強い斜面地形が迫る。確認面はローム漸移層である暗褐色土で行い、単独の検出となった。

平面形は不整形形で、規模は約75×60×15cmで浅く皿状の断面形を示す。底面も不連続で立ち上がりも弱い印象を得る。

出土遺物は見られなかったため、時期は不明である。埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

61区21号土坑 (第290図 PL.26)

調査区北東部の1号住床面上で調査された。61区P-Q-10に位置する。1号住南に重なる3号住と接しており、10号住P3や39号土坑と重複して検出された。いずれの重複関係も新旧の把握にまでは至っていない。確認面は1号住床面に相当し、硬質ローム上面である。

平面形は縦長の長方形で、東西に長軸を設ける。規模は約160×60×16cmを測る。やや浅いが壁は明瞭な黄褐色土である。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。形状から、中世、近世の所産の可能性もあるが、1号住床面での重複状況から、縄文時代の所産とした。

61区24号土坑 (第290図 PL.26)

調査区東端の61区Q-7・8グリッドに位置する。南側と西側への斜面地形が近接し、重複遺構も無く単独の検出となった。近接遺構としては、北に3A号住や37号坑を見るが関係性は薄い。確認面はローム漸移層の暗褐色土である。

南北に長軸を持つ縦長方形を平面形とし、規模は約150×50×25cmを測る。壁も直立し箱形の断面形を呈す。

出土遺物は無く、時期は不明である。埋土も軟質土のため、積極的に縄文時代の所産と位置付けられない。

61区37号土坑 (第291・298図 PL.26・130)

調査区北東の3A号住南端にあるP17と重なる。61区Q-8グリッドに位置し、南西への緩傾斜面に占地する。北側に38号坑が近接するが、南側の遺構は希薄で24号坑を見るのみである。確認面はローム漸移層の暗褐色土である。

平面形は長軸を北北東に向けた不整形楕円状を呈し、規模は約110×70×40cmを測る。深さはあるが、底面は不連続で壁の立ち上がりも弱く、皿状の断面を示す。

遺物は深鉢体部破片2点を図示した。いずれも埋土中の出土で、土坑の時期を具体化する資料ではない。加曾利EⅡ式とEⅢ式に比定される時間幅もある。また、3号住ピットに切られる新旧関係からは、加曾利EⅢ式新段階以前の所産として位置付けられる。このことから、土坑の時期は中期後葉に設けておきたい。

61区38号土坑 (第291・298図 PL.26・130)

調査区北東の3号住床面南側で検出された。61区Q-8・9に位置する。37号坑北側に近接する。ほぼ平坦地形に占地するが、西側は斜面地形が広がる。土層観察では3A号住より古い新旧関係を得た。確認は3A号住床面で行ったため、ローム漸移層下位の褐色土である。

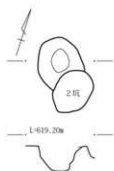
規模は約130×110×20cmを測る不整形の平面形で、不連続な凹凸のある断面形を示す。

遺物は埋土出土の深鉢破片2点(298図)と石礫1点(PL.130)を図示した。土器は「郷土式」であろう。土坑の時期としては、出土土器の様相と3A号住床面に切られる重複関係から、中期後葉としておきたい。

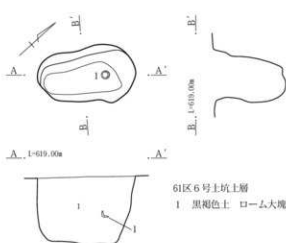
61区39号土坑 (第291・298図 PL.26・130)

調査区北東部の1号住床面上で調査された。1号住と3B号住重複部接点である61区P-Q-10に位置する。周辺は南側への緩斜面地形で、ほぼ平坦面に占地する。21号坑や1号住P5、3号住北壁との重複が認められるが、有効な土層観察が果たせず、新旧は不明である。

61区1号土坑



61区6号土坑



61区6号土坑土層

1 黒褐色土 ローム大塊を含む。軟質

61区7号土坑



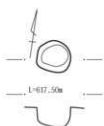
61区10号土坑



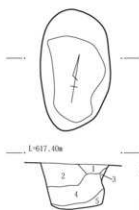
61区10号土坑土層

1 黒褐色土 黄色粒を多く含む。軟質

61区17号土坑



61区18号土坑



61区18号土坑土層

- 1 黒色土 均質。しまり弱い
- 2 黒褐色土 白色粒を微量含む
- 3 褐色土 粘質土
- 4 暗褐色土 褐色粘質土塊を少量含む
- 5 褐色土 粘質土。黄色粒を微量含む

61区19号土坑



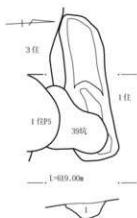
61区20号土坑



61区20号土坑土層

1 黒褐色土 ローム塊を含む。軟質

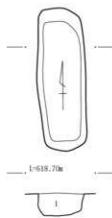
61区21号土坑



61区21号土坑土層

1 黒褐色土 ローム大塊を含む。軟質

61区24号土坑



61区24号土坑土層

1 黒褐色土 ローム小塊を含む。軟質



第3章 発見された遺構と遺物

平面形は不整形であろう。重複のため長軸値は不明だが短軸値は約55cm、深さ約45cmを測る。袋状の断面形を呈す。

出土遺物として、埋土中より打製石斧1点(PL.130)を見るが、土坑の性格に起因する遺物ではないと思われる。土器の出土も見られず、重複遺構との新旧も不明のため、詳細な時期は不明である。おそらく、縄文時代の所産と考えた。

61区43号土坑(第291・298図 PL.26・130)

61区T-10・11グリッドに位置する。調査区北東部にあたり、9号住北に近接し、4号竪穴遺構に重なる位置である。後述する44号坑と重複して検出された。南西への緩傾斜面が広がるが、ほぼ平坦地形に占地する。高、44号坑との新旧は重複部分が狭く確定的ではないが、おそらく本土坑が新しいと観察された。4号竪穴遺構底面である黄褐色ロームを確認面とする。

平面形は不整形円状を呈し、東西に長軸を設ける。規模は100×60×45cmを測り、深いが壁の立ち上がりなど不安定な要素が多い。

出土遺物としては埋土中より「郷土式」深鉢体部破片を見る。土坑の性格、時期を反映する例ではないが、おそらく埋土の様相と出土土器の様相から、中期後葉の所産と考えられよう。

61区44号土坑(第291図 PL.26)

43号坑と重複して、調査区北東部で調査された。61区T-11グリッドに位置する。4号竪穴遺構底面の黄褐色ロームを確認面とする。

東北東に長軸を向けた小型不整形円状を平面形とし、しっかりとした掘り込みで箱形の断面形を呈す。規模は約70×40×40cmを測る。

出土遺物は無く、土坑の詳細な時期は不明だが、43号坑に切られる新旧関係から、縄文時代の所産とする

61区45号土坑(第291・298図 PL.27・131)

調査区北東部の26号住東壁に接して調査された。61区U-9グリッドに位置する。周辺は緩やかな南斜面が広がり、ほぼ平坦地形といえよう。重複する26号住や57号土坑を切る新旧関係と思われるが、確定的ではない。

確認面はローム漸移層の暗褐色土で、径約130cm前後の不整形円形を平面形とする。深さは30cmを測り、皿状の断面形ながら、壁の立ち上がりははっきりしていた。

出土遺物として8点の深鉢破片を図示した。時間幅があり「焼町類型」(2)や加曾利EⅢ式(3・8)が見られるが、その他は称名寺式に比定されよう。

土坑の性格などは不明だが、帰属時期としては、後期初頭として位置付けられよう。

61区51号土坑(第291図 PL.27)

調査区北東部の61区S-9グリッドに位置する。17号住床面で検出されている。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあり、ほぼ平坦地形にある。17号住床面及びP18・P19と重複するが、新旧関係は不明である。確認面は17号住床面である黄褐色ロームで平面形は明瞭に検出し得た。

径約100cmの不整形円形を平面形とし、深さ約15cmを測り、浅く皿状の断面形を示す。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが埋土の特徴から、縄文時代の所産と考えた。

61区52号土坑(第291図 PL.27)

61区S-8グリッドに位置する。調査区北東部の17号住床面南に重なる。周辺は南側への緩傾斜面が広がり、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。17号住P16・P26と重複しているが、土層の観察が果たせず、新旧関係は不明である。近接する遺構としては西側に53坑～55坑が群在する。土坑群の中にあるといえよう。

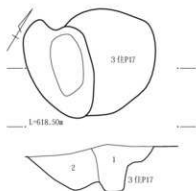
平面形は17号住床面南側の暗褐色土で確認された。約105×90を測る不整形円形で、深さは20cmと浅く皿状の断面形を示す。

重複関係も不明で、出土遺物が無いため、詳細な時期を特定できない。埋土の様相から縄文時代の所産とする。

61区53号土坑(第291図)

調査区北東部の17号住床面上で確認した。61区T-8・9グリッドに位置する。南側への緩傾斜面地形が広がり、各遺構は平坦面に占地するといえよう。重複遺構は17号住床面の他、55号坑などの土坑が重なる。明瞭な新旧関係は把握できなかったが、本土坑が最も新しい様相を示

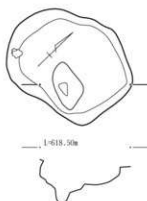
61区37号土坑



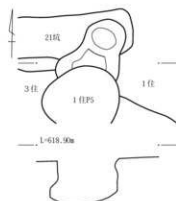
61区37号土坑上層

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む。3住P17埋土
- 2 暗褐色土 ローム小塊を少量含む。37坑埋土

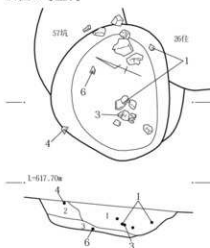
61区38号土坑



61区39号土坑



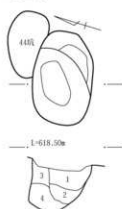
61区45号土坑



61区45号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黄褐色土 ローム小塊を含む
- 3 黄褐色土 ローム大塊を主体とする

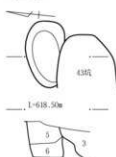
61区43号土坑



61区43・44号土坑上層

- 1 褐色土 ローム小塊を少量含む
- 2 黄褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 褐色土 ローム大塊を微量含む
- 4 黄褐色土 ローム大塊を多く含む
- 5 暗褐色土 ローム小塊を微量含む
- 6 黄褐色土 ローム大塊を多く含む

61区44号土坑



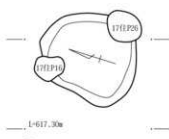
61区51号土坑



61区51号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む

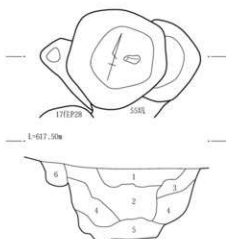
61区52号土坑



61区52号土坑上層

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を微量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を少量含む

61区53号土坑



61区53号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム塊を多く含む
- 5 暗褐色土 ローム塊を多く含む
- 6 黄褐色土 ローム塊主体



第29回 土坑 61区(2)

第3章 発見された遺構と遺物

していた。規模は、径105cm、深さ75cmを測り、不整形円形を呈す。

遺物の出土も見られず、時期の特定はできないが、縄文時代の所産と考えられる。

61区54号土坑 (第292図 PL.27)

調査区北東部の17号住床面上で確認した。61区S-T-8グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面に占地する。17号住床面との新旧は不明だが、おそらく本土坑が切る重複関係と思われる。

平面形の確認は17号住床面である暗褐色土で行った。径60～70cmの小型円形の平面形で、深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは直立気味で、箱形の断面形を示す。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、17号住との重複状況や埋土の様相から、縄文時代の所産と考えた。

61区55号土坑 (第292図)

調査区北東部の61区T-8グリッドに位置する。53号坑や17号住P28と大きく重複した状態で検出された。そのため平面形も不明で、僅かに40cmを超える深さを測り得たのみである。重複遺構との新旧関係も不明であり、遺物の出土も見られないため、詳細な時期は確定できない。埋土の様相から縄文時代の所産とした。

61区56号土坑 (第292図 PL.27)

調査区北東部の61区T-U-8・9グリッドに位置する。26号住上で調査された大型土坑である。周辺は南側への緩やかな斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形の中45号坑や57号坑が西に、53号～55号坑が東に群生する。

26号住床面である黄褐色ロームで平面形を確認し、約90×70cmの大型楕円状を呈す土坑を検出した。深さは40cmあるが、底面は不連続で壁の立ち上がりも弱い印象を得る。

出土遺物は埋土中から自然礫と共に、土器細片が出土したが図示に耐えられなかった。中期後葉～末葉の時間幅を示していた。

61区57号土坑 (第292図)

調査区北東部の26号住東壁に接して、45号坑と重複した状態で調査された。61区U-9グリッドに位置する。周

辺は南側への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面での検出である。北側は斜面地形が強く、遺構密度も薄い。

26号住など重複遺構との明瞭な新旧関係は把握できなかった。おそらく、26号住、45号坑に切られる新旧関係と思われる。

平面形も重複遺構のため全容は判然としない。長軸長200cm前後の楕円状の平面形で深さは約30cmを測る。出土遺物は無く、詳細な時期は特定できないが、後期初頭に比定される26号住や45号坑に切られる新旧関係から、縄文時代の所産である。

61区58号土坑 (第292・298図 PL.25・131)

調査区中央の北壁際で調査された。61区W-8グリッドに位置する。29号住北に近接し、東には自然流路が南北に走る。単独の検出である。

黒褐色土での遺構確認中、深鉢のまとまった出土が見られ、遺構の存在を想定して調査を進めた。その結果、住居跡や竪穴遺構としての位置づけが果たせず、土器手中下位で検出された径約30cm、深さ約25cmの小型円形土坑を58号土坑として位置付け、土器集中としての4個体を一括出土土器として扱った。

小型円形土坑が、果たして土器集中に伴う遺構なのか、検討を要する。しかしながら、一括出土した4個体は同時期の所産と把握され、良好な資料となる。「郷土式」古段階あるいは「唐草文系土器」に相当する土器群であろうか。時期は中期後葉と捉えられよう。

61区59号土坑 (第292図)

調査区中央東寄りの61区V-W-7・8グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面での検出となった。30号住南側と大きく重複し、本土坑が30号住を切る新旧関係と把握された。

黒褐色土での平面確認である。長軸を東西に持ち、平面規模は約200×170cmの不整形方形を呈し、深さは約35cmを測る。皿状の断面形を示すが、壁の立ち上がりは明瞭だった。

数点の土器片出土を見るが、無文で小破片のため図示しなかった。中期後葉～後期初頭と思われるが、判然としない資料である。詳細な時期は不明だが、後期初頭に位置付けられる30号住を切る。ここでは、埋土の特徴が

ら縄文時代の所産とした。

61区60号土坑（第292図 PL.27）

調査区中央の遺構密集地点にある。61区X-6に位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあり、23号住や43号住、102号～105号坑が群在する。

平面形はローム漸移層である暗褐色土で確認した。長軸を北に向けた不整楕円状を呈し、平面規模は120×75cmを測る。深さは約30cmでしっかりした立ち上がりを示す。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、埋土の様相から縄文時代の所産と考える。

61区61号土坑（第293図 PL.27）

調査区東側の住居群内にある24号住西壁に重なり調査された。61区U-7グリッドに位置する。周辺は34号住、36号住の他、64坑、70坑、73坑、74坑、さらに61区2号掘立柱建物跡が南側に近接するように、住居跡や土坑が密集して検出された箇所である。重複する24号住との新旧は土層観察により24住P 9が本土坑を切る様相を示していた。

確認面は暗褐色土で、径90cm前後の不整円形を平面形とする。深さは30cm程で比較的しっかりした立ち上がりを呈す。

出土遺物は無く、時期は特定できないが、24号住に切られる重複関係から、縄文時代の所産といえよう。

61区62号土坑（第293・299図 PL.27・131）

調査区東側の南壁近くにある21号住床面で調査された。61区S-6グリッドに位置し、8号住が東に、33号住が北に、22号住が西に37号住が南に近接するように住居跡密集地点の中にある。南西への緩やかな斜面地形に占地するが、重複する住居跡の影響でほぼ平坦地形が広がる。21号住床面上において、P 1とP 8が重複するが、土層の観察が及ばず新旧は確定できない。おそらくP 1・P 8を切る重複関係と思われる。

確認面は21号住床面である暗褐色土で、平面形は径110cm前後の整った円形を呈す。深さは約75cmを測り、底面が広く平坦面を築き、壁の立ち上がりもしっかりした袋状の断面形を示していた。

遺物は埋土中より石皿片の他、加曾利EⅡ式や「郷土式」

に比定される土器片が出土した。直接的な時期を示唆する例では無いが、ほぼ同時期の所産と見たい。土坑の性格も、断面形状から貯蔵穴として位置付けることも可能であろう。

61区63号土坑（第293図 PL.27）

調査区東側の住居跡群北にある。61区U-8グリッドに位置する。31号住床面での検出で、24号住北西壁に接する。24住P10や31住P1が重複するが、土層による的確な新旧関係は把握できなかった。周辺は南への緩斜面地形が広がる。

31号住床面である黄褐色ロームを確認面とし、北東に長軸を向けた90×75cm程の不整楕円状を平面形とする。深さは約30cmを測る。

出土遺物は見られなかったが、24住や31号住との重複から縄文時代の所産と考えた。

61区64号土坑（第293・299図 PL.27・131）

調査区東側の住居跡密集地点の中で調査された。61区T-7グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がる。24号住連結部東に重複し、24号住調査後に検出された。24号住P11・P12が重複するが、土層の観察では、本土坑が古く位置付けられた。

24住床下である黄褐色ローム面を確認面とし、約100×85cmの不整円形を平面形とする。深さは約25cmを測り、比較的しっかりした立ち上がりを示していた。

出土遺物は埋土中より、深鉢体部破片2点と石蹴1点が出土している。土器片は加曾利EⅡ式と「郷土式」だが、土坑の時期や性格を具体化する資料ではないが、土坑帰属時期は中期後葉と考えておきたい。

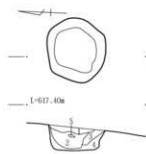
61区65号土坑（第293・299図 PL.27・131）

調査区東側の住居跡密集地点にある35号住北壁に重なり調査された。61区S-8グリッドに位置する。周辺は南東への緩やかな斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形といえよう。35号住との新旧は、不明である。

ローム漸移層である暗褐色土で平面形を確認し、径90cm、深さ60cm程の円形土坑を検出した。底面は凹凸を見るが、黄褐色ロームまで達しており、壁もしっかりした立ち上がりを呈していた。

第3章 発見された遺構と遺物

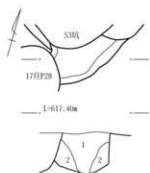
61区54号土坑



61区54号土坑土層

- 1 暗褐色土 As-YPK 5%程含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊20%程含む
- 3 暗褐色土 黄色粒 5%程含む
- 4 暗褐色土 ローム小塊10%程含む

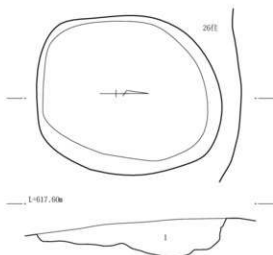
61区55号土坑



61区55号土坑土層

- 1 黄褐色土 褐色土塊を少量含む
- 2 黄褐色土 ローム塊主体

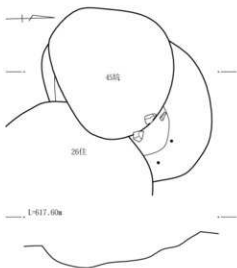
61区56号土坑



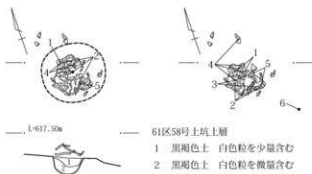
61区56号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム小塊、黄色粒を多く含む

61区57号土坑



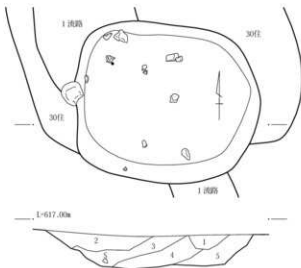
61区58号土坑



61区58号土坑土層

- 1 黒褐色土 白色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 白色粒を微量含む

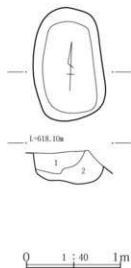
61区59号土坑



61区59号土坑土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 に近い黄褐色土 黄色粒、小礫を少量含む
- 4 黄褐色土 ローム小塊、黄色粒を主体とする
- 5 黄褐色土 黒褐色土塊を少量含む

61区60号土坑



61区60号土坑土層

- 1 黒褐色土 暗褐色土を含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、礫を微量含む

第292図 土坑 61区(3)

0 1 : 40 1m

出土遺物は埋土中より出土した深鉢破片2点を図示した。いずれも加曾利EⅡ式併行である。土坑の時期も中期後葉と捉えておきたい。

61区66号土坑 (第293図 PL.27)

61KS-7グリッドに位置する。調査区東側の住居跡密集地点にある35号住が跡南と34号住P1に重複して検出された。周辺は南東への緩斜面地形に多くの遺構が群在し、本土坑の南に33号住、や69号土坑や2号掘立柱建物跡も近接する。

重複する35号住が跡との新旧は本土坑が跡南辺を壊すことから、本土坑の方が新しい。34号住P1に関しては土層の観察が果たせず、不明としたい。

黄褐色ロームを確認面とし、平面形は径80cm前後の円形を呈す。深さは約20cmを測る。

出土遺物が無いため詳細な時期は確定できないが、34号住や35号住との重複様相から、縄文時代の所産とした。

61区68号土坑 (第293図 PL.27)

調査区中央の北壁際で調査された。前述した58号坑の北東に近接する。61区V-W-9グリッドに位置する。

ローム漸移層上層の黒褐色土で平面形を確認し、径45cm前後の小型円形土坑を得た。深さは15cm程度で浅く皿状の断面形を示す。

出土遺物は無く、時期を確定できないが、埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

61区69号土坑 (第293・299図 PL.27・131)

調査区東側の住居跡密集地点にある34号住と35号住に重なって調査された。61区I-7グリッドに位置する。周辺は遺構密集地点で、ほぼ平坦地形での検出となった。

黄褐色ロームでの確認で、径約77×68cmの不整形円形を平面形とする。深さは12cmで浅く、皿状の断面形を示す。

出土遺物として、埋土中より出土した深鉢体部破片1点を図示した。細片であり土坑の詳細な時期や性格を具体化する資料ではない。「郷土式」であろう。

土坑の時期は、34号住、35号住との重複と出土土器を考慮して中期の所産として判断したい。

61区70号土坑 (第293・299図 PL.27・131)

調査区東側の24号住と36号住に重複して調査された。61区U-7グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面上の立地だが、多くの遺構が重複するため、ほぼ平坦地形が広がる。両住居跡との重複関係は土層による観察を経ていないが、両住居跡調査後の検出であり、本土坑を古く捉えておきたい。

両住居床面下の黄褐色ロームを確認面とし不整形円状の平面形で、深く箱形の断面形を示している。規模は、約110×74×50cmを測る。

出土遺物は深鉢体部破片1点を図示した。中期中葉に比定されるが、土坑の詳細な時期や性格を具体化する資料ではない。ただし、両住居跡床下の検出から、中期に時期を求めておきたい。

61区73号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

61区U-7グリッドに位置する。調査区東側の住居跡集中箇所であり、36号住床面で検出された。周辺は南斜面が緩やかに広がり、ほぼ平坦面に占地するといえよう。

36号住床面下で調査されており、そのため36号住より古いと考えられる。

確認面はローム漸移層の暗褐色土で、東西に長軸を設けた楕円状の平面形を呈す。規模は104×80×19cmでやや浅く、皿状の断面形を示す。

遺物は深鉢破片2点と石鏝1点を挙げた。土器片は中期と後期初頭に比定され、土坑の時期や性格を現す資料ではない。土坑の時期としては、36号住床面下の検出から、中期の所産と考えておきたい。

61区74号土坑 (第294・299図 PL.25・132)

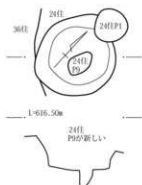
調査区東側の36号住床面下で調査された。61区U-7グリッドに位置し、周辺は24号住や34号住の他、61坑、70坑、73坑など土坑も群在する地点であり、そのため平坦地形が広がる。36号住跡下での調査であり、36号住より古い土坑として捉えている。

確認面はローム漸移層の暗褐色土で76×55cmを測る不整形円状の平面形を呈す。長軸を東西に設け、深さは80cmと深くしっかりした掘り込みである。

上層から半完形の深鉢体部上半が出土している。出土状況から、埋甕や埋設土器としての性格を充てず、土坑として捉えた。大木9式新段階の深鉢であろう。

第3章 発見された遺構と遺物

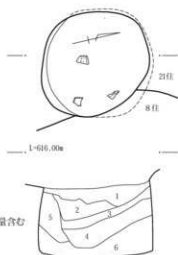
61区61号土坑



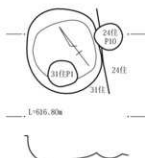
61区62号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒、炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を多く含む
- 3 黒色土 黄色粒を極微量含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 6 黒褐色土 黄色粒を微量含む

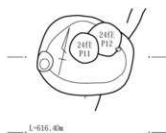
61区62号土坑



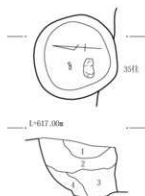
61区63号土坑



61区64号土坑



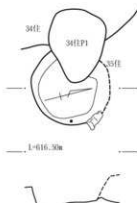
61区65号土坑



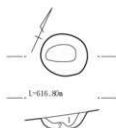
61区65号土坑上層

- 1 褐色土 黄色粒、ローム小塊を含む
- 2 暗褐色土 ローム塊少量を含む
- 3 暗褐色土 暗い、ローム塊を多く含む
- 4 に深い黄褐色土 ローム粒を多く含む

61区66号土坑



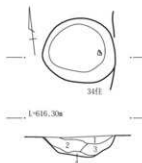
61区68号土坑



61区68号土坑上層

- 1 暗褐色土 黒褐色土塊、ローム粒を含む
- 2 に深い褐色土 ローム粒を多く含む

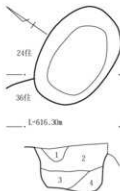
61区69号土坑



61区69号土坑上層

- 1 暗褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を微量
- 4 黒褐色土 褐色土塊を少量含む

61区70号土坑



61区70号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 黄褐色土 黄色粒を主体とする
- 4 黄褐色土 黒褐色土塊を含む



第293図 土坑 61区(4)

土坑の性格は判然としませんが、深く、柱穴状の規模を呈す。南には2号掘立柱建物跡もあり、何等かの関係性を想起したい。時期は出土土器から中期後葉と判断した。

61区75号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

調査区東側の住居跡群にある大型土坑である。61区U-8グリッドに位置し、24号住、31号住北側で重複し、土坑南半を逸する。兩住居跡との新旧は不明である。

暗褐色土で平面形を確認した。径250cm前後の不整円形を呈すると思われる。深さは50cmを超えるが、底面及び壁はAs-Ypk層中に達しており、不連続な印象を得る。また底面は中央部分が盛り上がる傾向があり、人為的な掘削とは思われなかった。

遺物は土器片5点を図示した。いずれも中期後葉に比定されるが土坑の性格を現す資料ではない。

大型土坑とはいえ、坑底面の不連続性など有機的な施設とは思われない。あるいは倒木痕の可能性もある。

61区76号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

調査区中央北壁際で調査された。61区Y-7・8に位置し、周辺は南東への強い傾斜面が鋭く。南から南西に77号～79号坑が近接するが住居跡群とはやや距離を置く。P137と重複するが新旧は不明である。

暗褐色土を確認面とした。長軸長80cm以上の不整楕円形の平面形を呈し、深さは36cmを測るが、底面は平坦ではなく、斜面地形に沿った形態となった。

遺物は深鉢体部破片1点を図示した。中期中葉末～後葉初に比定されるが、土坑の性格や時期を具体化する資料ではない。土坑の時期は不明だが、埋土の様相と出土遺物から中期と考えた。

61区77号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

61区Y-7グリッドの調査区中央北側で調査された。周辺は南東への強い傾斜面が広がる。北東に76坑、南西に78坑が近接するように等高線に沿った土坑配置が見られる。確認面は暗褐色土で、重複遺構は無く単独の検出となった。

平面形は小型の不整楕円状で、規模は約64×49×28cmで、椀状の断面形を示す。

出土遺物として深鉢体部破片1点を図示した。加曾利

EⅡ式に比定されるが、土坑時期の特定にまでは至らない。土坑時期は埋土の様相などから、縄文時代の所産としたい。

61区78号土坑 (第294図 PL.28)

調査区中央北側で調査された。61区Y-7に位置し、周辺は南東への強い傾斜の中、77坑や79坑が近接するが、79坑との新旧は不明である。

確認面はローム漸移層である暗褐色土で、不整楕円状を平面形とする。規模は120×94×38cmで皿状の断面形を呈す。立ち上がりはやや弱い印象を得る。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、周辺土坑の様相から、縄文時代の所産とした。

61区79号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

調査区中央北側で調査された。61区Y-7に位置し、周辺は南東への強い傾斜の中、南に43号住、北東に78坑が接するが、重複部分が狭く新旧の観察にまでは至らなかった。

暗褐色土を確認面とし、土坑底面はAs-Ypk層にまで達していた。長軸を北北西に向けた不整楕円状を平面形とし、断面形は不連続な皿状を呈す。規模は178×120×32cmを測る。

出土遺物として深鉢破片2点を図示した。加曾利EⅢ式と称名寺式であり、時間幅もあることから土坑時期や性格を具体化するものではない。詳細な時期は確定できないが、周辺土坑との様相や埋土の様相から縄文時代の所産としたい。

61区81号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

調査区中央東寄りの61区W-6グリッドに位置する。39号住床下で調査された。北に23号住や41号住、北西に104号坑や107号坑が近接する。ほぼ平坦地形に占地する。39号住との新旧は、床面敷石下及び跡下の検出から、本土坑を古く位置付けておきたい。

確認面は暗褐色土で、坑底面は黄褐色ロームに達する。平面形は径100cm前後の円形で、深さは約20cmを測る。皿状の断面形ながら壁はしっかりと掘り込まれていた。

遺物は深鉢体部破片2点を図示した。加曾利EⅢ式と勝坂3式であり、時間幅も見られ土坑の時期、性格を現

す例では無い。

時期は、39号住の床下検出という層位例から、中期の所産と考えられよう。

61区82号土坑 (第294・299図 PL.28・132)

調査区東側の61区U-6・7グリッドに位置し、住居跡群内の38号住と36号住に重複して調査された。周辺は南側への緩やかな斜面上の立地だが、多くの遺構が重複するため、ほぼ平坦地形が広がる。

平面形は暗褐色土で確認し、径50～60cm程の小型の不整形円形土坑を得ている。深さは34cmを測り、やや袋状の断面形を呈し、壁も黄褐色ロームを掘り込む。

遺物は埋土中より深鉢体部破片1点を出土する。加曽利EIV式だが、36号住からの流入も考えられ、本土坑の時期を具体化しない。

断面形から貯蔵穴としての性格も考えられよう。時期は、36号住に切られる様相から、中期後葉と判断したい。

61区83号土坑 (第295・299図 PL.28・132)

61区U-7グリッドに位置する。調査区東側にあたり、平坦地形に24号住や36号住、34号住が重複立地し、本土坑も84・85号土坑と伴に住居跡群内に重なる様相を示す。各住居跡との新旧関係は判然としないが、おそらく住居跡が本土坑を切る傾向は見られた。また84坑、85坑との新旧関係も土層の観察が果たせず判然としないが、同一規模の土坑が集中する傾向は短時間の設営の可能性が高く、同時期併存も念頭におきたい。

平面形は暗褐色土で確認し、径約90cmの円形土坑を得ている。深さは30cmで、底面は黄褐色ロームにまで達しており、壁も良好に立ち上がる。

出土遺物として深鉢体部破片1点を図示した。加曽利EIV式に比定されるが、周辺の敷石住居跡から流入の可能性もある。

土坑の性格としては、断面形から貯蔵穴の可能性もある。時期は住居跡との重複から中期後葉～末葉としたい。

61区84号・85号土坑 (第295・300図 PL.28・132)

調査区東側の61区U-6・7グリッドに位置する。平坦面に占地し、前述の83号坑南に両土坑が重複するが83号坑との新旧関係は不明である。84号坑と85号坑は土層観

察では84号坑が新しい新旧関係を示している。また38号住が跡下で検出されており、38号住より古い層位を示している。

38号住床面である暗褐色土を確認面とする。両土坑とも円形の平面形を呈し、規模は84号坑が径94cm、深さ29cm、85号坑は径約80cm、深さ74cmを測る。土坑の断面形は鍋底状を呈し壁の立ち上がりも緩いが、深く、土坑に対する積極的な意図が看取される。

両土坑とも深鉢破片を各1点のみ図示した。いずれも中期後葉の所産だが、土坑時期を確定する資料ではない。土坑の性格は深さから、貯蔵穴に近い用途が想起されよう。時期は38号住との重複と出土土器から中期後葉と判断したい。

61区86号土坑 (第295図)

調査区東側の住居跡群内にあり、61区U-7グリッドに位置する。平坦地形に24号住や36号住、34号住が重複立地し、本土坑も83号土坑と伴に住居跡群内に重なる様相を示す。83号坑との新旧は不明だが、36号住P6とは本土坑が切られる重複関係を示している。

平面形は不整形円形を呈し、断面形は鍋底状を示す。壁の立ち上がりはやや弱い印象を得る。規模は66×56×38cmである。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、36号住より古い重複関係から、縄文時代の所産と考える。

61区87号土坑 (第295・300図 PL.28・132)

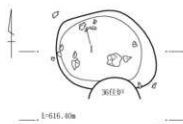
調査区南端の61区W-4グリッドに位置する。44号住床面上の検出で、27号住や32号住の南西に近接する。また88号土坑が西に接して調査されている。44号住との新旧関係は不明である。

44号住床面である褐色土を確認面とした。平面形は整った円形を呈し、平面規模は径約90cmを測る。深さは約55cmで袋状の断面形を示す。坑底面は黄褐色ロームに達し、壁も良好に立ち上がる。

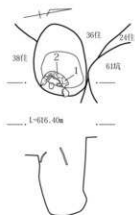
埋土下位より坑底面にかけて、大型の自然石を伴出する。遺物は細片が出土しているが、体部破片2点を図示した。いずれも加曽利EII式に比定されるが、土坑の詳細な時期を具体化していない。

土坑の性格は断面形態などから、貯蔵穴の可能性があ

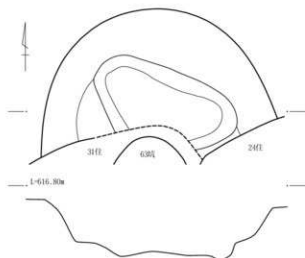
61区73号土坑



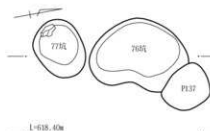
61区74号土坑



61区75号土坑

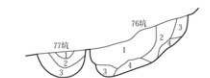


61区76・77号土坑



61区76号土坑土層

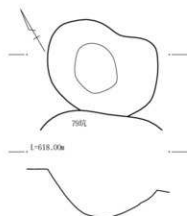
- 1 暗褐色土 黄色粒多く含む。しまり強い
- 2 暗褐色土 ローム粒、黄色粒多く含む。しまり強い
- 3 褐色土 黄色粒多く含む。しまり強い
- 4 黄褐色土 暗褐色土塊を含む。しまり強い



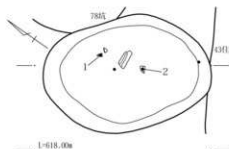
61区77号土坑土層

- 1 黄褐色土 黄色粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 3 暗褐色土 黄色粒を多く含む

61区78号土坑



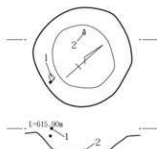
61区79号土坑



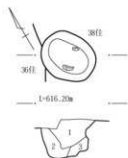
61区79号土坑土層

- 1 暗褐色土 小礫、微量の黄色粒を含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 にぶい黄褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 黄褐色土 ローム塊を含む

61区81号土坑



61区82号土坑



61区82号土坑土層

- 1 灰褐色土 ローム小塊を含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を微量含む
- 3 褐色土 黄色粒を微量含む

第3章 発見された遺構と遺物

る。しかし、大型自然石の出土は墓墳への転用も想定しておきたい。時期は出土土器を参考にして、中期後葉とおきたい。

61区88号土坑 (第295図 PL.28)

87号坑と同様に調査区南端の61区W-4グリッドに位置する。ほぼ平坦地形での調査で、44号住床面での検出である。44号との新旧は調査区壁の土層観察の限りは、本土坑が新しい様相を示している。

確認面は44号住床面の褐色土で、南～西側を調査区外に延ばす。極一部の検出となり、規模などは不明である。おそらく不整形円の平面形を呈し、深さは60cmを超える良好な例であろう。断面形は袋状を呈す傾向を見せる。

出土遺物は見られないため、詳細な時期は不明である。44号住との重複関係や隣接する87号土坑から、中期後葉の貯蔵穴の可能性を想定しておきたい。

61区92号・93号土坑 (第295・300図 PL.28・132)

調査区中央の43号住、46号住と重複して調査された。61区Y-6グリッドに位置し、62区境に近づく。周辺は住居跡密集地点であり、そのためほぼ平坦面での検出となった。重複遺構としては、43住P9、P18、P19があるが、いずれも良好な土層観察を得なかった。図示していないが、43住P9は両土坑を切る土層記録を残す。

確認面は黄褐色ロームで行った。92坑が不整形円状を呈し、規模は90×60×20cmを測る。93坑はおそらく不整形円形で、径80cm前後、深さ14cmでやや浅い。両土坑とも、断面形は皿状を呈し、坑底面は不連続で壁立ち上がりも弱い。

両土坑とも出土遺物は少なく、92坑より深鉢体部破片1点の図示に止まる。「郷土式」に比定されるが、詳細な時期を現してはいない。不整形な土坑で性格は不明であり、時期は43号住との重複から中期後葉と考えておきたい。

61区94号土坑 (第295図)

調査区南端の61区U-5グリッドに位置する。東に22号住、西に42号住に挟まれた壁際で調査した。重複遺構は無く、単独の検出である。

確認面はローム層上層であるが、調査区壁は上層の黒

褐色土からの掘り込みを示す。径50cm、深さ54cmの小型の円形土坑と思われる。

出土遺物は見られないため、詳細な時期は確定できない。埋土の特徴から縄文時代の所産と判断した。

61区95号土坑 (第295・300図 PL.28・132)

61区Y-6グリッドに位置する。調査区中央の住居跡密集地点の62区4号住、62区18号住と重複して検出された。周辺は重複する住居跡群のため平坦地が広がり、東には43号住や46号住、南には62区2号掘立柱建物跡の他土坑群も密集する。62区18号住P3を切る重複が認められる。

62区18号住床面である黄褐色ロームで平面形を確認し、径125cm程の円形土坑を得た。深さは17cmでやや浅く底面は平坦で壁も直立し、立ちあがりも明瞭だった。

出土遺物として土器片4点と打製石斧1点を図示した。土器片は加曽利EⅡ式及び「郷土式」に比定されるように、安定しており、概ね中期後葉に時期を求められよう。

61区96号土坑 (第296・300図 PL.29)

61区Y-6グリッドに位置する。95号坑と同様に調査区中央の住居跡密集地点の62区4号住、61区46号住と重複して検出された。46号住が跡下での調査である。ほぼ平坦地形での確認で、46号住床面である暗褐色土を確認面とした。

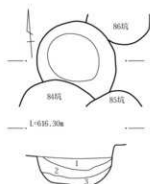
平面形は円形で、径117cm前後の平面規模を測り、52cmの深さで掘り込みも良好である。底面は黄褐色ローム中層にまで達し、平坦面を築く。小ピットを穿つが性格は不明である。壁はしっかりと掘り込まれ、ほぼ直立気味に立ち上がり箱形の断面形を示していた。

遺物は土器片を4点図示した。いずれも中期末葉の様相を呈しており、土坑時期に近接する資料と思われる。土坑性格も深く、良好な断面形態から、貯蔵穴としての位置付けが可能であろう。

61区99号土坑 (第296・300図 PL.29・133)

調査区中央の43号住南で検出された。61区X-5・6グリッドに位置する。62区2号掘立柱建物跡と重複するが新旧は不明である。近接する遺構として、101号～105号、107号、110号、111号土坑があるように、土坑が群在す

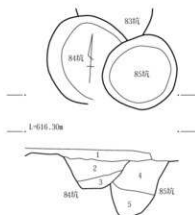
61区83号土坑



61区83号土坑上層

- 1 灰褐色土 ローム塊を多く含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を微量含む

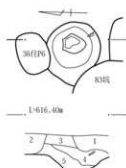
61区84・85号土坑



61区84・85号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 白色粒を極微量含む
- 4 灰褐色土 ローム塊、炭化物を微量含む
- 5 黒褐色土 ローム塊を多く含む

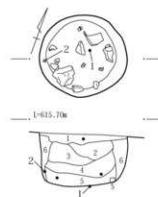
61区86号土坑



61区86号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 白色粒、黄色粒を微量含む
- 3 灰褐色土 ローム塊、炭化物を少量含む
- 4 灰褐色土 ローム塊を多く含む
- 5 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む

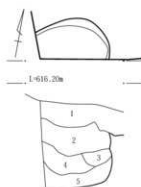
61区87号土坑



61区87号土坑上層

- 1 黒色土 ローム小塊を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 灰褐色土 ローム大塊を多く含む
- 4 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 5 灰褐色土 ローム小塊を少量含む
- 6 黒褐色土 ローム小塊を多く含む

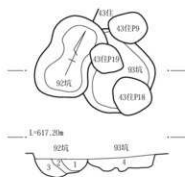
61区88号土坑



61区88号土坑上層

- 1 灰褐色土 白色粒、黄色粒を微量含む
- 2 灰褐色土 白色粒、炭化物を微量含む
- 3 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 4 灰褐色土 ローム小塊を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム小塊を微量含む

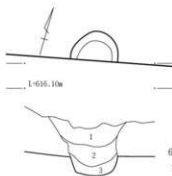
61区92・93号土坑



61区92・93号土坑上層

- 1 灰褐色土 ローム小塊を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 灰褐色土 ローム大塊を多く含む
- 4 灰褐色土 ローム粒を多く含む

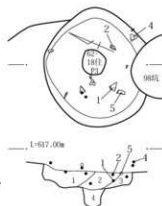
61区94号土坑



61区94号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を多く含む

61区95号土坑



61区95坑、62区18住P3上層

- 1 灰褐色土 ローム小塊を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 灰褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 灰褐色土 黄色粒を少量含む

0 1 : 40 1m

る箇所でもある。

黒褐色土を確認面とした。円形の平面形を検出し、平面規模は約120×108cmを測り、深さは約48cmと深い。底面は平坦でローム漸移層にまで達するが、壁は黒褐色土～暗褐色土で、埋土との分別は難しかった。

埋土中から多くの出土遺物を得ているが、土器は全て破片状態である。また、中期中葉末～中期後葉と時間幅があり、土坑の時期を確定できない。その中で、加曾利EⅡ式(8・14)や「唐草文系土器」(4)、「郷土式」(5・7・13)、曾利式(7・9)が土坑時期に近いと考える。また、土坑の性格も断面形態から貯蔵穴の可能性を考えておきたい。

61区100号土坑(第296・301図 PL.29・133)

調査区中央南寄り、61区と62区に跨って調査された。61・62区Y-A-5グリッドに位置する。8号住が跡下、22号住北東壁隅に重複する。周辺はほぼ平坦地形で、住居跡が群集する他62区2号掘立柱建物跡や62区42号坑や30号坑が近接しており、土坑群が占地する。

ローム漸移層の暗褐色土を確認面とし、径120cm前後の不整形円形を平面形とする。深さは30cmを超え、平坦な坑底面を作出し壁も直立する箱形の断面形を示す。

遺物は加曾利EⅢ式の深鉢破片1点と加工痕ある剥片石器(PL.133)が出土している。土坑の性格や時期を直接具体化する資料ではないが、時期は中期後葉に求めておきたい。

本土坑の性格であるが、平面形や断面形からは貯蔵穴としての性格が想起されよう。しかしながら、土坑平面位置は、奇妙なことに8号住が跡と重なる。まったくの偶然として捉えるべきであろうが、出土土器の時期差も無いため、8号住が跡埋方の可能性も念頭におきたい。

61区101号土坑(第296・301図 PL.29・133)

61区Y-5グリッドに位置する。100号土坑と同様に平坦地に占地する住居跡群や土坑群、掘立柱建物跡の中にあり、62区4号住や8号住と重複する。おそらく両住居跡に切られる新旧関係と考えている。

黒褐色土中に確認面を設け、径約129×116cmの不整形円形土坑を検出した。深さは80cmを超え、黄褐色ローム上面に達しており、直立気味の壁と平坦な底面から、筒状

の断面形態を示した。

出土遺物は多いが、土器片主体の出土である。深鉢底部破片を中心に8点を図示し、敲石1点を掲載した。土器片の帰属時期は殆どが中期中葉末に比定され、本土坑の時期を具体化する資料と考えられる。

土坑の性格としては、形態から貯蔵穴としての位置付けが可能である。また時期は、出土土器組成から中期中葉に求めておきたい。

61区102号土坑(第296・301図 PL.29・134)

61区X-5・6グリッドに位置する。周辺は、平坦地に占地する住居跡群や土坑群、掘立柱建物跡が集中するが、本土坑は単独の検出となった。北西に43号住、南に47号住が近接し、99号坑や103号～105号坑等の土坑群の中にある。

黒褐色土中で平面形の確認をした。また東側は倒木状の覆乱坑が重なり土坑上半を逸失する。径135cm前後の整った円形を平面形とする。深さは約43cmを測り、黄褐色ロームを掘り込む。底面は平坦面を築き、壁はやや開き気味に立ち上がるが箱形の断面形といえよう。

出土遺物量は多く、深鉢破片10点と凹石1点、使用痕ある剥片石器1点(PL.134)を図示した。土器片は「郷土式」あるいは加曾利EⅡ式やEⅢ式古段階に比定され、土坑時期に近い時期と推定できた。

土坑の性格としては、形態から貯蔵穴の可能性が高い。時期は出土土器の様相から中期後葉と位置付けたい。

61区103号土坑(第296図 PL.29)

調査区中央の遺構密集地点で検出された。61区X-6グリッドに位置し、周辺の平坦地形では北西に43号住が接し、南には99号坑や102号坑が近接する。43号住との新旧関係は不明である。

平面形の確認は黒褐色土中で行われ、小型の不整形円形土坑を検出した。規模は径約74cm、深さ約37cmを測る。断面形態は箱状を呈すが、黒褐色土中の検出のため、壁の立ち上がりなど、やや弱い傾向を見せる。

遺物の出土は見られず、周辺土坑の在り方や埋土の様相から、縄文時代の所産とした。また、若干ながら埋土に焼土小塊を見た。

61区104号土坑 (第296・302図 PL.29-134)

61区W-X-6グリッドに位置する。調査区中央の遺構密集地点で調査された。23号住、32号住、43号住、47号住に囲まれ、102号坑や105号坑が近接する。また本土坑北側には107号土坑が重複するが、本土坑が切る新旧関係を示す。

黒褐色土中での平面形確認である。径140cm前後のやや大型の円形土坑を検出した。深さは約80cmを測り、黄褐色ロームを掘り込み底面は平坦面を築く。壁は直立気味に立ち上がり、箱形の断面形を呈す。

出土遺物は比較的多く、9点を図示した。中期中葉末の破片数点が混在するが、他は加曾利EⅡ式、「郷土式」古段階に比定されよう。

土坑の性格としては貯蔵穴の可能性が高い。帰属時期は、出土土器から中期後葉と捉えられよう。

61区105号土坑 (第296図 PL.29)

調査区中央の遺構密集地点で検出された。61区X-6グリッドに位置し、周辺の平坦地形では北西に43号住が北に23号住が近接し、更に102～104号土坑と一群を形成している。

平面形は黒褐色土中で確認したが、南半は倒木状の攪乱坑で逸失していた。おそらく不整楕円状の平面形で、短軸長が約94cmを測る。深さは約41cmだが、底面が暗褐色土中に止まり、壁は黒褐色土で構成されていた。

出土遺物は無く、詳細な時期の特定はできない。埋土の様相から縄文時代の所産とした。

61区107号土坑 (第297・302図 PL.29-134)

調査区中央の遺構密集地点で調査された。61区W-X-6グリッドに位置する。23号住、32号住、39号住などに囲まれ、104号坑と重複して検出された。新旧は本土坑が古い。

黒褐色土中に確認面を設け、104号坑と同時に調査した。不整楕円状の平面形で、長軸長約100cm、深さ24cmを規模とする。

遺物は埋土中より出土した深鉢体部破片1点を図示した。加曾利EⅡ式に比定されるが、土坑時期の特定には至らない。

深さも浅く、性格も不明な不整形土坑である。時期も

特定できず、埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

61区110号土坑 (第297・302図 PL.29-134-135)

調査区中央の47号住西で検出された。61区X-5グリッドに位置する。111号土坑や62区2号掘立柱建物跡P7と重複するが2号掘立柱建物跡P7が本土坑を切る新旧関係を示す。また、近接する遺構として、101号～105号、107号土坑があるように、土坑が群在する箇所でもある。

確認面はローム漸移層の暗褐色土である。平面形は不整形円形で、平面規模は約140×132cm、深さは約92cmを測る。黄褐色ローム層を深く掘り込み、底面を平坦に築く。壁は直立気味に開き、箱形状の断面形を呈す。

出土遺物は多く、土器片10点と礫石1点を図示した。出土土器の時間幅は大きく、阿玉台Ⅱ式や加曾利EⅡ式を見る。おそらく土坑時期は中期後葉と考えられよう。土坑の性格も、貯蔵穴としての可能性を位置付けたい。

61区111号土坑 (第297・303図 PL.29-135)

前述の110号坑南東で重複して調査された。61区X-5グリッドに位置する。南東に47号住が接するが、110号坑、47号住とも明確な新旧関係は捉えられなかった。

確認面は暗褐色土で110坑と同時に調査されたが、当初の土層軸と重複箇所がずれていたため、新旧関係は把握できなかった。北側の大半を、深い110坑によって失ったため、平面形や平面規模も判然としないが、おそらく径70cm程の不整形円形土坑と思われ、約66cmの深さを測る。断面形は丸底形だが、正確な底面形態ではないため判断材料にはならない。

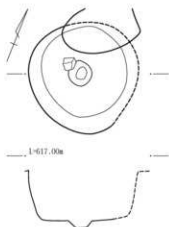
出土遺物は同一個体の深鉢体部破片がまとめて出土したが、個体図示には至らなかった。加曾利EⅢ式に比定され、110号坑出土土器より新しい様相を示す。

極一部の検出に止まったため、土坑の性格は不明だが、時期は中期後葉と判断できよう。

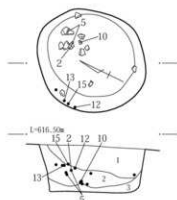
61区112号土坑 (第297・303図 PL.29-135)

調査区中央の南壁際で、61区Y-4グリッドに位置する。8号住床面上で114号土坑と重複して調査された。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、住居跡床面もあり黒褐色土を基調とする平坦面での調査となった。8号住、114号坑との新旧は不明である。

61区96号土坑



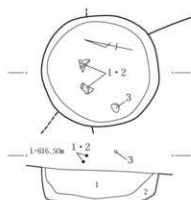
61区99号土坑



61区99号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を多く含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 暗褐色土塊を含む

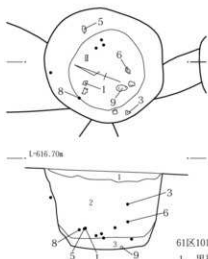
61区100号土坑



61区100号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム大塊を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む

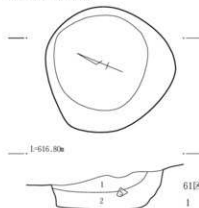
61区101号土坑



61区101号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒、褐色土塊を含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、ローム塊を多く含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を含む

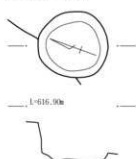
61区102号土坑



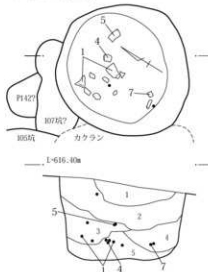
61区102号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒を含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む

61区103号土坑



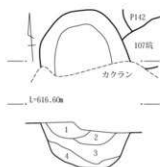
61区104号土坑



61区104号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を含む。遺物出土を見る
- 4 黒褐色土 暗褐色土塊、ローム小塊を含む
- 5 赤い褐色土 ローム粒を含む

61区105号土坑



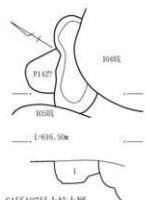
61区105号土坑土層

- 1 褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 褐色土塊、ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 褐色土塊を含む



第296図 土坑 61区(7)

61区107号土坑



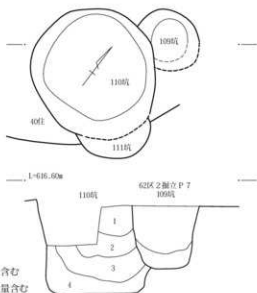
61区107号土坑上層

1 黒褐色土 黄色粒を微量含む

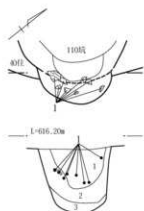
61区110号土坑上層

- 1 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を極微量含む
- 3 褐色土 ローム小塊を含む
- 4 黒褐色土 ローム小塊を多く含む

61区110号土坑



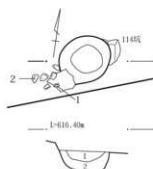
61区111号土坑



61区111号土坑上層

- 1 褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を含む
- 3 にぶい黄褐色土 ローム粒を含む

61区112号土坑

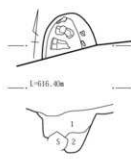


61区112号土坑上層

- 1 黒褐色土 表層に礫を多く含む
- 2 黒色土 黄色粒を含む

0 1 : 40 1m

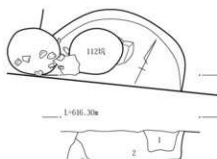
61区113号土坑



61区113号土坑上層

- 1 暗褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 黒褐色土 均質土。粘性強い

61区114号土坑



61区114号土坑上層

- 1 暗褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を含む
- 3 暗黄褐色土 ローム塊を含む

第297図 土坑 61区(8)

径50cm前後の小型円形土坑である。深さは20cm程で深くなく、ビット状の土坑といえよう。

出土遺物として深鉢体部破片1点と加工痕ある剥片石器1点を図示した。土器片は中期後葉に比定されるが、土坑時期を確定する資料ではない。

重複する62区8号住や114号坑との新旧は不明だが、埋土の特徴や出土遺物から縄文中期に位置付けたい。

61区113号土坑 (第297図 PL.29)

112号坑と同様に調査区中央8号住床面上で、南壁際において検出された。61区Y-5・6グリッドに位置する。南

半を調査区域外に延ばし北側のみの調査となった。114号坑が西に近接する。8号住との新旧関係は不明である。

確認面は黒褐色土で、径約56cmの小型円形土坑であろう。深さは40cmを測る。底面も不連続で壁の立ち上がりも弱い。小型の自然礫が埋土中から出土したが、土坑の性格を現す例では無い。

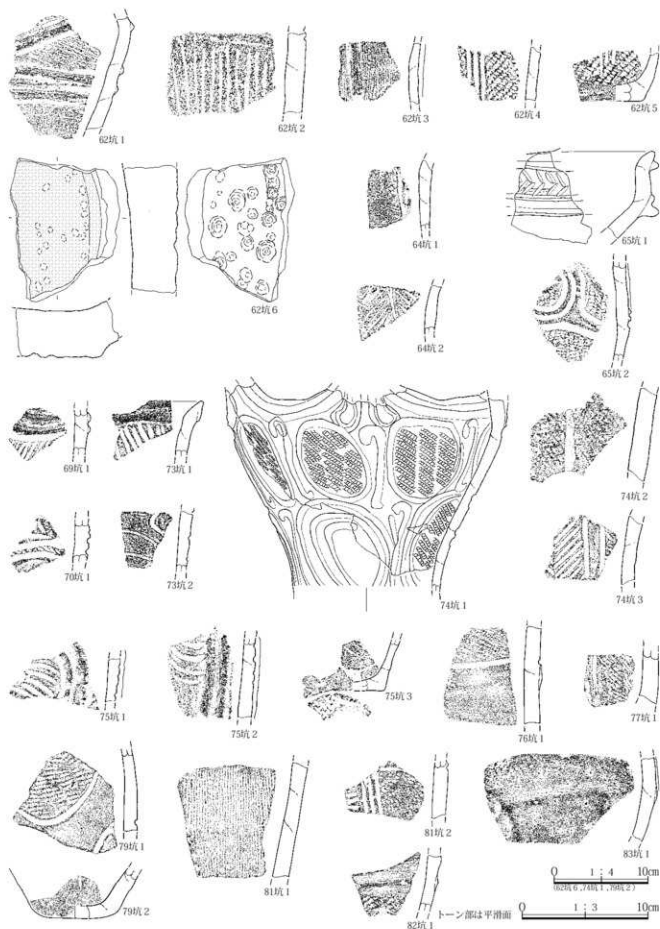
出土遺物が無く、詳細な時期は不明である。埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

61区114号土坑 (第297図 PL.29)

61区Y-4グリッドに位置する。112号坑、113号坑と同



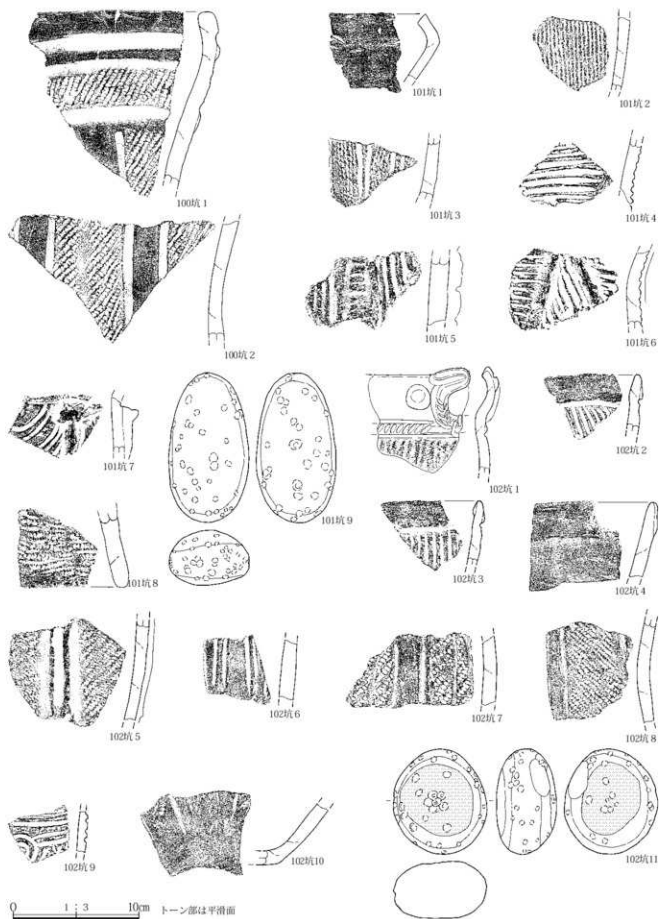
第298図 土坑 61区出土遺物(1)



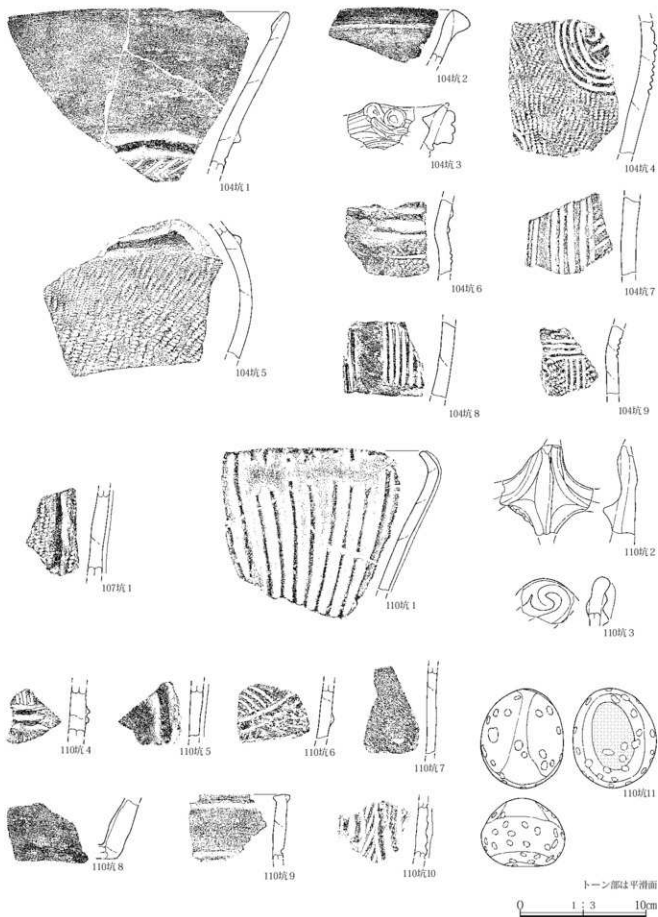
第299図 土坑 61区出土遺物(2)



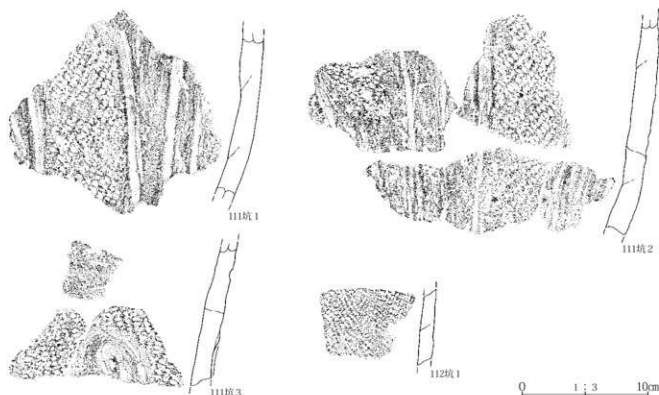
第300図 土坑 61区出土遺物(3)



第301図 土坑 61区出土遺物(4)



第302図 土坑 61区出土遺物(5)



第303図 土坑 61区出土遺物(6)

様に8号住床面で、調査区中央南壁際で調査された。南半を調査区域外に延ばし、112号坑と重複するが新旧関係は不明である。

黒褐色土中での確認で、軸長140cm以上の不整形土坑である。深さは40cmを超えるが、底面は黄褐色ロームながら、不連続面が広がり、壁の立ち上がりもやや弱い印象を得る。

出土遺物は無かった。詳細な時期は不明だが、埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

62区2号土坑(第304図 PL.30)

調査区中央北西側にあたる62区C-6グリッドに位置する。南東への斜面地形が続くためか、周辺の遺構密度はやや低く、重複遺構もなく単独の検出となった。

確認面はローム漸移層の暗褐色土中で、径約72×55cmの不整形円形を平面形とする。深さは約28cmで坑底面も凹凸のある不連続面で、立ち上がりも弱く、浅い皿状の断面形を示す。

出土遺物も無く、詳細な時期は不明である。埋土の特徴から縄文時代の所産と考えた。

62区4号土坑(第304図 PL.30)

調査区中央北西側の62区D-7グリッドに位置する。南東への斜面地形が連続し、遺構密度は低く、東側に8号・10号・11号土坑などが見られる程度である。

確認面はローム漸移層の暗褐色土である。平面形は不整形円状を呈し、平面規模は約126×110cm、深さは約78cmを測る。大型の土坑で深く、黄褐色ローム層を掘り抜き、As-YPk層にまで達していた。底面はやや凹むものの壁は良好な立ち上がりを示し、箱形の断面形を呈す。

土坑の性格は判然としない。出土遺物は無く、埋土の様相から、縄文時代の所産としたが、詳細な時期特定は果たせない。

62区5号土坑(第304・309図 PL.135)

調査区中央西側の5号住床面で検出された。62区C-6グリッドに位置する。周辺は南東への斜面地形が広がるが、5号住周辺より緩やかになり、ほぼ平坦面が保たれる。遺構密度も高く、本土坑も5号住との重複以外に22号土坑と南東で接する。新旧関係は土層、出土遺物からも確定できなかった。

5号住床面である褐色土を確認面とする。平面形は、径90cm程の円形を呈し、深さは約48cmを測る。底面は黄褐色ローム面にまで達し、ほぼ平坦面を築く。壁の立ち

上がりも直立気味で、箱形の断面形を示していた。

埋土中より浅鉢底部と深鉢口縁部破片が出土した。いずれも中期後葉に比定されるが、土坑の時期特定には至らない。

土坑の性格は、形状から貯蔵穴としての性格が想起されよう。時期に関しては、8号住や22号土坑との出土土器の時期差が少なく、確定的できなが、中期後葉と判断したい。

62区6号土坑 (第304図 PL.30)

調査区西側にある17号住北東に接して調査された。62区D-6グリッドに位置する。周辺は南側への強い斜面地形がやや緩やかになる地形を呈す。17号住の他、2号坑が東側に近接する。確認面はローム漸移層の暗褐色土で、径約120×110cmの円形を平面形とする。深さは38cmを測り、坑底面は暗褐色土に止まるが、壁の立ち上がりは明瞭だった。

出土遺物は無く、17号住との新旧も判然としなため、詳細な時期は不明である。埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

62区8号土坑 (第304・309図 PL.30・135)

調査区中央北壁際で、南側を10号坑と重複して調査された。62区D-7グリッドに位置する。周辺は南側への強い傾斜地形が広がる。10号坑との新旧は、土層の観察が果たせず、不明である。また北側は調査区域外に延びるため、平面形なども不明である。暗褐色土で検出され、底面は黄褐色ロームにまで達し、約53cmの深さを測る。断面形は若干袋状を呈し壁の立ち上がりは良好だった。

出土遺物は埋土中より出土した深鉢破片3点を図示した。中期後葉～後期初頭に比定されよう。出土土器から、後期初頭に時期を求められ、断面形からは貯蔵穴として位置付けられるが、平面形など不明な要素が多く、判断は控えたい。

62区10・11号土坑 (第304・309図 PL.25・30・135・136)

62区C・D-7グリッドに位置する。周辺は強い南側への斜面地形で、10号坑は8号坑と重複して、11号坑は10号坑を切る新旧関係を示していた。

ローム漸移層の暗褐色土で平面形を確認し、両土坑の

新旧を観察して検出した。10号坑の規模は208×165cm程の不整楕円状を平面形とする。深さは約74cmを測り深いが、坑底面は凹凸が顕著だった。壁は明瞭に立ち上がる。11号坑の平面形は不整形で、平面規模約117×80cm、深さは約68cmを測る。底面は凹凸が多いが、壁立ち上がりは明瞭だった。

10号坑の出土遺物は多く5点を図示した。土器片は4点とも称名寺式に比定され、土坑の時期を現すと思われる。石皿片は埋土上層の出土である。11号坑は深鉢破片2点を図示したが、いずれも中期後葉に比定される。土層観察で得た新旧に沿わないため、出土土器は本土坑の時期を現していないと判断した。両土坑とも、人為的所産ながら不整形土坑に近く、性格は不明である。

62区13号土坑 (第305・309図 PL.30・136)

調査区中央北側の62区C-7グリッドに位置する。11号坑の南東に近接する。周辺は南側への強い傾斜地形で、遺構密度は高くない。

確認面は暗褐色土で行い、不整楕円状の平面形を検出した。規模は約98×76×48cmを測り、小型で坑底面も凹凸が強かったが、壁の立ち上がりは明瞭だった。

出土遺物として、2点の深鉢片を図示した。加曾利Ⅲ式の口頸部破片であるいは同一個体の可能性もある。土坑の性格は不明である。埋土の特徴と出土土器から縄文時代の所産と考えた。

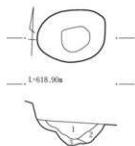
62区14号土坑 (第305・309図 PL.25・136)

61区と62区の境界に跨がる62区2号住床面で検出された。62区A-6・7グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形が広がり、2号住の他20号坑、25号坑、39号坑が重複する。新旧関係は土層の観察では果たせなかった。

2号住床面北東部での検出のため、確認面は黄褐色ロームとなった。平面形は不整楕円状を呈し、平面規模は約153×118cmで、深さは約24cmを測る。坑底面は凹凸があり、壁の立ち上がりも弱く皿状の断面形を示す。

出土遺物は土坑西側から、数点の土器片と石器が出土した。土器片2点と打製石斧と敲石各1点を図示した。土器片は加曾利Ⅳ式とⅢ式で若干時間幅が見られる。また、同様に土坑西側から骨片が集中した。被熱のため

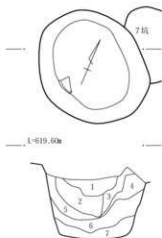
62区2号土坑



62区2号土坑上層

- 1 黒褐色土 ローム粒を含む。しまり強い
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりやや弱い
- 3 黄褐色土 暗褐色土塊、ローム大塊含む。しまり強い

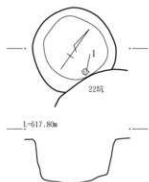
62区4号土坑



62区4号土坑上層

- 1 にふい黄褐色土 ローム大塊、黄色粒を含む
- 2 黒褐色土 暗褐色土塊、黄色粒を含む
- 3 褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 4 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 5 褐色土 黄色粒を微量含む
- 6 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 7 黒褐色土 黄色粒を少量含む

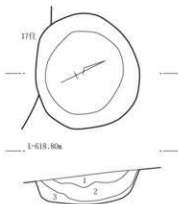
62区5号土坑



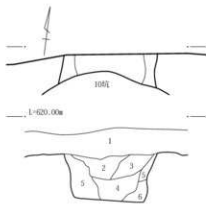
62区6号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を含む。しまり弱い
- 2 暗褐色土 黄色粒を多く含む
- 3 褐色土 黄色粒を微量含む。しまりやや強い

62区6号土坑



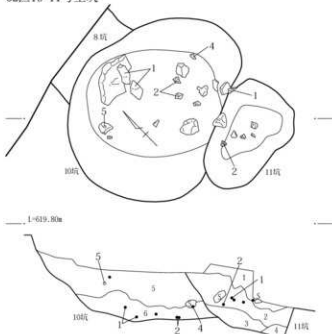
62区8号土坑



62区8号土坑上層

- 1 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム塊、黄色粒を含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 4 黒褐色土 ローム塊を少量含む
- 5 黒褐色土 暗褐色土塊を含む
- 6 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 7 黄褐色土 ローム塊を多く含む

62区10・11号土坑



62区10・11号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 暗褐色土 黄色粒を多く含む
- 4 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 5 暗褐色土 黄色粒、中礫を少量含む
- 6 暗褐色土 ローム塊を多く含む

第304図 土坑 62区(1)

0 1 : 40 1m

第3章 発見された遺構と遺物

が白化しており、51区調査で得られた墓墳としての性格も想定されたが、整理段階の分析で、獣骨と同定されている。埋土中に少量ながら焼土塊が見られたことから、土坑の性格を調理施設に求めることも可能であろう。時期は、中期末葉としておきたい。

62区15号土坑（第305図）

62区A-6グリッドに位置する。北側の2号住と東側の4号住接点と重なるが、土層による新旧関係は把握されなかった。周辺は南東への緩斜面地形で、ほぼ平坦地形が広がる。2号住、4号住以外には32号坑が南側で重なり、37号坑が西側に近接する。

黄褐色ローム面を確認面とし、径80cm程の不整形円形を平面形とする。深さは約37cmを測り、北側から西側の壁は明瞭に立ち上がる。

出土遺物は見られず、土坑の性格や詳細な時期は不明である。埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

62区16号土坑（第305・310図 PL.30・136）

調査区西側やや北寄りで調査された。62区F-6グリッドに位置する。重複遺構は無く単独の検出である。周辺は南側への強い傾斜地形で、遺構密度も低い。西に9号住、南東に10号住が近接する。

黒褐色土中の確認で、深鉢体部下半の出土から断面観察を加えて平面形を把握した。径約53cm程の小型の円形土坑である。深さは約16cmで浅く立ち上がりも弱い。

出土遺物は深鉢体部下半と口縁部破片を見る。いずれも中期後葉に比定され、2は「郷土式」であろう。小ピット状の土坑であり、出土状態が特徴的であるが性格は不明である。時期は中期後葉と考えたい。

62区17号土坑（第305・310図 PL.30・136）

調査区西側北壁際の62区F-6・7グリッドに位置する。周辺地形はほぼ平坦地形で、本土坑南端より1号溝が南下し地形も強い傾斜を持つ。遺構密度は低く、南4mに10号住を見る。

黒褐色土を確認面とし、長軸を北北西に向けた不整形円状を平面形とする。平面規模は約120×85cmで、深さは18cmを測る。やや浅く皿状の断面形を呈す。

平面形確認時から出土遺物が集中した。深鉢破片5点

と打製石斧1点を図示した。殆どが土坑上層の出土であり、土坑の性格や時期を特定する資料ではない。

土坑の形状から墓墳の可能性もあるが、浅く、出土土器も破片状態で時期差を見る。性格は不明としたい。時期は出土土器から中期後葉～末葉前後と考えたい。

62区18号土坑（第305・310図 PL.30・136）

調査区中央にある2号住西と5号住東が接する箇所で検出された。62区B-6グリッドにあたる。周辺は南東への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面が保たれる。遺構密度も高く、1号掘立柱建物跡も重なり31号土坑が南西に近接する。2号住、5号住との新旧関係は不明である。

確認面は5号住床面の褐色土である。径約108×100cmの円形を平面形とする。深さは約48cmで、しっかりとした掘り込みで黄褐色ロームにまで達する。断面形は箱形である。

出土遺物として、深鉢破片2点を図示した。加曾利Ⅲ式で、周辺の住居跡出土遺物との時期差は無い。流入の可能性もある。

貯蔵穴としての性格が想定されよう。時期は中期後葉としたい。

62区20号土坑（第305・310図 PL.30・136）

2号住東壁に重なり61区と62区に跨がった61区Y・62区A-6・7グリッドに位置する。西側を14号坑、南側を1号掘立柱建物跡柱穴と重複するが明瞭な新旧関係は得られなかった。

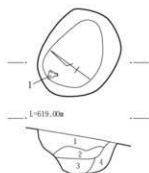
確認面は暗褐色土で短軸長90cm前後の不整形を平面形とする。深さは54cmで坑底面は凹凸があり、壁の立ち上がりもやや弱い。

出土遺物は深鉢破片2点と磨石片1点を図示した。埋土中の出土で、土器片は加曾利Ⅲ式と称名寺式で時期差が大きい。土坑の時期を確定する資料ではない。土坑の性格も不明であり、時期も不確定である。埋土の様相から、縄文時代の所産とした。

62区21号土坑（第306・310図 PL.25・137）

調査区西端の62区K-4グリッドに位置する。周辺は緩やかな南斜面ながら、遺構密度は低く、東に62区1号埋設土器や29号坑が近接する程度である。

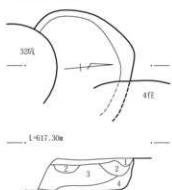
62区13号土坑



62区13号土坑土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム大塊を多く含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 黄褐色土 ローム塊、黄色粒を多く含む

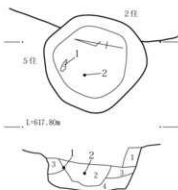
62区15号土坑



62区15号土坑土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム大塊を少量含む

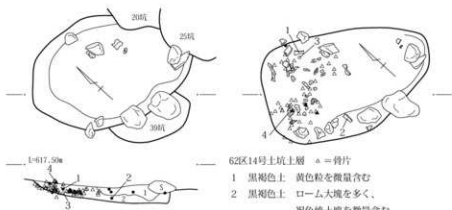
62区18号土坑



62区18号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム塊を多く含む
- 2 灰褐色土 黄色粒を多く含む
- 3 灰褐色土 ローム塊、黄色粒を少量含む
- 4 灰褐色土 ローム大塊を少量含む

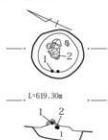
62区14号土坑



62区14号土坑土層 △=碎片

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム大塊を多く、褐色焼土塊を微量含む

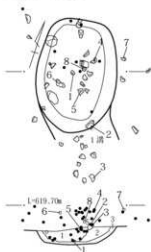
62区16号土坑



62区16号土坑土層

- 1 暗褐色土 As-YFk10%程含む

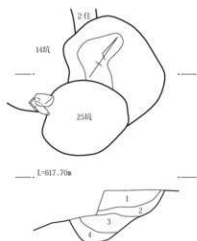
62区17号土坑



62区17号土坑土層

- 1 暗褐色土 黒褐色土塊、ローム小塊を少量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む

62区20号土坑



62区20号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム大塊、黄色粒を少量含む
- 3 灰褐色土 黄色粒を多く含む
- 4 灰褐色土 ローム大塊、黄色粒を含む

第305図 土坑 62区(2)

0 1 : 40 1m

第3章 発見された遺構と遺物

黒褐色土中の確認だが、南半を掘乱坑で大きく逸失する。径150cm前後の不整形円形を平面形とし、深さは約32cmを測る。坑底面は凹凸があり、壁の立ち上がりも弱いため皿状の断面形を呈す。

遺物は、埋土中から深鉢1個体が破片状態で出土した。埋置された状態ではなく、一括廃棄あるいは短時間の流入と捉えられた。前期初頭の資料と位置付けられ、土坑の性格は不明だが、本遺跡の最古段階の遺構として評価されよう。

62区22号土坑（第306・311図 PL.30・137）

調査区中央やや西よりの5号住床面で調査した。62区B・C-5・6グリッドに位置する。周辺は緩やかな南側への斜面地形で5号住の他1号掘立柱建物跡が重なり、5号坑が西側で重複する。5号坑が本土坑を切る重複関係を示すが、土層観察を経ておらず、検討を要する。

暗褐色ローム漸移層を確認面とする。径130cm前後の円形を平面形とし、深さは50cmを測る。底面は平坦で、壁も直立気味に立ち上がり、箱形の断面形を呈す。

出土遺物は多く、9点を図示した。加曾利EⅡ式とEⅢ式、「郷土式」が混在するが、土坑の時期としては中期後葉と考えられよう。

土坑の性格は、形状から貯蔵穴としての位置付けが妥当であろう。

62区24号土坑（第306・311図 PL.30・137）

調査区西側の南壁際に調査した。62区D-E-4グリッドに位置し、14号住床面と重複する。本土坑が14号住を切る新旧関係を示す。尚、南半は調査区域外に延びるため、未調査である。

14号住床面である暗褐色土を確認面とする。平面形は径160cm程の不整形円形と思われる、深さ約47cmを測る。坑底面に凹凸があるものの、壁は明瞭に立ち上がり、箱形の断面形を示す。

出土遺物は多く、「郷土式」や加曾利EⅢ式～EⅣ式に比定されるように、時間幅を有す。

北半の調査に止まるため、土坑の性格は不明である。断面形状から貯蔵穴の可能性もある。時期は中期後葉～末葉と考えた。

62区26号土坑（第306図 PL.30）

調査区西側の14号住床面で調査した。62区D-4グリッドに位置する。重複する27号坑や14号住との新旧は不明である。その他では6号住や28号坑と近接する。

暗褐色土を確認面とし、不整形円形の平面形を検出した。平面規模は約65×60cm、深さは約37cmを測る。凹凸ある坑底面で、壁も基盤礫が露出する。やや不安定な様相を呈す。

出土遺物は無く、埋土の特徴から縄文時代の所産としている。

62区27号土坑（第306・311図 PL.30・138）

26号坑と重複状態で調査された。62区C-D-4グリッドに位置する。不整形土坑で、規模は約90×64×34cmを測る。坑底面は凹凸があり、壁も地盤礫の露出が見られるが、26号坑に比してしっかりした掘り込みを呈す。

埋土中より深鉢破片の出土が見られた。中期後葉に比定されよう。土坑の性格は26坑と同様不明で、時期も確定的ではない。縄文時代の所産とした。

62区28号土坑（第306図 PL.30）

26号坑、27号坑と同様に14号住床面で調査された。62区D-4グリッドに位置する。東側で14号住P3と重複し、26号坑、27号坑と近接する。

14号住床面である、暗褐色土を確認面とし、小型の不整形円形の平面形を検出した。平面規模は約78×50cm、深さは約38cmを測る。底面及び壁には基盤礫が露出していた。

出土遺物は無く、埋土の特徴から縄文時代の所産としたが、土坑の性格は不明である。

62区29号土坑（第306・311図 PL.31・138）

調査区西端の62区J-3・4グリッドに位置する。周辺は緩やかな南斜面ながら、遺構密度は低く、西に62区1号埋設土器や21号坑、北に15号住が近接する程度で、重複遺構は無く、単独の検出である。

遺構確認面はローム漸移層で、径200cm程の大型不整形円形土坑を検出した。深さは約54cmを測り、掘り込みは暗褐色土に止まり、基盤礫の露出があるが、坑底面は平坦で壁も直立し、箱形の断面形を示す。

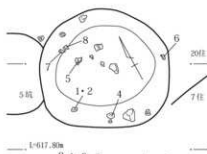
62区21号土坑



62区21号土坑土層

- 1 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 4 黒褐色土 褐色土小塊を少量含む

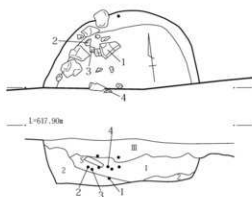
62区22号土坑



62区22号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊、黄色粒を含む
- 3 灰褐色土 ローム大塊を極めて多く含む
- 4 灰褐色土 ローム大塊を微量含む
- 5 にぶい褐色土 黄色粒を少量含む

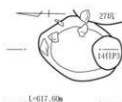
62区24号土坑



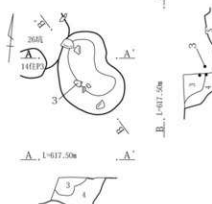
62区24号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊を微量含む

62区26号土坑



62区27号土坑



62区26・27号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を多く含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を少量含む

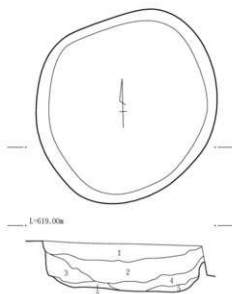
62区28号土坑



62区28号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む

62区29号土坑



62区29号土坑土層

- 1 暗褐色土 褐色土塊を含む
- 2 暗褐色土 小礫、黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 小礫、ローム粒を含む
- 4 褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 5 にぶい黄褐色土 ローム小塊を含む

第306図 土坑 62区(3)

0 1 : 40 1m

第3章 発見された遺構と遺物

出土遺物は埋土中から出土した深鉢細片2点を図示した。「郷土式」と勝坂1式で時期差も大きく、土坑の時期を具体化していない。

大型で坑底面も平坦なため、人為的な土坑と考えられるが、性格までは言及できない。小壜穴遺構としての位置付けも必要であろう。時期は埋土の特徴から、縄文時代の所産とした。

62区30号土坑 (第307・312図 PL.31・138)

調査区中央の62区4号住床面で61区と62区に跨がって調査された。61区Y・62区A-5グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、そのため遺構密度も高い。62区8号住や18号住、2号掘立柱建物跡、32号坑、61区95号坑、100号坑が近接する。

4号住床面の暗褐色土で確認された。平面形は円形で約124×108×43cmを測り、良好な立ち上がり、鍋底状の断面形を呈す。

出土遺物として、深鉢破片3点を図示した。細片でやや時期差を持つため、土坑時期や性格を具体化する資料ではない。

性格や時期は不明ながら、周辺土坑の様相は貯蔵穴群としての位置付けも可能である。規模も近いため、中期後葉の貯蔵穴として位置付けておきたい。

62区31号土坑 (第307・312図 PL.31・138)

調査区中央やや西側の5号住床面で調査された。62区B-6グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形といえよう。遺構密度は高く、1号掘立柱建物跡が重なる他、北東に2号住、北に18号坑、南に7号住や西に20号住が近接する。5号住との新旧は、5号住が跡地方調査の際に、本土坑が検出されたことから、5号住が新しいと考えている。

確認面は5号住床下にあたる黄褐色ローム上面である。径101cm前後の整った円形を平面形とし、深さは50cmを測る。坑底面は平坦で、壁も直立気味に立ち上がり、箱形の断面形を示す。

遺物は埋土中から出土した深鉢破片4点を図示した。中期中葉の例と後葉の例が混在しており、土坑の詳細な時期は確定できない。

円形土坑で掘り込みのしっかりした断面形状から、貯

蔵穴としての性格が想起されよう。また、時期は出土土器の時間幅が見られるため確定できないが、5号住との重複と出土器から中期後葉と考えられる。

62区32号土坑 (第307・312図 PL.31・138)

調査区中央の62区4号住床面で調査された。62区A-5・6グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、そのため遺構密度も高い。62区8号住や18号住、2号掘立柱建物跡、15号坑、37号坑、30号坑などが近接する。新旧関係はいずれの遺構とも土層の観察が果たせず、不明である。

確認面は4号住床面の暗褐色土で、径102cm前後の整った円形を平面形とする。深さは64cmを測り、良好な遺存度を示す。坑底面は平坦で、壁も直立し箱形の断面形を呈す。

出土遺物は多く深鉢破片5点と打製石斧1点を図示した。1は大木9式後半段階の所産か。その他の土器片も「郷土式」に比定され、ほぼ同時期と考えられる。土坑の帰属時期を示唆する資料と考える。

土坑の性格は、周辺の土坑群が円形を基調とした箱形の断面形を呈することから、貯蔵穴群としての位置付けが可能であろう。本土坑も同様の例と考えたい

62区34号土坑 (第307図 PL.31)

調査区中央やや西寄りで調査した。62区C-4・5グリッドに位置する。周辺は南側への斜面地形がやや強い地点ながら遺構は点在しており、北東に7号住や20号住、西に6号住などが近接する。また、本土坑北には44号坑が接し、南西に35号坑が近接する。

黒褐色土を確認面とし、円形の平面形で鍋底状の断面形を呈した小型土坑を検出した。規模は約80×74×43cmで坑底面は黄褐色ロームを掘り込み、やや緩やかな壁が立ち上がる。

遺物の出土は見られず、詳細な時期は確定できない。埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

62区35号土坑 (第307・312図 PL.25・138)

62区C-4グリッドに位置する。調査区中央やや西寄りあたり、周辺は南側への斜面地形がやや強い地点である。前述の34号坑と北東で近接する。

平面形の確認は黒褐色土で行い、径約92cmを測る円形の土坑を検出した。深さは約41cmで、壁の立ち上がりはやや緩やかで、鍋底状の断面形を示す。

出土遺物は深鉢細片2点と敲石1点を図示した。土器片は加曾利Ⅲ式に比定されるが、細片のため土坑時期を具体化する資料とは言えない。敲石は底面よりやや浮いた状態で出土しているが、意図的な埋置かは不明である。土坑の性格、時期とも詳細は不明であるが、あるいは中期後葉の貯蔵穴としての位置付けも可能であろう。

62区37号土坑（第307・313図 PL.31・138）

調査区中央の62区A-5・6グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、遺構密度も高く北側に2号住、東に4号住や18号住、さらに2号掘立柱建物跡などが近接する。土坑群の中にあり15号坑、30号坑、32号坑などが重複・近接する。調査では2号住を切って、32号坑に切られる重複関係を示すが、適確な土層の観察を経ておらず、確定性には乏しい。

平面形はローム漸移層下位の褐色土で確認され、長軸を北北西に向けた、規模約150×110cmを測る不整楕円状を呈する。深さは30cmで坑底面は平坦で、壁も直立する。良好な箱形の断面形を示す。

出土遺物は多く、深鉢破片9点と、打製石斧片、敲石、磨石各1点を図示した。出土土器は黒浜式から加曾利Ⅳ式まであり、時間幅が広い。埋没過程における流入による出土と捉えられよう。土坑の時期を具体化する資料ではない。

平面形状から墓塚の可能性もあるが、同様な例は1基のみの検出で、積極的な根拠を持たない。時期は確定できないが、中期末葉以降として考えておきたい。

62区39号土坑（第307図 PL.31）

2号住床面下で検出された。62区A-6グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形が広がり、2号住の他14号坑が重複する。新旧関係は、2号住や14号坑調査後の検出であり、本土坑が古く見られるが、土層の観察では果たせなかった。

2号住床面下の検出のため、確認面は黄褐色ロームとなった。平面形は、規模は約90×66cmの小型の不整楕円状を呈し、深さは66cmを測り、深く掘り込みもしっかり

していた。底面は平坦ではなく、断面形は鍋底状を示す。

出土遺物は無く、詳細な時期や性格を特定できない。埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

62区41号土坑（第307・313図 PL.31・139）

調査区西側の住居跡群の中にある。62区F-4グリッドに位置し、19号住南東壁と重なる。住居跡はその他に13号住や14号住、16号住が近接する。その他の遺構では、2号集石が南東に、3号土坑が西に接する。周辺は南への緩斜面地形が広がっており、ほぼ平坦地形の占地といえよう。19号住との重複は、土層の観察では確定できなかったが、出土土器からは、本土坑の方が新しい様相を示している。

主に黄褐色ローム上層で平面形を確認した。径106cm前後の整った円形を平面形とし、深さは45cmを測る。坑底面、壁に基盤礫が露出し、鍋底状の断面形を示すが、掘り込みはしっかりしていた。

出土遺物は、個体図示できた加曾利Ⅲ式の1と土偶腕部破片（4）などが出土している。時期は中期後葉と位置付けられるが、土坑性格に関しては、貯蔵穴とは断面形状や周辺遺構の様相から位置付けられない。墓塚も含めた用途も念頭におきたい。

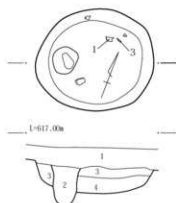
62区42号土坑（第307・314図 PL.31・139）

ほぼ平坦地形が広がる、調査区中央の遺構密集地点にある。61区との境に近接し、62区A-5グリッドに位置する。8号住と22号住の重複部に重なり、新旧関係は判然としないが、おそらく22号住を切る重複と考える。62区2号掘立柱建物跡とも重なり、61区100号坑などと近接する。

ローム漸移層の暗褐色土と22号住床面の黄褐色ローム面を確認面とする。径95cm前後の円形を平面形とし、深さは約32cmを測る。坑底面は僅かに凹凸を持つが、ローム層を掘り込みほぼ平坦面を築く。壁は直立気味で断面形は箱形といえよう。

出土遺物は多く、8点を図示した。土器は加曾利Ⅲ式に比定される例（1～3、7）、中期中葉段階の例（4～6）が見られる。土坑時期としては、中期後葉に求められよう。中葉段階の資料は22号住が影響したと考えられる。土坑の性格に関しては、周辺土坑との関係から、

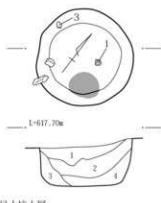
62区30号土坑



62区30号土坑上層

- 1 灰褐色土：しまり弱い、黄色粒を含む
- 2 黒褐色土：黄色粒を少量含む。別種ビット埋土
- 3 灰褐色土：黄色粒を少量含む
- 4 黒褐色土：ローム大塊、黄色粒を少量含む

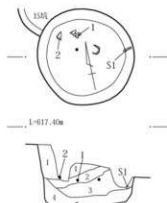
62区31号土坑



62区31号土坑上層

- 1 灰褐色土：ローム大塊、黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土：ローム大塊を微量、黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土：黄色粒を微量含む
- 4 黒褐色土：ローム小塊を少量、黄色粒を微量含む

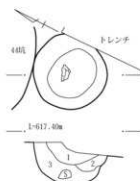
62区32号土坑



62区32号土坑上層

- 1 暗褐色土：黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土：ローム小塊を含む
- 3 褐色土：ローム小塊を含む
- 4 黄褐色土：ローム大塊を含む

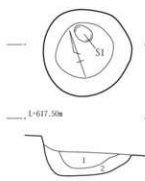
62区34号土坑



62区34号土坑上層

- 1 黒褐色土：ローム粒を含む
- 2 黒褐色土：黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土：ローム小塊を多く含む

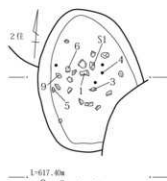
62区35号土坑



62区35号土坑上層

- 1 暗褐色土：ローム粒を含む
- 2 黒褐色土：ローム塊を含む

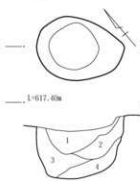
62区37号土坑



62区37号土坑上層

- 1 暗褐色土：黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土：黄色粒を微量含む
- 3 暗褐色土：ローム大塊を含む

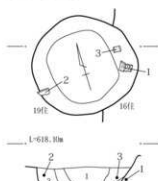
62区39号土坑



62区39号土坑上層

- 1 暗褐色土：ローム大塊を少量含む
- 2 暗褐色土：ローム大塊を含む
- 3 明黄褐色土：黄色粒を微量含む
- 4 明黄褐色土：ローム塊、黄色粒を含む

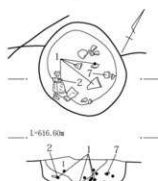
62区41号土坑



62区41号土坑上層

- 1 黒褐色土：ローム粒を少量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒を多く含む
- 3 黄褐色土：礫、ローム大塊を含む

62区42号土坑



62区42号土坑上層

- 1 黒褐色土：黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒を含む

トーン部は焼土 0 1:40 1m

第307図 土坑 62区(4)

貯蔵穴として位置付けたい。

62区43号土坑 (第308図 PL.31)

調査区中央の遺構密集地点南西側にある。62区A・B-4グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形で遺構密度が高いが、本土坑は単独の検出である。近接遺構としては、北西に45号坑、南西に46号坑が見られる。

黒褐色土中の確認で、径約68×60cmを測る小型の円形土坑を検出した。深さは21cmで断面形は箱形だが、やや浅い。坑底面は暗褐色土に止まる。

出土遺物は無く、詳細な時期特定には至らない。土坑性格も、土坑群の中にありながらも、形状差もあるため不明とした。

62区44号土坑 (第308・314図 PL.139)

調査区中央やや西寄りの62区C-5グリッドに位置する。周辺は南側への斜面地形がやや強い地点ながら遺構は点在しており、南に34号坑、35号坑が近接する。本土坑にもピットが重複するが、新旧は本土坑が新しい。

確認面はローム漸移層の暗褐色土である。不整楕円状の平面形を呈し。規模は約122×83×23cmを測る。掘り込みはやや浅いが、坑底面はローム層上層にまで達しており、平坦面を築く。

出土遺物は無く土坑の性格、時期は特定できない。周辺遺構の様相や埋土の特徴から縄文時代の所産とした。

62区45号土坑 (第308図 PL.31)

調査区中央の遺構密集地点南西に見る。62区B-4・5グリッドに位置する。ほぼ平坦地形が広がり、周辺遺構が近接するが、重複遺構は無く単独の検出となった。近接遺構としては南東に22号住、北に7号住などがあるが、南には43号坑、46号坑が近い位置にある。

確認面は黒褐色土で径95cm前後の不整円形を平面形とする。深さは約20cmで、浅く皿状の断面形を示す。坑底面も暗褐色土上層で止まり、壁もやや弱い立ち上がりだった。

図示する遺物は無かったが、北壁際でやや浮いた状態で大型の円礫と角礫が出土している。埋置としての判断は控えるが念頭においておきたい。

時期は埋土の様相から縄文時代の所産としたい。土坑

の性格としては、大型の自然石の出土から墓塚の可能性もあるが、土坑自体が浅く確定的な性格は控えたい。

62区46号土坑 (第308図 PL.31)

調査区中央の遺構密集地点南西側にある。南壁際で調査され、62区B-4グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形で遺構密度が高いが、本土坑は単独の検出である。近接遺構としては、北西に43号坑や45号坑、西に1号集石が見られる。

黒褐色土を確認面とし、不整円形を平面形とする。規模は約103×87cmで、深さは約20cmを測る。浅く皿状の断面形を示す。

出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。埋土の特徴から縄文時代の所産と考えた。

62区48号土坑 (第308図 PL.31)

調査区西側の住居跡群の中にある9号住西壁に重なり調査された。62区H-5グリッドに位置し、北に21号住、西に15号住、24号住が近接する。周辺は南への緩斜面地形だが、ほぼ平坦地形での調査となった。9号住との重複で東半は逸失しているが、新旧は不明である。

確認面は黒褐色土である。平面形は9号住との重複により判然としなが、135cm前後の大型不整円形を呈すると思われる。深さは約16cmを測り浅く、底面には基盤礫が大きく露出していた。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。性格も特定できないが、埋土の特徴から縄文時代の所産であろう。

62区49号土坑 (第308図 PL.31)

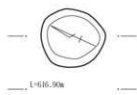
62区E・F-5グリッドに位置する。調査区西側の住居跡群内にあり13号住と25号住が重なる箇所に重複するが新旧関係は不明である。周辺は緩やかな南斜面が展開し、ほぼ平坦面が広がる地点である。

確認面は住居跡床面である黄褐色ローム面で、径約96cmの整った円形を平面形とする。深さは約46cmを測り、坑底面に基盤礫の露出が見られたものの、ほぼ平坦面を築き壁も直立し、箱形の断面形を呈す。

出土遺物は無く、土坑の性格や詳細な時期は不明である。埋土の特徴から、縄文時代の所産と考えた。

第3章 発見された遺構と遺物

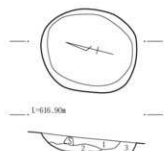
62区43号土坑



62区43号土坑上層

- 1 暗褐色土 黒褐色土塊を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を極微量含む

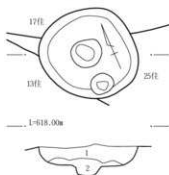
62区46号土坑



62区46号土坑上層

- 1 黒褐色土 礫、ローム小塊を含む
- 2 にふい黄褐色土 ローム小塊を含む
- 3 にふい黄褐色土 ローム小塊を少量含む

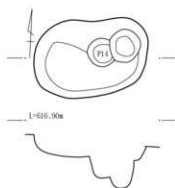
62区50号土坑



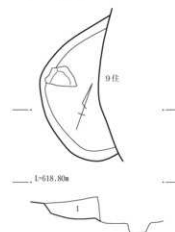
62区50号土坑上層

- 1 暗褐色土 ローム小塊を多く含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む

62区44号土坑、P14



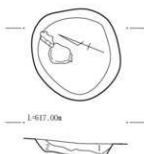
62区48号土坑



62区48号土坑上層

- 1 黒褐色土 粘質。礫を含む

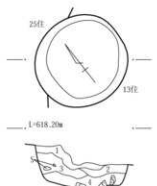
62区45号土坑



61区45号土坑上層

- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 にふい黄褐色土 ローム粒を含む

62区49号土坑



62区49号土坑上層

- 1 暗褐色土 黄色粒、炭化物を少量含む
- 2 灰黄褐色土 焼土を多く含む
- 3 褐色土 ローム小塊、礫を含む
- 4 黄褐色土 ローム粒を多く含む



第308図 土坑 62区(5)

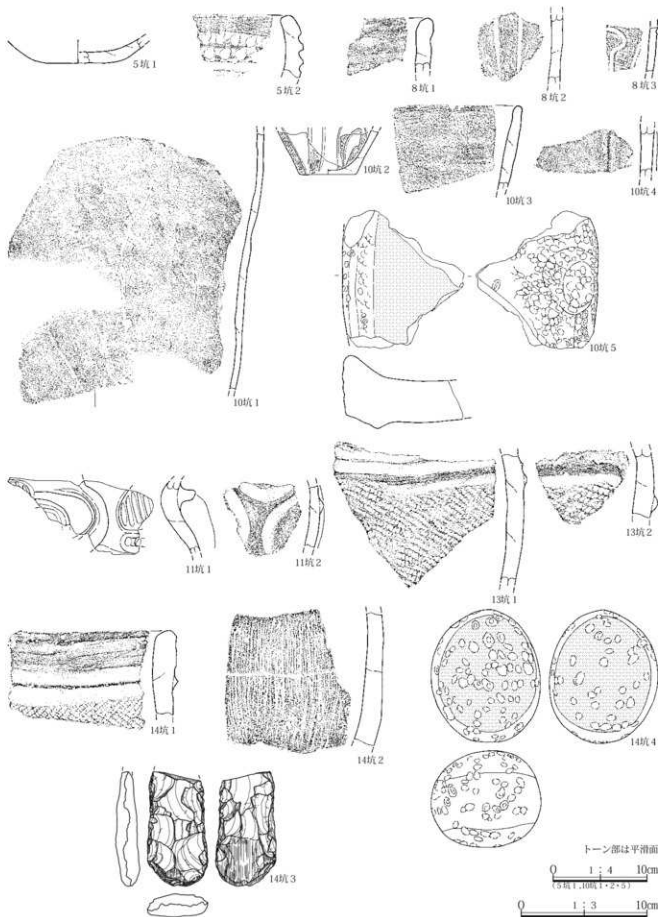
62区50号土坑 (第308図 PL.31)

62区E-5グリッドに位置する。調査区西側の住居跡群内にあり、17号住と13号住の間に重なるが新旧関係は不明であるが、おそらく両住居跡に切られる重複と考えられる。坑底面に小ピットが開くが、本土坑に伴うものかは不確定である。

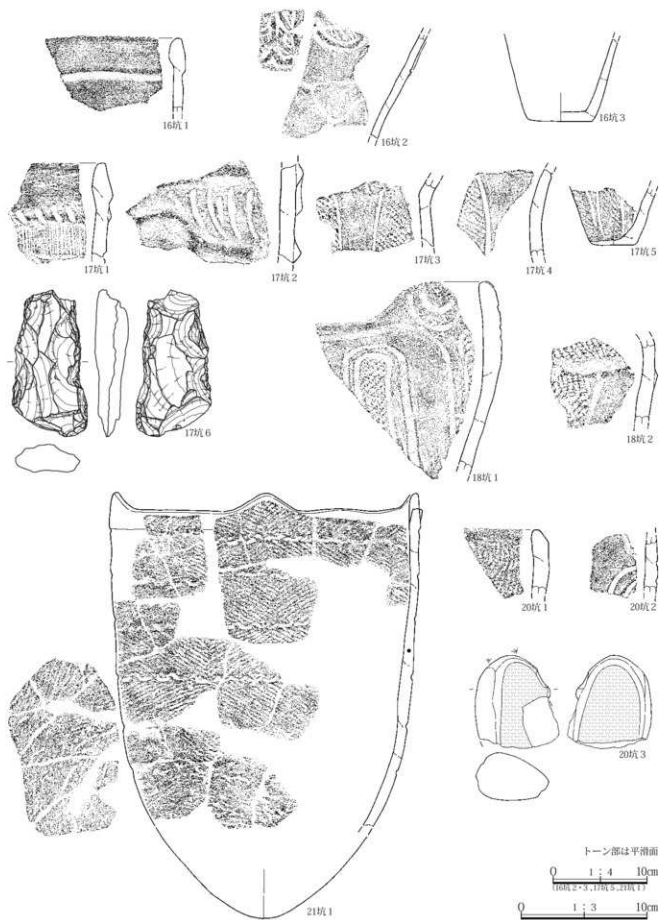
黄褐色ローム面での平面形確認で、約106×96×22cmを規模とする。やや浅いが、掘り込みもしっかりしており箱形の断面形を示す。

出土遺物も無く、時期、性格とも不明だが、埋土の特

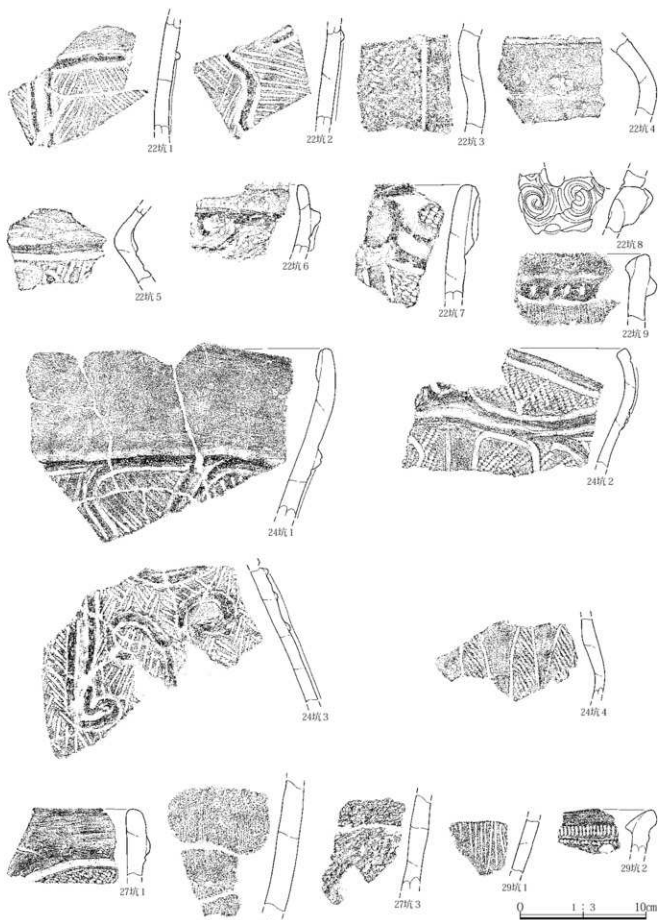
徴から縄文時代の所産と考えた。おそらく時期は中期後葉と思われる。



第309図 土坑 62区出土遺物(1)

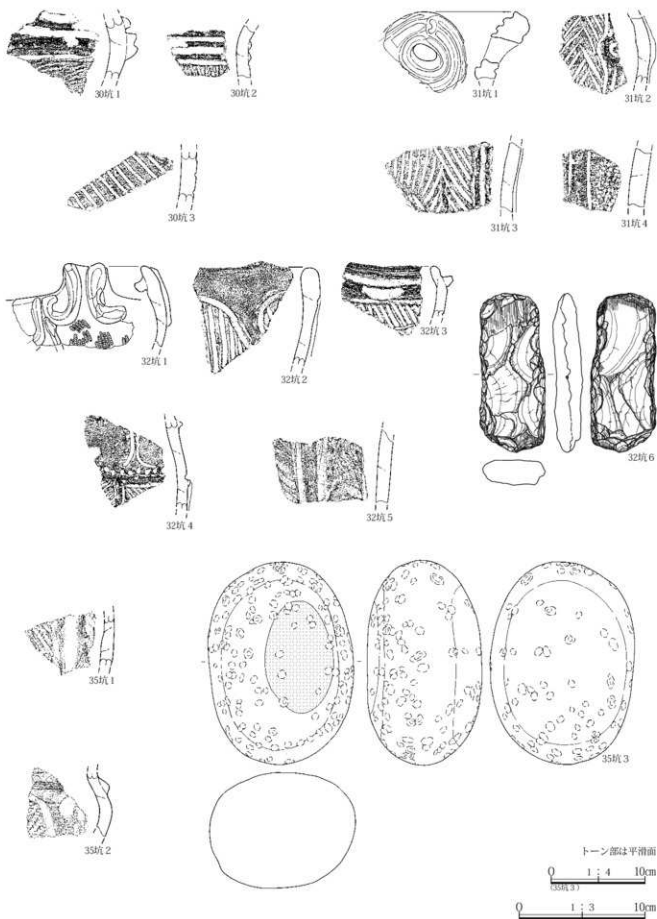


第310図 土坑 62区出土遺物(2)

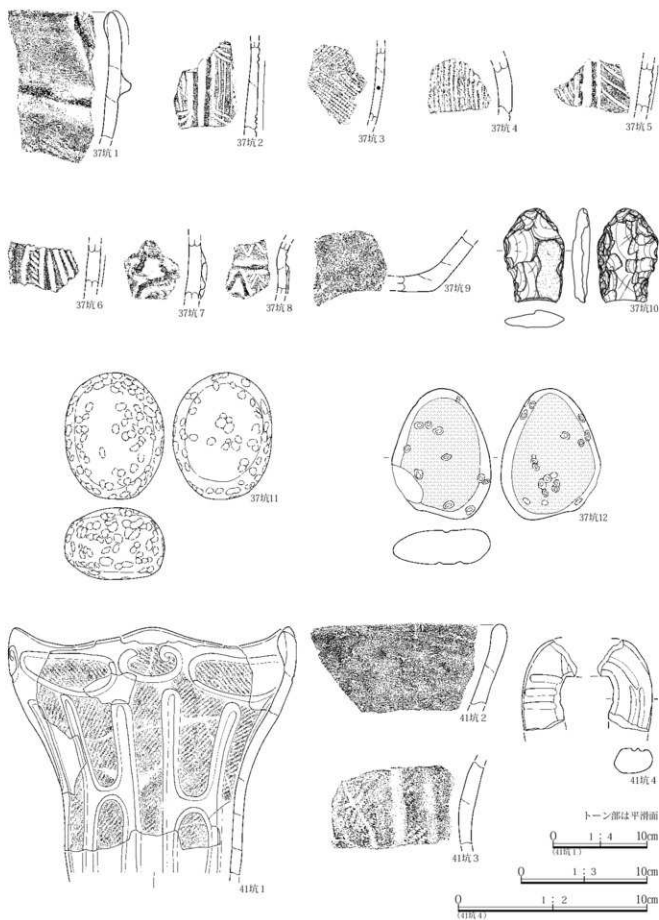


第311圖 土坑 62区出土遺物(3)

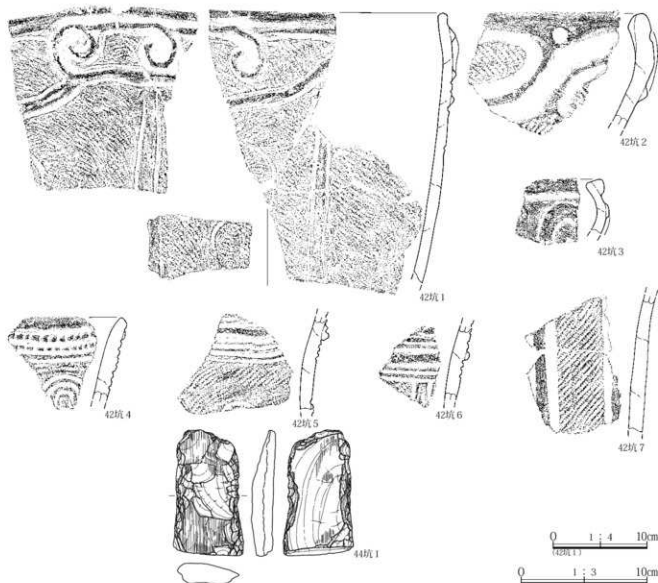
第3章 発見された遺構と遺物



第312図 土坑 62区出土遺物(4)



第313図 土坑 62区出土遺物(5)



第314図 土坑 62区出土遺物(6)

第6節 竪穴状遺構

本節では、跡跡を持たず径2 m以上で、底面が比較的平坦な竪穴状居状の遺構を扱う。前冊では、1基が報告されたが、柱穴を附帯し上屋が想定されたが、本書に掲載した3基の竪穴状遺構は、柱穴も持たず、必ずしも、定型的な様相を示していない。3基とも不整形な様相を示すため、遺構の性格や用途など不確定な要素が多く、集落内施設としては位置付けられない。しかしながら、調査における遺構としての扱いから、割愛する事はできず、本書に掲載する。

調査では、61区において5基の竪穴状遺構を得ている。そのうち1号、2号竪穴状遺構は弥生時代に比定される遺構である。ここでは3号～5号竪穴状遺構を報告する。

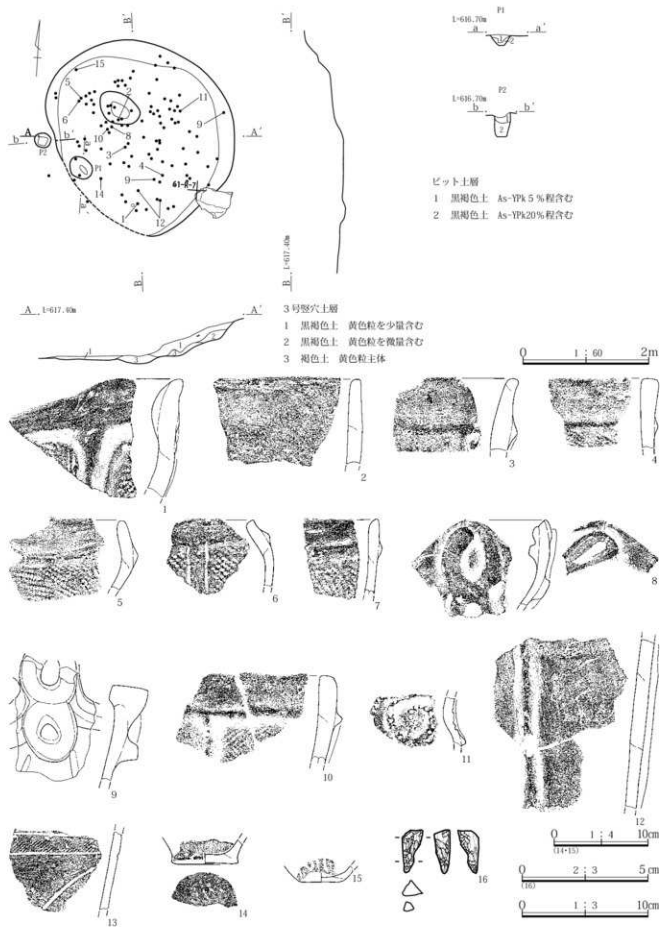
61区3号竪穴状遺構(第315図 PL.32・139・140)

調査区南東にある住居跡群東にやや距離を置いて、単独で調査された。61区Q・R-6・7グリッドに位置する。周辺は南西への斜面地形が強い地点で、そのため、重複する遺構は無く、8号住、18号住が南西に近接する。

確認面は暗褐色土で、円形の掘り込みが検出され、段差状の遺構面を得た。平面形は不整形円で、平面規模は約315×275cmで、深さは68cm以上を測るが、斜面地形での計測のため不備がある。

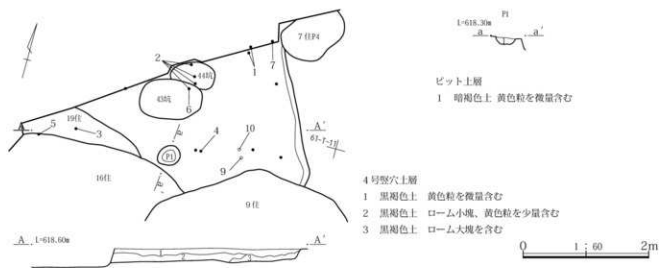
出土遺物は多く、土器片15点、石器1点を図示した。土器片はいずれも破片状態で、埋土中の出土である。内訳も中期後葉から後期前葉にまで広く、主体となる時期も見られない。

斜面で調査された遺構である。底面も傾斜に沿って傾

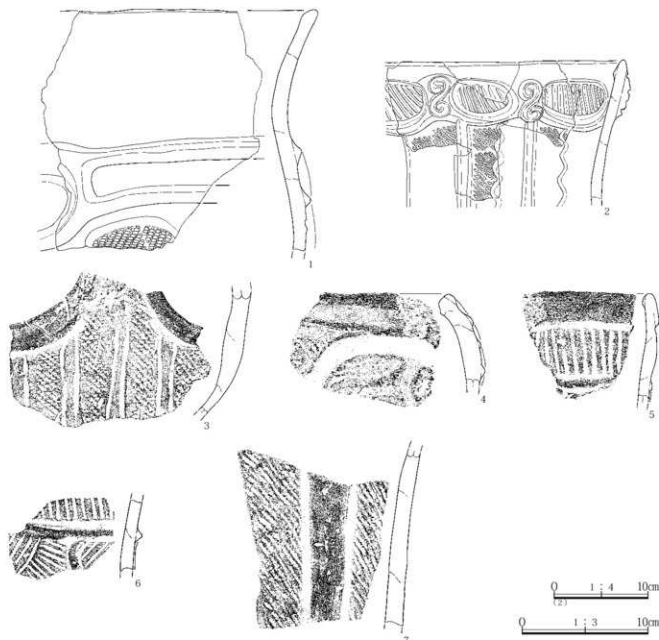


第315図 61区3号竪穴状遺構及び出土遺物

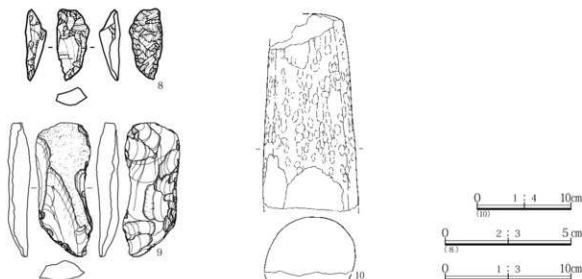
第3章 発見された遺構と遺物



第316図 61区4号竪穴状遺構



第317図 61区4号竪穴状遺構出土遺物(1)



第318図 61区4号竪穴状遺構出土遺物(2)

いており、凹凸も強い。壁も意図的な掘り込みではなく、弱い立ち上がりである。出土土器も時間幅が広く、帰属時期の特定もできない。このことから、本遺構はおそらく、人為的な所産ではなく、傾斜に沿った土器の流入と判断できよう。

61区4号竪穴状遺構(第316～318図 PL.32・140)

調査区北東部の住居跡密集地点で調査された。61区T-10・11グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形の占地といえよう。重複する住居跡としては、南の9号住の他、南西に16号・19号住が重なり、東に7号・20号住が接する。また北側は調査区域外になり、大半が未調査となった。北壁の調査区壁の観察では、19号住に切られる新旧関係を示す。9号住との新旧は不明だが、9号住埋土中に本遺構の痕跡を見出せないことから、9号住を新しく考えておきたい。

平面形は黒褐色土で、北西を向いた方位で直線上の壁を検出した。東辺にあたり約21cmの壁高を示す。南側で屈曲する兆しを見せるが、9号住との重複のため、判断としない。底面は平坦面を築くが、硬化面は見られなかった。

出土遺物は埋土下位から全面にわたって出土している。43号坑や44号坑との重複部にも出土が見られるが、北壁の観察からは、本遺構を新しく位置付けた。

出土土器は破片資料ながら、加曾利EⅢ式と「郷土式」を中心とする。石器は打製石斧や、スクレイパー、石棒を図示した。いずれも中期後葉の所産と捉えられるが、

本遺構の周辺の住居跡からの影響も念頭に置かねばならず、確定的ではない。

東側で得られた直線状の壁と南側の屈曲部から、長方形の竪穴状遺構を想定するが、壁高も低く遺存度も良好ではないため、平面形は確定できない。ただ底面を平坦に築く例から、集落内の施設として意図的な所産と位置付けられよう。あるいは住居跡としての位置付けも可能である。時期は、中期後葉とするが周辺遺構との関連も考慮しなければならない。

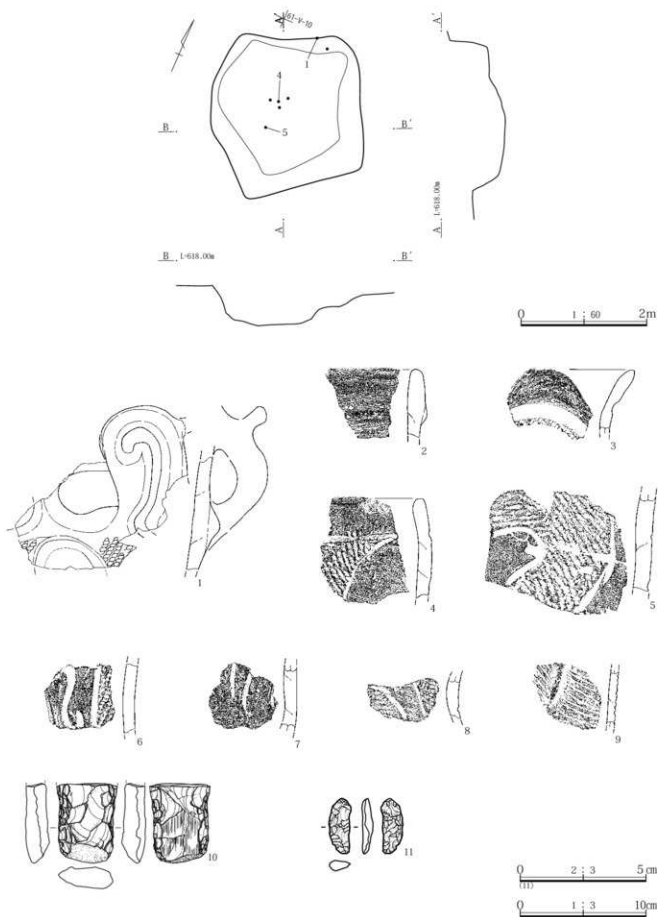
61区5号竪穴状遺構(第319図 PL.32・140)

調査区北東側の61区U・V-9グリッドに位置する。東に12号住、南に45号・57号坑が近接するが、重複する遺構は無く、単独の検出である。周辺は南側への緩斜面地形が広がる。

確認面は暗褐色土で、不整形の平面形を検出した。平面規模は約240×240cmで、深さは約62cmを測る。底面は凹凸が顕著で、壁の立ち上がりも不安定で弱い。意図的な掘り込みとは思われなかった。

出土遺物は9点の深鉢破片と、打製石斧1、スクレイパー1、石織未製品、加工痕ある剥片(PL.140)を図示した。土器片は加曾利EⅢ式と「郷土式」、称名寺式が出土しており、時間幅が認められる。

不整形な平面形で、底面も凹凸が顕著である。壁の立ち上がりも弱く、出土遺物の時間幅があることから、居住痕跡あるいは貯蔵穴等の集落内施設とは位置付けられない。自然的な凹地の可能性もある。



第319図 61区5号竪穴状遺構及び出土遺物

第7節 埋設土器

本節で扱う埋設土器は、発掘調査時においては、「埋裏」として扱われた土器を附帯した遺構である。本書では、埋裏は住居内床面下に埋設された土器を埋裏と呼称しているため、住居跡外で検出された「埋裏」は埋設土器として位置付け本節にまとめた。発掘調査では、縄文時代の埋設土器を埋裏、弥生時代の埋設土器を埋設土器として分けて呼称している。そのため、第3分冊においても弥生時代埋設土器が、埋設土器として報告される予定である。

61区1号埋設土器（第320・321図 PL.33・141）

調査区中央やや南東側寄りの61区V-W-4グリッドに位置する。南側壁際で調査された。周辺はほぼ平坦地形が広がり、遺構も多い地点で、32号住、27号住との重複の他、44号住とも重なる。また、2号埋設土器も東約2mに近接する位置にある。

確認面は暗褐色土で、径約60cmの円形土坑に、深鉢1が逆位に伏せられて埋置されていた。深さは約38cmを測り、掘り込みしっかりしていた。周辺は32号住や27号住などの住居跡密集地点であり、そのため、住居内埋裏の可能性を踏まえて調査を進めたが、いずれの住居にも帰属できず、住居外の埋設土器として位置付けた。

埋設土器1は加曾利EⅢ式土器、「椀山類型」である。4単位波状口縁を呈し、体部下半を意図的に欠損していた。また、1の内側に新たに深鉢体部中位2が埋設されていた。加曾利EⅢ式土器で、1と同時期と位置付けられよう。その他には敲石が1点出土している。

重複する32号住は3基の埋裏を有する住居跡である。本埋設土器もあるいは32号住に帰属する可能性も考えられるが、調査工程を尊重し、別遺構として報告する。

61区2号埋設土器（第320・321図 PL.33・141）

調査区中央やや南東側寄りの61区V-4グリッドに位置する。前述の1号埋設土器の東側に近接する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、遺構も密集する地点で、32号住南壁が接する。

確認面は暗褐色土で、径約70×64×22cmを測る不整形土坑を掘り込みとする。底面は平坦で、壁も直立気味に立ち上がる良好な例で箱形の断面形を示していた。

土器は逆位に埋置されていた、平縁の大型深鉢で口縁を下位にし、体部下半は意図的な欠損と考えられた。その他に磨石1点と石鏝4点、スクレイパー1点が伴出している。

土器は「郷土式」後半期の所産と捉えられ、1号埋設土器や、32号住埋裏との関連が想起される。

61区3号埋設土器（第320・321図 PL.34・141）

調査区中央やや南東側寄りの61区V-6グリッドで調査された。32号住北東隅、42号住北壁に近接する。また4号埋設土器が西約20cmに近接する。周辺は緩やかな南斜面が広がり、ほぼ平坦地形と言えよう。

掘り込みを持たず、暗褐色土中で出土した深鉢底部を埋設土器と位置付けた。あるいは包含層出土土器としての位置付けも妥当性を帯びる。土器は加曾利EⅢ式で単独出土である。近接する4号埋設土器との関係性は不明である。

61区4号埋設土器（第320・322図 PL.34・142）

調査区中央やや南東側寄りの61区V-5グリッドに位置する。前述の3号埋設土器の東に接し、32号住北東隅に重なる。

確認面は暗褐色土で、径約82×78cmの円形土坑を掘り込みとする。深さは約40cmで、底面も平坦面を築き壁の立ち上がりもやや内傾気味に立ち上がり、良好な袋状の断面形を呈す。

埋置された土器は大型の両耳壺1個体（1）と大型深鉢体部大破片（2）である。いずれも、正位の埋置で1が2の上位に置かれるように埋置されていた。その他には敲石（3）や石鏝未製品（4）、石鏝（PL.*）が伴出している。

埋設土器1・2は32号住南に、埋設土器4は32号住北東に位置するように、埋設土器が1箇所に集中する傾向が見られる。これは本遺構の性格が、土器棺など儀礼に伴う例が想定され、32号住周辺を墓域としての位置付けが可能になる。

61区6号埋設土器（第320・323図 PL.34・143）

調査区中央東側寄りの61区U-6グリッドに位置する。東側住居跡群と中央住居跡群の中間にあたり、北に36号

第3章 発見された遺構と遺物

住、東に34号住、南から南西に42号住や32号住が近接する。また、先に述べた3号埋設土器や4号埋設土器も南西に近接する。

確認面は暗褐色土で、平面形が径約57×56cmの円形土坑を掘り込みとしていた。深さは約53cmを測り、柱穴状に深い土坑である。

埋置された土器は大型の加曾利EⅢ式の深鉢形土器で、体部下半～底部が正位に埋置されていた。上半の欠損は意図的と考えられる。その他に深鉢破片3点が出土するが、これらは意図的な埋置ではないと考える。

若干ながら距離を置くが、あるいは、32号住内の埋糞とともに1号、2号、4号埋設土器と一群の墓域の土器と位置付けられよう。

61区7号埋設土器 (第320・323図 PL.34・143)

調査区中央の住居跡群の中にある。北の23号住と重なり、東の39号住に挟まれた箇所位置する。61区Ⅶ-6グリッドである。前述の4号埋設土器は南東5m程にやや距離を置く。

確認面は暗褐色土である。径50cm程の不整形の掘り込みで北側が23号住によって失われていた。深さは約16cmを測り、やや浅く鍋底状の断面形を示す。

埋置された土器は大型の両耳壺ながら、頸部～体部上半1/4しか残っておらず、遺存度は悪い。おそらく23号住との重複が影響したのであろう。その他では、凹石と石織未製品が伴出している。

墓域と考えた1号、2号、4号などの埋設土器からやや距離を置くが、一群に包括される埋設土器と考える。また、4号埋設土器と同様に両耳壺を供した共通例は、周辺遺跡の類例をあたるべきだろう。

61区8号埋設土器 (第320・323図 PL.35・144)

調査区南東部の61区T-5グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形に占地する。22号住西に近接し、住居跡群内にあるといえよう。また前述の6号埋設土器は北西約4mにある。

暗褐色土中で確認した。径27cm程の円形ピット状の掘り込みを有し、深さは10cmを測る。出土土器は深鉢底部を中心とした3点で、器面磨滅が著しい個体である。あるいは3号埋設土器のように、掘り込みを有さない、包

含層出土に近い在り方も可能性として指摘したい。時期は中期後葉であろう。

62区1号埋設土器 (第320・324図 PL.35・144)

調査区東端の62区J-4グリッドに位置する。重複遺構は無く単独の検出であり、東に29号坑、西に21号坑が近接するように、遺構密度も低い。

黒褐色土中の確認である。規模を約56×52cmの不整形円形を呈し、深さ25cmの土坑を掘り込みとする。底面は平坦面を築き、壁は直立する。箱形の断面形を示す。

埋置された土器は、加曾利EⅢ式の深鉢口縁～体部上半で正位に埋置されていたが、体部中位に被熱による変色が見られることから、再利用による埋置とも考えられる。

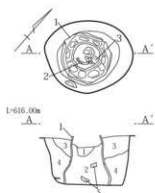
62区2号埋設土器 (第320・324図 PL.35・144)

位置不明

確認面は暗褐色土中で、長軸を東西に持つ不整形円状の土坑を掘り込みとする。規模は約68×56×33cmで、底面に小ピットを設ける。壁の立ち上がりも良好である。

埋置されていた土器は、加曾利EⅢ式の深鉢体部で、口縁部と底部を欠損する。意図的な欠損であろうか。正位で埋置されているが、出土状態では全周していなかった。整理段階では、全周が確認できたが、埋置する際に既に欠損が広がった状態と推定できよう。

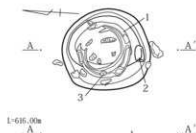
61区1号埋設土器



61区1号埋設土器土層

- 1 暗褐色土 ローム粒を含む。しまり弱い
- 2 黄褐色土 ローム粒を多く含む。底面に礫
- 3 黒褐色土 ローム粒、炭化物、礫を含む
- 4 暗褐色土 炭化物、黄色粒を含む。しまり弱い

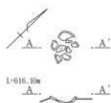
61区2号埋設土器



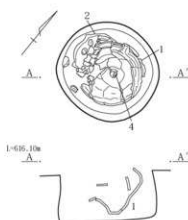
61区2号埋設土器土層

- 1 暗褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 褐色土塊を含む。しまりあり
- 4 暗褐色土 ローム粒、小礫を少量、炭化物を微量含む

61区3号埋設土器



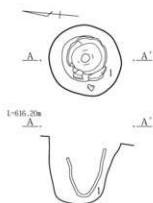
61区4号埋設土器



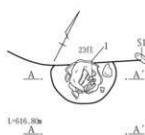
61区8号埋設土器



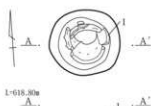
61区6号埋設土器



61区7号埋設土器



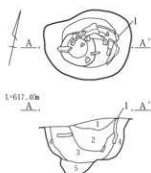
62区1号埋設土器



62区1号埋設土器土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を多く、炭化物を少量含む
- 2 褐色土 やや暗い。ローム小塊を少量含む
- 3 褐色土 ローム粒、炭化物を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む

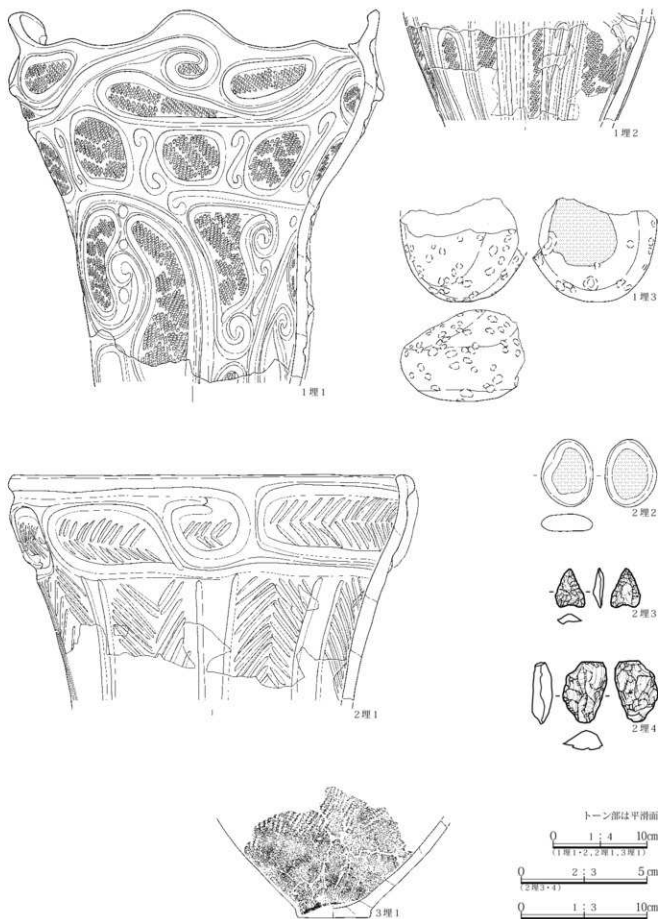
62区2号埋設土器



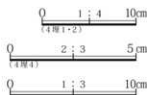
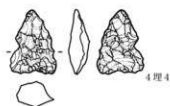
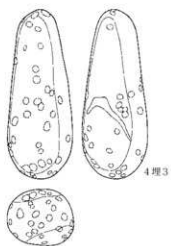
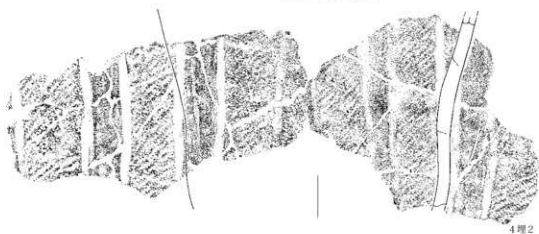
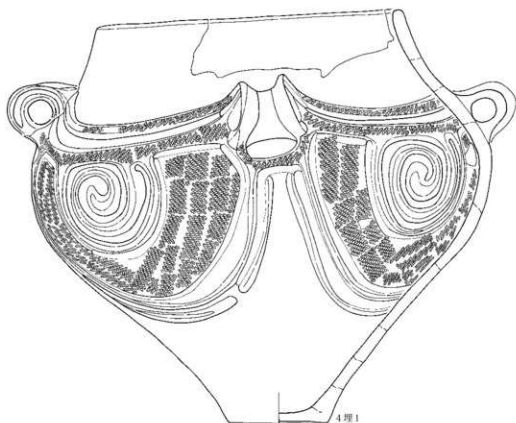
62区2号埋設土器土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 暗褐色土塊を含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む
- 5 黒褐色土 ローム粒、小礫を含む

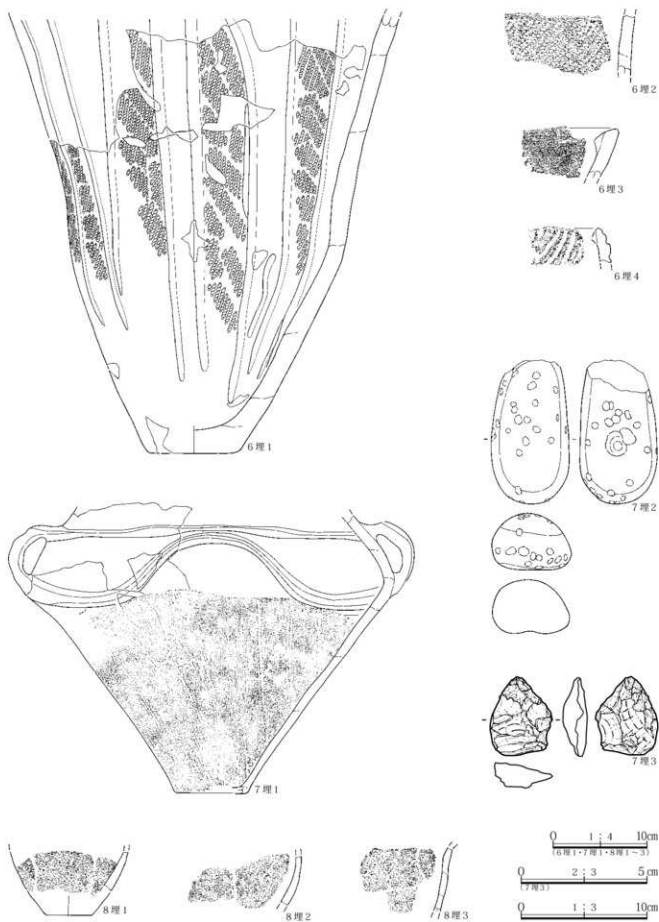




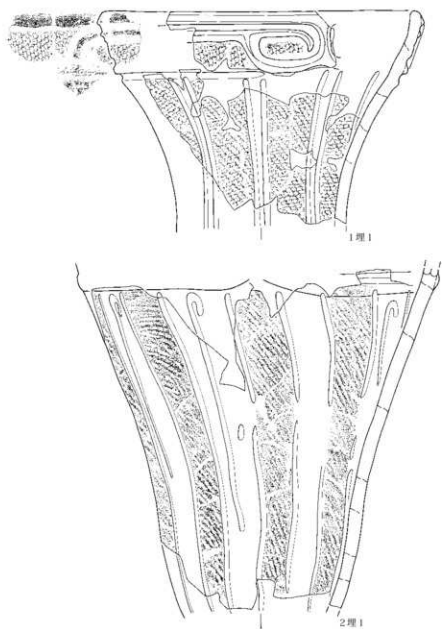
第321図 埋設土器 61区出土遺物(1)



第322図 埋設土器 61区出土遺物(2)



第323図 埋設土器 61区出土遺物(3)



第324図 埋設土器 62区出土遺物

第8節 焼土遺構

ここでは13基の焼土遺構（以下焼土）を報告する。本遺跡の調査は縄文時代集落跡の調査が主体となったため、住居跡検出が優先された。そのため、遺構確認中の作業としては、焼土一か跡として位置付けられ、焼土の集中と遺物分布などから住居跡を予想して調査が進められた。検出された多くの焼土遺構が住居跡帰属となったが、幾つかの焼土は住居跡に帰属できず、本節にまとめる事になった。また明らかに中世～近世に比定される焼土は第3分冊に報告予定であるが、時期不明の焼土も本冊に掲載した。

61区3号焼土（第325図 PL.36）

調査区東側の61区V-7・8グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には31号住が重複、近接する。

暗褐色土を確認面とし、平面形は不整形で浅い皿状の掘り込みに焼土が堆積していた。底面は凹凸が顕著で、有機的な掘り込みではないと考える。規模は、 $160 \times 92 \times 14$ cmを測る。

遺物の出土は無く、時期の特定が確定的ではないが、中世に位置付ける確証も無く、縄文時代としての可能性を考えた。

61区4号焼土 (第325図 PL.36)

調査区東側の61区V-7グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には41号住や59号土坑が重複、近接する。

確認面は暗褐色土で、不整形の平面形を呈す。平面規模は約146×60cmで、浅い皿状の掘り込みに焼土が堆積していた。深さは14cmを測り、底面は凹凸が顕著だった。

遺物の出土は無く、詳細な時期は不明であるが、中世に位置付ける確証も無く、縄文時代としての可能性を優先した。

61区7号焼土 (第325図 PL.36)

調査区北東部の61区U-9・10グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には12号住が重複、近接する。

暗褐色土を確認面とし、顕著な掘り込みを有さず、暗褐色土が焼土化した様相を示していた。焼土下も凹凸が顕著で、有機的な掘り込みではない。規模は、76×54×6cmを測り、小規模な焼土分布である。

遺物の出土は無く、時期の特定が確定的ではない。さらに掘り込みも設けておらず、恒常的な施設ではないと考える。中・近世に位置付ける確証も無く、縄文時代の所産として報告する。

61区9号焼土 (第325図 PL.36)

調査区北東部の61区T・U-10グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には12号住や9号住が重複、近接する。

暗褐色土中に焼土が広がるが、掘り込みを持たず、84×38cmの範囲に分布を見た。底面は暗褐色土が焼土化した様相で凹凸も顕著だった。

遺物の出土は無く、時期は確定的ではないが、中世に位置付ける確証も無く、縄文時代として位置付けた。

61区10号焼土 (第325図 PL.36)

61区S-10グリッドに位置する。調査区北東部にあたり周辺は緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。9号住や11号住が重複、近接する。

確認面は暗褐色土中で、掘り込みを持たず、約65×55cmの不整形の範囲に焼土が分布していた。底面は凹凸が顕著だった。深さは8cmを測る。

遺物の出土は無く、時期の特定が確定的ではないが、中世に位置付ける確証も無く、縄文時代としての可能性を考えた。

61区13号焼土 (第325図 PL.36)

調査区東側の61区R・S-7・8グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には35号住や65号土坑が重複、近接する。

暗褐色土を確認面とし、平面形は小型の円形で、平面規模は約54×50cmを測る。深さは12cmで皿状の断面形を呈し、弱い立ち上がりを示す。

出土遺物は無く時期特定ができない。中世に位置付ける確証も無く、縄文時代としての可能性を考えた。

61区14号焼土 (第325・326図 PL.36・144)

61区U-7グリッドに位置する。調査区東側にあたり、周辺は緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。重複、近接遺構としては36号住や31号住が見られるが、新旧関係は不明である。

確認面は暗褐色土で、不整形の平面形を呈す。平面規模は約102×70cmで、深さは16cmを測り、浅い皿状の断面形で底面は凹凸が顕著だったが、壁としての立ち上がりは明瞭だった。

遺物は焼土中から下位にかけて、土器片を中心に出土が見られた。8点を図示した。被災痕跡を1～5に見る。加曾利EⅢ式に比定されよう。

61区15号焼土 (第325・326図 PL.36・144)

調査区南東部の61区V・W-5グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には27号住が重複、近接する。

暗褐色土を確認面とし、掘り込みを持たない。不整形円状の平面形を呈し、平面規模約114×76cmの範囲に焼土が分布する。焼土周辺は北側を除き、硬化面が広がるが、焼土に伴うものかは確定できない。

遺物は称名寺式深鉢把手破片を図示したが、時期を特定するには至らない。焼土の時期は、確認面や出土遺物

おから縄文時代中期以降の所産としたい。

61区16号焼土 (第325・326図 PL.36・144)

調査区東側の61区T-7グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には34・35号住や1号掘立が重複、近接する。

暗褐色土を確認面とし、小型円形を平面形とし、規模は約36×28cmを測る。深さは約12cmで、浅い皿状の断面形を呈し、弱い立ち上がりを示す。底面は被熱しておらず、焼土を埋土とした様相を示す。

出土遺物は「郷土式」の深鉢把手破片1点を図示したが、確定的な時期を示すものではない。時期は中期以降の所産とすべきだろう。

61区17号焼土 (第325・326図 PL.36・144)

61区U-7グリッドに位置する。調査区東側にあたり、周辺は緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。36号住や73号土坑が重複、近接する。

確認面は暗褐色土で、不整楕円形の平面形を呈す。北側は逸失しており、南半のみの検出となった。断面形は浅い皿状を呈し深さ14cmを測り、焼土塊を中心に堆積が見られた。

出土遺物は焼土以降東に被熱痕のある土器片1が集中して出土する。厳密に焼土範囲に入らないが、被熱痕を重視して、本遺構の帰属とした。また、小型の石棒片の出土も見られた。時期は出土遺物から中期後葉末から中期末葉に求めたい。

61区18号焼土 (第325・326図 PL.36・145)

調査区中央の61区Y-6グリッドに位置する。緩やかな南斜面が広がるほぼ平坦地形で調査された。周辺には62区4号住や95・96号土坑が重複、近接する。

平面形は暗褐色土中で検出し、規模88×70cmの不整形を平面形とし、約17cmの深さを測る。壁の立ち上がりはやや弱い。

出土遺物として、中期中葉～後葉の土器片3点を図示したが、時期を確定するものではない。

62区1号焼土 (第325・326図 PL.36・145)

調査区中央の住居跡群にある62区1号掘立柱建物跡

P4と重なり調査された。62区B-5グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、1号掘立柱建物跡以外には5号住や7号住などが近接する。

黒褐色土中の確認である。平面形は不整楕円状を呈し平面規模は約50×(31)cmを測る。深さは22cm程で浅い皿状の断面形を示す。南半をP4で逸失する。

出土遺物として2点の深鉢片を図示した。称名寺式と加曾利EⅢ式で、時期の特定には至らなかった。焼土の時期としては、中期後葉以降の所産としたい。

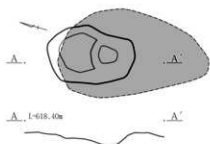
62区2号焼土 (第325・326図 PL.36・145)

調査区西側の6号住床面で確認された。62区C-4グリッドに位置する。周辺は緩やかな南斜面地形が広がり、14号住や27号坑や35号坑が近接する。

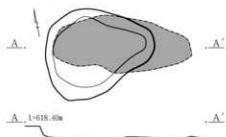
確認面は黄褐色ローム面で、径47cm程の小型不整円形を平面形とする。深さは約20cmを測り、皿状の断面形ながら立ち上がりは明瞭である。焼土は埋土中に多く含まれていた。

出土遺物として、加曾利EⅢ式口縁部破片2点と加工痕ある剥片1点を図示した。時期を確定するものではないが、中期後葉の所産と判断し得た。

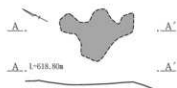
61区3号焼土



61区4号焼土



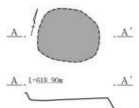
61区7号焼土



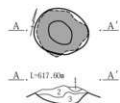
61区9号焼土



61区10号焼土



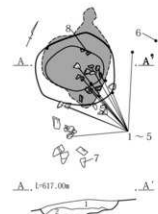
61区13号焼土



61区13号焼土土層

- 1 橙色焼土 塊状の堆積を示す
- 2 暗褐色土 焼土小塊を少量含む
- 3 褐色焼土 黄色粒を極微量含む

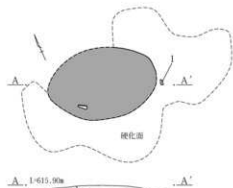
61区14号焼土



61区14号焼土土層

- 1 褐色土 橙色焼土塊を含む
- 2 橙色土 焼土塊主体、よく焼ける

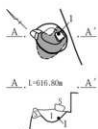
61区15号焼土



61区15号焼土土層

- 1 黒褐色土 焼土粒、ローム小塊を含む

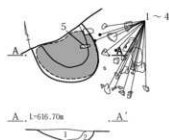
61区16号焼土



61区16号焼土土層

- 1 黒褐色土 焼土塊を多く含む

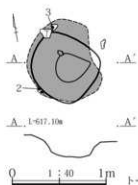
61区17号焼土



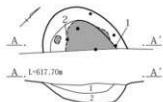
61区17号焼土土層

- 1 灰褐色土 焼土小塊、ローム小塊を含む
- 2 灰褐色土 焼土粒を微量含む

61区18号焼土



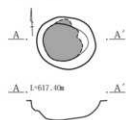
62区1号焼土



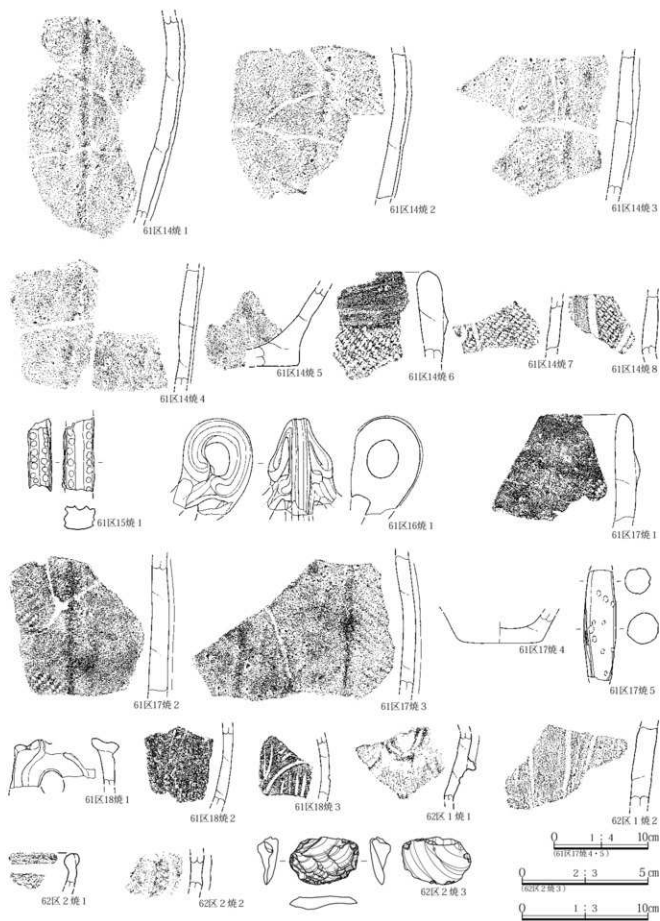
61区17号焼土土層

- 1 暗褐色土 焼土小塊を多く含む
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む

62区2号焼土



0 1 : 40 1m トーン部は焼土



第326图 烧土 61·62区出土遗物

第9節 集石遺構

ここでは、掘り込みを持たずに数十個の礫を集中させた遺構をとりまとめて、集石遺構（以下集石）として2基を報告する。いずれも、62区で検出されている。

62区1号集石（第327図 PL.35・145）

調査区中央南西寄りの南壁際で検出された。62区C-4グリッドに位置し、62区6号住埋裏や2号焼土が北西に近接する。周辺は南東への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形上で確認された。

黒褐色土中で確認され、6号住埋裏と同時に調査されたが、住居跡施設ではなく、単独の集石遺構として位置付けられた。東西約200cm、南北約120cmの範囲に40個程の中～大型の角礫が集中する。

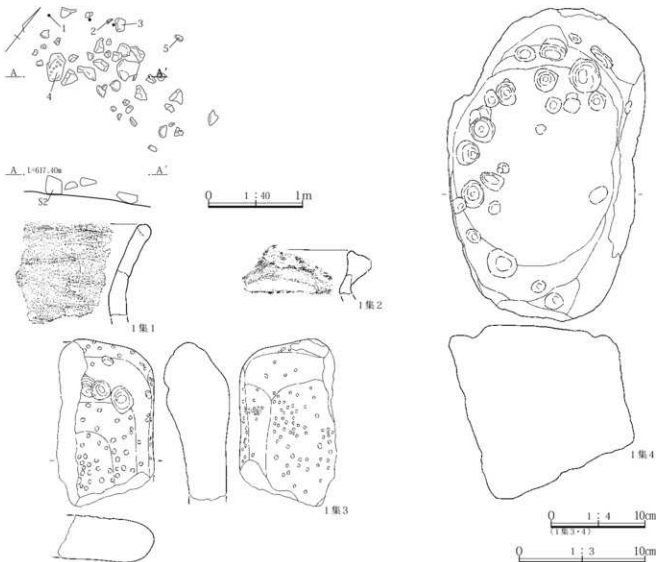
掘り込みもなく、傾斜に沿って分布しており、被熱の

痕跡も見られなかった。斜面地形に沿った流入の可能性もあるが、大型多孔石（4）が出土した様相から、人為的な所産と判断した。その他に、石皿片（3）、打製石斧（PL.145）、土器片（1・2）が出土している。土器片の時期から中期後葉以降の所産と捉えたが、遺構の性格は不明である。

62区2号集石（第328図 PL.35・145）

調査区南西部の62区F-4グリッドに位置する。平坦地形が広がり、遺構密度も高い。19号住や41坑が北西に近接する。

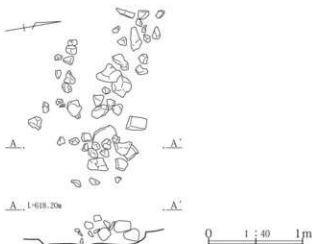
暗褐色土中で確認された。東西約210cm、南北約120cmの範囲に大型の角礫を中心に多量の集石が見られた。しかし、基盤礫も露出しており、分別を果たした結果、50個以上の角礫による集石遺構として位置付けた。高、角



第327図 62区1号集石及び出土遺物

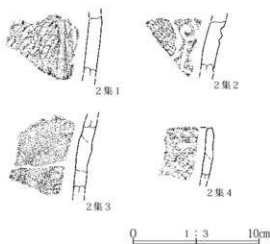
礫には被熱痕跡は見られなかった。

断面図では掘り込みを有する記録に見えるが、これは検出による掘り下げによるもので、掘り込みを持たない集石として考えられた。



第328図 62区2号集石及び出土遺物

出土遺物として、中期後葉に比定される土器片4点を図示したが、詳細な時期が反映される資料ではない。集石の時期としては中期後葉であるが、性格は不明である。



第10節 列石遺構

本節では、61区で調査された列石遺構（以下列石）1基と62区で調査された列石1基を報告する。調査段階で、遺物の取り上げなど、記録類に混乱が生じているため、整理作業で61区列石を1号列石、62区列石を2号列石として掲載する。

1号列石（第329～341図 PL.37～39・145～149）

位置：調査区中央南壁際から、東へ35mに及ぶ大規模な列石である。61区R～Y-4～7グリッドに跨がる。62区8号住周辺から直線的に39号住を経て、36号住・24号住に至り、弧を描き18号住北壁に至る走行である。

周辺地形は南及び南西側への緩傾斜地形が平坦地形へ変換する箇所であり、標高616.4m付近の高さを地形に沿って設けられていた。

経過：第1面調査で検出された遺構である。黒色土～黒褐色土中で、石列が確認されたため、縄文時代の遺構として位置付けられ、他の住居跡等より先駆けて調査着手された。故に、層位的には最も新しい縄文時代遺構と把握された。

規模等：南西端より北東方向の24号住まで、ほぼ直線の走行で約22mを測る。24号住との接点で6m程の弧状の配置となり、18号住北壁周辺を終点とする。幅は50～120cm程でやや狭い印象を得るが、大型の配石遺構を附

帯していないためであろう。斜面形状に沿った走行であり、傾斜上位を削平して幅狭の平坦面に石列を設けていた。石列は立体的な配置を呈す箇所もあり、入念な意図を想起させる単位も見られた。

石列下は先に述べた段差が顕著で、土坑墓などの明確な下部遺構は見られなかった。下面で調査された土坑の多くが中期後葉の所産で、本列石遺構とは時期差が見受けられた。

また、石列走行に沿って、敷石住居跡の幾つかが調査されている。時期は中期末葉～後期初頭で列石との時期差がある住居もあるが、敷石など住居を構築する石を列石が一部利用する傾向もあり、敷石住居と列石の深い関連が想起された。特に24号住は出入口連結部から列石が延びる形態を示しており、24号住居住者と列石構築者の有機的な繋がりも考えられよう。

内容：35mにも及ぶ大規模な石列を呈する。本遺構であるが、幾つかの見かけ上の単位が抽出できる。ここでは便宜的に7群の単位に分けて述べていきたい。東側から順次概要を述べる。

1群：敷石住居跡である18号住北東側に位置する。上層での検出である。北西方向に長軸を持つ、数個の大型自然礫からなる小規模な単位である。長軸約190cm、短軸は70cm程である。小規模なまとまりながら、堀之内2式の鉢（1）が出土している。散布した破片状態の出土の

ため、使用状態とは考えられないが、石列間から出土した破片もあるため、時期を示唆する資料である。

2群：18号住北西に近接し、1群とは90cm程の距離を置く。長軸を北北西に向け、長軸長約230cm、短軸長約110cmを測り、大型自然礫10数個からなる小規模な単位である。緩やかな南西への斜面地形に大型の円礫、亜円礫が平面的に置かれた状態で検出されている。出土遺物は、中期後葉の土器片(44)や打製石斧(54)、凹石(59)が見られるが、時期や性格を反映する例では無い。

3群：2群の北西約120cmとやや距離を置いた位置に占地する。東西に長軸を向け、長軸長約230cm、短軸長約100cmを測り、10数個の大型礫が凝集する単位である。円礫あるいは亜円礫が主体で、大型礫石器である多孔石(66・77)、磨石(62)、台石(63)が加わっている。土器では加曾利EⅢ式の両耳壺把手破片(40)、底部片(29)が出土しているが、列石に伴う所産とは思われない。流入であろう。

4群：3群の南西部に近接し、22号住北壁と24号住出入口部東に接する。両住居跡とも敷石住居跡である。24号住出入口部を挟んで西側には5群があり、両群が24号住出入口部より派生する走行が見られる。

4群は径150cm程の不整形を呈する範囲に、小規模なまとまりを見る。大型の円礫以外に亜角礫や角礫状の多孔石(76)などが加わる。出土土器は加曾利EⅤ式(19)や加曾利EⅢ式(33)が混在しており、詳細な時期を具体化していない。

また、4群南端両脇より大型円礫が東西に列石状に延びる。この石列は、22号住北壁を構成した石列であり、4群とこの石列が一体化した施設ならば、4群が22号住に附帯した北壁周辺の配石遺構の可能性もある。

5群：24号住出入口部西側に近接する。4群と共に24号住出入口部より派生する列石の可能性もある。長軸を西北西に向け、長軸長約220cm、短軸長約140cmを規模とする。楕円状の範囲に大型自然石を主体に10数個の円礫や角礫、亜角礫が混在して構成される。特に断面図D-D'にかかる大型楕円状円礫は傾いて出土したが、立石の可能性が高い例である。また、同じ地点では、楕円状円礫に凹みが集中する多孔石(65)が出土している。立石西に接して、大型円礫2個が上下に重なった状態で出土している。出土土器は、称名寺式(13)、堀之内1式(5)

の口縁部破片が見られた。

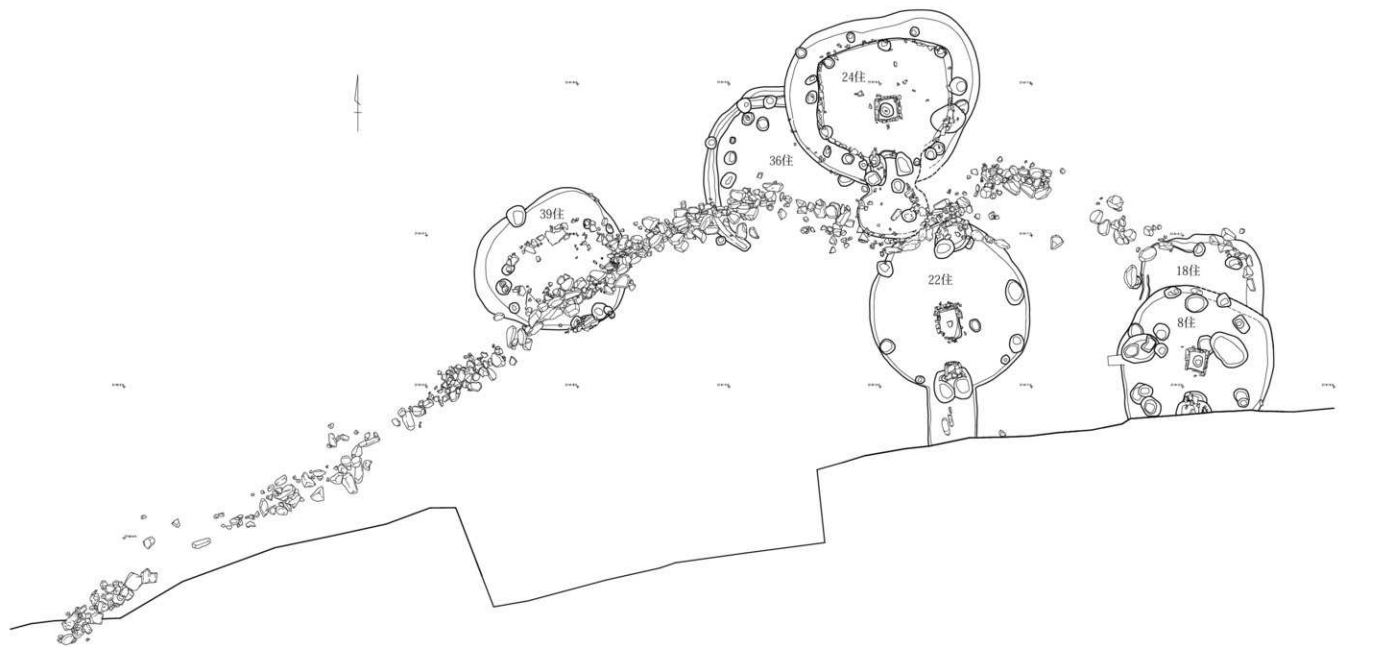
6群：大型の列石遺構を1単位とする。東北東に走行を持ち、36号住から39号住西に至る約8.5mの距離を測る。1号列石の中で最も濃密な石列配置を見せており、堀方として段差を設けて石列を配する傾向が顕著となっている。おそらく幾つかの小単位に分かれると思われる、これも便宜的に2区分を図示した。

6群aは39号住東壁で分けた。長軸長約320cm、短軸長約130cmを測る。大型の自然礫を凝集した様相を示し、円礫、亜円礫を主体にするが、角礫、亜角礫も少なからず加わる。遺物としては、東側に大型石製品一石棒未製品(73)が出土している。傾いた出土であり、これも立石の可能性が求められよう。また、丸石(67)が西側で下部に大型礫を置き出土している。その他では多孔石(75)や蔽石(91)が見られた。出土土器としては、1群でまとまった堀之内2式鉢の破片が出土するが、両群の同時性を問う出土状態ではない。他では、加曾利EⅢ式の壺破片(43)をみるが、土器底部(30～32)の出土が目立つ。

6群bは、6群aの西延長で僅かな途切れて区分したが確定的ではない。東北東に長軸を持つ楕円状のまとまりで、長軸長約380cm、短軸長約110cmを測る。大型の自然礫を凝集した様相を示し、やや角礫、亜角礫に比重を置き、円礫を各所に配した構成を示す。2・3段の積石状の箇所もあり、列石遺構のピークともなる地点であろう。また、時期はやや古い中期後葉段階の39号住を重ねると、出入口埋土位にある蓋石が南側に接する。あるいは、列石構築時に蓋石が露出した可能性もある。

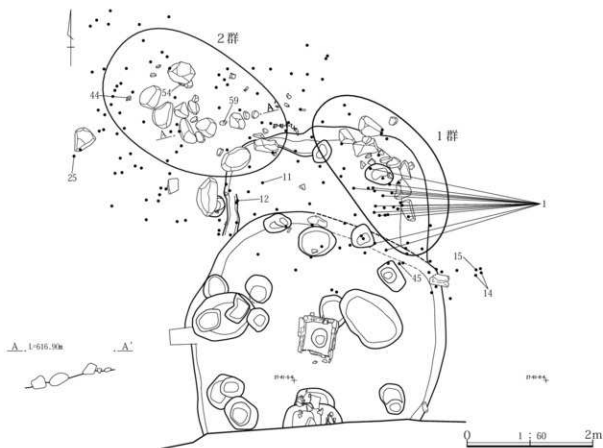
さらに、断面図J-J'に示したように、大型で方形の亜角礫が立石状に検出されており、北側には丸石(68)が見られた。丸石の他、遺物としては石棒破片2点(70・72)、多孔石(79・80)、磨石(60)、蔽石(64)が見られる。土器片の出土では、称名寺式の深鉢体部破片(18)が出土した。

7群：6群の西側に接しており、延長上に位置する。6群と同様に、東北東に長軸を持つ楕円状の範囲を示す。規模は長軸長約370cm、短軸長約100cmを測る。大型の自然礫を集めるが、円礫が主体となり、角礫や亜角礫はやや少ない。6群に比して、組み合わせた石列は見られず、やや乱雑に礫が置かれた印象を受ける。6群の西末端の



第329図 1号列石配置図

0 1 : 100 5m



第330図 1号列石(1)

様相と見ておきたい。出土遺物も加曾利EⅤ式の深鉢口縁部破片(22)や堀之内1式深鉢口縁部破片(9)などが出土するように、時間幅が見られ詳細な時期は不明である。

8群：7群の西に接する。6群と7群の延長線上に位置する。長軸も同様に東北東に向き、長軸長約470cm、短軸長約190cmを測る楕円状の範囲に大型自然礫を集めた単位である。6群の様相と比較するとやや散漫な配置に見える。円礫を主体に垂角礫が少数混じる組成である。出土遺物としては、大型石皿片(69)、多孔石(81)が東側に偏る。その他では磨製石斧の再利用品(56)も出土している。土器片は堀之内1式の壺体部破片(8)を見る。

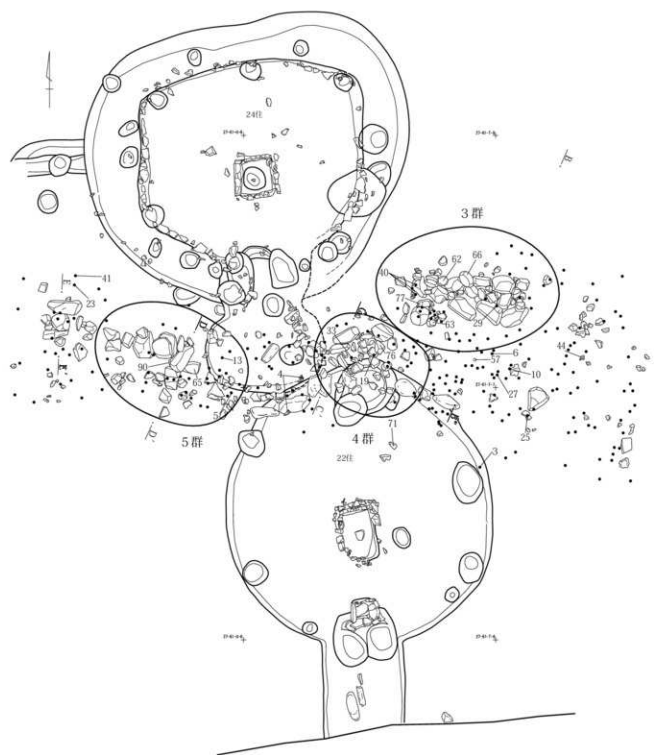
9群：最西端に位置する。8群とはやや距離を置き、東北東に長軸を持つ。規模は長軸長320cm、短軸長80cmを測り、楕円状のまとまりを呈す。単位として明瞭な様相である。大型の垂角礫を主体に円礫が混じるように、凝集する様相を示す。

遺物は多孔石(78)や土器片として加曾利EⅢ式(34・37・39)、加曾利EⅣ式(21)を見る。

所見：大規模な走行を見せる1号列石遺構を、見かけ上ではあるが9群に分けて述べてみた。おそらく同時期の所産ではないものの、後期初頭段階から後期前葉段階にかけて、徐々に構築され大規模な列石が形成されたものと考えられた。各群の様相を見ると、主体となる単位は5群と6群であり、丸石や立石が設けられる様相が把握された。墓域などの下部遺構を検出していないが、おそらく儀礼を伴う列石施設として位置付けられよう。

本遺跡の列石遺構は、南側の国道部分-51区で調査された3基の列石遺構が挙げられる。そのうち51区1号列石は、本遺構である61区1号列石と地形に沿った走行が近く近縁性が想起される。さらに、51区1号列石は散石住居跡が占地する地点にあり、1号列石と極めて近い様相を示す。時期、距離は離れるが、南側への斜面地形において、等高線に沿った数段の列石遺構が併存していた可能性は高い。

さて、3群～5群は22号住と24号住周辺に集まる。南西側でほぼ直線状に設けられた石列が、3～5群周辺で弧状の走行に変化する。これは、おそらく24号住との同時併存に近い様相で、24号住構築時に、列石遺構を取り



B, 1/616.00m



B - B' 土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒、黄色粒を多く含む

B'

C, 1/616.00m



C - C' 土層

- 1 黒褐色土 ローム粒・黄色粒を少量含む

C'

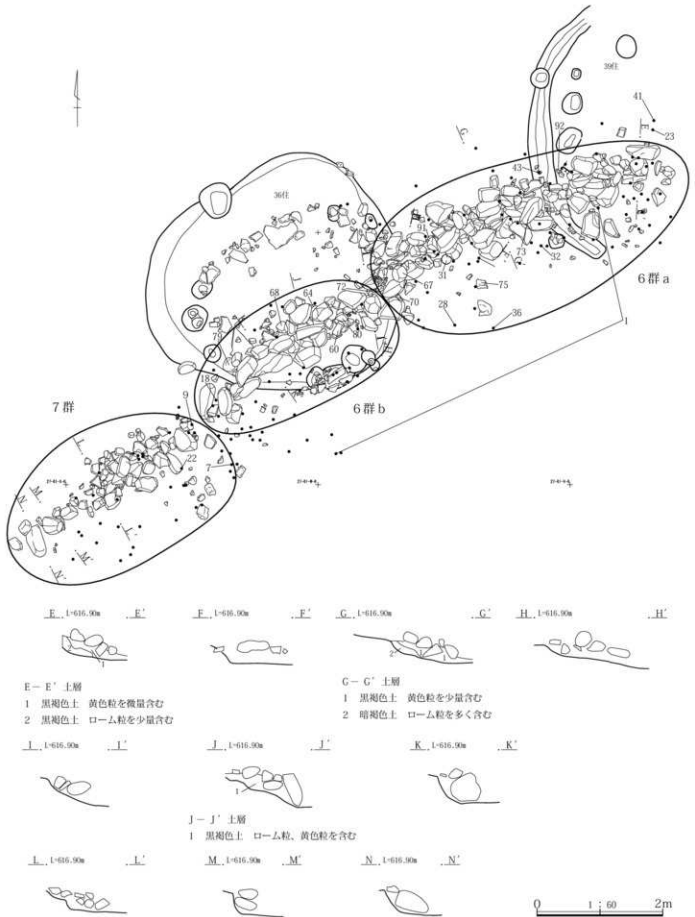
D, 1/616.00m



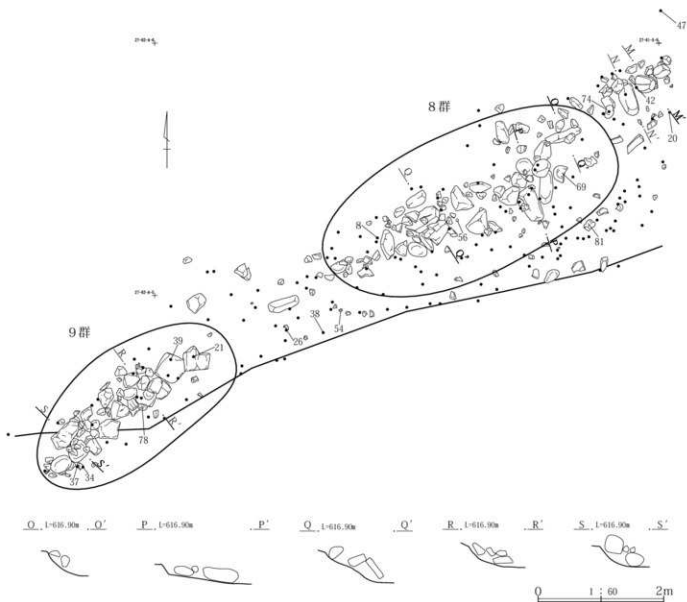
D'

0 1 : 60 2m

第331図 1号列石(2)



第332図 1号列石 (3)



第333図 1号列石(4)

込み、弧状に変化させたと考えている。24号住は後期初頭の敷石住居であり、1号列石の時期を推定するに重要な現象と位置付けたい。

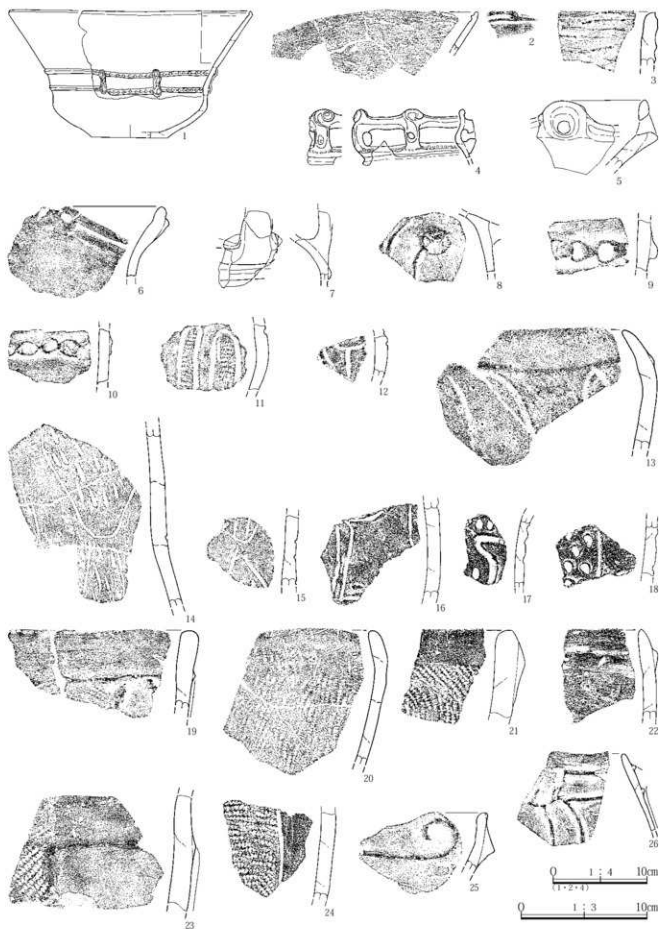
3点の図示に止まる。堀之内2式や加曾利EⅢ式の出土であるが、列石遺構の性格や時期を現す資料ではないが、時期は中期後葉以降と考えておきたい。

2号列石(第342図 PL.149)

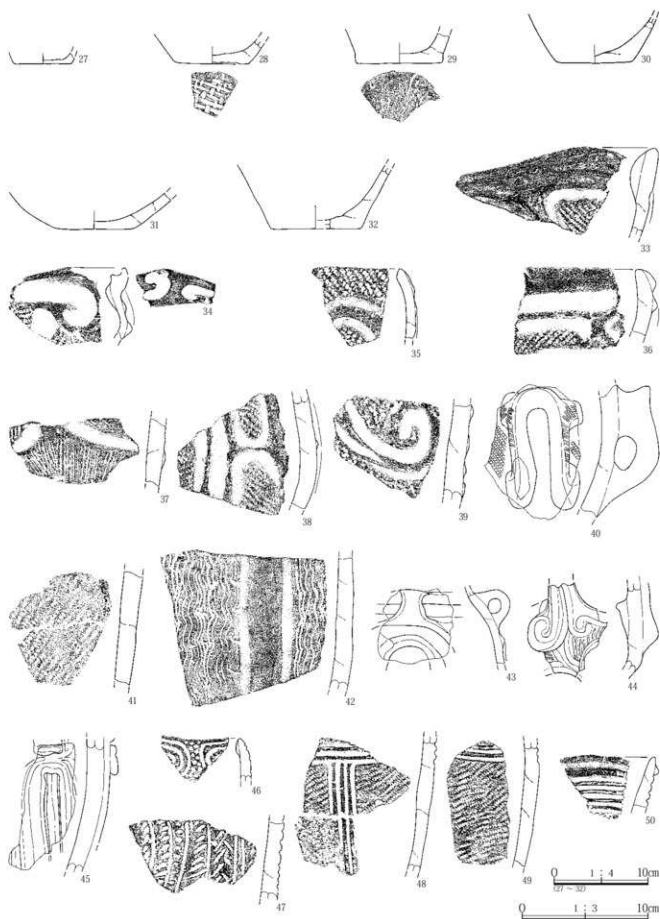
位置：62区西側の住居跡群上層で調査された。62区E-5グリッドに位置し、周辺はほぼ平坦地形が広がるため、10号住や13号住、17号住が重複、近接する。

規模等：第1面調査の黒褐色土中で確認された。西北西に長軸を設け、長さは約158cmを測る。10数個からなる小規模な列石遺構である。

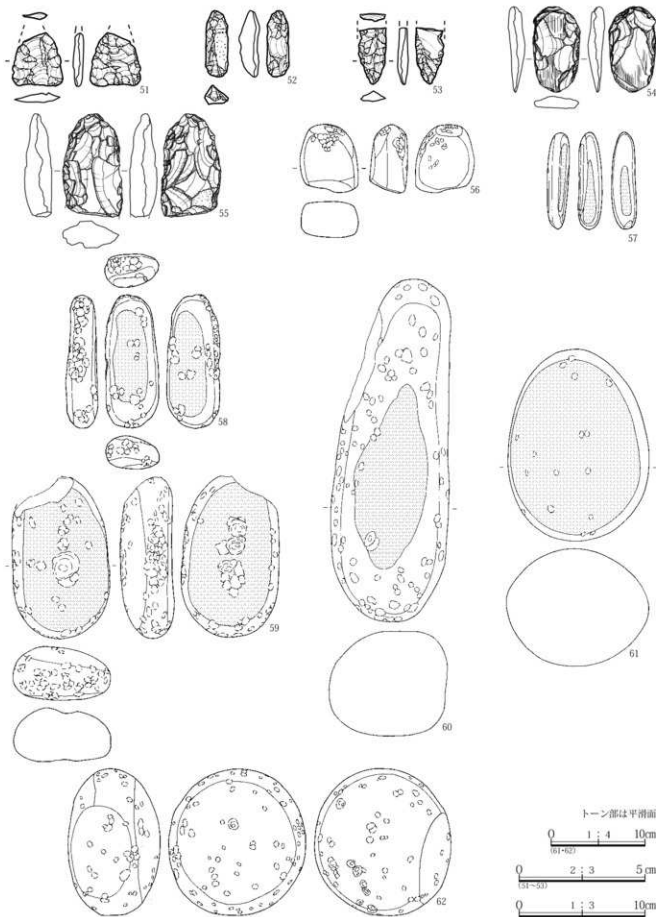
内容：単列の石列で構成される。垂角礫を主体にし、少数の円礫が混じる。大型礫石器の出土は無く、土器片



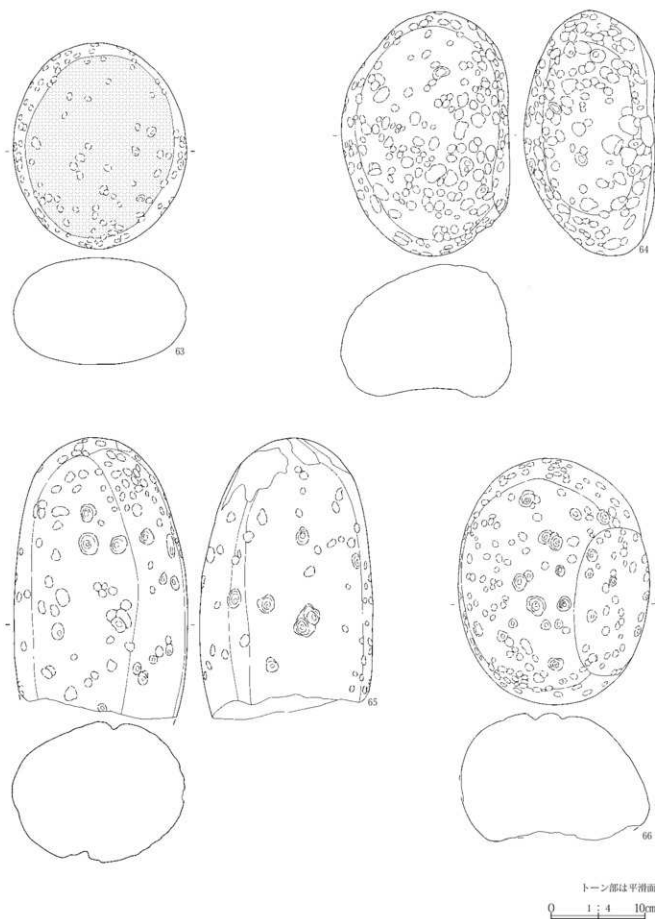
第334回 1号列石出土遺物(1)



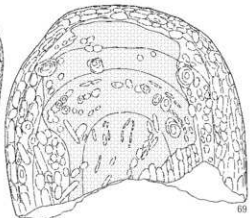
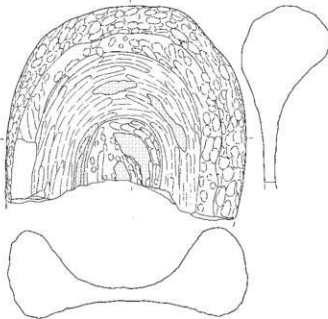
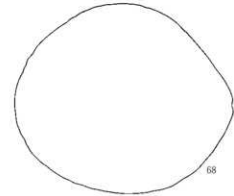
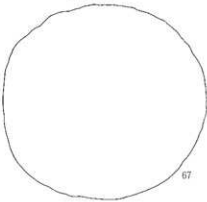
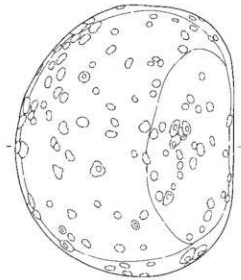
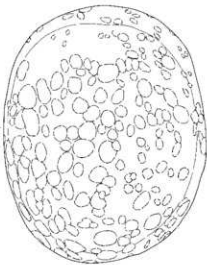
第335図 1号列石出土物(2)



第336図 1号列石出土遺物 (3)

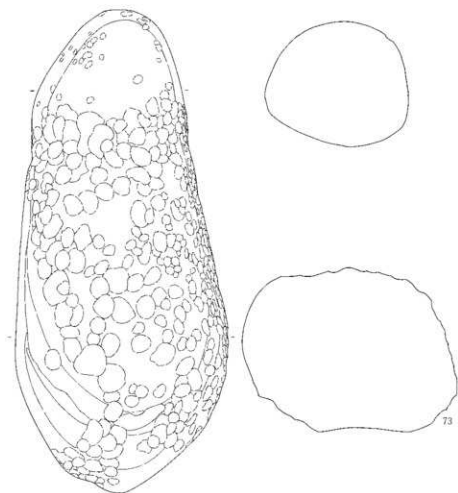
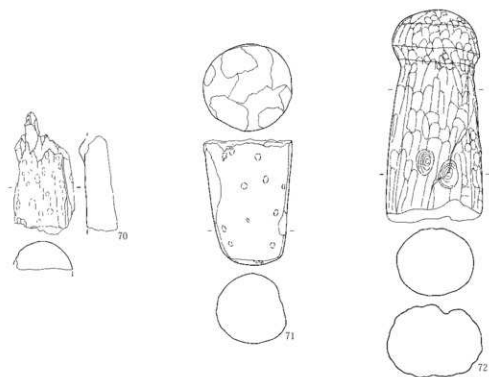


第337図 1号列石出土遺物(4)



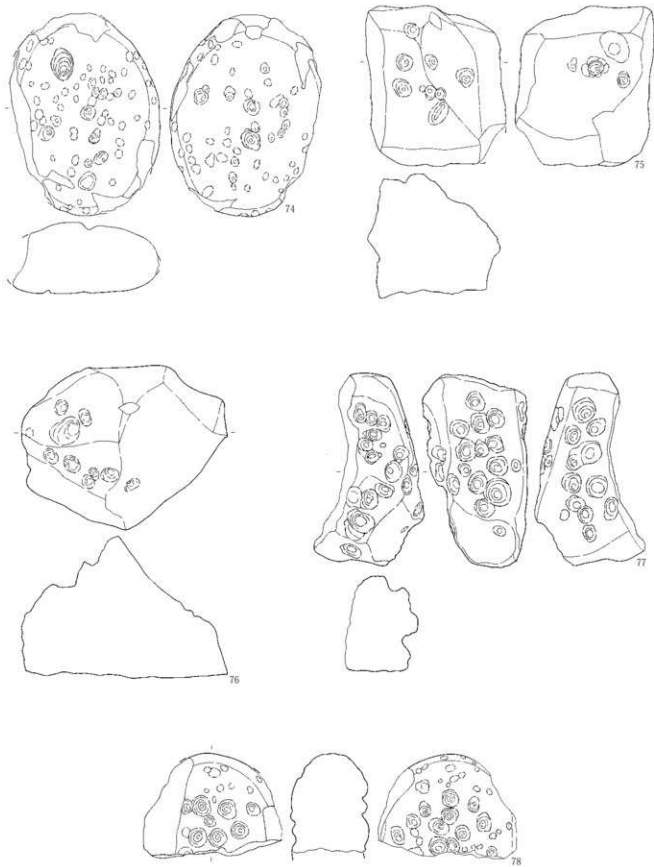
0 1 : 4 10cm

第338圖 1号列石出土遺物(5)



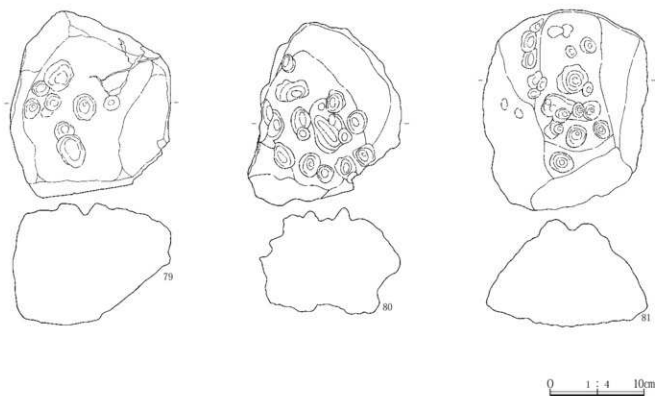
トーン部は平滑面
0 1 : 4 10cm

第339図 1号列石出土遺物(6)

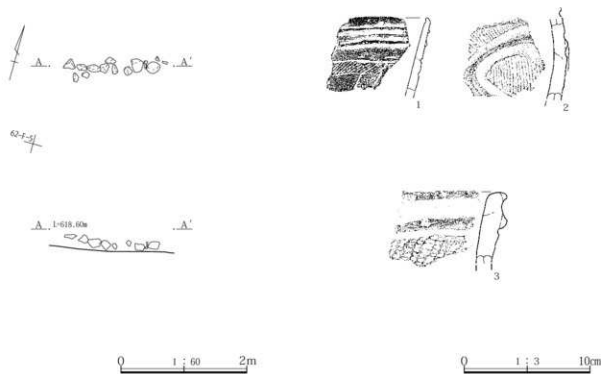


0 1 : 4 10cm

第340圖 1号列石出土物(7)



第341図 1号列石出土遺物(8)



第342図 2号列石及び出土遺物

第11節 流路及び溝

1号流路、1号溝 (第343・344図 PL.149)

1号流路は、61区で検出された。調査区中央やや東寄りを南北に走行を見せる自然流路である。上層調査である黒褐色土中より確認されたが、1号列石下になるため、縄文時代の所産と思われる。断続的に砂壤土の堆積も見られ、人為的な様相を示すため、遺構としては扱わず、土層図と遺物を掲載する。

出土土器は多くが中期後葉の加曾利EⅢ式や「郷土式」に比定される。その中で、1は中期末葉と思われるが、

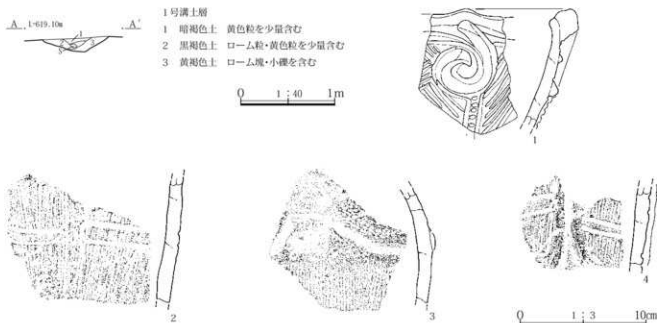
関東系ではなく、長野県などの異系統土器の要素が見られる。

1号溝は調査区西寄りの62区で南北の走行を見せる。黒褐色土中での調査で、10号住との重複箇所、傾斜のため消失する。時期は不明だが、おそらく人為的な所産と考えている。あるいは中世・近世に時期が求められる怖れがあるが、ここでは断面図と出土遺物を掲載する。

出土土器はいずれも「郷土式」にまとまる。また出土土器は写真図版のみの掲載だが、加工痕ある剥片石器と打製石斧片である。



第343図 61区1号流路及び出土遺物



第344図 62区1号溝及び出土遺物

第12節 遺構外出土遺物

ここでは、遺構確認時に出土し、縄文時代遺構出土遺物として捉えられなかった土器を中心に掲載する。グリッド出土土器として扱い、各時期に沿ってその概略を述べる。尚、石器に関しては多くは図化に至らず、写真図版のみの掲載となっている。観察表、計測表を参考にさせていただきたい。

61区（第345～352図 PL.150～157）

61区は全調査区中央から東側にあたる。東端の住居跡群や中央の住居跡群など遺構が密集する地点でもある。主に中期後葉の住居跡が目立つが、後期に比定される1号列石や中期末葉～後期初頭の敷石住居跡も調査されており、遺構外出土遺物も時期幅が広い。

第1分冊でも遺構外出土土器を扱ったが、前冊では完形個体、半完形個体が多かったのに比して、61区では、個体図示し得た土器は少ない。要因は不明だが、包含層の在り方なども関係するのかもしれない。

前期：345図1～6に挙げた。いずれも胎土中に繊維を含む。1は小波状口縁を呈し、薄手の器厚。関山式併行と思われ、あるいは異系統か。2～5は同一個体、羽状縄文構成で、有尾式あるいは黒浜式であろう。6は有尾式の口縁部破片である。おそらく強い波状口縁であろう。中期前葉～中葉：345図7～17に挙げた。阿玉台1b式(7)、勝坂式(9～12)、「焼町類型」(13～15)が見られる。16-17は中葉末～後葉初頭段階の加曾利I式であろう。

中期後葉：加曾利EⅡ式併行段階の土器として、345図18～346図46を挙げた。19～21は「郷土式」古段階、28、29は「唐草文系土器群」、42の曾利2式が見られるように、信州系の中期土器群が混在する様相を示す。ただし、主体となる土器群としては、関東系である加曾利EⅡ式が多数を占める。

加曾利EⅢ式併行の土器群として、346図47～349図102に示した。加曾利EⅢ式土器として47～81を挙げたように、本遺跡でも主体となる土器群である。一方、「郷土式」など信州系の土器として、348図88～102を挙げた。曾利3式として99、「唐草文系土器」として100があるが、多くが「郷土式」が信州系の主たる土器群である。「郷土式」は後半段階になると、体部文様が沈線意匠に限ら

れる傾向がある(101-102)。103は小破片のため判然としないが、あるいは「郷土式」の終末段階の様相かもしれない。

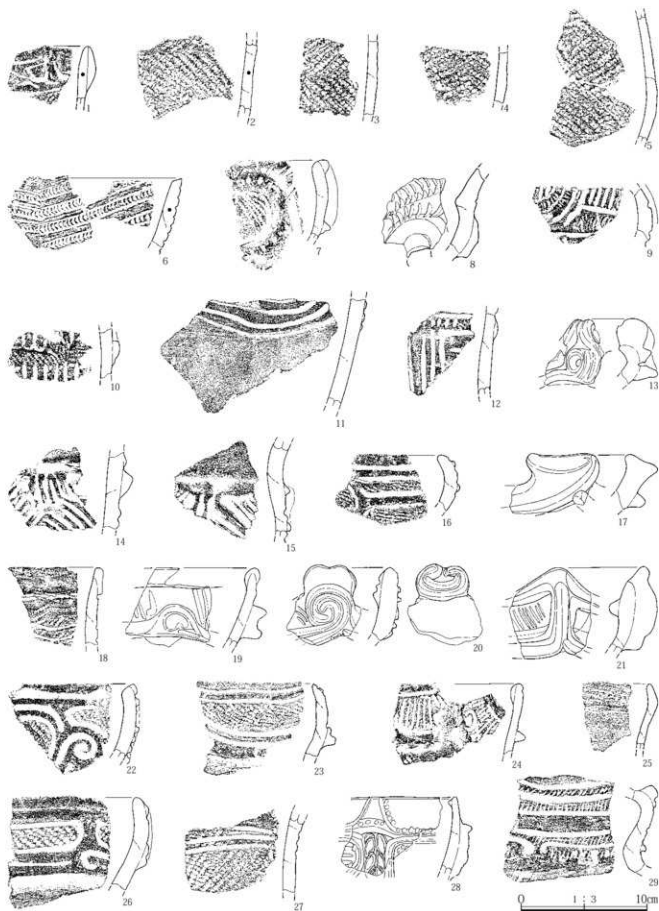
土製品は、おそらく中期後葉の所産と判断した。104は土偶右脚部と思われるが、確信性に乏しい。あるいは土器突起の一部の可能性もある。105～107は土製円盤。周縁を丁寧に磨滅する例(105-106)や周縁を打ち欠いて円形に仕上げる例(107)がある。研磨具としての位置付けが注意されているが、やや軟質である。

中期末葉：加曾利EⅣ式として3点を挙げた(349図108～110)。末葉段階になると、「郷土式」などの信州系の土器は極めて客体的になる。110はあるいは後期段階の加曾利EⅤ式の可能性もある。

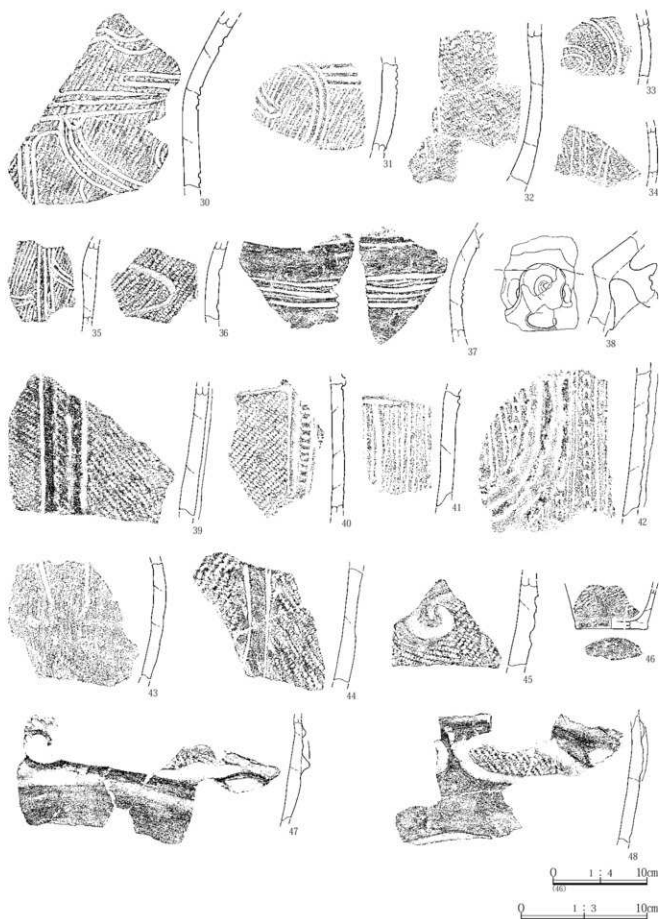
後期：破片資料に終止する。初頭段階の土器群として、称名寺式として350図111～122を挙げる。比較的調査区東側から南側にかけて分布する傾向があるが、これは1号列石の走行に近い。122は後期初頭としたが、文様構成など検討を要する。

前葉段階の堀之内式として123～131を挙げたが、当該期に比定される遺構は無く、出土土器も全体量からみると客体的である。そのなかで1式が量的に多く、称名寺式からの継続性も想定されよう。132、133は異系統土器として三十稲場式を挙げたが、小破片のため詳細は不明である。

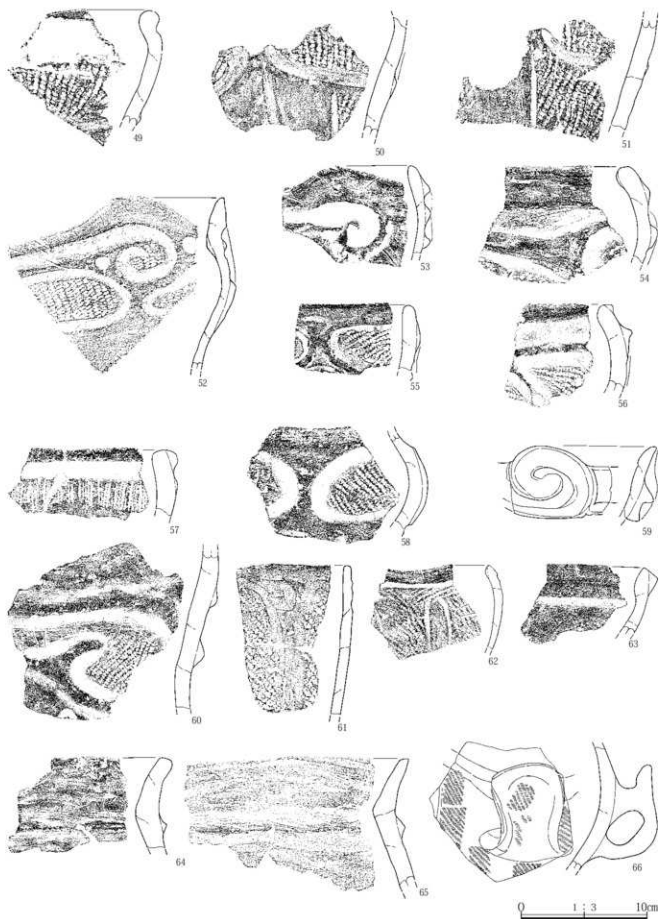
石器の大多数は写真図版にまとめた。軽石製品破片と、黒曜石原石を掲載した。いずれも巻末の観察表を参考にさせていただきたい。



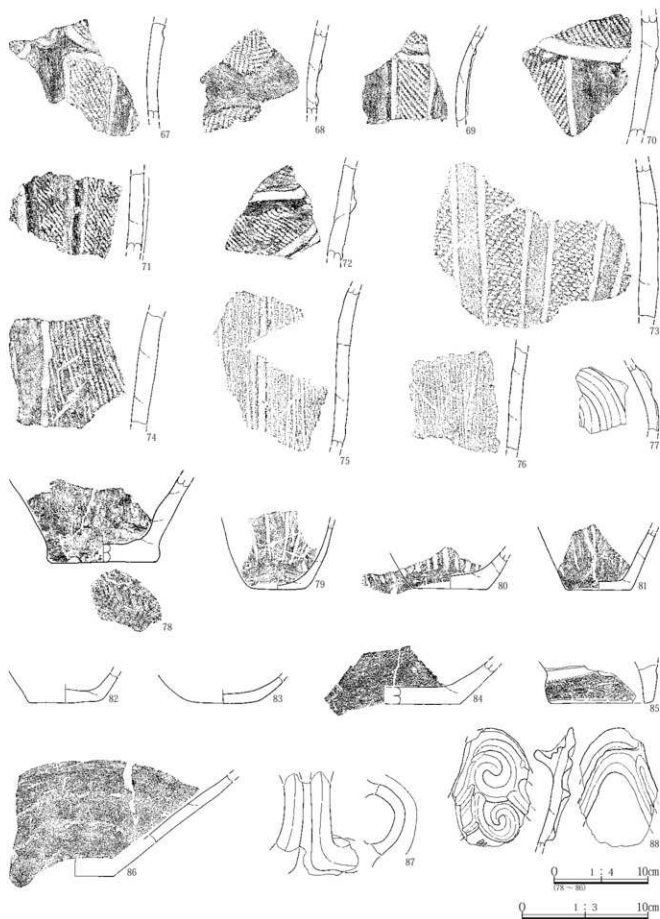
第345圖 遺構外出土遺物 61区(1)



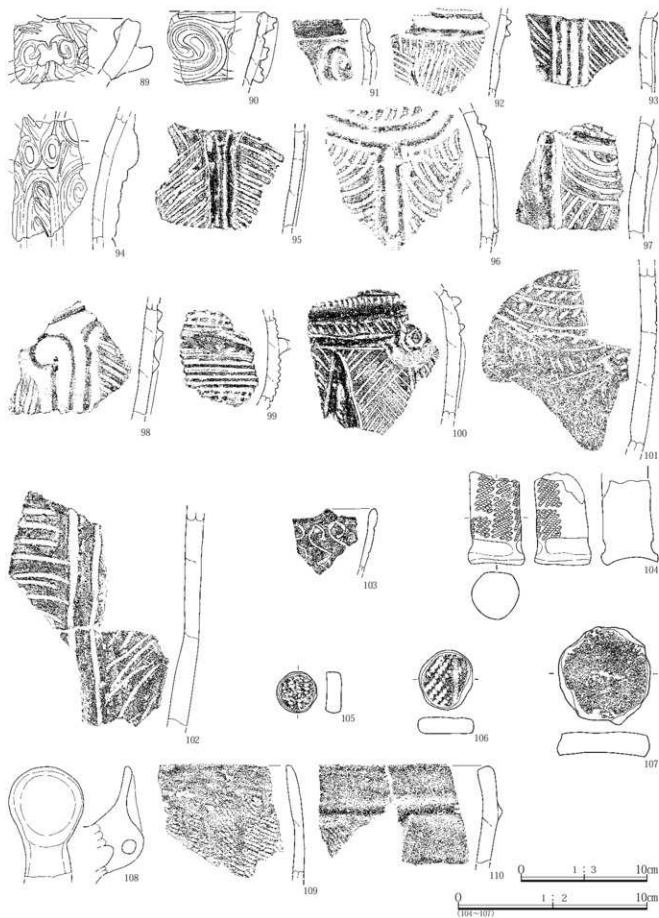
第346図 遺構外出土遺物 61区(2)



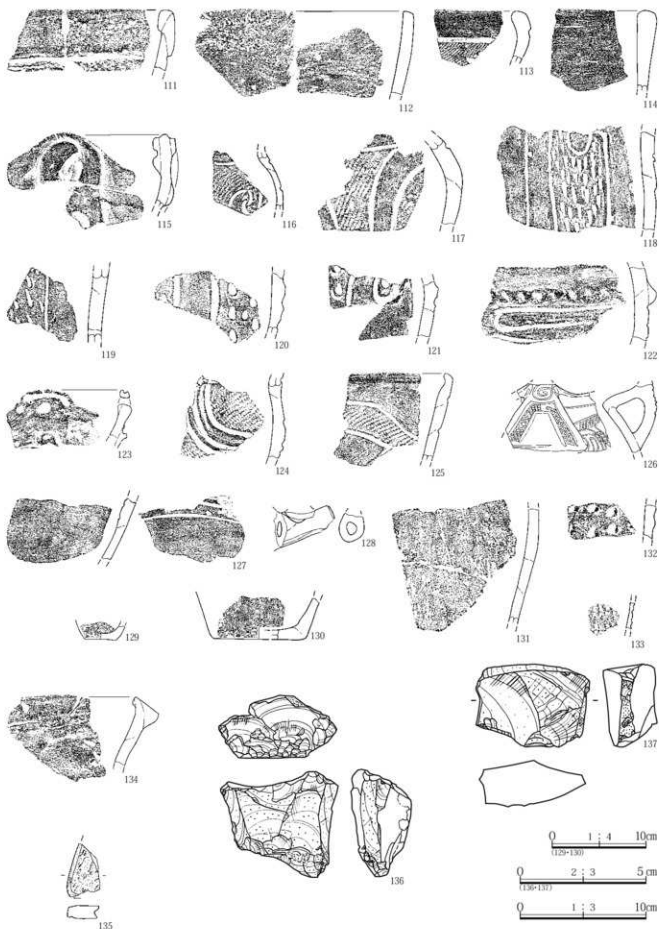
第347図 遺構外出土遺物 61区(3)



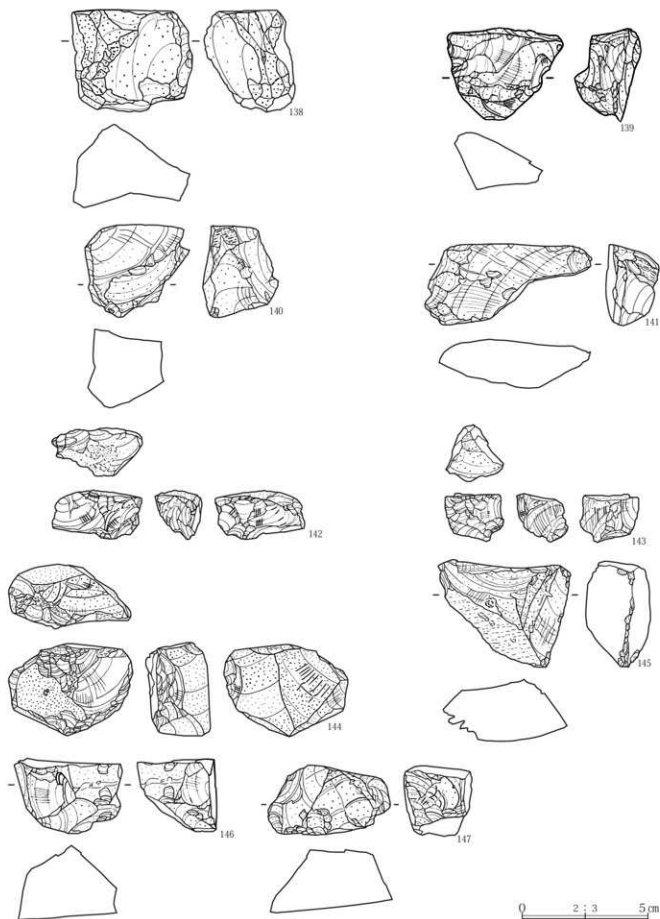
第348図 遺構外出土遺物 61区(4)



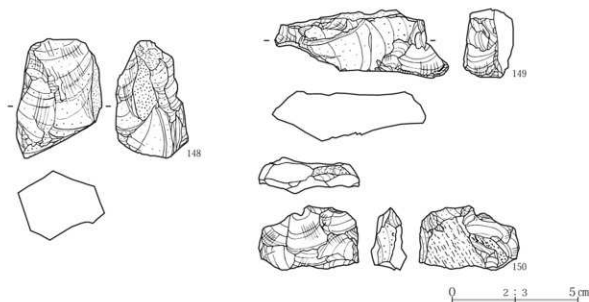
第349圖 遺構外出土遺物 61区(5)



第350図 遺構外出土遺物 61区(6)



第351圖 遺構外出土遺物 61区(7)



第352図 遺構外出土遺物 61区(8)

62区(第353～357図 PL.157～162)

全調査区中央より西側にあたる。13号住が中期末葉に比定される敷石住居跡であるが、比較的中期後葉の住居跡群が主体を占める。中期環状集落の西端に位置する調査区であり、遺構外出土土器も中期後葉に比定される例が多い。

前期：中葉段階とした353図1は、胎土に繊維を含むが、薄手で、内面に僅かな凹凸を見る口縁部破片である。外器面の剥落が著しいため、羽状構成か不明だが、異系統土器として位置付けられよう。

後葉段階として、諸磯b式の平行沈線文(353図2)、浮線文(353図3～8)の出土が見られる。浮線文は、51区、52区でも出土が充実しており、まとまった様相を示している。一方、爪形文や平行沈線文は量的に少なく、諸磯b式後半段階の土器組成と考えられよう。

中期前葉～中葉：前葉段階の絜沢式併行期の角押文を施す土器(353図9～11)が見られる。10・11は浅鉢口頸部破片であろう。12は勝坂1式の小型深鉢か。

353図13～22は中葉～中葉末・後葉初頭段階の土器をまとめた。勝坂3式～加曾利E1式の範疇に納めたい。体部に三叉文を刻む例は多く、当地域の勝坂3式及び勝坂系の特徴の一つである。15は屈折した無文の口縁部を設ける。おそらく、信州地域からの搬入品であろう。16は「焼町類型」、18は加曾利E1式古段階、20は「柵倉式」と考えた。

中期後葉：中期後葉前半段階の加曾利EⅡ式に併行する

一群として353図22～27を挙げた。住居跡数は一定数を見るが、包含層、遺構外出土土器は少ない。一方、中期後葉後半段階加曾利EⅢ式段階の土器群は多い。これは後葉段階の環状集落を主とする本遺跡の特徴の一つである。353図28～355図48に加曾利EⅢ式を集めた。深鉢を主とするが、両耳壺(35・36)、無頸壺(37～39)が加わる。またジョッキ形深鉢と思われる破片2点(46・47)を図示した。

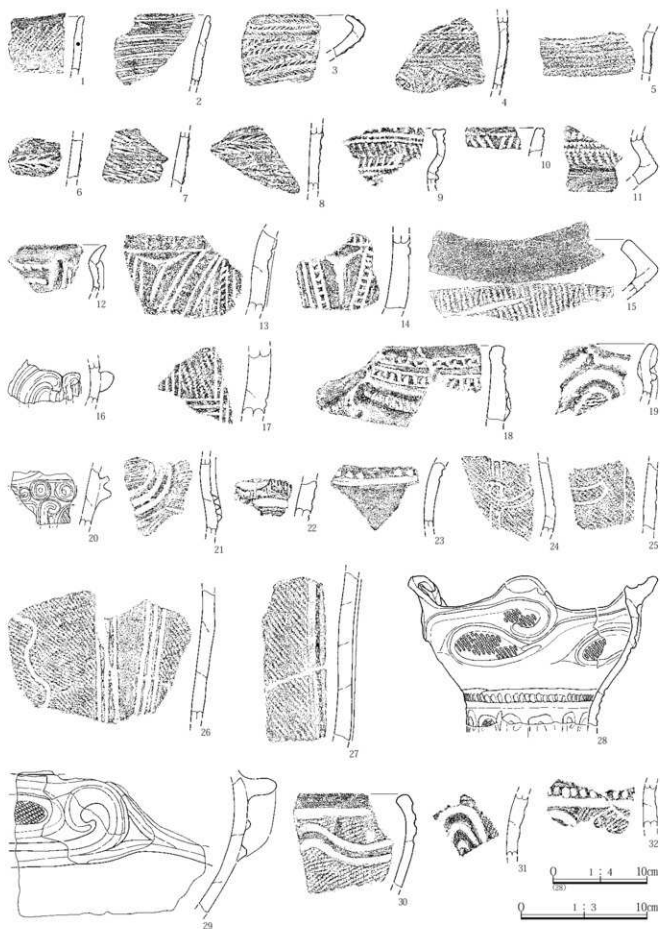
355図49・50は大木9式土器の影響が強い「屋代類型」、51・52は曾利3式であるが、信州系の土器として「郷土式」(355図53～62、356図74)が圧倒する。52は浅鉢と思われるが、突起～口頸部への施文に特徴が見出せる。

355図62～66に口縁部に幅広の無文部を設ける土器を集めたが「郷土式」にも加曾利EⅢ式にも見られる例で、一概に分別はできない。

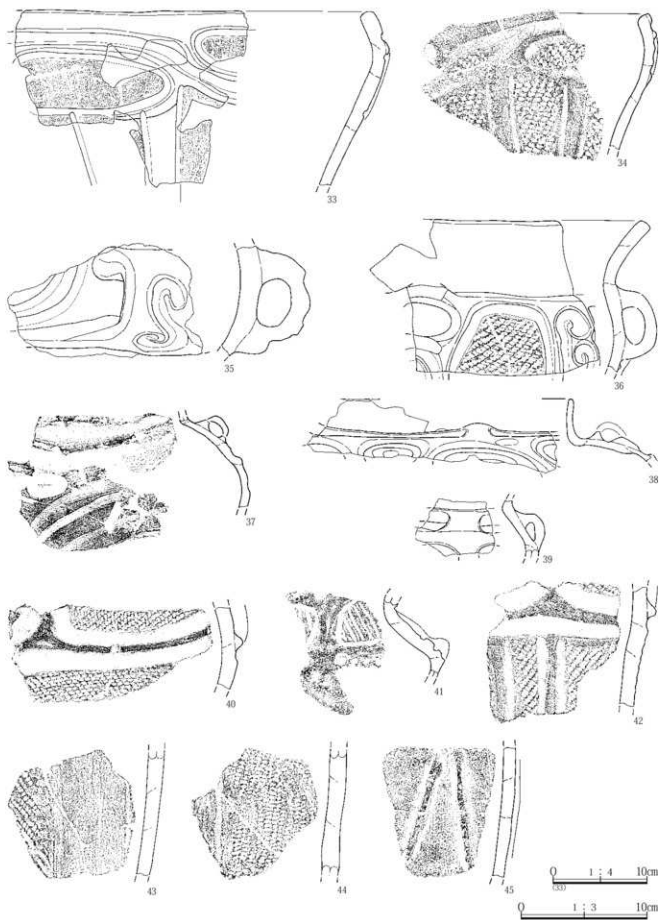
356図68～74に中期深鉢底部を集めたが、無文土器の分別は確定的ではない。あるいは後期も混在する。73は中期中葉末前後の台付き深鉢脚部か。土製円盤(77)は中期の例と捉えた。周縁の磨滅が丁寧である。

中期末葉：加曾利EⅣ式とした2点(356図75・76)を図示した。出土量は多くないが、51区や61区に敷石住居跡などの検出は見られる。短期間に限られた時期のため土器量そのものが少ないのか検討を要する。

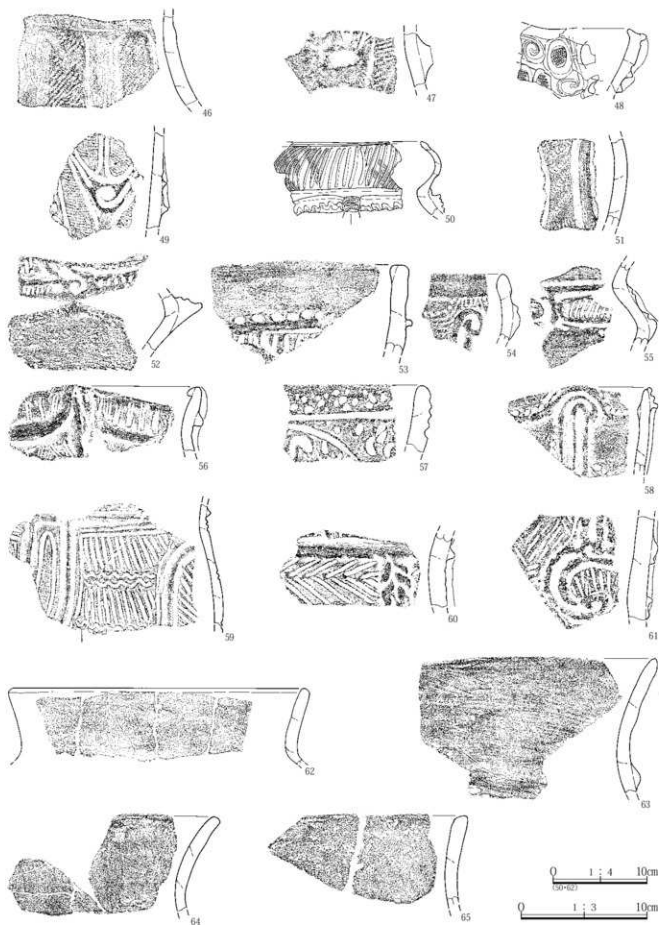
後期：称名寺式(356図79～83)、堀之内式(84～88)、加曾利B1式(89～91)を集めたが、時期が登るにつれ出土量が減る。これは吾妻川流域の上位段丘に立地す



第353圖 遺構外出土遺物 62区(1)

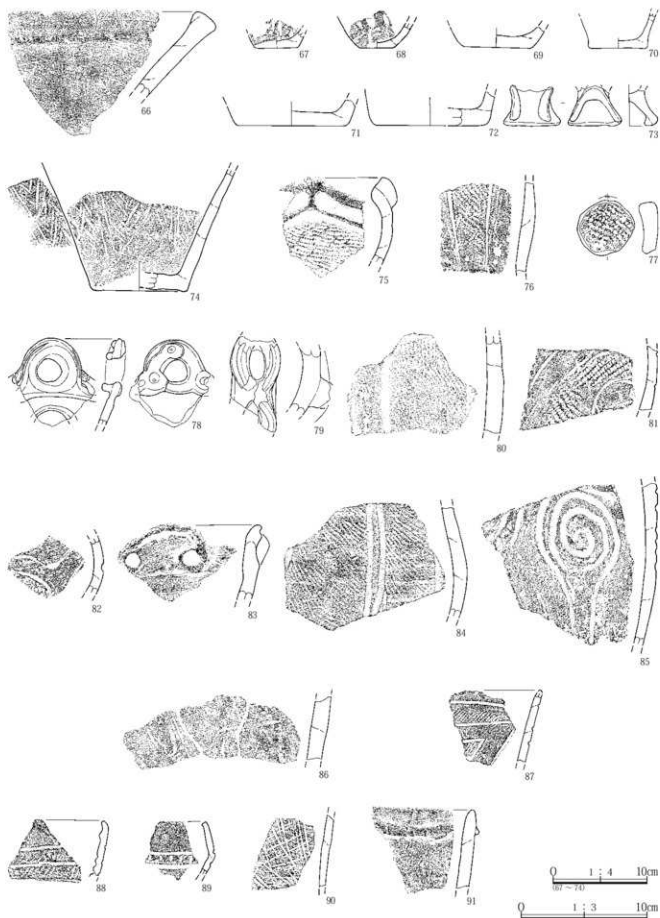


第354図 遺構外出土遺物 62区(2)

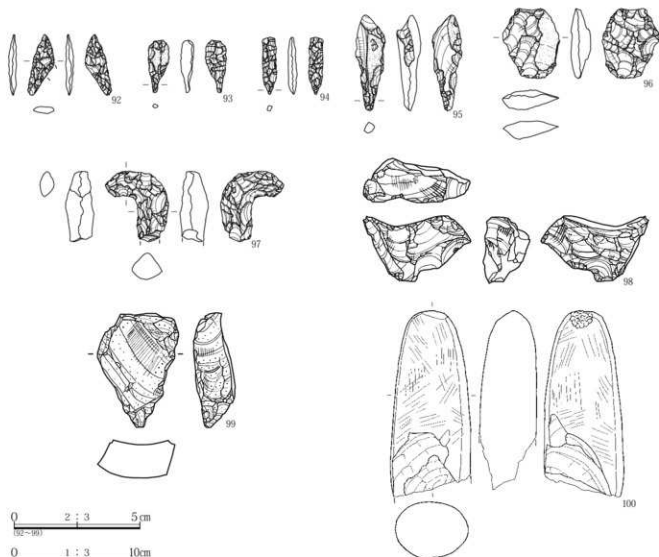


第355図 遺構外出土遺物 62区(3)

第3章 発見された遺構と遺物



第356図 遺構外出土遺物 62区(4)



第357図 遺構外出土遺物 62区(5)

る遺跡の特徴で、中期環状集落、後期敷石住居跡群までは継続的な居住が見られるが、後期中葉以降、出土量が極めて少なくなる。ただ、中段段丘の横壁中村遺跡や川原田遺跡では、後期中葉以降の遺構、遺物が検出されていることから、居住立地環境による、出土量の減少が把握されよう。上位段丘における土地利用変化が背後に存在するのであろう。

石器：多くを写真図版に掲載した。61区とともに観察表を参照していただきたい。97の異形石器・鉤状石器は黒曜石製で、出土量は少ないながら、本遺跡で特徴的な存在を示す。異形石器自体が縄文時代前期の所産とされているが、中期集落で出土する様相も注意を払いたい。帰属時期、性格など検討課題の多い器種である。